

明治大学

国際日本学研究

Global Japanese Studies Review

Meiji University

第16巻 第1号
Vol. 16 No.

張教授、渡教授、尾関教授、横田教授、小林准教授 退任記念号
Special Edition in Honor of Professor Cho, Watari, Ozeki, Yokota, Associate Professor Kobayashi

献呈の辞 鈴木 賢志 (1)

〔第1部〕退任者の履歴・業績、所感

張 競 教授 近影、履歴・業績、所感 (5)

渡 浩一 教授 近影、履歴・業績、所感 (51)

尾関 直子 教授 近影、履歴・業績、所感 (65)

横田 雅弘 教授 近影、履歴・業績、所感 (83)

小林 明 准教授 近影、履歴・業績 (99)

〔第2部〕渡浩一教授への献呈論文

『今昔物語集』における言語活動語彙の文体的特徴 田中 牧郎 (101)

自動評価システムによる作文評価は教師評価の代用になるのか 小森 和子 (117)

<永遠の女の子>と<意地悪な女>

—『キューティ・ブロンド』に見る女性の連帯の可能性— 田中絵美利 (133)

日本語上級レベル留学生の読解ストラテジーの使用頻度の変化

—「留学生のための学術日本語Ⅰ」受講前と受講後の比較— 安高 紀子 (157)

日本語学習者の日本語科目履修後の日本語能力の向上

— Can-do statements 調査を用いた自己評価を基に— 柳澤 絵美 (171)

『佛説大蔵正教孟蘭盆経』(血盆経細注・血盆経國字略縁記・喫茶時考論) 高遠奈緒美 (216)

献 呈 の 辞

国際日本学部は2023年度ではや16年目を迎え、張競先生、渡浩一先生、尾関直子先生、横田雅弘先生、小林明先生という、学部創設時あるいはそれ以前から学部創設に向けてご尽力を賜りました5人の先生方がご退任の時を迎えられることとなりました。

先生方の研究業績の詳細なご紹介は後に譲ることとし、ここでは私の個人的な思い出にふれながら、先生方のご紹介をさせていただきます。

張先生は1998年に明治大学法学部に着任され、2008年の学部創設時に本学部に移籍されました。初年度に在外研究に出ていらしたためきちんとご挨拶ができていなかったこともあり、当初、私にとっては分野が違う大研究者として近寄り難いところがありました。しかしみなさんもご存知のとおり大変気さくな方で、私が学部長に就任する少し前に発足した「国際日本研究」コンソーシアムにおいて国際日本文化研究センターとの連絡役を快くお引き受けいただき、非常に助かったことが今では良い思い出となっております。

渡先生は1990年に明治大学政治経済学部に着任され、2008年の学部創設時に本学部に移籍されました。そして創設時より長きに渡り一般教育主任としてご活躍され「学部長や他の執行部メンバーが交代しても、常に執行部で存在感を放ち続ける先生」でいらっしゃいました。ただし私個人としては、先生が学部執行部を離れられた後に学部長として、特に初年次教育と入試に関して非常に熱心に取り組んでいただき、また他の様々な学務においても、私が困った時に常に献身的に支えていただき、大変お世話になりました。

尾関先生は2003年に明治大学経営学部に着任され、2008年の学部創設時に本学部に移籍されました。尾関先生も創設時の学部執行部のメンバーであり、本学部の英語教育の発展にご尽力されました。尾関先生には、私の学部長1期目に筆頭教務主任としてお支えいただき、その後の4年間は理事として様々なご支援を賜りました。ところで（先生は覚えていらっしゃると思いますが）実は私が尾関先生とお仕事を最初にご一緒させていただいたのは、2人だけのイングリッシュトラックの設置準備委員会でした。そのイングリッシュトラックも発足からはや10年超が経過し、時の速さを痛感いたします。

横田先生は2008年の学部創設時に一橋大学から移籍され、当初は国際交流委員会の委員長として、文字通りゼロであった学部としての留学先の開拓を進め、同時に在京の日本語学校からの指定校推薦入試という画期的な手法を導入し、本学部の国際化を送り出し・受け入れの両面で推進してくださいました。さらには大学のグローバル化の推進にご尽力され、対外的にはヒューマンライブラリーを長年実施され、2014年からは学部長として、本学部の特徴にダイバーシティという新たな彩りを加えてくださった功績は計り知れません。

小林先生も横田先生や私と同様に2008年の学部創設時からの移籍メンバーであり、国際交流委員会のメンバーとして、フロリダのディズニー・アカデミック・インターンシップや、多数のコミュニティ・カレッジの留学先の開拓など、様々な形で学生の海外経験の道を開いてくださ

いました。小林さんがいらっしやらなければ、現在の本学部の国際化のかたちは、もっとずっと平凡なものになっていたと思います。さらに個人的には、現在の学部長3期目において、学科長として非常に近くから叱咤激励とともに支えていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

以上の5名の先生方のご退職されることで、とうとう学部創設以降にお迎えしたメンバーの数が、学部創設時のメンバーの数を上回ることになるという、学部にとって大きな節目を迎えることとなります。そのことを考えながら、これまでの学部の発展に対する先生方の多大なるご貢献に対して、重ねて深く感謝を申し上げますとともに、今後のさらなる発展をお見守りいただきたいとの願いを差し上げつつ、先生方の益々のご活躍を祈念申し上げて、献呈の辞とさせていただきます。

2024年3月吉日

国際日本学部長 鈴木賢志



張競教授·近影

張 競 教授 履歴・業績

目次

1 学歴・学位・職歴

<学歴>

- 1982年 2月 華東師範大学外文系卒業
 1988年 3月 東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻修士課程修了
 1991年12月 東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻博士課程修了

<学位>

- 1991年12月 博士（学術） 東京大学

<職歴等>

- 1982年 4月 華東師範大学 専任助教
 1992年 4月 東北芸術工科大学 専任助教授
 1996年 4月 國學院大學 専任助教授
 1998年 4月 明治大学法学部 専任助教授
 2000年 4月 明治大学法学部 専任教授
 2007年 3月 ハーバード大学 客員研究員
 2009年 4月 明治大学国際日本学部 専任教授
 2011年 4月 国際日本文化研究センター 客員教授
 2018年 4月 東京大学総合文化研究科 客員教授
 2022年 9月 ハーバード大学 客員研究員

2 研究活動

(1) 著書・編著書

<単著>

- 1992年 『恋の中国文明史』筑摩書房、／ちくま学芸文庫 1997年
 1995年 『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店
 1997年 『中華料理の文化史』ちくま新書 /ちくま文庫、2013
 2001年 『美女とは何か一日中美人の文化史』晶文社 /角川ソフィア文庫 2007
 2002年 『天翔るシンボルたち』農文協
 2002年 『중화요리 4000년의 문화사』 뿌리와 이파리.
 2004年 『文化のオフサイド/ノーサイド』岩波書店、
 2004年 『사랑의 중국 문명사: 잡중문화 중국 읽기』 이학사
 2006年 『アジアを読む』みすず書房
 2007年 『근대 중국과 연애의 발견』 소나무

- 2008年 『中国人の胃袋－日中食文化考』 バジリコ
 2008年 『「情」の文化史 中国人のメンタリティー』 角川選書
 2010年 『海を越える日本文学』 ちくまプリマー新書
 2011年 『本に寄り添う Cho Kyo's Book Reviews 1998-2010』 ピラールプレス
 2011年 『異文化理解の落とし穴－中国・アメリカ・日本』 岩波書店
 2012年 *The search for the beautiful woman : a cultural history of Japanese and Chinese beauty* ; Rowman & Littlefield Publishers
 2013年 『張競の日本文学診断』 五柳書院〈五柳叢書〉
 2014年 『夢想と身体の間人博物誌: 綺想と現実の東洋』 青土社
 2014年 『詩文往還 戦後作家の中国体験』 日本経済新聞出版社
 2015年 『時代の憂鬱 魂の幸福』 明石書店
 2017年 『餐桌上的中國史』 大是文化
 2021年 『식탁 위의 중국사 : 한 상 가득 펼쳐진 오천 년 미식의 역사』 현대지성
 2023年 『羅針盤なき航海』 論創社

<共著>

- 1991年6月 竹田晃退官記念学術論文集編集委員会編『東アジア文化論叢』 汲古書院
 1994年3月 川本皓嗣編『美女の図像学』 思文閣
 1995年7月 神奈川大学言語研究センター 編『異文化との出会い——日本文化を読み直す』 勁草書房
 1994年1月 亀井俊介編『近代日本の翻訳文化』 中央公論社
 1995年12月 丸谷才一編『私の選んだ文庫ベスト3』 毎日新聞社、
 Edited by Ziva Ven-Porat & Hana Wirth-Nesher, 《Dramas of Desire》
 International Comparative Literature Association
 1997年 世界河川会議編『長良川から世界へ…人と川の共生をめざして』 世界河川会議実行委員会
 1998年10月 丸谷才一編『本読みの達人が選んだ「この3冊」』 毎日新聞出版社
 1999年5月 稲畑耕一郎監修『紫禁城の女性たち』 西日本新聞社
 2000年4月 稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』 名古屋大学出版会
 2000年11月 国分良成編『中国全球化（グローバリゼーション）が世界を揺るがす』 ウェッジ
 2001年5月 丸谷才一、三浦雅士、鹿島茂編『千年紀のベスト100作品を選ぶ』 講談社、
 2001年6月 『オン・セックス』 飛鳥新社／文春文庫、2006
 2001年7月 日本文藝家協会編『文芸年鑑』「中国文学の現状、翻訳と研究」新潮社
 2001年7月 『丸谷才一と22人の千年紀ジャーナリズム大合評』 都市出版
 2001年9月 『奈良・平安朝の日中文化交流』（共）農文協

- 2002年7月 日本文藝家協会編『文芸年鑑』「中国文学の現状、翻訳と研究」新潮社
- 2003年3月 明治大学人文科学研究編『異文化体験としての大都市——ロンドンそして東京』
明治大学人文科学研究所
- 2003年11月 小森陽一編『詩歌の饗宴』(岩波講座文学; 4)岩波書店
- 2005年10月 日本経済新聞社編『私にとっておきの愉しみかた』日本経済新聞出版社,
2005年 Edited by Eugene Eoyang, 《Intercultural Explorations》 Amsterdam, New York.
- 2005年4月 浅田次郎 著『歴史・小説・人生』河出書房新社
- 2005年10月 北方謙三編『替天行道——北方水滸伝読本』集英社
- 2005年10月 日本経済新聞社編『半歩遅れの読書術 I』日本経済新聞出版社
- 2006年6月 『意地悪な人: ベスト・エッセイ2006』光村図書
- 2012年11月 丸谷才一、池澤夏樹編『分厚い本と熱い本』毎日新聞社
- 2012年8月 丸谷才一、池澤夏樹編『怖い本と楽しい本』毎日新聞社
- 2011年4月 浅田次郎著『すべての人生について』幻冬舎
- 2012年8月 北方謙三 編著『吹毛剣: 楊令伝読本』集英社
- 2012年3月 文藝春秋企画出版部編『くつろぎの時間』文藝春秋
- 2014年2月 金田直次郎君追悼刊行会編『扶桑と唐土の間を駆けて』金田直次郎君追悼刊行会
- 2015年6月 藤原書店編集部編『「アジア」を考える』藤原書店
- 2016年6月 日本文藝家協会編『ベスト・エッセイ = THE BEST ESSAY』光村図書
- 2017年3月 沼野充義編著『つまり、読書は冒険だ』光文社
- 2017年4月 桐光学園中学校・高等学校編『高校生と考える人生のすてきな大問題』左右社
- 2017年4月 中国文化事典編集委員会編集『中国文化事典』丸善出版
- 2018年11月 太田代志朗ほか編『高橋和己の文学と思想——その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』コー
ルザック社
- 2021年 Edited by Eugene Eoyang, Gang Zhou and Jonathan Hart 《Comparative
Literature Around the World: Global Practice》, Honore Champion, Paris

<編著>

- 2005年6月 張競 編著『現代中国の文化』明石書店 2005 (現代中国叢書 ;
2016年 張競, 村田雄二郎 編『日中の120年文芸・評論作品選』第1巻から第5巻、岩波書店

(2) 学術論文等

- 1982年7月 「中島敦の中国故事小説にみられる老荘思想について」日本文学協会国語部会編『国
語教育』第15号
- 1985年7月 「荒原派詩歌試論」中国社会科学院文学研究所編『外国文学報道』第40期
- 1986年6月 日中比較文学試論——唐詩と古今集の色彩表現を中心に」解釈学会編集『解釈』第

- 32巻第6号、教育出版センター
- 1986年7月 日中比較文学試論——(一) 韻文表現における色彩象徴」解釈学会編集『解釈』第32巻第7号、教育出版センター
- 1986年8月 日中比較文学試論——(二) 詩の想像と色彩」解釈学会編集『解釈』第32巻第8号、教育出版センター
- 1987年5月 「漢字と漢詩の日本語読み下し」解釈学会編集『解釈』第33巻第5号、教育出版センター
- 1988年4月 「偶然の一致か模倣か」東大比較文学会編『比較文学研究』第53号、東大比較文学会
- 1988年10月 「社会結構的变化と文学」『華東師範大学学报』79期、華東師範大学
- 1989年5月 「アイバンホーの変容」東大比較文学会編『比較文学研究』第55号
- 1990年12月 「万葉集における恋の感情——中国文学との関係をめぐって」『萬葉集研究会会報』第6号、解釈学会万葉集研究会
- 1990年7月 「漱石山房のたより」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第11号
- 1990年10月 「命がけで追う詩の真実」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第12号
- 1991年3月 「先秦時代の「情」の文化的意味について——『礼記』の記述を中心に」『都留文科大学研究紀要』第34集、都留文科大学
- 1991年10月 「五四運動前後の中国における西洋文化の受容と日本」東大比較文学会編『比較文学研究』60号、東大比較文学会
- 1991年10月 「中国詩における恋の抒情の表現原型」『都留文科大学研究紀要』第35集、都留文科大学
- 1991年10月 「辺境文化の南下と新しい恋——『紅樓夢』をめぐって」神奈川大学人文学会編『人文研究』110集 神奈川大学人文学舎
- 1991年12月 「恋物語における超自然的イメージの意味——人間と神の恋と人間と妖怪の恋をめぐって」『人文研究』第111集 神奈川大学人文学舎
- 1992年5月 「異文化の中の作品の運命——中国における『人形の家』の受容をめぐって」『人文研紀要』第15号、中央大学人文科学研究所
- 1992年5月 「東西文化衝突の中の『椿姫』——最初に西洋の恋愛を伝えた作品として」『人文研究』第113集、神奈川大学人文学会
- 1992年6月 「異文化としての恋愛の発見とその屈折——辛亥革命前後の恋愛観について」現代中国学会編『現代中国』第66号、現代中国学会
- 1993年8月 「過程としての「恋」、その集合体としての「色」」『無限大』No.94、日本アイ・ビー・エム株式会社
- 1993年11月 「情緒表現から倫理のアナロジーへ」『東北芸術工科大学紀要』創刊号
- 1994年7月 「大正文学の陰影——張資平の恋愛小説と田山花袋」東大比較文学会編『比較文学研究』66号、東大比較会

- 1994年2月 「恋の文学と遊里」『創文』353号、創文社
- 1996年3月 「目連戯は女人往生の演劇なのか」『群像』第51巻第4号、集英社
- 1996年11月 「メディア・読書行為・テキスト」『大航海』第13号、新書館
- 1996年12月 「記号としての死の別れ」『IS』74巻、ポーラ文化研究所
- 1996年1月 「メディアの文化大革命」『国際交流』70巻、国際交流基金
- 1996年1月 「消費革命と上海地域文明の変容」『国際交流』70巻、国際交流基金
- 1997年3月 「民族文化の変容と帰属意識」『大航海』1997年3月号、新書館
- 1997年3月 「日本ではなぜ犬食いはないか」『新潮45』第16巻第3号、新潮社
- 1997年9月 「海を越えた詩心——与謝野晶子と近代中国の「小詩」」『アステイオン』46号、TBSブリタニカ
- 1997年9月 「晶子と中国の女性運動」『鉄幹と晶子』第三号、和泉書院
- 1997年11月 「言葉による、言葉に対する反抗」『文学界』1997年11月号、文芸春秋
- 1997年12月 「嚴父の追放」『大航海』1997年12月号、新書館
- 1998年4月 「文化が情報になったとき」『世界』1998年4月号、岩波書店
- 1998年4月 「解き放たれた想像力」『アステイオン』48号、TBSブリタニカ
- 1998年4月 「中国拷問残酷物語」『新潮45』第17巻第4号、新潮社
- 1998年6月 「小人国、君子国そして女の国への旅」『IS』80号、ポーラ文化研究所
- 1998年9月 「美しいのは遊女なのか、良妻賢母なのか」『EYES』第9号、丸善株式会社
- 1999年1月 「むだのなかに隠された合理性」『Vesta』33号、味の素文化センター
- 1999年3月 「文化越境としてのエンターテインメント」『ヨークピア』第28号、横浜市海外交流協会
- 1999年6月 「美意識は異文化の敷居をどう跨ぐか」『新潮』第96巻第6号、新潮社
- 1999年9月 「空想のランドスケープ——奈良・平安文学における桃源郷イメージの受容」『明治大学教養論集』323号
- 2000年2月 「歴史VSフィクションをいかに超えるか」『大航海』第32号
- 2000年5月 「住居空間から読む現代文化変容」『ウェッジ』2000.6月号、株式会社ウェッジ
- 2000年9月 「与謝野晶子と中国——一九二〇年代前半に翻訳された評論について」『明治大学教養論集』338号、明治大学教養論集刊行会
- 2000年10月 「文化のあり方としての大学教育」『大航海』第36号、新書館
- 2000年10月 「実験的な手法で東洋的な省察」『毎日新聞』毎日新聞社
- 2001年1月 「二つの恋の理想像」『明治大学教養論集』第339号、明治大学教養論集刊行会
- 2001年3月 「与謝野晶子はどう読まれていたか——一九二〇年代の中国文学における受容について」『生活文化研究所年報』第14輯、ノートルダム清心女子大学生活文化研究所
- 2001年3月 「与謝野晶子と李助君の戯劇性邂逅」『The Journal of Humanities』Vol.7, The Institute of Humanities Meiji University』明治大学人文科学研究所

- 2001年4月 「〈大衆〉の変容と文化の行方」『大航海』38号、新書館
- 2002年3月 「大正文学と中国のかかわりについて——佐藤春夫『車塵集』の「秋の瀧」を中心に」
『明治大学人文かが研究所紀要』第50冊、明治大学人文科学研究所
- 2002年10月 「領土を超えた共感」『東京新聞』
- 2002年12月 「タフガイの変遷」『サントリー・クォーター』第71号
- 2002年2月 「楊貴妃はデブだった」『現代』第三十六卷二号、講談社
- 2002年3月 「再現された肖像たち」『IS』八七号、ポーラ文化研究所
- 2002年3月 「中国の大河ドラマ」『IS』八七号、ポーラ文化研究所
- 2003年1月 「アジア文化比較研究の明日」『出版ダイジェスト』出版粋会
- 2003年1月 「動物幻想とその表象類型——『山海経』の幻想全の形態的特徴をめぐって」『明治大学教養論集』363号、明治大学教養論集刊行会
- 2003年4月 「情念消費の言語ゲーム」『大航海』No.46、新書館
- 2003年9月 「比較文学の『若さ』を保つために」『比較文学研究』第82号、東大比較文学会
- 2004年5月 「文化越境と異文化倫理——はたして異文化理解は可能なのか」『アステイオン』第60号、TBSブリタニカ
- 2004年9月 「池田小菊『帰る日』との翻案小説『風に飛ぶ柳のわた』、『明治大学教養論集』386号、明治大学教養論集刊行会
- 2004年11月 「『社交する人間』の未来」、『アステイオン』第61号、TBSブリタニカ
- 2005年5月 「半世紀続いてきた思索の結晶」『東方』第291号、東方書店
- 2006年11月 「大正作家たちの上海表象」『東京人』No.233、都市出版株式会社
- 2006年9月 「断片」と「秋の悲嘆」にみる上海の投影——富永太郎の都市体験とその詩作について」『明治大学教養論集』通巻409号、明治大学教養論集刊行会
- 2007年8月 「富永太郎が見た上海——場所の経験と詩想の響き合い」『中原中也研究』第12号、中原中也記念館
- 2011年10月 「文人と豆腐料理」『考える料理』38号、新潮社
- 2011年11月 「ヘゲモニーをめぐる二つの主張」『アステイオン』75号、阪急コミュニケーションズ
- 2011年12月 「文字と書物の旅をめぐる綺想」『東京人』303号、都市出版株式会社
- 2012年1月 「『花営錦陣』の官能的な図像表現と寓意——江戸時代の春画との比較を中心に」『芸術新潮』2012年2月号、新潮社
- 2012年5月 「魂の幸福を語り合うこと」『アステイオン』76号、阪急コミュニケーションズ
- 2013年1月 「史実のなかの夢、詩画のような夢」『考える人』43号、新潮社
- 2013年3月 「中国にみる不老不死の夢」『NARASIA』3号、丸善出版
- 2013年9月 「How Youth Culture Has Changed the Japanese Publishing Industry」『Japanese Book News』No.77, Japan Foundation.
- 2014年2月 「孔子から曾国藩へ——なぜ中国の文人が働くようになったか」『考える人』2014冬

号、新潮社

- 2014年5月 「文化とデモクラシーの行方」『アステイオン』80号、CCCメディアハウス。
- 2015年3月 「池大雅の『莊子夢蝶図』」『学会会報』No.911
- 2015年5月 「戦後の日中作家交流とその意味について」『日中文化交流』No.829、日中文化交流協会
- 2015年5月 「土着の記憶を魂に響くりズムで」『アステイオン』82号、CCCメディアハウス
- 2015年6月 「木下順二の見た京劇」『京劇西遊記』公演カタログ
- 2015年7月 「漢字が文化の他者になったとき」『潮』677号、潮出版社
- 2015年12月 「批評する美術館」『国立新美術館研究紀要』No.2、国立新美術館
- 2016年1月 「文化の記憶とともに消えた明治26年の岡倉天心の中国視察旅行」『全漢詩連会報』第51号、全日本漢詩連盟
- 2016年5月 「技術至上の現代になぜ文学芸術が大切か」『アステイオン』84号、CCCメディアハウス
- 2016年10月 「半世紀前にわか報道写真展」『日中文化交流』N.847、日中文化交流協会
- 2016年10月 「水上勉の仏教回帰と作風の変化（上）苛烈な人生 少年期、宗教に失望」『中日新聞』
- 2016年10月 「『風狂』を独自に解釈」『中日新聞』
- 2017年11月 「華人文学という迷宮へのいざない」『アステイオン』87号、CCCメディアハウス
- 2018年11月 「夢を種蒔く人・厨川白村（一）——京都大阪で過ごした幼少時代」『アステイオン』89号、CCCメディアハウス
- 2019年5月 「夢を種蒔く人・厨川白村（二）——最初の音符を奏でるのは大事だ」『アステイオン』90号、CCCメディアハウス
- 2019年10月 「旅する詩人 さすらいの言葉——佐々木幹郎論への試み」『現代詩手帖』2019年10月号、思潮社
- 2019年10月 「文学表現の可能性と限界——文体のオリジナリティと書くことの責任」『表現研究』第110号、表現学会
- 2019年12月 「夢を種蒔く人・厨川白村（三）——鉄は熱いうちに打て」『アステイオン』91号、CCCメディアハウス
- 2020年6月 「夢を種蒔く人・厨川白村（四）——象牙の塔の悲喜劇」『アステイオン』92号、CCCメディアハウス
- 2020年11月 「夢を種蒔く人・厨川白村（五）——英語教師から新進気鋭の評論家へ（上）」『アステイオン』93号、CCCメディアハウス
- 2021年5月 「夢を種蒔く人・厨川白村（六）——英語教師から新進気鋭の評論家へ（下）」『アステイオン』94号、CCCメディアハウス
- 2021年11月 「夢を種蒔く人・厨川白村（七）——左足切断そしてアメリカ留学」（上）『アステイオン』95号、CCCメディアハウス

- 2022年5月 「夢を種蒔く人・厨川白村（八）——左足切断そしてアメリカ留学」（下）『アステイオン』96号、CCCメディアハウス
- 2023年5月 「謎のシエルコフ夫人を探して六千里」『アステイオン』98号、CCCメディアハウス
- 2023年11月 「巻頭言」『アステイオン』99号、CCCメディアハウス

（3）その他の研究業績

<翻訳>

- 1985年7月 「荒原派詩作選訳」中国社会科学院文学研究所編『外国文学報道』第40期
- 1986年12月 『紅蠟燭與美人魚』上海訳文出版社（共訳）
- 2000年 葉渭渠著「川端文学と日本文化」『IS』84号、ポラ文化研究所

<解説>

- 2002年4月 小池真理子『ひるの幻 よるの夢』文春文庫解説、文芸春秋
- 2003年12月 莫言『赤い高粱』岩波現代文庫解説、岩波書店
- 2005年4月 浅田次郎『珍妃の井戸』講談社文庫解説、講談社
- 2005年7月 丸谷才一『花火屋の大將』文春文庫解説、文芸春秋
- 2005年10月 関川夏央『白樺たちの大正』文春文庫解説、文芸春秋
- 2007年9月 北方謙三『水滸伝』第12巻、集英社文庫解説、集英社
- 2012年6月 北方謙三『楊令伝』第13巻、集英社文庫解説、集英社
- 2013年4月 丸谷才一『恋と日本文学と本居宣長』解説、講談社
- 2014年11月 『山崎豊子全集』第2期3「運命の人 3」解説、新潮社
- 2017年1月 北方謙三『岳飛伝』第3巻「嘶鳴の章」集英社文庫解説、集英社

<評論&エッセイ>

- 1986年6月 「下町は元禄時代の江戸の町」『東京人』1986年6月号、東京都文化振興会
- 1988年4月 「失われた美德を取り戻して」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第2号、財団法人生涯学習開発財団
- 1988年10月 「中国との違いにみる、日本人の「学ぶ」ということ」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第4号、財団法人生涯学習開発財団
- 1990年1月 「ベルリン、プラハと北京」『新潮45』第9巻第1号、新潮社
- 1990年1月 「明治日本人、その教養の豊か」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第9号、財団法人生涯学習開発財団
- 1990年4月 「明治の心を読む」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第10号、財団法人生涯学習開発財団
- 1990年6月 「「句」の学問」『花も嵐も』第27号、山河社

- 1990年7月 「徳永直の読者」『花も嵐も』第28号、山河社
- 1990年10月 「八月の随想」『花も嵐も』第31号、山河社
- 1990年11月 「七十年前の高田馬場」『花も嵐も』第32号、山河社
- 1991年1月 「権力にこびず、ひたすら美を求める」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第13号、財団法人生涯学習開発財団
- 1991年7月 「日本ではプロ野球が戦争の代わり」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第15号、財団法人生涯学習開発財団
- 1991年10月 「学ぶことについての発想の違い」財団法人生涯学習開発財団編『ライフラーニング』第16号、財団法人生涯学習開発財団
- 1992年3月 「酒の飲み方」『花も嵐も』第48号、山河社
- 1992年7月 「講義と売春」『花も嵐も』第52号、山河社
- 1992年10月 「わが内なる上海」『中国語』第394号、内山書店
- 1993年8月 「とても人にはいえない美人論」『新潮45』1993年8月号、新潮社
- 1994年1月 「お正月の音」『山形新聞』
- 1994年2月 「紹興酒の涙」『山形新聞』
- 1994年3月 「日曜コックの楽しみ」『山形新聞』
- 1994年5月 「喧嘩のエチケット」『山形新聞』
- 1994年6月 「蛙の感傷」『山形新聞』
- 1994年3月 「近代日本文学と中国文学のズレ」『読売新聞』
- 1994年3月 「なぜ中国に恋愛小説少ないか（上）」『山形新聞』
- 1994年3月 「なぜ中国に恋愛小説少ないか（下）」『山形新聞』
- 1994年7月 「日本国探検の記」『ARS』創刊号東北芸術工科大学。
- 1994年8月 「心頭を滅却すれば」『山形新聞』
- 1994年9月 「日本風中華ラーメン」『山形新聞』
- 1994年10月 「物乞い文法」『山形新聞』
- 1994年10月 「大衆文学の運命」『聖教新聞』
- 1994年11月 「食キングな季節感」『山形新聞』山形新聞社
- 1995年2月 「さすらい家族」『ARS』第2号東北芸術工科大学。
- 1995年1月 「源義経は英雄か」『国語通信』第 号、筑摩書房
- 1995年4月 「こちらは雪ばかりではない」『日本と中国』日中友好協会
- 1995年7月 「縁起のいい色、わるい色」『ワールドプラザ』第40号、講談社
- 1995年9月 「生で食うか、焼いて食うか」『ワールドプラザ』第41号、講談社
- 1995年12月 「ある知られざる交流」『山形新聞』
- 1995年11月 「あげるエチケット、もらう常識」『ワールドプラザ』第42号、講談社
- 1996年1月 「礼儀心は同じだけれど」『ワールドプラザ』第43号、講談社

- 1996年1月 「上海は何処へ」『フロント』第8巻第4号、財団法人リバーフロント整備センター
- 1996年1月 「ある歌手の一日」『国際交流』1996年1月号、国際交流基金
- 1996年1月 「腐敗の経済学」『国際交流』1996年1月号、国際交流基金
- 1996年2月 「近代の中国文学とジャーナリズム」『岩波月報』岩波書店
- 1996年2月 「イールの女神像」『文学界』第50巻第3号、文藝春秋
- 1996年2月 「箸の美学と箸の作法」『ワールドプラザ』第44号、講談社
- 1996年4月 「子年の叫び声」『季刊アステイオン』第40号、TBSブリタニカ
- 1996年4月 「豆腐の落とし穴」『ワールドプラザ』第45号、講談社
- 1996年6月 「東北イメージの虚実」『This is 読売』第7巻第3号、読売新聞社
- 1996年6月 「しんどい通過儀礼」『ワールドプラザ』第46号、講談社
- 1996年8月 「断りたい祝福」『ワールドプラザ』第47号、講談社
- 1996年7月 「奇数と偶数」『國學院雑誌』第97巻第9号、國學院大學
- 1996年9月 「七夕 裁縫の上達願う「乞巧」の祭り」『日本と中国』日中友好協会
- 1996年10月 「花よりラーメン」『ワールドプラザ』第48号、講談社
- 1996年10月 「故郷を思う」『日本と中国』日中友好協会
- 1996年11月 「食卓囲み蟹を賞味するひととき」『日本と中国』、日中友好協会
- 1996年12月 「冬至はいまも日常生活の節目」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年1月 「好みの食材をふんだんに」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年3月 「月と明るさ競う灯籠の祭り」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年4月 「時代は終わっていない」『This is 読売』第8巻第1号、読売新聞社
- 1997年4月 「天下の憂いを先んじて憂う」『季刊 歴史ピープル』講談社
- 1997年4月 「“草団子”に思いを託したことも」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年5月 「立夏の食卓に「塩漬け卵」と「酒釀」」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年5月 「きれい好きな泥棒」『毎日新聞』
- 1997年6月 「ちまき自慢」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年6月 「返す言葉がない」『毎日新聞』
- 1997年7月 「西瓜は夏一番の思い出」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年7月 「環境にやさしい食べ方」『毎日新聞』
- 1997年7月 「やがて懐かしき戸神山」『やましんVoice』第13号、山形新聞
- 1997年8月 「近所こそって夕涼み」『日本と中国』、日中友好協会
- 1997年8月 「生きた外国語のド迫力」『毎日新聞』
- 1997年9月 「私の好きなヨーロッパの酒場」『クォーター』第55号、サントリー株式会社東京
広報部
- 1997年9月 「フィレンツェでの陽動作戦」『毎日新聞』
- 1997年11月 「スッポンや姿蒸しに限る」『ちくま』320号、筑摩書房

- 1997年10月 「エリートがいいか、落ちこぼれがいいか」『毎日新聞』
- 1997年10月 「異文化交流と漢字の誤解」『公明新聞』
- 1997年11月 「やがて懐かしい蛇の肉」『毎日新聞』
- 1997年12月 「ファッションの凱旋」『メタログ』1997年12月号、メタログ
- 1997年12月 「上海の特選美味の店」『メタログ』1997年12月号、メタログ
- 1997年12月 「上海のゲイ事情」『メタログ』1997年12月号、メタログ
- 1998年1月 「中国で見た芸能記事」『外交フォーラム』第115号、都市出版
- 1998年1月 「過ぎたるは、なお及ばざるがごとし」『毎日新聞』
- 1998年10月 「戦うこおろぎたち」『中央公論』通巻1372号、中央公論社
- 1998年10月 「親族付き合いの常識ー一日中の家族観の違い」『国際文化研修』1998年秋号、財団法人全国市町村振興協会
- 1998年11月 「美人は残酷である」『中国語』467号、内山書店
- 1998年12月 「醜婦も心が美しければ」『中国語』468号、内山書店
- 1998年12月 「裏の作法にもお国柄」『岐阜新聞』
- 1998年12月 「地下の経済学」『岩手日報』
- 1998年12月 「裏の作法」『京都新聞』
- 1998年12月 「3グラムの理由」『岐阜新聞』
- 1998年11月 「銀杏が熟れる頃の思い出」『敬愛大学国際研究』編集委員会編『敬愛大学国際研究』第2号、敬愛大学国際学会
- 1999年1月 「美人は不吉である」『中国語』469号、内山書店
- 1999年1月 「人民服のクリントン」『神戸新聞』
- 1999年1月 「天然記念物を食べる」『伊勢新聞』
- 1999年1月 「清潔感と異文化理解」『公明新聞』
- 1999年2月 「美人は不運である」『中国語』470号、内山書店
- 2000年9月 「偶然の出会い」『IS』84号、ポーラ文化研究所
- 2001年1月 「新しい世紀の異文化交流マナー」『公明新聞』
- 2001年1月 「新しい世界への扉」『環』2001冬Vol.4、藤原書店
- 2001年2月 「三十二年目の回顧」『言語文化』第18号、明治学院大学言語文化研究所
- 2001年6月 「胃袋の適正サイズ」『図書』第626号、岩波書店
- 2001年11月 「理想の容姿は文化の『鏡』」『東京新聞』(夕刊)
- 2003年6月 「成語に秘められた力」『中国語ジャーナル』第3巻第6号、アルク
- 2003年7月 「忘れられぬ添削」『日本経済新聞』
- 2003年9月 「ブックログ」『本とコンピュータ』2003年秋号、「本とコンピュータ」編集室
- 2003年12月 「食糧難時代の中華料理」『月刊しにか』第14巻第12号
- 2003年12月 「中国をつくった人物たちー則天武后」日経BP企画編『中国ビジネスクラブ』第

- 6号、SMBCコンサルティング株式会社
『今月の本棚』毎日新聞社
- 2004年1月 「中国をつくった人物たちー鑑真和上」日経BP企画編『中国ビジネスクラブ』第7号、SMBCコンサルティング株式会社
- 2004年9月 「ネットで作家のデータベースを作ろう」『近代日本文学館』第201号、近代文学館
- 2005年2月 「「アジア」を観る前にすべきこと」『機』第157号、藤原書店
- 2005年4月 「子供は語学の天才か」『文藝家協會ニュース』第644号
- 2005年5月 「焼餅を焼くのもまた楽しからずや」『中国語講座』第43巻第2号、日本放送出版協会
- 2005年7月 「旅の食物、食物の旅」『中国語講座』第43巻第4号、日本放送出版協会
- 2005年9月 「中国の蕎麦の作り方」『中国語講座』第43巻第6号、日本放送出版協会
- 2005年11月 「『棗飯』とおにぎり」『中国語講座』第43巻第8号、日本放送出版協会
- 2005年10月 「楊貴妃イメージの変容」能楽観世座編「立合能 楊貴妃」、財団法人観世文庫
- 2006年1月 「『油条』の歴史を追って」『中国語講座』第43巻第10号、日本放送協会
- 2006年3月 「食卓を賑わす魚たち」『中国語講座』第43巻第12号、日本放送協会
- 2006年4月 「山重水復疑無路、柳暗花明又一村」The Japan Journal中文版日本通信、第24期、The Japan Journal社
- 2006年10月 「文学が映す若者・農民像」『朝日新聞』
- 2007年3月 「日本文学との出会い」『学会会報』No.863、社団法人学会
- 2007年9月 「郊外のカーライルは自然が保たれた町」(『公明新聞』)
- 2008年9月 「懐かしい味覚をめぐって」(『公明新聞』)
- 2009年3月 「活字メディア衰退を冷静に受けとめる必要も」『現代と私たち』月刊現代休刊とジャーナリズムの未来を考える会
- 2009年9月 「アメリカの小さな町で見た民主主義」(『公明新聞』)
- 2010年1月 「『ロン・ヤス』関係 油断禁物」(『山形新聞』)
- 2010年3月 「心得知らぬ日本の若者」(『山形新聞』)
- 2010年5月 「熱狂的で静かな米選挙ー宣伝なく生活妨害もせず」(『山形新聞』)
- 2010年7月 「有権者の責任は重大ー良識に頼る民主主義」(『山形新聞』)
- 2010年8月 「ありえない完璧な教育ー問題点見つけ絶えず直す」(『山形新聞』)
- 2010年9月 「神話としての都市表象」『ちくま』第474号、筑摩書房
- 2010年10月 「選択肢残す『多様性』」(『山形新聞』)
- 2010年12月 「『米国が標準』ではない」(『山形新聞』)
- 2011年3月 「海外留学リスクも」(『山形新聞』)
- 2011年5月 「悲しみ押さえつけないで」(『山形新聞』)
- 2011年5月 「読みやすさ優先の翻訳の力、日本の歴史小説ブームも」(『公明新聞』)

- 2011年6月 「夢を信じる」『週刊文春』2011年6月16日号、文藝春秋
- 2011年6月 「同じ夢を見る」『週刊文春』2011年6月23日号、文藝春秋
- 2011年6月 「親友の顔が一瞬に曇った」(『週刊朝日』2011年6月24日号、朝日新聞社)
- 2011年6月 「古人たちの夢」『週刊文春』2011年6月30日号、文藝春秋
- 2011年7月 「夢を恐れる」『週刊文春』2011年7月7日、文藝春秋
- 2011年8月 「史料のはざまに隠されたものをたずねて」『VESTA』第83号、味の素文化センター
- 2011年7月 「大衆感情に流されない」『山形新聞』
- 2011年9月 「医療保険 驚く米国の方式」『山形新聞』
- 2011年11月 「親子関係に 公共の意識」『山形新聞』
- 2012年1月 「失敗を受容する社会に」『山形新聞』
- 2012年3月 「法科大学院制度は失敗」『山形新聞』
- 2012年5月 「いつも矛盾だらけの中国」『山形新聞』
- 2012年7月 「破綻寸前の医療保険制度」『山形新聞』
- 2012年9月 「視点を变えて考えよう」『山形新聞』
- 2012年10月 「秋入学は本当に有益か」『山形新聞』
- 2012年12月 「日本から消えゆく喧嘩」『山形新聞』
- 2013年3月 「雇用分野に変化の兆し——高齢者の能力生かす発想が必要」『山形新聞』
- 2013年5月 「“変化球”に見事三振——黄泉の下で笑う親父」『山形新聞』『山形新聞』
- 2013年6月 「指導者に不可欠な品格——目立つ劣化、根強い途上国侮蔑」『山形新聞』
- 2013年8月 「良好な隣国関係は”財産“——日中感情悪化 先人の努力顧みよう」『山形新聞』
- 2013年9月 「中国地名は漢字表記に——通じないカタカナ発音、一利なし」『山形新聞』
- 2013年11月 「米国方式導入 多い疑問——大学入試改革、文化風土 見据えて」『山形新聞』
- 2014年1月 「政治の『合法的背任』横行——米国債デフォルト騒動が示す教訓」『山形新聞』
- 2014年2月 「通信技術の活用図ろう——『人生100年』——超高齢化社会へ備え」『山形新聞』
- 2014年4月 「国際化を『平和』の手段に」『山形新聞』
- 2014年5月 「日本語が日本文化の基盤」『山形新聞』
- 2014年7月 「『教養崩壊』に歯止め策を」『山形新聞』
- 2014年8月 「能力に応じた職業選択を」『山形新聞』
- 2014年10月 「歴史共有の姿勢に学ぶ」『山形新聞』
- 2014年10月 「ジャンクの考察にみる複眼的思考」『遼』第53号、司馬遼太郎記念館
- 2014年10月 「日本の地方」『Worth Sharing』Vol.2、国際交流基金
- 2014年12月 「投票行動で社会変えよう」『山形新聞』
- 2014.10.1 「手工業で印刷された書物をたずねて」『究』43号、ミネルヴァ書房
- 2015年1月 「『米国流選抜』 どう生かす」『山形新聞』
- 2015年2月 「文化史の証言となった日中作家交流」『公明新聞』

- 2015年 3月 「『空気』の呪縛から自由に」『山形新聞』
- 2015年 4月 「国益主張 世界情勢が混迷」『山形新聞』
- 2015年 6月 「英語力 人間成長に重要か」『山形新聞』
- 2015年 7月 「家族との親密性が変容」『山形新聞』
- 2015年 9月 「法を整備し子供を守る」『山形新聞』
- 2015年10月 「難民移民、日本の対応は」『山形新聞』
- 2015年12月 「破壊の先に 平和訪れず」『山形新聞』
- 2016年 1月 「控えたい過剰な電飾」『山形新聞』
- 2016年 3月 「日本の見識 世界に示して」『山形新聞』
- 2016年 4月 「研究職 労働時間短縮を」『山形新聞』
- 2016年 5月 「外国人観光客 対応準備を」『山形新聞』
- 2016年 6月 「隣国を知る専門家を育てる」『山形新聞』
- 2016年 8月 「文系不要論の間違いととは」『山形新聞』
- 2016年 9月 「観光客誘致 先進国に学ぶ」『山形新聞』
- 2016年11月 「米大統領選後 溝修復が鍵」『山形新聞』
- 2016年12月 「不安定な世界 生きるには」『山形新聞』
- 2017年 1月 「公共利益に気を配ろう」『山形新聞』
- 2017年 3月 「心の中に壁を作らない」『山形新聞』
- 2017年 4月 「『文系学部廃止論』は危険」『山形新聞』
- 2017年 5月 「多様な情報から真相把握」『山形新聞』
- 2017年 7月 「日本文学の翻訳者支援」『山形新聞』
- 2017年 8月 「手厚い北欧の文学支援」『山形新聞』
- 2017年 9月 「外国語教育 広い視野で」『山形新聞』
- 2017年11月 「銅像たちの悲しき流転」『山形新聞』
- 2017年12月 「記憶力 人間形成に不可欠」『山形新聞』
- 2018年 2月 「世界の変化に関心持とう」『山形新聞』
- 2018年 3月 「公務員、倫理観取り戻して」『山形新聞』
- 2018年 5月 「キャリア変更できる社会に」『山形新聞』
- 2018年 6月 「広がる 世代間の文化断絶」『山形新聞』
- 2018年 8月 「災害救援 地域に専門機関」『山形新聞』
- 2018年 9月 「女性自ら意識改革必要」『山形新聞』
- 2018年10月 「独裁国に厳しい対処を」『山形新聞』
- 2018年12月 「医療保険維持へ改革必要」(『山形新聞』)
- 2019年 2月 「混迷の今こそ戦争防げ」『山形新聞』
- 2019年 3月 「『しつけ』名目の虐待防げ」『山形新聞』

- 2019年4月 「世界の最新の動き知ろう」『山形新聞』
- 2019年6月 「多文化社会への備え必要」『山形新聞』
- 2019年8月 「情報公開法の不備正そう」『山形新聞』
- 2019年9月 「核拡散 防止の努力を」『山形新聞』
- 2019年11月 「学部教育を三年制に」『山形新聞』
- 2019年12月 「若者の「草食化」は本当か」『山形新聞』
- 2019年12月 「文明の出直し・月面の日本基地より」『アステイオン』91号、CCCメディアハウス
- 2020年2月 「持続可能な成長の代償」『山形新聞』
- 2020年3月 「隔離こそ最も有効な対策」『山形新聞』
- 2020年4月 「一段と強力な対策必要」『山形新聞』
- 2020年5月 「非常時も公共図書館開いて」『山形新聞』
- 2020年7月 「大衆なき社会の脅威」『山形新聞』
- 2020年8月 「文化施設の規制に疑問」『山形新聞』
- 2020年9月 「新首相 環境施策に期待」『山形新聞』
- 2020年11月 「コロナ対策 財政に不安」『山形新聞』
- 2020年12月 「学生の精神的ケア 必要」『山形新聞』
- 2020年12月 「山崎正和先生の仕事と思い出」『それぞれの山崎正和 別冊 アステイオン』CCC
メディアハウス。
- 2021年1月 「長期化を見据えて 予備案練る」『山形新聞』
- 2021年3月 「オンライン授業に潜在力」『山形新聞』
- 2021年4月 「子育て支援に法整備必要」『山形新聞』
- 2021年6月 「ガザ 勝者なき武力衝突」『山形新聞』
- 2021年7月 「画一的な教育 転換必要」『山形新聞』
- 2021年8月 「「想定外」こそ想定せよ」『山形新聞』
- 2021年9月 「米、タリバンともに敗者」『山形新聞』
- 2021年11月 「選挙後求む 政策再点検」『山形新聞』
- 2021年12月 「政治の信頼回復 早急に」『山形新聞』
- 2022年2月 「課題山積 今年も試練」『山形新聞』
- 2022年3月 「米EU 停戦協議に臨め」『山形新聞』
- 2022年4月 「国際政治「待つ」大切さ」『山形新聞』
- 2022年5月 「対立より融和と協力」『山形新聞』
- 2022年7月 「スクールバス導入 ぜひ」『山形新聞』
- 2022年8月 「核廃絶への努力の継続必要」『山形新聞』

＜連載＞

名作を読む『サンデー毎日』

- 2004.9.19増大号 「極致の表現で描く幼い心」(中勘助『銀の匙』)
- 2004.10.17日号 「胸を突き刺す絶望感」(太宰治『斜陽』)
- 2004.11.14日号 「都市の表情に描かれる悲哀」(永井荷風『?東綺譚』)
- 2004.12.12日号 「人間性の真実を示す」(森鷗外「山椒大夫」)
- 2005.1.9-16日号 「円熟の筆致が無碍の境地に」(中里恒子『時雨の記』)
- 2005.2.13日号 「『無意識』を文学で表現」(芥川龍之介『お富の貞操』)
- 2005.3.13日号 「夢を奪われた少年」(志賀直哉『清兵衛と瓢箪』)
- 2005.4.10号 「生の淵をのぞくような」(夏目漱石『夢十夜』)
- 2005.5.8～15号 「リアルに描く女性の現実」(樋口一葉『十三夜』)
- 2005.6.12号 「近代社会に反逆する身体」(堀辰雄『菜穂子』)
- 2005.7.10号 「チューホフを超える巧みさ」(永井龍男『冬の日』)
- 2005.8.7号 「暗闇に描く男心の機微」(里見弴『俄あれ』)
- 2005.9.11号 「母を語って娘を描く」(川端康成『母の初恋』)
- 2005.10.9号 「日常の『遠景化』に見えるもの」(国木田独步『忘れえぬ人々』)
- 2005.11.6号 「緻密な描写で描く生活の断面」(徳田秋声『出産』)
- 2005.12.4号 「荒れ狂う内心を精緻に描く」(三島由紀夫『金閣寺』)
- 2006.1.1号 「幼い心の揺らぎ巧緻に描く」(有島武郎『一房の葡萄』)
- 2006.2.5号 「生活体験がなければ・・・」(徳永直『最初の記憶』)
- 2006.3.5号 「幻想が消えて潰えた美」(谷崎潤一郎『秘密』)
- 2006.4.2号 「沈黙さえ奪われた作家への鎮魂曲」(開高健『玉、碎ける』)
- 2006.4.30 「桃源郷への憧れと不安」(萩原朔太郎『猫町』)
- 2006.6.4 「死を賭す『承認』への情念」(有吉佐和子『黒衣』)
- 2006.7.2 「瑣事で現す生の悲哀」(藤枝静男『悲しいだけ』)
- 2006.7.30 「動機のない意外性が魅力」(武田泰淳『女賊の哲学』)
- 2006.9.3 「戦後の暮らしをユーモラスに」(梅崎春生『ボロ家の春秋』)
- 2006.10.1 「生きることの不思議さとは」(岡本かの子『老妓抄』)
- 2006.10.29 「虎となって知る『人とはなにか』」(中島敦『山月記』)
- 2006.11.26 「千変万化するイメージ世界」(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)
- 2006.12.24 「そこには人間味あふれる関係が」(吉行淳之介『娼婦の部屋』)
- 2007.1.28 「嘘をつく妻に夫は・・・」(向田邦子『かわうそ』)
- 2007.2.25 「因習や単調な日常が蝕むもの」(福永武彦『廢市』)
- 2007.3.25 「心象風景が結ぶ『生』の物語」(水上勉『寺泊』)
- 2007.4.22 「欧米文学とは異質の世界」(泉鏡花『二、三羽——二、三羽』)

- 2007.5.27 「マジシャンのように歴史を幻想に」(渋澤龍彦『ダイダロス』)
- 2007.6.24 「激しい情念を流麗な文章で」(内田百閑『サラサーテの盤』)
- 2007.7.22 「鮮烈なレトリックは情念の噴出」(中上健次『黄金比の朝』)
- 2007.8.19 「理性と知性のパラドックスを炙り出す」(坂口安吾『白痴』)
- 2007.9.23 「独特の展開に絶妙な挿話のあしらい」(立原正秋『雪のなか』)
- 2007.10.21 「排除を文化の掟として描く衝撃作」(深沢七郎『楢山節考』)
- 2007.11.18 「人生の黄昏を駆けめぐった思い出」(藤沢周平『秘密』)
- 2007.12.16 「生き生きと人物像が伝わる端正な戯曲」(菊池寛『父帰る』)
- 2008.1.20 「恋多き女の心、だめ男を翻弄する老獺さ」(林芙美子『晚菊』)
- 2008.2.17 「孤独からの脱出を透徹した筆致で」(大岡昇平『花影』)
- 2008.3.16 「子供の目で見た『戦時下』」(阿部昭『馬糞拾い』)
- 2008.4.13 「斬新な比喩が生き生きと」(平林たい子『施療室にて』)
- 2008.5.18 「意識の不思議さ描く独自の様式」(横光利一『機械』)
- 2008.6.15 「老いる肉体に心若返るとき」(円地文子『妖』)
- 2008.7.13 「認知症を生の一断面としてとらえた衝撃」(丹羽文雄『獣がらせる年齢』)
- 2008.8.10 「詩情豊かなファンタジーの綿密な描写」(佐藤春夫『西班牙犬の家』)
- 2008.9.7 「被爆で破壊された肉体と人間の尊厳」(原民喜『夏の花』)
- 2008.10.5 「引き裂かれる男の心理を迫真に描く」(宇野千代『おはん』)
- 2008.11.2 「夢に到達した後の空虚と絶望」(松本清張『笛壺』)
- 2008.11.30 「根底に在る東洋哲学の発想」(遠藤周作『白い人』)
- 2008.12.28号 「読み方で意味が異なる多義小説」(小島信夫『小銃』)
- 2009.2.1号 「祖国への矛盾する思いを抱く苦悩と孤独」(堀田善衛『香港にて』)
- 2009.3.1号 「鮮やかな比喩で描く生命観」(鳥尾敏雄『出発は遂に訪れず』)
- 2009.3.29号 「海鳴りが象徴する運命の過酷さ」(田宮虎彦『足摺岬』)
- 2009.4.26号 「自然現象を通じてとらえる意識の動き」(埴谷雄高『虚空』)
- 2009.5.31 「精巧な文体の胸迫る綺談」(石川淳『紫苑物語』)
- 2009.6.28 「聖域の中の俗っぽい日常」(森敦『月山』)
- 2009.7.26 「絵のような風景、独特の表現で描く」(井伏鱒二『朽助のいる谷間』)
- 2009.8.23 「悲しみの人生を意表つく視点で描く」(島崎藤村『ある女の生涯』)
- 2009.9.20 「勝者のない闘いに敗者の表情を活写」(井上靖『闘牛』)
- 2009.10.18 「実体験にもとづく衝撃の作品」(北條民雄『いのちの初夜』)
- 2009.11.15 「完璧な小説作法で描く安部ワールド」(安部公房『誘惑者』)
- 2009.12.13 「精密画のように描く男の感情」(近松秋江『黒髪』)
- 2010.1.17 「日常の情景を巧妙に組み上げる」(庄野潤三『静物』)
- 2010.2.14 「閃光が通り過ぎるような文体で、カフカを超える」(倉橋由美子『パルタイ』)

- 2010.3.14 「事実の細密化で虚構をつくる」(吉村昭『冷い夏、熱い夏』)
- 2010.4.11 「海外に紹介される迫力の表現」(大原富枝『ストマイつんぼ』)
- 2010.5.9 「ふつうの言葉を駆使して感動を呼ぶ」(井上ひさし『あくる朝の蝉』)
- 2010.6.13 「排除された余計者の悲しみ」(田山花袋『重右衛門の最後』)
- 2010.7.11 「人間の孤独を独特の視点から描く」(色川武大『離婚』)
- 2010.8.8 「戯画的な風俗批評、大衆文化の活写」(山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』)
- 2010.9.12 「一枚の喪服になぞる女の半生」(幸田文『黒い裾』)
- 2010.10.10 「ふつうの恋愛を『事件』に転ずる妙」(三浦哲郎『忍ぶ川』)
- 2010.11.7 「複雑な人間の心を鋭くえぐる」(三浦綾子『氷点』)
- 2010.12.5 「平静な表情から「すれ違い」を描く」(日野啓三『あの夕陽』)
- 2011.1.2& 9 「二つの物語が一つの作品で響く」(田久保英夫『辻火』)
- 2011.2.6 「『日本文学』を超え世界文化の殿堂に」(開高健『輝ける闇』)
- 2011.3.6 「散文詩的文体で描く青春の精神的自画像」(清岡卓行『アカシヤの大連』)
- 2011.4.3 「酒酔いの目から見た人生的一幕をスケッチ」(吉田健一『酒宴』)
- 2011.5.1 「淀みのない文章で孤独に直面した少年を描く」(久生十蘭『母子像』)
- 2011.6.5 「意表をつく展開、巧みな語り口」(江戸川乱歩『押絵と旅する男』)
- 2011.7.3 「断末魔の苦しみから人間の魂と生を描く」(檀一雄『終わりの火』)
- 2011.7.31 「海外作品に見られぬ『人と動物』の関係」(新田次郎『おとし穴』)
- 2011.9.4 「科学と空想を織り交ぜ恐怖と不安を娯楽に」(小松左京『日本沈没』)
- 2011.10.2 「市井人の等身大の生を捉える」(織田作之助『夫婦善哉』)
- 2011.11.27 「遺された多様な作品の中でも『傑出』した作品」(北杜夫『幽霊』)
- 2011.12.25 「魂を揺さぶるような文章で芸術家の苦悩を」(辻邦生『廻廊にて』)
- 2012.1.29 「長い一生をいくつかのコマで捉える」(小田実『「アボジ」を踏む』)
- 2012.2.26 「思いもよらぬ角度から恋愛を描く」(小川国夫『ハシッシ・ギャング』)
- 2012.3.25 「主役と脇役を巧みに呼応させる筆さばき」(城山三郎『総会屋錦城』)
- 2012.4.22 「サラリーマンの生態を描き切って色あせない」(源氏鶏太『三等重役』)
- 2012.5.27 「古風な葬儀を描き、近代農村の家族史を映し出す」(柏原兵三『坐棺』)
- 2012.6.24 「印象的な場面をとらえ胸を打つ人情画を描く」(加能作次郎『乳の匂い』)
- 2012.7.22 「常人の及ばない想像力を支える文章力の土台」(稲垣足穂「一千一夜物語」)
- 2012.8.19/26 「日本らしくない小説の系譜に連なる一作」(大庭みな子『三匹の蟹』)
- 2012.9.23 「生の悲哀が流れる白い雲のように」(芝木好子『隅田川暮色』)
- 2012.10.9 「平明な文章が伝える胸を打つ真情」(壺井栄『二十四の瞳』)
- ブロムナード『日本経済新聞』
- 2005年7月6日 「京劇の舞台に押し寄せる波」『日本経済新聞』
- 2005年7月13日 「観劇という修業」『日本経済新聞』

- 2005年9月28日 「異常気象と天人感応説」『日本経済新聞』
- 2005年10月5日 「漢字の原音読み」『日本経済新聞』
- 2005年10月12日 「挨拶は確かに難しい」『日本経済新聞』
- 2005年10月19日 「秋ナスの俗説」『日本経済新聞』
- 2005年10月26日 「情報社会での判断力」『日本経済新聞』
- 2005年11月2日 「一般化という落とし穴」『日本経済新聞』
- 2005年11月9日 「言葉もいろいろ」『日本経済新聞』
- 2005年11月16日 「三十三年の重み」『日本経済新聞』
- 2005年11月30日 「ヒゲは格好いいか」『日本経済新聞』
- 2005年12月7日 「啓示的な発見」『日本経済新聞』
- 2005年12月14日 「境界が漂流する時代」『日本経済新聞』
- 2005年12月21日 「無駄と無用の力」『日本経済新聞』
- 2005年12月28日 「お正月映画のゆくえ」『日本経済新聞』
- 男を惑わす美女『日本経済新聞』
- 2006.7.20 男を惑わす美女 十選（1）菊池容斎「塩冶高貞妻出浴図」『日本経済新聞』
- 2006.7.21 男を惑わす美女 十選（2）ラ・トゥール「ボンパドゥール侯爵夫人」
- 2006.7.24 男を惑わす美女 十選（3）「浅井長政夫人像」
- 2006.7.25 男を惑わす美女 十選（4）顧中「韓熙載夜宴図」（部分）
- 2006.7.27 男を惑わす美女 十選（5）プーシェ「ソファに横たわる裸婦」
- 2006.7.28 男を惑わす美女 十選（6）喜多川歌麿「北国五色墨 てっぼう」
- 2006.7.31 男を惑わす美女 十選（7）「孝賢純皇后像」
- 2006.8.1 男を惑わす美女 十選（8）ジャン・クーザン「エヴァ・プリマ・パンドラ」
- 2006.8.3 男を惑わす美女 十選（9）上村松園「楊貴妃」
- 2007.8.4 男を惑わす美女 十選（10）マネ「秋（メリー・ローラン）」
- 詩文往還『日本経済新聞』
- 2013年6月 「階級社会と『花城』の色彩」『日本経済新聞』
- 2013年6月 「珠江に見た未知の豊かさ」『日本経済新聞』
- 2013年6月 「庶民の顔に『哲学の皺』」『日本経済新聞』
- 2013年6月 「自由に書けぬ『明るい国』」『日本経済新聞』
- 2013年6月 「戦中の記憶にうづく心の傷」『日本経済新聞』
- 2013年7月 「“精神の廃墟”で受け入れた孤独」『日本経済新聞』
- 2013年7月 「国の腐敗描く矛盾への共感」『日本経済新聞』
- 2013年7月 「魂すり減らす文化の異質性」『日本経済新聞』
- 2013年7月 「戯曲家の情緒が誘う風雅の心」『日本経済新聞』
- 2013年8月 谷崎潤一郎「演劇人・田漢への忌憚なき批評」『日本経済新聞』

- 2013年 8月 「戦後世代、社会主義文学に関心」『日本経済新聞』
- 2013年 8月 「毛沢東の目に浮かぶ悲しみ」『日本経済新聞』
- 2013年 8月 「『人民の表現力』に抱いた嫌悪感」『日本経済新聞』
- 2013年 9月 「本音語れぬ文学者の苦悩」『日本経済新聞』
- 2013年 9月 「芸術至上主義者の社会活動」『日本経済新聞』
- 2013年 9月 「翻訳本『雪国』がブームに」『日本経済新聞』
- 2013年 9月 「『謎』の裏探る知識人の責任感」『日本経済新聞』
- 2013年 9月 「紅衛兵の『直接行動』に当惑」『日本経済新聞』
- 2013年10月 「色恋抜き 政治を描く文学」『日本経済新聞』
- 2013年10月 「毛沢東神格化に見た時代の迷妄」『日本経済新聞』
- 2013年10月 「元『兵隊作家』、革命にときめく」『日本経済新聞』
- 2013年10月 「怪談生んだ宋子文の逸話」『日本経済新聞』
- 2013年11月 「占領下広州で幽霊に会う」『日本経済新聞』
- 2013年11月 「広大な大陸、統治の難しさ実感」『日本経済新聞』
- 2013年11月 「『絶世の美女』指導者を魅了」『日本経済新聞』
- 2013年11月 「怖い物知らず 権力者と”論争“」『日本経済新聞』
- 2013年12月 「同性の文豪と交わした友情」『日本経済新聞』
- 2013年12月 「『無節操な男』の苦悩を知る」『日本経済新聞』
- 2013年12月 「唐墨に託した『二千年の友情』」『日本経済新聞』
- 2013年12月 「四合院で触れた庶民の日常」『日本経済新聞』
- 2013年12月 「延安で思う青年の夢の行方」『日本経済新聞』
- 2014年 1月 「血族的儒教に見えた文明の本質」『日本経済新聞』
- 2014年 1月 「民を食わせる『聖人』待望論」『日本経済新聞』
- 2014年 1月 「『前近代』思考の根強さ予見」『日本経済新聞』
- 2014年 1月 「信義重んじる『人間通』」『日本経済新聞』
- 2014年 2月 「『周縁』に見た民族の複雑な地層」『日本経済新聞』
- 2014年 2月 「西域の詩的イメージ紡ぐ」『日本経済新聞』
- 2014年 2月 「空想の西域 砂に描いた自画像」『日本経済新聞』
- 2014年 2月 「戦争体験は思い出の倉庫に」『日本経済新聞』
- 2014年 3月 「老舎の顔に認めた暗い影」『日本経済新聞』
- 2014年 3月 「古都に漂う暮らしの匂い」『日本経済新聞』
- 2014年 3月 「苦力打つ竹刀に魂の痛み」『日本経済新聞』
- 2014年 3月 「苦難の人生慰めた厚い人情」『日本経済新聞』
- 2014年 3月 「天安門事件の衝撃に倒れる」『日本経済新聞』
- 2014年 4月 「学生の血沸かせた孫文の演説」『日本経済新聞』

- 2014年4月 「二股かけられた恋のゆくえ」『日本経済新聞』
 2014年4月 「詩人の夢支えた魔法の杖」『日本経済新聞』
 2014年4月 「時空超えた詩人の友情」『日本経済新聞』
 2014年5月 「『大地の子』生んだ閃き」『日本経済新聞』
 2014年5月 「総書記との会見が突破口に」『日本経済新聞』
 2014年5月 「『無私無欲』の人に捧げた3巻」『日本経済新聞』
 2014年5月 「窯変する国と向き合う」『日本経済新聞』
 2014年6月 「政治越え人つなぐ文学」『日本経済新聞』

<書評>

- 1987年4月 「ロマンに包まれた英雄の実像」日本文化会議編『文化会議』第214号、日本文化会議
 1990年3月 「金泰俊『虚学から実学へ——一八世紀朝鮮知識人洪大容の北京旅行』」日本比較文学会編『比較文学』第32巻、日本比較文学会
 1996年6月 「「色」眼鏡を通して見た世界」『産経新聞』
 1996年10月 「地方文化論の助走」『中国図書』第91号、内山書店
 1996年11月 「上海の三冊」『毎日新聞』
 1997年5月 「文学論の変遷をたどる」『中国図書』第9巻第5号、内山書店
 1998年4月 「待ち望んでいた事典がついに出了」『毎日新聞』
 1998年5月 「興味深い使節たちのラブストーリー」『毎日新聞』
 1998年5月 「多民族共生を多角的に解き明かす」『毎日新聞』
 1998年6月 「日本人の感情表現はどう変わったか」(『性のプロトコル』)『毎日新聞』
 1998年7月 「風習から思考様式の変容を読む」『毎日新聞』
 1998年7月 「漂流する魂に捧げるレクイエム」『波』新潮社
 1998年8月 「常識をくつがえす映画史の入門書」『毎日新聞』
 1998年8月 「言語の境界を越えた語りを追いかける」(『台湾文学この百年』)『毎日新聞』
 1998年9月 「幽霊はいかに人とつきあってきたか」『毎日新聞』
 1998年10月 「生きる緻密な構成と見事な細部描写」『毎日新聞』
 1998年11月 「気宇壮大な文芸史の構築を目指して」(『日本の「文学」概念』)『毎日新聞』
 1998年12月 「諷刺画から東洋のイメージを読む」『毎日新聞』
 1998年4月 J・チルダーズほか編、杉野健太郎ほか訳『コロンビア大学 現代文学・文化批評用語辞典』『毎日新聞』
 1998年5月 藤井省三編『現代中国短編集』『毎日新聞』
 1998年6月 ヨコタ村上孝之『性のプロトコール』『毎日新聞』
 1998年7月 段躍中主編『在日中国人大全』『毎日新聞』

- 1998年7月 高崎篤『あじゃいあ・キッチン旅行』『毎日新聞』
- 1998年8月 平野久美子『食べ物が語る香港史』『毎日新聞』
- 1998年8月 北原安門『中国の風土と民居』『毎日新聞』
- 1998年9月 鷺田清一『普通をだれも教えてくれない』『毎日新聞』
- 1998年10月 牧陽一『アヴァン・チャイナ』、『毎日新聞』
- 1998年11月 大沼保昭ほか編『「慰安婦」問題とアジア女性基金』『毎日新聞』
- 1998年11月 鈴木貞美『日本の「文学」概念』『毎日新聞』
- 1998年12月 「この年の三冊」田中一成『中国演劇史』、辻原登『翔べ麒麟』、四方田犬彦『映画史への招待』『毎日新聞』
- 1999年1月 「巨大な渦巻きにいかにかたするか」『毎日新聞』
- 1999年2月 「1998年読書アンケート」『中国図書』第11巻第2号、内山書店
- 1999年2月 「随所に卓見がちりばめられた入門案内」(『アメリカの詩を読む』)『毎日新聞』
- 1999年3月 「欲情の深層にメスを入れる」(『エロチックな足』)『毎日新聞』
- 1999年4月 「東西の優れた知性の響き合い」『毎日新聞』
- 1999年4月 「激動の半世紀を生きた作家の生涯を綴る」『公明新聞』
- 1999年5月 「清末の官僚たちは日本をどう見たか」『毎日新聞』
- 1999年6月 「心のふるさとの神話を打ち破る」『毎日新聞』
- 1999年7月 「文化比較から生まれた鋭い批評眼」『毎日新聞』
- 1999年8月 「知の流行を卒業するための道案内」(『カルチュラル・スタディーズ入門』『ニューレフト』)『毎日新聞』
- 1999年8月 「近代アメリカ史の驚くべき側面」『毎日新聞』
- 1999年9月 「文化批判としての中国映画論」『毎日新聞』
- 1999年10月 「歴史描写と幻想的現在とが響き合う」『毎日新聞』
- 1999年11月 「異文化倫理への鋭い問題提起」『毎日新聞』
- 1999年11月 「あらゆる戦争に反対する理論的根拠を探る」『公明新聞』
- 1999年12月 「近代日本人の心象を映し出す」『毎日新聞』
- 1999年3月 雁翼著、入谷萌苺訳『長江は知っている』、『毎日新聞』
- 1999年3月 木間正道ほか著『現代中国法入門』、『毎日新聞』
- 1999年5月 エルネスト・アイテル著、中野美代子ほか訳『風水——欲望のランドスケープ』、『毎日新聞』
- 1999年6月 陸鏗著、青木まさこほか訳『中国妖怪記者の自伝——20世紀史の証言』、『毎日新聞』
- 1999年6月 瀬戸宏『中国演劇の二十世紀——中国話劇史概況』、『毎日新聞』
- 1999年7月 中野美代子『チャイナ・ヴィジュアル——中国エキゾティシズムの風景』、『毎日新聞』
- 1999年7月 溝上憲文『パチンコの歴史』『毎日新聞』
- 1999年8月 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』、『毎日新聞』 リン・チュン著、渡辺雅男

- 訳『イギリスのニューレフト——カルチュラル・スタディーズの源流』『毎日新聞』
- 1999年8月 三浦俊彦『環境音楽入門』、『毎日新聞』
- 1999年10月 ラフカディオ・ハーン著、平川祐弘訳『カリブの女』『毎日新聞』
- 1999年10月 平井正『レニ・リーフェンシュタール——20世紀映像論のために』『毎日新聞』
- 1999年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』
- 2000年1月 「日中文化が交差する現場を再現する」『毎日新聞』
- 2000年2月 「歴史文化的文脈から読み解く」『毎日新聞』
- 2000年3月 「古典を読むことで広がる世界を見る目」『毎日新聞』
- 2000年4月 「多彩な質的転換が身近に読める」『毎日新聞』
- 2000年5月 「乱世を生きる英勇の実像にせまる」『公明新聞』
- 2000年5月 「道教の思弁の迷路を解き明かす」『毎日新聞』
- 2000年6月 「文化の多元化を生み出すプロセス」『毎日新聞』
- 2000年7月 「西洋への入り口から耽溺な街へ」『毎日新聞』
- 2000年8月 「思想の根源は遊戯性と触覚に」（『ベンヤミン「複製技術時代の芸術」を再読）『毎日新聞』
- 2000年9月 「『鬼』を描く不気味な展開に哀愁が漂う」『毎日新聞』
- 2000年9月 「なぜ『街道をゆく』が書かれたか」『毎日新聞』
- 2000年10月 「移民国家の精神を明晰な言葉で」『毎日新聞』
- 2000年11月 「浮かび上がる物語のシルクロード」『毎日新聞』
- 2000年12月 「近代人の不安を映す不思議な魔力」（樋口覚『日本人の帽子』）『毎日新聞』
- 2000年1月 蘇培成ほか編、阿辻哲次ほか編訳『中国の漢字問題』、『毎日新聞』
- 2000年1月 北京中日新聞事業促進会編、関直美訳、林国本監修『中国人特派員が書いた日本』
- 2000年1月 小池寿子『死を見つめる美術史』、『毎日新聞』
- 2000年2月 成恵卿『西洋の夢幻能——イェイツとパウンド』
- 2000年3月 ポール・ドゥ・ゲイほか著、暮沢剛巳訳『実践カルチュラル・スタディーズ——ソニー・ウォークマンの戦略』『毎日新聞』
- 2000年3月 丹藤佳紀『中国 現代ことば事情』『毎日新聞』
- 2000年4月 藤井省三『百年の中国人』、『毎日新聞』
- 2000年4月 老子原著、加島祥造訳著『タオ 老子』『毎日新聞』
- 2000年4月 谷川渥『芸術をめぐる言葉』、『毎日新聞』
- 2000年5月 井波律子『中国文章家列伝』、『毎日新聞』
- 2000年6月 澤田瑞穂『中国史談集』『毎日新聞』
- 2000年6月 手島兼輔『海の文明——ギリシア「知」の交差点としてのエーゲ海』『毎日新聞』
- 2000年7月 李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』『毎日新聞』
- 2000年7月 山田登世子『ブランドの世紀』『毎日新聞』

- 2000年8月 多木浩二『多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』『毎日新聞』
- 2000年8月 NHK「街道をゆく」プロジェクト編『司馬遼太郎の風景⑩』『毎日新聞』
- 2000年10月 王勇『中国史のなかの日本像』『毎日新聞』
- 2000年11月 佐伯順子『泉鏡花』『毎日新聞』
- 2000年11月 荒俣宏『奇想の20世紀』『毎日新聞』
- 2000年11月 高山宏『奇想天外・英文学講義——シェイクスピアから「ホームズ」へ』『毎日新聞』
- 2000年12月 楊中美、趙宏偉ほか編訳『一つの中国一つの台湾——江沢民VS李登輝』『毎日新聞』
- 2000年12月 「この年の三冊」
- 2001年1月 「物語の名手が精細に描く人間の心の襞」『毎日新聞』
- 2001年1月 「恋歌の発生から詩の起源を探る」(辰巳正明『詩の起源——東アジア文化圏の恋愛詩』書評)『國學院雑誌』第102巻第1号、67～71頁。
- 2001年2月 「2000年読書アンケート」『中国図書』第13巻第2号、内山書店、10～11頁。
- 2001年2月 「良心の自由が奪われる過程を追う」『毎日新聞』
- 2001年3月 「謎とともに示される上海像」『毎日新聞』
- 2001年4月 「長距離通勤が書物の読み方を変えた」『毎日新聞』
- 2001年5月 「彷徨う魂の叫びは都会の荒野に木霊する」『文学界』第五十五巻第五号、文藝春秋
- 2001年5月 「日常の矛盾が存在の不条理に」『毎日新聞』
- 2001年6月 「伝統にも政治思想にも断絶して」『毎日新聞』
- 2001年7月 「活字メディアの裏で何が起きたか」『毎日新聞』
- 2001年8月 「日本の詩歌は一本の巨木なのだ」『毎日新聞』
- 2001年9月 「民間交流をもたらした海難事故」『毎日新聞』
- 2001年9月 「宮沢賢治の世界と中国古典」『公明新聞』
- 2001年9月 「ヨーロッパ精神史の一側面をおもしろく読み解く」『図書新聞』
- 2001年9月 「異色のアメリカ論の魅力も」『毎日新聞』
- 2001年11月 「明治以来の「国語改革」は何を招いたか」『毎日新聞』
- 2001年11月 「目的地のない旅をする男の心の奥に」『毎日新聞』
- 2001年1月 白倉敬彦ほか著『浮世絵春画を読む(上・下)』『毎日新聞』
- 2001年2月 小谷野敦『恋愛の超克』『毎日新聞』
- 2001年3月 佐々木幹郎『自転車乗りの夢——現代詩の20世紀』『毎日新聞』
- 2001年3月 岩淵功一『トランスナショナル・ジャパン——アジアをつなぐポピュラー文化』『毎日新聞』
- 2001年3月 衛慧著、桑島道夫訳『上海ベイビー』、『文学界』2001年3月号
- 2001年5月 白水紀子『中国女性の20世紀——近現代家父長制研究』『毎日新聞』
- 2001年5月 古田島洋介注釈『鷗外歴史文学集 第十三巻 漢詩(下)』『毎日新聞』
- 2001年6月 井上健『翻訳裏街道——わが青春のB級翻訳』『毎日新聞』

- 清丸恵三郎『出版動乱——ルポルタージュ・本をつくる人々』『毎日新聞』
- 2001年7月 北岡正子『魯迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』
『毎日新聞』
- 2001年9月 劉焯編著、氣賀澤保規編訳『図説 三国志の世界』『毎日新聞』
- 2001年9月 マイケル・V・ミラー著、矢沢聖子訳『愛はテロリズム——ロマンティック・ラブ
の終焉』『毎日新聞』
- 2001年10月 朱捷『においとひびき——日本と中国の美意識をたずねて』『毎日新聞』
- 2001年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』
- 2002年1月 「他者なしで充足する社会はどこへ」『毎日新聞』
- 2002年2月 「楽屋裏から何が見えてきたか」『毎日新聞』
- 2002年3月 「ひっくりかえされた豪傑たちのイメージ」『毎日新聞』
- 2002年4月 「風景はいかにして発見されたか」『毎日新聞』
- 2002年5月 「日本人の自然観に見る大陸との文化往還」『東京新聞』
- 2002年5月 「ミソとコンソメの思わぬ相性」『毎日新聞』
- 2002年6月 「消費社会の更年期を過ごすためには」『毎日新聞』
- 2002年7月 「記憶の風景を旅する日々」『毎日新聞』
- 2002年8月 「幻覚のなかで壊れる自分をさらす」『毎日新聞』
- 2002年9月 「二千年の往来からみえる隣国と日本」『毎日新聞』
- 2002年9月 「女性美を図像化する歴史を再現」『週刊読書人』
- 2002年10月 「意識が身体を動かすという錯覚」『毎日新聞』
- 2002年11月 「「低俗」が支えた高雅な士大夫世界」『毎日新聞』
- 2002年12月 「内からの視線でとらえた意外な一面」『毎日新聞』
- 2002年1月 東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』『毎日新聞』
- 2002年3月 松浦友久『漢詩——美の在りか』『毎日新聞』『毎日新聞』
- 2002年4月 藤井省三『魯迅事典』『毎日新聞』
- 2002年6月 蔡毅編『日本における中国伝統文化』『毎日新聞』
- 2002年7月 平出隆『ベルリンの瞬間』『毎日新聞』
- 2002年7月 子どもの本・翻訳の歩み研究会編『図説 子どもの本・翻訳の歩み事典』『毎日新聞』
- 2002年9月 上野創『がんと向き合って』『毎日新聞』
- 2002年9月 安村敏信監修『日本美人画一千年史』、『週刊読書人』
- 2002年10月 T・ノーレットランダーシュ著、柴田裕之訳『ユーザーイリュージョン——意識と
いう幻想』『毎日新聞』
- 2002年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』
- 2003年1月 「洗練された町並みを取り戻すには」『毎日新聞』
- 2002年2月 「謎が解かれない物語の迷宮」『毎日新聞』

- 2003年 3月 「「精神の庶民」が描いた大衆化の時代」『毎日新聞』
- 2003年 4月 「壊れていく物がなぜ美しいのか」『毎日新聞』
- 2003年 5月 「希代の名宰相はなぜ生まれたか」『毎日新聞』
- 2003年 6月 「いまアジア観の歴史を振り返る意味」『毎日新聞』
- 2003年 6月 「歴史学の接点と差異を解く」『日本経済新聞』
- 2003年 7月 「絵から見た読書人の本音と建前」『毎日新聞』
- 2003年 7月 「東洋的な詩文の美を投影」『サンデー毎日』
- 2003年 8月 「現代の発端となる時代だった」『毎日新聞』
- 2003年 8月 「言葉は心の変化を映し出す」（小谷野敦『性と愛の日本語講座』）『産経新聞』
- 2003年 9月 「言語の外に出た時に作家が見たもの」『毎日新聞』
- 2003年10月 「ウソのない世界はなぜ不可能か」『毎日新聞』
- 2003年11月 「不遇ゆえの理想的父子関係」『産経新聞』
- 2003年11月 「いまよみがえる在野の日本研究者」『毎日新聞』
- 2003年11月 「東洋的な情感を巧みに再生」（高行健著、飯塚容訳『靈山』）『産経新聞』
- 2003年12月 「流れ星のような詩人の苛烈な生涯」『毎日新聞』
- 2003年 8月 千葉一幹『賢治を探せ』『毎日新聞』
- 2003年 1月 「私の読書日記」『週刊文春』 1月30日号、文藝春秋
- 2003年 2月 「私の読書日記」『週刊文春』 2月27日号、文藝春秋
- 2003年 4月 「私の読書日記」『週刊文春』 4月10日号、文藝春秋
- 2003年 5月 「私の読書日記」『週刊文春』 5月29日号、文藝春秋
- 2003年 7月 「私の読書日記」『週刊文春』 7月 3日号、文藝春秋
- 2003年 8月 「私の読書日記」『週刊文春』 8月 7日号、文藝春秋
- 2003年 9月 「私の読書日記」『週刊文春』 9月25日号、文藝春秋
- 2003年10月 「私の読書日記」『週刊文春』 10月30日号、文藝春秋
- 2003年12月 「私の読書日記」『週刊文春』 12月 4日号、文藝春秋
- 2003年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』
- 2004年 1月 「路地裏に見えた新鮮な中国像」『毎日新聞』
- 2004年 2月 「純度100%の愛に託されているもの」『毎日新聞』
- 2004年 2月 「日常の退屈照らす漂泊の生」『日本経済新聞』
- 2004年 3月 「『死』というアングルが見せた思わぬ『生』」『毎日新聞』
- 2004年 4月 「理想的な為政者像を問う」『サンデー毎日』
- 2004年 5月 「アジア大衆文化の対流を追う」『毎日新聞』
- 2004年 6月 「歩行者の視線で追った銀座の変容」『毎日新聞』
- 2004年 6月 「非母語でも伝わる梶井作品」『日本経済新聞』
- 2004年 6月 「批評家の芸 風味や香りの品定め」『日本経済新聞』

- 2004年6月 「大衆の目線 なぜ娯楽映画に泣くのか」『日本経済新聞』
- 2004年7月 「ロマン膨らむ脳内の私探し」（茂木健一郎『脳内現象——<私>はいかに創られるか』）『毎日新聞』
- 2004年8月 「準家族的な職業が姿を消した訳」『毎日新聞』
- 2004年9月 「学問分野を超え「知」の組織化に迫る」（P・バーク著、井山弘幸ほか訳『知識の社会史——知と情報はいかにして商品化したか』）『毎日新聞』
- 2004年10月 「西欧美術の多元的思考を追って」『毎日新聞』
- 2004年11月 「女の一生、近代台湾を映す」『日本経済新聞』
- 2004年11月 「歴史性と娯楽性を織りませた構成員」『毎日新聞』
- 2004年1月 夏石番矢『世界俳句入門』『明治大学広報』第533号
- 2004年11月 山崎正和『社交する人間——ホモ・ソシアリビス』、『アステイオン』第61号、阪急コミュニケーションズ
- 2004年1月 「私の読書日記」『週刊文春』1月29日号、文藝春秋
- 2004年3月 「私の読書日記」『週刊文春』3月4日号、文藝春秋
- 2004年4月 「私の読書日記」『週刊文春』4月8日号、文藝春秋
- 2004年5月 「私の読書日記」『週刊文春』5月27日、文藝春秋
- 2004年7月 「私の読書日記」『週刊文春』7月1日号、文藝春秋
- 2004年8月 「私の読書日記」『週刊文春』8月5日号、文藝春秋
- 2004年9月 「私の読書日記」『週刊文春』9月23日、文藝春秋
- 2004年10月 「私の読書日記」『週刊文春』10月28日、文藝春秋
- 2004年12月 「私の読書日記」『週刊文春』12月2日号、文藝春秋
- 2004年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』
- 2005年1月 「弊風破った異文化交流の双方向性」『毎日新聞』
- 2005年2月 「米国の内側から「日本趣味」に迫る」『毎日新聞』
- 2005年4月 「越境した多様な<文体>の変容に迫る」『毎日新聞』
- 2005年5月 「科学もかかわった『らしさ』の規範」（ジョージ・L・モッセ著、細谷実、小玉亮子ほか訳『男のイメージ——男性性の想像と近代社会』）『毎日新聞』
- 2005年6月 「随想風の文章にみる新たな可能性」（加藤典洋『僕が批評家になったわけ』）『毎日新聞』
- 2005年7月 「思考の類型化を分析した先駆の仕事」『毎日新聞』
- 2005年8月 「戦後日本に延びる人造国家の地下茎」『毎日新聞』
- 2005年10月 「秀逸なパチンコ論、流行のなかの不変」『毎日新聞』
- 2005年10月 「肉体に秘めた非西洋文明の意志」『毎日新聞』
- 2005年1月 徳田武『近世近代小説と中国白話文学』『明治大学広報』第550号
- 2005年5月 丸山昇『魯迅・文学・歴史』『東方』第291号、東方書店

- 2005年11月 武田雅哉『＜鬼子＞たちの肖像——中国人が描いた日本人』『毎日新聞』
- 2005年12月 「言葉遊びに徹した新しい文化的事象」『毎日新聞』
- 2005年12月 「この人・この三冊」『毎日新聞』
- 2005年 1月 「私の読書日記」『週刊文春』 1月20日号、文藝春秋社
- 2005年 3月 「私の読書日記」『週刊文春』 3月3日号、文藝春秋社
- 2006年 1月 「現代性と男らしさ 筆力光る再創作大河」『毎日新聞』
- 2006年 2月 「新たな読者に応答する構成の妙」『毎日新聞』
- 2006年 4月 「視覚や嗅覚めぐる言説を洗い直す」(坪井秀人『感覚の近代——声・身体・表象』)『毎日新聞』
- 2006年 5月 「いま何が恋愛の障碍になりうるか」(小池真理子『虹の彼方』)『毎日新聞』
- 2006年 6月 「理想的教育めざした人物を再発見」(新田義之『澤柳政太郎——随時随所楽シマザルナシ』)『毎日新聞』
- 2006年 6月 上田高弘『モダニストの物言い——現代美術をめぐる確信と抵抗一九九〇～二〇〇五』『毎日新聞』
- 2006年 7月 宮本隆司『Kobe 1995 The Earthquake Revisited』『毎日新聞』
- 2006年 7月 「皮膚感覚でとらえた社会の断面」(近藤大介『東アジアノート——小泉訪朝同行記』)『毎日新聞』
- 2006年 8月 「艶聞の精査にもとづく「神話」の解体」(小谷野敦『谷崎潤一郎伝——堂々たる人生』)『毎日新聞』
- 2006年 9月 「過去の体験に「現在」を読む三重奏」(小田実「玉砕／Gyokusai」)『毎日新聞』
123, 「独特の美学を魔法のように抽出」(ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』)『毎日新聞』 2006.10.29
- 2006年11月 「明治の翻訳本 受容の理由を解明」(平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク——中村正直と「西国立志編」』)『日本経済新聞』
- 2006年12月 「境域を超えた歴史記述のあり方示す」(アンドル・ゴードン著、森谷文昭訳『日本の200年——徳川時代から現代まで』上・下)、『毎日新聞』
- 2006年10月 横山禎徳『アメリカと比べない日本——世界初の先進課題を自力解決する』
- 2006年11月 榎本泰子『上海オーケストラ物語——西洋人音楽家たちの夢』
- 2006年12月 「この年の三冊」
- 2005年 5月 丸山昇『魯迅・文学・歴史』『東方』第291号、東方書店
- 2007年 1月 傅益瑤画、李兆良書『絵解き 菜根譚——一〇八の処世訓』『毎日新聞』
- 2007年 1月 「大衆演劇の来歴が物語る近代中国史」(佐治俊彦『かくも美しく、かくもけげな——「中国のタカラヅカ」越劇百年の夢』)『毎日新聞』
- 2007年 2月 アダム・カバット『ももんが対見越入道——江戸の化物たち』『毎日新聞』
- 2007年 2月 「「2600年前、すでに女装趣味があった」(武田雅哉『楊貴妃になりたかった男たち——

- 一<衣服の妖怪>の文化誌)『毎日新聞』
- 2007年4月 「抵抗の後の前衛芸術はどこへ行くか」(牧陽一『中国現代アート——自由を希求する表現』)『毎日新聞』
- 2007年5月 「『他者』という海に行く冒険物語」(『大きな熊が来る前に、おやすみ』)『毎日新聞』
- 2007年6月 「時系列的な思考からの解放」(堀江敏幸『パン・マリーへの手紙』)『毎日新聞』
- 2007年8月 「東アジアで大人気の理由を読み解く」(藤井省三『村上春樹のなかの中国』)『毎日新聞』
- 2007年9月 「記憶の公共性を考えさせる史料」(J・ウエラー、A・ウエラー編、小西紀嗣訳『ナガサキ昭和20年夏——GHQが封印した幻の潜入ルポ』)『毎日新聞』
- 2007年10月 「ミステリーの境界を自在に往来」『1950年のバックトス』『毎日新聞』
- 2007年11月 「人情味溢れる描写のより古典を再生」(平岩弓枝『西遊記』)『毎日新聞』
- 2007年12月 「社会の下層から歴史を動かす人々」浅田次郎『中原の虹』『毎日新聞』
- 2007年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』
- 2007年3月 Book Review of The Breaking Jewel, Japanese Book News, No.51, The Japan Foundation, p.4
- 2007年3月 Book Review of The Japan of Modernism, Japanese Book News, No.51, The Japan Foundation, p.9
- 2008年2月 「国境を越えた『負け組』の格闘の喜劇」(楊逸『ワンちゃん』)『毎日新聞』
- 2008年2月 「一本の曲線は時代精神を描き出す」(原克『流線形シンドローム——速度と身体の大衆文化誌』)『毎日新聞』
- 2008年4月 「都会を漂流する女性たちの孤独」(谷村志穂『みにくい あひる』)『毎日新聞』
- 2008年5月 「作家らの表情を活写した交友録」(瀬戸内寂聴著、横尾忠則画『奇縁まんだら』)『毎日新聞』
- 2008年7月 植木雅俊訳『梵漢対照・現代語訳 法華経(上・下)』『毎日新聞』
- 2008年7月 「文学越境の難しさを考えさせる話題作」(楊逸『時が滲む朝』)『毎日新聞』
- 2008年8月 「西洋のメガネを捨てた日本語作家の目」(リービ英雄『延安——革命聖地への旅』)『毎日新聞』
- 2008年10月 「東アジア古代史のロマンを追う20年の歷程」(岡本健一『蓬莱山と扶桑樹——日本文化の古層の探究』)『毎日新聞』
- 2008年11月 「『意味』から離れたところへ連れ出す」(保坂和志『小説、世界の奏でる音楽』)『毎日新聞』
- 2008年12月 「文章の奥底に流れる細やかな「情」の水脈」(中井久夫『日時計の影』)『毎日新聞』
- 2008年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』
- 2009年1月 「『恋愛』と『色事』の上下関係を転覆」(佐伯順子『「愛」と「性」の文化史』)『毎日新聞』

- 2009年3月 「映像を通して『隣人』の声に耳を傾ける」(佐藤忠男『私はなぜアジアの映画を見つづけるか』)『毎日新聞』
- 2009年4月 「作家の一生に見る近代日中文化の交差」(巖安生『陶晶孫 その数奇な生涯——もう一つの中国人留学生精神史』)『毎日新聞』
- 2009年5月 「時空間トリックが問う人類の未来」(東野圭吾『パラドックス13』)『毎日新聞』
- 2009年6月 「深い謎 幾重ものどんでん返し」(大門剛明『雪冤』)『毎日新聞』
- 2009年8月 「文学の手法で迫る『密約』事件の本質」(山崎豊子『運命の人』)『毎日新聞』
- 2009年9月 シリン・ネザマフィ『白い紙/サラム』『毎日新聞』
- 2009年12月 「この年の三冊」『毎日新聞』『毎日新聞』
- 2010年1月 「宗教・科学を絡め人類の精神像を走査」(ジョージ・M・フレドリクソン著、李孝徳訳『人種主義の歴史』)『毎日新聞』
- 2010年2月 「玉の碗 土の匂い 名もなき人々の尊厳」(劉一達著、多田麻美訳『乾隆帝の幻玉——老北京骨董異聞』)『毎日新聞』
- 2010年4月 「落差を歩き時空を超えた知の探究」(山折哲雄『愛欲の精神史』[全3巻])『毎日新聞』
- 2010年5月 「文化史的に跡づける苦難の道」(前田耕作『玄奘三蔵 シルクロードを行く』)『毎日新聞』
- 2010年7月 「心霊写真があぶり出す家族の迷路」(宮部みゆき『小暮写真館』)『毎日新聞』
- 2010年8月 「父への日本的な心性から離れて」(市川真人『芥川賞はなぜ村上春樹に与えられなかったか——擬態する日本の小説』)『毎日新聞』
- 2010年10月 「文学的想像力を取り戻す方法として」(青木保『作家は移動する』)『毎日新聞』
- 2010年11月 「草莽の英雄の奇想天外な後日談」(北方謙三『楊令伝』集英社)『毎日新聞』
- 2011年1月 「『SF前夜』の恐るべき文学的妄想力」(横田順彌『近代日本奇想文学史 明治篇』ピラールプレス、)『毎日新聞』
- 2011年3月 「人麻呂は「思努尔」に何を込めたのか」(石川九楊『万葉仮名で読む万葉集』岩波書店、)『毎日新聞』
- 2011年5月 「遊技場の『落書き』から見えてくるもの」(加藤裕康『ゲームセンター文化論』新泉社、)『毎日新聞』
- 2011年6月 「器官表現に託された西洋精神史」(小池寿子『内臓の発見』)『毎日新聞』
- 2011年7月 「外部の目が捉えた明治文学の『明と暗』」(ジェイ・ルービン『風俗壊乱』)『毎日新聞』
- 2011年9月 「孤高の仏作家 知られざる生涯をたどる」(宇京頼三『異形の精神』、)『毎日新聞』
- 2011年11月 「原始仏典の精読にもとづく宗教文化論」(植木雅俊『仏教、本当の教え』)『毎日新聞』
- 2011年3月 Book review of The Maiden's Anonymous Trip, Japanese Book News No.67, Japan Foundation,p.4
- 2011年3月 Book review of Why Wasn't Murakami Haruki Awarded the Akutagawa Prize?

- Japanese Book News No.67, Japan Foundation, p.6
- 2011年 3月 Book review of A New History of Japan's Literary World, vols.1-4, Japanese Book News No.67, Japan Foundation, p.9
- 2011年 3月 Book review of Japanese Overseas Travel, Japanese Book News No.67, Japan Foundation, p.7
- 2011年 6月 Book review of A Singing Whale, Japanese Book News No.68, Japan Foundation, p.5
- 2011年 6月 Book review of Lone Boat, Japanese Book News No.68, Japan Foundation, p.5
- 2011年 6月 Book review of Authors Migrate, Japanese Book News No.68, Japan Foundation, 2011.6, p.6
- 2011年 6月 Book review of The Postwar Japanese Image of China: From Japan's War Defeat to the Cultural Revolution and Resumption of Sino-Japanese Diplomatic Relations, Japanese Book News No.68, Japan Foundation, p.9
- 2011年 9月 Book review of Kiko and Towako, Japanese Book News No.69, Japan Foundation, p.4
- 2011年 9月 Book review of A Narrative History of the Japanese Mystery Novel, Japanese Book News No.69, Japan Foundation, p.7
- 2011年 9月 Book review of A History of the Japanese Imaginative Novel: Meiji, Japanese Book News No.69, Japan Foundation, p.8
- 2011年 9月 Book review of People Die Alone, Japanese Book News No.69, Japan Foundation, p.10
- 2011年12月 Book review of The Hostages' Reading Club, Japanese Book News No.70, Japan Foundation, p.4
- 2011年12月 Book review of Sandbox Library, Japanese Book News No.70, Japan Foundation, p.5
- 2011年12月 Book review of Game Centers: A Cultural Study, Japanese Book News No.70, Japan Foundation, p.7
- 2011年12月 Book review of An Illustrated Encyclopedia of the Capital at Heijo, Japanese Book News No.70, Japan Foundation, 2011.12, p.11
- 2012年 1月 「平和的な世界秩序構築への提言」(青木保『「文化力」の時代』)『毎日新聞』
- 2012年 2月 「モードに組み込まれた「女子制服」の変遷」(難波知子『学校制服の文化史』)『毎日新聞』
- 2012年 4月 「依存と衝突の構図を解き明かす」(平山篤子『スペイン帝国と中華帝国の邂逅』)『毎日新聞』
- 2012年 6月 「身体論からみた理想的な「美」の変遷」(ジョルジュ・ヴィガレロ、後平濤子訳『美人の歴史』)『毎日新聞』
- 2012年 7月 「響き合う文学の舞台裏をまざまざと」(高橋一清『作家魂に触れた』)『毎日新聞』
- 2012年 8月 「過去との連続性 実証考察」(福山泰男『建安文学の研究』)『山形新聞』

- 2012年 9月 「西洋文明は果たして没落するか」(ニール・ファーガンソン『文明：西洋が覇権がとれた6つの真因』)『毎日新聞』
- 2012年10月 「時流に抗する気骨ある編集者の回想」アンドレ・ジフリン著、高村幸治訳『出版と政治の戦後史』、『公明新聞』
- 2012年10月 「娯楽文化を巡る主導権争いの全容に迫る」(フレデリック・マルテル著、林はる芽訳『メインストリーム——文化とメディアの世界戦争』『毎日新聞』
- 2012年12月 「推理小説風の仕掛けで奥深い世界を旅する」(三浦篤『名画に隠された「二重の謎』』『毎日新聞』
- 2012年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2012年 3月 Book review of Downtown Rocket, Japanese Book News No.71, Japan Foundation, p.4
- 2012年 3月 Book review of Sizzle, Japanese Book News No.71, Japan Foundation, p.6
- 2012年 3月 Book review of Japan's Sex-Verse Young People, Japanese Book News No.71, Japan Foundation, p.9
- 2012年 3月 Book review of Natsume Soseki as a Scholar of English Literature, Japanese Book News No.71, Japan Foundation, p.11
- 2012年 6月 Book review of Roses That Weigh Heavy in the Hand, Japanese Book News No.72, Japan Foundation, p.5
- 2012年 6月 Book review of The Battle of the Monkey and the Crab: A Modern Portrait, Japanese Book News No.72, Japan Foundation, p.5
- 2012年 6月 Book review of An Invitation to Wahon: A History of the Book in Japan, Japanese Book News No.72, Japan Foundation, p.11
- 2012年 6月 Book review of The History of Girls' Comics in Japan: A Personal Account, Japanese Book News No.72, Japan Foundation, p.11
- 2012年 9月 Book review of Cannibalism, Japanese Book News, No.73, Japan Foundation, p.5
- 2012年 9月 Book review: The Travels of the Monkey King, Japanese Book News, No.73, Japan Foundation, p.8
- 2012年 9月 Book review of Illustrated Encyclopedia of Edo Clothing, Japanese Book News, No.73, Japan Foundation, p.8
- 2012年 9月 Book review of Sending Books Beyond the Seas, No.73, Japanese Book News, Japan Foundation, p.10
- 2012年12月 Book review of Marriage, No.74, Japanese Book News, No.74, Japan Foundation, p.4
- 2012年12月 Book review of Paradise Canvas, Japanese Book News, No.74, Japan Foundation, p.5
- 2012年12月 Book review of Manga Poverty, Japanese Book News, No.74, Japan Foundation, p.8
- 2012年12月 Book review of A History of Pastimes in Japan, Japanese Book News, No.74, Japan

Foundation, p.10

- 2013年 1月 「20世紀遺跡——帝国の記憶を歩く」(
- 2013年 2月 「最後の一文から『権威』を笑い飛ばす」(齊藤美奈子『名作うしろ読み』『毎日新聞』
- 2013年 3月 「涙と感動を誘う“形式”の起源を徹底解剖する」(有本真紀『卒業式の歴史学』『毎日新聞』
- 2013年 5月 「国境を越える新たな「博物学」への道」(吉田憲司『文化の『肖像』』『毎日新聞』
- 2013年 8月 「静謐と不安の現代に送る処方箋」(山崎正和『大停滞の時代を超えて』『毎日新聞』
- 2013年 9月 「愛の不在、孤独もありふれた日常として」(藤野可織『爪と目』『毎日新聞』
- 2013年11月 「奇天烈な「知の自由人」を輝かせた明治の包容力」(川村伸秀『坪井正五郎——日本で最初の人類学者』『毎日新聞』
- 2013年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2013年 3月 Book review of Tokyo Prison, Japanese Book News, No.75, Japan Foundation, p.4
- 2013年 3月 Book review of Dreams Without Keys, Japanese Book News, No.75, Japan Foundation, p.5
- 2013年 3月 Book review of Understanding Japanese Gardens, Japanese Book News, No.75, Japan Foundation, p.7
- 2013年 3月 Book review of Japan “Under the Arches”: A History, Japanese Book News, No.75, Japan Foundation, p.8
- 2013年 6月 Book review of Rays, Japanese Book News, No.76, Japan Foundation, p.6
- 2013年 6月 Book review of Touching the Spirit of Writers, Japanese Book News, No.76, Japan Foundation, p.6
- 2013年 6月 Book review of Japanese a Hundred Years Ago, Japanese Book News, No.76, Japan Foundation, p.11
- 2013年 6月 Book review of Women’s Speech in the Japanese Language, Japanese Book News, No.76, Japan Foundation, p.11
- 2013年 9月 A skillful depiction of contemporary young lives through SNS messages, Japanese Book News, No.77, Japan Foundation, p.4
- 2013年 9月 A brilliant evocation of loss and longing for the past, Japanese Book News, No.77, Japan Foundation, p.4
- 2013年 9月 A comprehensive introduction to the noh mask as a work of art, Japanese Book News, No.77, Japan Foundation, p.8
- 2013年 9月 An accessible guide to a crucial period for the Japanese theater, Japanese Book News, No.77, Japan Foundation, p.8
- 2013年12月 Collection depicting several decades in the life of a love hotel, Japanese Book News, No.78, Japan Foundation, p.5

- 2013年12月 An accessible introduction to contemporary Japanese art, Japanese Book News, No.78, Japan Foundation, p.8
- 2013年12月 A fascinating guide to a unique aspect of Edo culture, Japanese Book News, No.78, Japan Foundation, p.9
- 2013年12月 Graduation ceremony tears as a rite of passage, Japanese Book News, No.78, Japan Foundation, p.10
- 2014年 1月 「水彩画のように描かれた異なる習俗の恋」(沈従文著、小島久代訳『辺境から訪れる愛の物語』)『毎日新聞』
- 2014年 3月 「対日世論の推移からみた言論多様化の難しさ」(馬立誠著、及川淳子訳『憎しみに未来はない』)『毎日新聞』
- 2014年 6月 「転換期の中国認識に独自の解析モデル」(馬場公彦著『現代日本人の中国像』)『毎日新聞』
- 2014年 8月 「内面世界の形象化 巧みな着想で読み解く」(宇佐美文理著『中国絵画入門』)『毎日新聞』
- 2014年 8月 植木雅俊『仏教学者 中村元』
- 2014年 9月 「地道な細部調査、時宜にかなった考察」(石井明『中国国境 熱戦の跡を歩く』)『毎日新聞』
- 2014年11月 「地道な努力で演劇交流の謎を解く」(飯塚容『中国の「新劇」と日本』)『毎日新聞』
- 2014年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2014年 3月 Young lives on the Inland Sea, Japanese Book News, No.79, Japan Foundation, p.4
- 2014年 3月 A stylistic tour de force, Japanese Book News, No.79, Japan Foundation, p.5
- 2014年 3月 The commercial context of woodblock publishing, Japanese Book News, No.79, Japan Foundation, p.7
- 2014年 3月 The “light novel” and US pop culture, Japanese Book News, No.79, Japan Foundation, p.9
- 2014年 6月 Agonizing and courageous stories of people living in a foreign land, Japanese Book News, No.80, Japan Foundation, p.5
- 2014年 6月 Seeking human connections through interactions with dogs, Japanese Book News, No.80, Japan Foundation, p.6
- 2014年 6月 Visit folk performing arts locations all around Japan, Japanese Book News, No.80, Japan Foundation, p.7
- 2014年 6月 An Encyclopedia of everyday-use items from the Edo period, Japanese Book News, No.80, Japan Foundation, p.8
- 2014年 9月 Who decides the criteria of justice?, Japanese Book News, No.81, Japan Foundation, p.5

- 2014年9月 A novel of elderly love, Japanese Book News, No.81, Japan Foundation, p.5
- 2014年9月 The most ordinary of actions and words can be hurtful, Japanese Book News, No.81, Japan Foundation, p.6
- 2014年9月 A reliable guide-book to Japanese traditions, Japanese Book News, No.81, Japan Foundation, p.10
- 2014年12月 Two women fight back against a vengeful criminal, Japanese Book News, No.82, Japan Foundation, p.4
- 2014年12月 A new look at the genealogy of humor, Japanese Book News, No.82, Japan Foundation, p.6
- 2014年12月 Symbols of authority, position, and wealth, Japanese Book News, No.82, Japan Foundation, p.7
- 2014年12月 The origins of Japanese names for people and places, Japanese Book News, No.82, Japan Foundation, p.10
- 2015年1月 「推理小説読むような専門研究の展開」（東京大学史料編纂所編『描かれた倭寇——「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』『毎日新聞』
- 2015年3月 「素朴な道徳感覚に基づく健全さの指標」（森本あんり『反知性主義——アメリカが生んだ熱病の正体』『毎日新聞』
- 2015年5月 「精神史の風景を眺望する書物案内」（山崎正和『「厭書家」の本棚』『毎日新聞』
- 2015年6月 「主張の違いにみる人間性向上の共通点」『毎日新聞』
- 2015年10月 「記憶の川を遡行し、憎悪の悲劇を描く」（ジェー・ルービン『日々の光』『毎日新聞』
- 2015年11月 「機智に富む話術で信仰の本質明かす」（橋爪大三郎、植木雅俊『ほんとうの法華経』『毎日新聞』
- 2015年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2015年3月 A powerful story of the fragility of human relationships, Japanese Book News, No.83, Japan Foundation, p.4
- 2015年3月 The culture shock of a Japanese reared in China, Japanese Book News, No.83, Japan Foundation, p.6
- 2015年3月 A comprehensive guide to food and daily life in Edo, Japanese Book News, No.83, Japan Foundation, p.7
- 2015年3月 Media-based analysis of Japanese views on China, Japanese Book News, No.83, Japan Foundation, p.10
- 2015年6月 What matters to a woman beyond “happiness” and “love”, Japanese Book News, No.84, Japan Foundation, p.4
- 2015年6月 Gruesome stories and the passions and pathos of human life, Japanese Book News, No.84, Japan Foundation, p.5

- 2015年6月 The living legends of vengeful spirits, Japanese Book News, No.84, Japan Foundation, p.7
- 2015年6月 How dialect reflects cultural differences around Japan, Japanese Book News, No.84, Japan Foundation, p.11
- 2015年9月 Inventive collection of super-short fiction, Japanese Book News, No.85, Japan Foundation, p.4
- 2015年9月 A novel of love, betrayal, and revenge, Japanese Book News, No.85, Japan Foundation, p.4
- 2015年9月 A richly illustrated social and cultural history, Japanese Book News, No.85, Japan Foundation, p.7
- 2015年9月 Connoisseur's guide to yakitori history and culture, Japanese Book News, No.85, Japan Foundation, p.7
- 2015年12月 Learning the meaning of life from those who face death, Japanese Book News, No.86, Japan Foundation, p.4
- 2015年12月 A novel of love, loss, and understanding, Japanese Book News, No.86, Japan Foundation, p.5
- 2015年12月 Modern Japanese history depicted in dreams, Japanese Book News, No.86, Japan Foundation, p.6
- 2015年12月 What really happened when the Mongols invaded Japan, Japanese Book News, No.86, Japan Foundation, p.10
- 2016年1月 「文化の政策的価値に注目する理由」(渡辺靖『<文化>を捉え直す』)『毎日新聞』
- 2016年4月 「古典の魅力とその受容史を巧みに語る」(影山輝國『「論語」と孔子の生涯』)『毎日新聞』
- 2016年4月 マガジン評『灯火』創刊号
- 2016年5月 「知的刺激とユーモア精神あふれた批評」(大岡玲『不屈に生きるための名作文学講義』)『毎日新聞』
- 2016年7月 「精神の石碑に農民生活の叙事詩刻む」(閻連科『父を想う』)『毎日新聞』
- 2016年8月 「予測困難な時代を生きる知恵袋」(山崎正和『日本人はどこへ向かっているのか』)『毎日新聞』
- 2016年10月 マガジン評『芸術新潮』
- 2016年10月 「東京に飛び込んできた革命家の群像」(譚璐美『帝都東京を中国革命で歩く』)『毎日新聞』
- 2016年12月 「メルヘン的な舞台に社会珍現象の活写」(閻連科『炸裂志』)『毎日新聞』
- 2016年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2016年3月 A work of historical fiction narrated by a mountain goat's horn, Japanese Book

- News, No.87, Japan Foundation, p.4
- 2016年 3月 An unconventional romance in contemporary Japan, Japanese Book News, No.87, Japan Foundation, p.4
- 2016年 3月 Feminists and the student movement, Japanese Book News, No.87, Japan Foundation, p.5
- 2016年 3月 A memoir of a teenage girl living in wartime Manchuria, Japanese Book News, No.87, Japan Foundation, p.8
- 2016年 6月 A parable of discord in the roles of marriage, Japanese Book News, No.88, Japan Foundation, p.4
- 2016年 6月 Twelve original short stories with links to classical works of literature, Japanese Book News, No.88, Japan Foundation, p.5
- 2016年 6月 A family-saga puzzle against the backdrop of history, Japanese Book News, No.88, Japan Foundation, p.6
- 2016年 6月 An editor's-eye view of twenty-one popular fiction writers, Japanese Book News, No.88, Japan Foundation, p.7
- 2017年 2月 「言語の越境に導かれた作家と訳書」(ジェー・ルービン 『日々の光』)『毎日新聞』
- 2017年 4月 「出版文化の先駆者の全貌明らかに」(植田康生ほか 『岩波茂雄文集』)『毎日新聞』
- 2017年 4月 マガジン評(「日経サイエンス」5月号)『毎日新聞』
- 2017年 5月 「政治力学と指導者の意志 外交左右」(国分良成『中国政治からみた日中関係』)『毎日新聞』
- 2017年 7月 「芸術としての批評とは」(菅原克也『小説のしくみ』)『毎日新聞』
- 2017年 8月 「自己の彼岸化を独創的な文体形式で」(余華『世事は煙の如し』)『毎日新聞』
- 2017年10月 「博物学図鑑に芸術性求めた奥深さ」(芳賀徹『文明としての徳川日本』)『毎日新聞』
- 2017年11月 マガジン評(『週刊トラベルジャーナル』10月30日号)『毎日新聞』
- 2017年12月 「現役詩人が読み解く詩の生成過程」(佐々木幹郎『中原中也——沈黙の音楽』)『毎日新聞』
- 2017年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2018年 2月 「小説的言語の限界への挑戦」(閻連科『硬きこと水のごとし』)『毎日新聞』
- 2018年 3月 「入念な資料収集と考証」(野口孝一『銀座カフェー興亡史』)『毎日新聞』
- 2018年 5月 「哲学構想仕上げの身体論」(山崎正和『リズムの哲学ノート』)『毎日新聞』
- 2018年 6月 「時代の可能性から大正を捉え直す」(鷺田清一『大正 = 歴史の踊り場とは何か』)『毎日新聞』
- 2018年 8月 「物語を運び去っていく言葉の霊力」(甘耀明『冬将軍の夏』)『毎日新聞』
- 2018年10月 「俯瞰する眼」で批評の本質に迫る」(三浦雅士『孤独の発明』)『毎日新聞』
- 2018年11月 「些細な痕跡から事実掘り起す」(岩尾光代『姫君たちの明治維新』)『毎日新聞』

- 2018年12月 「画家を通し美術史を照射」(三浦篤『エドゥアール・マネ——西洋絵画史の革命』)『毎日新聞』
- 2018年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2019年2月 「円熟した技巧の新境地」(辻原登『不意撃ち』)『毎日新聞』
- 2019年4月 「手堅い考証で日記を読む手本示す」(佐野真由子『クララ・ホイットニーが綴った明治の日々』)『毎日新聞』
- 2019年5月 「AI技術が悪用される未来図描く」(王力雄『セレモニー』)『毎日新聞』
- 2019年6月 「忘我の恬淡さで理想郷を語る」(『毎日新聞』) 芳賀徹『桃源の水脈』『毎日新聞』
- 2019年9月 「仲間たちへの鎮魂の音符」(『毎日新聞』) 閻連科『黒い豚の毛、白い豚の毛』『毎日新聞』
- 2019年10月 「西洋の発想から生まれない批評眼」(『毎日新聞』) 石川九揚『河東碧梧桐』『毎日新聞』
- 2020年4月 「中立的な立場から束の間の友情を描く」(加藤徹「日中戦後外交秘史」『毎日新聞』)
- 2020年6月 「外交戦略を構想するための理論構築」(北岡伸一編「新しい地政学」『毎日新聞』)
- 2020年7月 「天下を考え、文雅を忘れない」(芳賀徹「外交官の文章」『毎日新聞』)
- 2020年9月 「都市のあり方w思索するために」(吉見俊哉「東京裏返し」『毎日新聞』)
- 2020年10月 「無我にたどりく迷宮めぐり」(四方田犬彦「愚行の賦」『毎日新聞』)
- 2020年12月 「民意を反映する流れのきっかけ」(北岡伸一「明治維新の意味」『毎日新聞』)
- 2021年4月 「文化の自己定義の揺らぎを映す」(榎本泰子『敦煌と日本人』)『毎日新聞』
- 2021年5月 「文学研究のあるべき姿を示唆する人物論」(亀井俊介「英文学者 坪内逍遙」)『毎日新聞』
- 2021年9月 「オリンピック初参加への道たどる」(牛村圭「ストックホルムの旭日」)『毎日新聞』
- 2021年11月 「帰属先の変化に伴う誕生と消滅」(坂井裕一郎「仲人の近代」)『毎日新聞』
- 2021年7月 「アメリカ文化の両面性 鋭く見抜く」(大野裕之「ディスにーとチャップリン」)『毎日新聞』
- 2021年10月 「政治の風圧にさらされた思想の漂流」(福嶋亮大「ハロー・ユーラシア」)『毎日新聞』
- 2021年2月 「感覚的な表象にひそむ可逆的な関係性」(鷲田清一「つかふ」)『毎日新聞』
- 2022年1月 「学問対象と研究者の緊張関係に着目」小野寺史郎『戦後日本の中国観』『毎日新聞』
- 2022年3月 「「文脈の自由」に潜む大きな可能性」(田島正樹『文学部という冒険』)『毎日新聞』
- 2022年4月 「共振作用による思想体系の変遷」(中島隆博『中国哲学史』)『毎日新聞』
- 2022年6月 「幻想性と小説の内的合理性の融合」(辻原登『隠し女小春』)『毎日新聞』
- 2022年7月 「日本における大衆音楽の盛衰を読み解く」(周東美材『「未熟さ」の系譜』)『毎日新聞』
- 2022年8月 「目線の低さ 孤独なつぶやき」(周作人著、井田進、劉岸偉訳『周作人自伝』)『毎日新聞』

- 2023年4月 「音声を書きとどめる努力の足跡」(釘貫亨『日本語の発音はどう変わってきたか』)
『毎日新聞』
- 2023年5月 「想像の他者像のさすらいを追って」(垂水千恵『台湾文学というポリフォニー』)『毎
日新聞』
- 2023年7月 「専門的知見で寺子屋の実像に迫る」(八楸友広『読み書きの日本史』)『毎日新聞』
- 2023年9月 「移住者の心伝える 南米への航海日記」(根川幸男『移民船から世界をみる』)『毎
日新聞』
- 2023年11月 「習い事上位に入る楽器の文化的謎解き」(玉川裕子『ピアノを弾く少女』)『毎日新聞』
- 2023年12月 「今年の三冊」『毎日新聞』
- 2024年1月 「大衆娯楽として文化的起源探る」(高柳友彦『温泉旅行の近現代』)『毎日新聞』

<対談>

- 1996年6月 「同文同種の虚妄を越えて」『This is 読売』第7巻第3号、読売新聞社
- 1997年1月 張競、丸谷才一、山内昌之、鹿島茂「性の世界史——四人の碩学が掘り起こす、
知的興奮の二〇〇分」『現代』1997年1月号、講談社
- 1997年1月 張競、伊藤晃、伊藤欣二、種村季弘、米川良夫、高木昌史「翻訳文化論」『國
學院雑誌』1077号、國學院大學
- 1997年2月 張競、丸谷才一、山内昌之、木村尚三郎「創刊30周年記念大座談会「欲望の文
化論」<Part 2>「食」の世界史」『現代』1997年2月号、講談社。
- 1997年9月 張競、鹿島茂、氏家幹人、伴田良輔「大座談会・ポルノの世界史—暴走する日
本人のSEXは歴史の必然」『現代』1997年9月号、講談社
- 1999年7月 張競、風間賢二、松沢呉一「大座談会・20世紀を変えた世界の「性革命家」
100人—涙ぐましい研鑽と探求心が現代人のSEXを産んだ」『現代』1999年7月
号、講談社
- 1998年2月 張競、鹿島茂、氏家幹人「大座談会・「極悪人」の世界史—大量殺人鬼、好色侶、
詐欺の天才……しばしば戦慄、ときに抱腹絶倒」『現代』1998年2月号、講談
社
- 1998年5月 佐々木幹郎、張競「消費文化と言語表現——その可能性を探る」『滴』第17号、
國學院大學広報部
- 1998年9月 張競、高山宏、氏家幹人「エロスの世界史—性の常識を問い直す大座談会、日・
中・欧の性文化を検証した白熱の百八十分」『現代』1998年9月号、講談社
- 1999年4月 張競、池内紀、川本 三郎「(大座談会)20世紀を創った「偉人」「怪人」100人」『現
代』1999年4月号、講談社
- 1999年7月 張競、風間賢二、松沢呉一「大座談会=涙ぐましい研鑽と探究心が現代人の
SEXを産んだ 20世紀を変えた世界の「性革命家」100人」『現代』1999年7月号、

講談社

- 1999年12月 「対話 中国に未来はあるか--建国五十年目の転換期」新書館編『大航海』1999年12月号、新書館
- 2000年3月 張競、鹿島茂、佐伯順子「大座談会 英雄の「性愛史」--歴史は夜作られる」『現代』2000年3月号、講談社
- 2000年5月 張競、丸谷 才一、高島俊男「東京ジャーナリズム大合評第六シリーズの(9)東アジアの最新漢字事情」『東京人』153号、都市出版
- 2000年 「対談 ジャパノロジーの新展開--白幡洋三郎×張競」『IS』84号、ポーラ文化研究所
- 2000年11月 張競、国分良成、松井孝典「中国全球化と人間圏の行方」『中国全球化が世界を揺るがす』ウェッジ選書、株式会社ウェッジ
- 2001年6月 張競、鹿島茂、山本博文「大座談会・性豪たちの世界史--権力者でも、庶民でも歴史は夜つくられる」『現代』2001年6月号、講談社
- 2004年2月 辻原登×張競「対談 上海・神戸--都市の魔力」文藝春秋社編『本の話』105号、文藝春秋
- 2001年10月 張競、リリー・フランキー「美人はどこにいる」『出版ニュース』株式会社トーハン、2001年10月号、株式会社トーハン
- 2004年4月 張競、辻原登、桑島道夫「鼎談「上海モダン」をめぐる」『アジア遊学』第62号、勉誠出版
- 2004年10月 浅田次郎×張競「特別対談 『蒼穹の昴』天命をめぐる時代の群像」『IN POCKET』第22巻第10号、講談社
- 2005年1月 張競、加藤徹「漢文は東アジアのラテン語 訓読文化が今日の日本人を作った」『中央公論』1448号、中央公論社
- 2005年4月 Cho Kyo, Toru Kato 「Classical Chinese in Japan: A Cultural Treasure」『JAPANECHO』Volume32,Number 2
- 2006年3月 張競、井上章一、鹿島茂、田丸公美子「蘊蓄満載の艶笑座談会 古今東西 性の話はどこまでも」『現代』2006年3月号、講談社
- 2007年1月 「日本文学の可能性を探る -- 隣接科学との協同と国際化への道」『國學院雑誌』第1197号、國學院大學
- 2008年7月 張競・浅田次郎対談、浅田次郎著・監修『浅田次郎とめぐる 中国の旅』所収、講談社
- 2010年5月 張競、鹿島茂、井上章一「世界は夜、作られる! 井上章一×鹿島茂×張競 知れば知るほどSEXは愉しい」『週刊現代』第2570号、講談社
- 2010年11月 張競、北方謙三「対談 北方謙三×張競--日本の作家が書き上げた中国の壮大な歴史物語」『青春と読書』第412号、集英社

- 2011年11月 張競、勝見洋一「『料理』に隠された真実」『東京人』第26巻第11号、都市出版
- 2014年9月 張競、北方謙三「日本人だからこそ書けた英雄の物語」『小説すばる』第二十八巻第十号、集英社
- 2016年2月 張競、毛丹青「対談 中国で日本文学はどう読まれているか」『潮』第684号、潮出版社
- 2016年3月 張競、毛丹青「対談 中国人眼中的日本文学」『在日本』、華東理工大学出版社

<インタビュー>

- 2003年3月 「龍や鳳凰、何のシンボル？」『日中友好新聞』
- 2012年4月 「中国の龍」株式会社みずほ銀行編集『華』Vol.22、株式会社みずほ銀行
- 2012年6月 「なぜ「留学生30万人」なのか指導改善のためTA導入すべき」『向学新聞』国際留学協会
- 2013年12月 「文学批評への危機感」『毎日新聞』
- 2015年9月 「タレを遡る」株式会社みずほ銀行編集『華』Vol.36、株式会社みずほ銀行
- 2015年11月 「「批判覚悟で」社会読み解き」『朝日新聞』聞』第237号

<監修>

- 2010年7月21日 「中華料理 四千年の歴史をたどる」『一個人』KKベストセラーズ

<協力>

- 2003年8月 深巳琳子『沈夫人の料理人』（1）小学館
- 2004年7月 深巳琳子『沈夫人の料理人』（2）小学館

（4）所属学会

<学会活動>

- 世界比較文学学会会員
- 日本比較文学学会会員
- 東大比較文学学会会員

(5) 社会活動

- 2011年4月 生涯学習開発財団「博士号取得支援事業」選考委員長
- 2011年11月 奈良県「日本と東アジアの未来を考える委員会」委員
- 2011年4月 サントリー文化財団「社会と文化に関する特別研究助成」選考委員
- 2012年1月 サントリー文化財団「海外出版助成」選考委員
- 2012年4月 国際交流基金翻訳出版助成プログラム翻訳推薦著作リスト“Worth Sharing ”アドバイザー
ヴァイザイ
- 2012年4月 『アステイオン』編集委員
- 2012年7月 国際交流基金・翻訳出版助成プログラム「翻訳推薦著作リスト」作成アドバイザー
- 2012年8月10日 国際交流基金Japanese Book News編集委員
- 2015年11月20日 日本経済新聞社「日経アジア賞」審査委員会「文化・社会部門」審査委員
- 2015年12月7日 国際交流基金関西国際センター「専門日本語研修（文化・学術専門家）」プログラム申請事前評価委員

(6) 教育歴

- 1989年9月1日～1992年3月 都留文科大学非常勤講師
- 1990年4月1日～1992年3月 学習院大学非常勤講師
- 1990年4月1日～1992年3月 中央大学非常勤講師
- 1991年4月1日～1992年3月 神奈川大学非常勤講師
- 1996年4月1日～1998年3月 和光大学非常勤講師
- 1998年4月1日～2000年3月 國學院大學非常勤講師

(7) 明治大学での教育歴

- [1] 法学部
- [2] 国際日本学部
- [3] 国際日本学研究科

3 その他**(1) 受賞歴**

- 1994年2月 第45回読売文学賞評論伝記賞
- 1995年11月 サントリー学芸賞受賞

(2) 役職

- 1998年4月1日～2000年3月31日 学生部委員
- 2010年4月1日～2012年3月31日 学長室専門員

セピア色の記憶にさよならを

張 競

野原の草花のささやきに導かれて、明治大学の未知なる湿原に足を踏み入れたのはいまから二十六年前のことであった。それ以来、知のせせらぎの音を訪ね、無謀な水先案内人のように、全身がシニカルなしぶきにずぶ濡れになりながらも、ひたすら夢の収集に勤んできた。

若者の最前線に立ち、活力に満ちた若い知性と肌で触れ合うのは自らの魂を磨く、またとない機会になった。教えるとは名ばかりで、柔らかい感性に導かれて、新たな美学の岸辺にたどりつくことも一度ならずあった。新月のような未完はかえってめくるめく輝きを予感させ、みなぎった青春の活力は無限の可能性を悟らせてくれた。青白い主張に躓くこともあったが、わたしはほとぼしるような若いエネルギーの噴水に身を任せていた。思い返せば、静かな幸福感に満ちた二十六年間であった。

沈黙のまま支えてくれた裏方の善意も忘れられない。不器用を言い逃れにする頑固さをものともせず、気付かないふりをしてフォローしてくれたことには頭が下がる。過ぎ去った年月が空高く舞い上がった風のように、もはや目で追えないほど遠くまで飛んで行ってしまったいま、すべての想いは感謝の音符になって、無言の好意に返すしかない。

教える仲間に何か話しかけようとしても、気まぐれの引き出しにはすでに残りの言葉が少ない。もともとわたしたちは交響楽団の団員のように、それぞれまったく違う楽器を奏でるために集まったに過ぎない。個性と異質性が集合の理由ならば、奏でられた音響が聴者の心に響くだけでよい。別れのための寄り合いである以上、別れの儀式も言葉もいらない。

心の壁に映し出された蝋燭の炎がゆらめくたびに、思い出の落書きはくっきりと姿を現してくる。一つだけを挙げるとすれば、雲一つないある秋の午後、健診の結果を受けたときである。わたしは青い果実が季節外れに落ちるのを予感し、ふいに訪れてくるかもしれない人生の幕切れに戸惑った。小学校一年生の娘の笑顔を思い出したとき、視界がぼんやりになったのをいまも忘れない。講義の途中で言葉が続かなくなり、授業を中断して病院に直行したのは四十年近くの教師人生において後にも先にもその一度きりである。こうして、定年を迎えたのはまさに人生の奇跡としか言いようがない。

いまわたしは残照に彩られた夕空を見つめ、精神の深呼吸をして、黄昏の旅に出かけようとしている。願いはただ一つしかない。はにかみの帽子を少し持ち上げ、音もなく去っていくのみである。

再見！



渡浩一教授・近影

渡 浩一 教授 履歴・業績

1 学歴・学位・職歴

〈学歴〉

- 1973年4月 埼玉大学 教養学部 教養学科入学
- 1978年3月 埼玉大学 教養学部 教養学科(日本文化コース)卒業
- 1978年4月 東京都立大学 人文科学研究科 史学専攻 修士課程入学
- 1981年3月 東京都立大学 人文科学研究科 史学専攻 修士課程修了
- 1982年4月 東洋大学 文学研究科 国文学専攻 博士後期課程入学
- 1985年3月 東洋大学 文学研究科 国文学専攻 博士後期課程単位取得退学

〈学位〉

- 1981年3月 文学修士 東京都立大学

〈職歴〉

- 1981年4月 桐朋女子中学校・高等学校 非常勤講師(～1987年3月)
- 1985年4月 明治大学法学部 兼任講師(～1990年3月)
- 1985年5月 学習院女子短期大学 非常勤講師(～同年9月)
- 1986年4月 日本学術振興会特別研究員(大正大学)(～1988年3月)
- 1987年4月 学習院女子短期大学 非常勤講師(～1988年3月)
- 1988年4月 東洋大学文学部 非常勤講師(～2019年9月)
- 1990年4月 亜細亜大学 非常勤講師(～1991年3月)
- 1990年4月 明治大学政治経済学部 専任講師
- 1991年4月 実践女子大学文学部 非常勤講師(～2002年3月)
- 1993年4月 日本獣医畜産大学 非常勤講師(～1997年3月)
- 1994年4月 明治大学政治経済学部 専任助教授
- 2004年4月 実践女子大学文学部 非常勤講師(～2010年3月)
- 2001年4月 明治大学政治経済学部 専任教授
- 2008年4月 明治大学国際日本学部 専任教授
- 2018年8月 文教大学文学部 非常勤講師(夏期集中講義)

2 研究活動

(1) 著書・編著書

- 1983年10月 共著 『絵解き台本集』 三弥井書店
「矢田地蔵大士絵解」
- 1985年9月 編著 『延命地蔵菩薩経直談鈔』 勉誠社
- 1985年9月 共著 『一冊の講座 絵解き』 有精堂

- 「矢田地蔵縁起」
- 1986年 5月 共著 『絵画の発見—〈カタチ〉と読み解く19章』（イメージ・リーディング叢書）
平凡社
- 「生身地蔵の出現—『地蔵菩薩靈驗記絵—岩船地蔵縁起—』」
- 1987年12月 共著 仏教民俗大系3 『聖地と他界観』 名著出版
「地獄めぐり（冥界譚）」
- 1989年 7月 共著 『絵解き—研究と資料』 三弥井書店
「瑞泉寺～吉沢孝譽師蔵『聖徳太子傳記』」（分担翻刻）
- 1989年 8月 共著 仏教歳時記9 『放生』 第一法規
「とげぬき地蔵の信仰と習俗」
- 1992年 8月 共著 『民間の地蔵信仰』 溪水社
「絵解きと矢田地蔵縁起」（『一冊の講座 絵解き』収録論文の再録）
「民間地蔵信仰に関する文献一覧」（共編）
- 1993年 2月 共著 説話の講座3 『説話の場—唱導・注釈—』 勉誠社
「靈驗記の世界—地蔵説話を中心に—」
- 1993年12月 共著 『日本歴史館』 小学館
「絵解きの世界—中世の伝道者」
- 1994年 4月 共著 『説話—救いとしての死』 翰林書房
「華嚴経破地獄偈」をめぐって
—王氏蘇生説話と観心十界図を中心に—
- 1995年 1月 共著 岩波講座 日本文学と仏教 第7巻 『靈地』 岩波書店
「地蔵信仰と靈驗記—矢田地蔵靈驗記の諸相」
- 1999年 3月 共著 明治大学公開文化講座18 『生と死』 風間書房
「幼き亡者たちの世界」
- 2002年 4月 共著 『一四巻本 地蔵菩薩靈驗記』 上 三弥井書店
- 2002年 9月 共著 新編日本古典文学全集63 『室町物語草子集』 小学館
- 2003年 3月 共著 『生と死の図像学—アジアにおける生と死のコスモロジー』 至文堂
「串刺しの母—地獄図と目連救母説話—」
- 2003年 8月 共著 『一四巻本 地蔵菩薩靈驗記』 下 三弥井書店
- 2011年 3月 共著 人間文化叢書 ユーラシアと日本—交流と表象—
『唱導文化の比較研究』 岩田書院
「矢田寺の「欲参り」信仰の成立とその唱導
—逆修信仰との関係および「矢田地蔵毎月日記絵」をめぐって—」
- 2011年11月 単著 『お地藏さんの世界—救いの説話・歴史・民俗—』 慶友社
- 2016年 1月 共著 『絵解きと伝承そして文学』 方丈堂出版

「〈笠の辻の地藏〉の縁起伝承をめぐって

—「矢田地蔵縁起」武者所康成蘇生譚と『笠辻地藏尊縁記』
および在地伝承—

2022年9月 共著 富山県 [立山博物館] 令和4年度後期特別展図録

『立山のお地藏様さま—苦しみに寄りそう』

「説話に見る立山のお地藏さま

—その霊験の諸相と立山権現との関係—

(2) 学術論文等

〈主な学術論文—査読あり〉

- 1983年3月 単著 「中世地藏説話集の編纂をめぐって」 『仏教文学』 7
- 1984年9月 単著 「中世地藏説話概観」 『東洋大学大学院紀要』 20
- 1985年2月 単著 「十四卷本『三国因縁地藏菩薩霊験記』とその周辺
付・説話別主要参考資料一覧」 『東洋大学大学院紀要』 21
- 1986年6月 単著 「地藏の逆縁救済をめぐって
—『地藏菩薩霊験記』巻七第五話を中心に—」 『説話文学研究』 21
- 1987年6月 単著 「浄慧と近世地藏説話集—『延命地藏菩薩経直談鈔』の背景—
『説話文学研究』 22
- 1997年4月 単著 「〈賽の河原〉の伝承
—『富士の人穴草子』と『賽の河原地蔵和讃』を中心に—
『説話・伝承学』 5
- 2001年3月 単著 「鬼と子どもと地藏—「子取ろ子取ろ」の起源伝説をめぐって—
『明治大学人文科学研究所紀要』 49
- 2004年3月 単著 「日本の冥界遍歴物語と地獄・極楽図
—福島県伊達郡桑折町観音寺蔵「考子善之丞幽冥感見之曼荼羅」を
めぐって—」 『明治大学人文科学研究所紀要』 54
- 2005年5月 単著 「『西院河原地蔵和讃』の唱導
—勸化本『西院河原口号伝』を中心として—
『日本宗教文化史研究』 9-1
- 2006年3月 単著 「熊野観心十界図と〈母の救済〉
—目連救母説話、盂蘭盆会、そして「熊野の本地」—
『明治大学人文科学研究所紀要』 59
- 2015年3月 単著 「矢田寺の「欲参り」信仰をめぐって
—「欲参り」と「矢田地蔵毎月日記絵」と「笠之辻地藏」伝説—
『明治大学人文科学研究所紀要』 76
- 2020年5月 単著 「ある近世往生伝の成立と伝播と伝承

—予告往生を遂げた安西法師の往生伝をめぐって—

『日本宗教文化史研究』24- 1

〈主な学術論文—査読なし〉

- 1977年5月 単著 「民間地蔵信仰の考察(上)—『今昔物語集』地蔵説話を中心として—」
『仏教民俗研究』4
- 1980年3月 単著 「平安末期民間地蔵信仰の構造 —民間地蔵信仰の考察(下)—」
『仏教民俗研究』5
- 1982年7月 単著 「満米上人巡獄譚の成立と小野氏 —矢田地蔵縁起成立考—」
『伝承文学研究』27
- 1982年10月 単著 「矢田地蔵縁起」 『国文学 解釈と鑑賞』47-11
- 1985年12月 単著 「近世地蔵説話集と地蔵縁起
—十四巻本『地蔵菩薩靈驗記』の場合—」 『武蔵野文学』33
- 1987年9月 単著 「熊野の縁起」 『国文学 解釈と鑑賞』52- 9
- 1988年6月 共著 「「無量寿経厭苦五悪凶画」とその周辺
—近世後期真宗における五悪段説教と絵解き—」 『絵解き研究』7
- 1988年9月 単著 「『地蔵菩薩利益集』の世界—貞亨・元禄時代の民間地蔵信仰—」
『仏教民俗研究』6
- 1989年10月 単著 「伝奇から史伝へ—聖徳太子伝図会—」
『国文学 解釈と鑑賞』54-10
- 1990年3月 単著 「ケンペル「江戸参府旅行日記」」 『国文学 解釈と鑑賞』55- 3
- 1990年8月 単著 「地蔵菩薩と文芸—地獄の救済者—」 『国文学 解釈と鑑賞』55- 8
- 1991年5月 単著 「地蔵菩薩と女人救済—火印(頬焼)地蔵のこと—」
『国文学 解釈と鑑賞』56- 5
- 1991年11月 単著 「お地蔵さんとハーン—日本人の信仰・微笑とお地蔵さんの微笑—」
『国文学 解釈と鑑賞』55-11
- 1993年3月 単著 「「地蔵菩薩夢授経」について」 『明治大学教養論集』232
- 1995年3月 単著 「L・フロイス「日本史」—凄絶な中世日本を見つめる」
『国文学 解釈と鑑賞』60- 3
- 1995年5月 単著 「E.S.モース『日本その日その日』
—未だ西洋文明の洗礼を受けぬ日本及び日本人に言及」
『国文学 解釈と鑑賞』60- 5
- 1998年2月 単著 日本「の地蔵信仰と文学 -<賽の河原>伝承を中心に-」
『日本研究』(韓国・中央大学校・日本研究所)13
- 2001年1月 単著 「空也堂蔵『空也上人絵詞伝』と『西院河原口号伝』
—<賽の河原>伝承を中心に—」 『明治大学教養論集』339

- 2014年3月 単著 「イソップ寓話「アリとキリギリス」の日本の変容
—『イソポのハブラス』における改変をめぐって—
『明治大学国際日本学研究』 6- 1
- 2021年9月 単著 「欲張りは天罰に値するか
—『伊曾保物語』所載イソップ寓話「肉をくわえた犬」の
教訓をめぐって—」
『明治大学教養論集』 554

(3) その他の研究業績

〈資料紹介・調査報告〉

- 1985年9月 単著 「赤穂市誓教寺『三界六道図絵』の絵解き」
『絵解き研究』 3
- 1990年3月 共著 「〈翻刻〉林山文庫蔵『十王賛嘆』」
『明治大学教養論集』 232
- 1991年3月 共著 「長野市刈萱山西光寺資料（一）—近世の書画と文書—」
『明治大学教養論集』 239
- 1993年3月 共著 「長野市刈萱山西光寺資料（二）—近代（明治期）の文書—」
『明治大学教養論集』 257
- 1994年3月 共著 「長野市刈萱山西光寺資料（三）
—近代（明治期・承前）の文書、近代（大正・昭和期）の文書—」
『明治大学教養論集』 268
- 1994年12月 共著 「長野市刈萱山西光寺資料（四）
—板木・霊宝・絵画・絵はがき・石造物・補遺（近世・近代）—」
『明治大学教養論集』 271
- 1997年9月 共著 「枕石山願法寺資料—『たびの枕』解説と翻刻—」
『明治大学教養論集』 303
- 1999年1月 共著 「枕石山願法寺資料（二）」
『明治大学教養論集』 317
- 2000年3月 共著 「枕石山願法寺資料（三）」
『明治大学教養論集』 330
- 2005年3月 単著 「『資料紹介』「西院河原口号伝絵」二種」
『明治大学教養論集』 392
- 2006年3月 単著 「『資料紹介』大和郡山市矢田寺蔵・
新出「矢田地蔵毎月日記絵」について」
『明治大学教養論集』 404
- 2017年3月 単著 「翻刻『安西法師往生伝』」
『明治大学国際日本学研究』 9- 1
- 2019年3月 単著 「【資料紹介】愛媛県大洲市寿永寺安西法師関係新出資料
掛軸「安西大徳臨終之期録」並びに絵伝「安西法師一代記絵鈔」
付録 翻刻『安西法師往生記略伝』」
『明治大学国際日本学研究』 11- 1

〈文献目録・索引等〉

- 1983年 1月 単著 「百人一首研究論文目録」 『国文学 解釈と鑑賞』 48- 1
- 1984年11月 共著 「説話文学研究文献目録」 『国文学 解釈と鑑賞』 49-11
- 1985年 2月 共著 「十四卷本『地藏菩薩靈驗記』索引
一人名・地名・寺社名・書名・年代・神仏名・地藏一
付・出典別引証一覧」
『文学論藻』（東洋大学文学部紀要 国文学篇） 38
- 1985年 7月 共著 「主要日記文学（古典）翻刻・複製目録」
『国文学 解釈と鑑賞』 50- 8
- 1986年 4月 共著 「昭和五十年以降 中世語り物研究書目録抄」
『国文学 解釈と鑑賞』 51- 4
- 1988年 3月 単著 「昭和61年国語国文学会の展望 中世(散文)」 『文学・語学』 116
- 1988年 5月 共著 「昭和51年以降 民俗芸能関係単行書目録」
『国文学 解釈と鑑賞』 53- 5
- 1990年 5月 共著 「古典歌謡研究文献目録抄」 『国文学 解釈と鑑賞』 55- 5
- 1990年 8月 共著 「「地獄・極楽」研究文献目録抄(研究文献目録)」
『国文学 解釈と鑑賞』 55- 8
- 1995年 3月 共著 「「外国人による日本論・日本人論」研究書目録（抄）」
『国文学 解釈と鑑賞』 60- 3
- 1995年 4月 共著 「外国人による日本論・日本人論訳書目録」 『国文学 解釈と鑑賞』 60- 3
- 1995年 5月 共著 「続・「外国人による日本論・日本人論」訳書目録」
『国文学 解釈と鑑賞』 60- 5
- 1996年10月 共著 「「日本人の見た異国・異国人」文学作品目録抄」
『国文学 解釈と鑑賞』 61-10
- 1996年10月 共著 「「日本人の見た異国・異国人」異国見聞記・漂流記・
異国研究等研究書目録抄」 『国文学 解釈と鑑賞』 61-10

〈事典類〉

- 1986年10月 単著 『日本伝奇伝説大事典』 角川書店 「矢田地蔵の縁起」 など7項目
- 1998年 4月 単著 『日本宗教民俗辞典』 東京堂出版 「地藏信仰」 など5項目
- 2000年 4月 単著 『小泉八雲事典』 恒文堂 「地藏」 の項
- 2001年 7月 単著 『日本の神仏の辞典』 大修館書店 「地藏」「小野篁」 など12項目

〈書評・新刊紹介〉

- 1984年 1月 単著 林雅彦・徳田和夫編『絵解き台本集』
「あるかんしえる」 9（東洋大学生協書評誌）
- 1985年 5月 単著 林雅彦著『増補 日本の絵解き』 『伝承文学研究』 31

- 1988年6月 単著 川口久雄著『山岳まんだらの世界』 『絵解き研究』 6
- 1990年3月 単著 中野玄三著「六道絵の研究」 『絵解き研究』 8
- 1991年4月 単著 五味文彦著『中世のことばと絵』 『言語』 20
- 1991年6月 単著 坂本要編『地獄の世界』 『絵解き研究』 9
- 1997年2月 単著 石川純一郎著『地蔵の世界』 『日本民俗学』 209
- 2000年4月 単著 日向一雅他編『神話・宗教・巫俗－日韓比較文化の試み』
『明治大学広報』 468
- 2007年10月 単著 堤邦彦著『女人蛇体－偏愛の江戸怪談史－』 『宗教民俗研究』 17
- 2012年7月 単著 中前正志著『神仏霊験譚の息吹 身代わり説話を中心に』
『説話文学研究』 47
- 2018年12月 単著 山本聡美著『闇の日本美術』 『図書新聞』 3379
- 2023年12月 単著 清水邦彦著『お地蔵さんと日本人』 『図書新聞』 3619
- 〈コラム・語句解説・その他〉
- 1988年8月 単著 『閻魔登場』 川崎市民ミュージアム 展示資料解説7点
- 1992年10月 単著 少年少女古典文学館 第十六巻『おとぎ草子・山椒大夫』 講談社
語句解説の一部
- 1987年3月 共著 「さすらう芸の演者たち」 『国文学 解釈と鑑賞』 52- 3
- 1987年6月 単著 「絵解きと仏教民俗」 『絵解き研究』 5
- 1987年9月 単著 「アルバム 神道美術と文芸」 『国文学 解釈と鑑賞』 52- 9
- 1988年3月 共著 「本号掲載作品の解題」 『国文学 解釈と鑑賞』 53- 3
- 1993年3月 共著 「アルバム 古典文学に見る霊場」 『国文学 解釈と鑑賞』 58- 3
- 1995年3月 単著 「地蔵信仰」 『学校図書館ニュース』 547
- 1999年10月 単著 「日本論・日本人論・日本文化論の案内書」 『明治』 4
- 2002年3月 単著 「『孝子善之丞感得伝』とその絵画―表紙によせて―」 『絵解き研究』 16
- 2005年1月 単著 「ルイス・フロイスのみた日本人と日本文化」 『日本医事新報』 4211
- 2005年3月 単著 「〈お地蔵さん〉の信仰」 『明治大学博物館友の会会報』 6
- 2017年4月 単著 「『あの世』にまつわる民衆宗教絵画」 『明治』 74
- 2021年11月 単著 「地獄の唱導と芸能―絵解き・落語・芝居―」

TERASIA公式サイト（ウェブ記事）

〈学会発表・講演〉

- 1982年6月 「中世地蔵説話集の編纂をめぐって」 仏教文学会大会
- 1984年8月 「王氏蘇生説話の伝承とその周辺―破地獄偈を中心に―」 伝承文学研究会大会
- 1987年6月 「目連救母説話と地獄絵」 仏教文学会大会
- 1996年4月 「〈賽の河原〉の伝承と図像」 説話・伝承学会春季大会
- 1997年9月 「日本の地蔵信仰と文学―〈賽の河原〉伝承を中心に―」

韓国中央大学校日本研究所国際学術発表会

- 1998年9月 「幼き亡者たちの世界 ―〈賽の河原〉の図像をめぐって―」
第22回 明治大学公開文化講座
- 2000年11月 「空也堂蔵『空也上人絵詞伝』と『西院河原口号伝』
― 〈賽の河原〉の伝承を中心に―」 仏教文学会支部例会
- 2004年11月 「〈賽の河原〉の唱導―勸化本『西院河原口号伝』を中心に―」
日本宗教文化史学会大会
- 2005年7月 「〈お地蔵さん〉の信仰」 明治大学博物館友の会総会
- 2011年11月 「『矢田地蔵毎月日記絵』の絵解き」 ワークショップ 近世地獄絵の観衆
- 2019年12月 「ある近世往生伝の成立と地元における伝承
― 『安西法師往生伝』と二つの安西法師絵伝―」
日本宗教文化史学会大会
- 2022年10月 「地蔵霊場としての立山」 富山県 [立山博物館] 主催
- 2022年12月 「日本の外来文化の取り入れ方―漢字文化を中心に―」
JENESYS2022 日ミャンマー交流 日本語学習者招へい 基調講演
- 2023年12月 「『恩愛』と『孝養』
―中世日本唱導説話・絵画に見る「孝」の日本の変容―」
第4回国際日本学学術集会（於：北京大学外国語学院）

（4）所属学会・研究会

〈学会活動〉

- 絵解き研究会会員（～2012年10月） 説話・伝承学会会員 説話文学会会員
 仏教文学会会員 日本民俗学会会員（～2016年3月） 日本宗教文化史学会会員
 日本宗教民俗学会会員 国際熊野学会会員
- 1984年4月 絵解き研究会委員（～2012年10月）
 1991年7月 説話文学会委員（～1996年6月）
 2000年6月 仏教文学会委員（～2006年6月）
 2007年7月 説話文学会委員（～2013年6月）

（5）社会活動

- 2015年2月 富山県 [立山博物館] 運営委員（～2020年1月）
 2022年4月 富山県 [立山博物館] 令和四年度後期特別企画展
 「立山のお地蔵さま―苦しみに寄りそう―」企画展委員（2022年11月）

3 その他

(1) 役職

1998年10月 明治大学政治経済学部経済学科和泉主任（～2000年9月）

2004年6月 明治大学博物館副館長（～2014年3月）

2008年4月 明治大学国際日本学部一般教育主任（～2014年3月）

2016年4月 明治大学専任教授連合会幹事長（～2017年3月）

明大生活 39 年を振り返って

渡 浩一

私をはじめ明治大学の教壇に立ったのは昭和 60 (1985) 年 4 月のことで、法学部の兼任講師としてであった。そして、平成 2 (1990) 年 4 月に、政治経済学部専任講師となり、平成 20 (2008) 年 4 月に国際日本学部に移籍した。法学部で兼任に、政経学部で専任になれたのは、それぞれの学部に中高時代の恩師がいらっしやっただけによる (当時の採用人事のシステムは今とはだいぶ違っていた)。

振り返ってみると、専任としては 34 年、兼任講師の時代も含めれば 39 年間、明治大学にお世話になったことになる。専任としては、政経学部で 18 年、国際日本学部で 16 年、和泉キャンパスで 23 年、中野キャンパスで 11 年過ごしたことになる。昭和・平成・令和と明治大学で過ごしたと思うと感慨深いものがある。昭和の明大を生で知っている教職員はもはや数えるほどではないか。第一校舎建築前の和泉キャンパスを知っている教職員もほとんどは学生時代の記憶であろう。

三十数年前の明大を思い起こすとまさに隔世の感がある。リバティ・タワーもなく、旧記念館の周りの塀はタテカンで埋め尽くされていた。短期大学と二部 (夜間部) があつたが、国際日本学部はもちろん情報コミュニケーション学部すら影も形もなかった。いうまでもなく、中野キャンパスもまったく影も形もなかった。教員の期限付き任用の制度はなかったし、自分は助教授で准教授ではなかった。二部があつたので若手の責任コマ数を尊重する雰囲気はまったくなく、自分も専任初年度から担当は 6 コマだった。古い校舎の教室には冷房機はなく、研究室の電話は黒電話だった。パソコンどころかワープロもなく、原稿はすべて手書きだったし、もちろん、学生の提出物も手書きだった。

はじめて出た教授会に女性教員は一人しかいなかった。しかもその方は私と同期の政経学部初の女性教員で、約 100 名の地味なスーツ姿の教授会員のなかのまさに紅一点だった。教授会開始前には女性職員の方々が教授会員一人一人にお茶を用意してくださった。履修者名簿には読めない名前はほとんどなく、性別が分からないような名前もほとんどないのに女子学生だけに F のマークがついていた。男子学生は「君」付で、女子学生は「さん」付けで呼ぶのが当たり前だった。授業はほとんどが年間 4 単位授業で、夏休み前に試験を実施したりレポートを課したりする教員はそれほど多くはなかったように記憶している。自己評価・自己点検などもなかったし、学生による授業評価もなかった。

今から思うと、よくもそんないい加減なことが許されていたなあと思うことがほかにもいくつもあったような気がする。おおらかと言えばおおらかな時代で、いい意味でも悪い意味でも自由が今よりずっとあつたともいえる。今は、いい加減なところは減つたが、「やらなければならないこと」が昔に比べずいぶん増えて自由が減つたように感じる。

私の国際日本学部との関わりは、2006 年の夏ごろから設置準備委員会に参加したことに始まる。

当時二部教務部長として大学執行部にいらっしゃった吉田悦志先生から、新学部での国語（日本語）教育関係のカリキュラムについて考えてもらえないかとお誘いいただいたのがきっかけであった。それまでは、国際系の新学部を明治もいよいよ作るらしいという情報が入ってきても、国際系の学部に移籍することなどまったく考えていなかったのだが、国際系でも「国際日本」という新しい名称とその名称に込められた理念に心惹かれ、迷った末に、設置後の移籍を前提に参加を決めた。国際系でも「日本学部」なら、自分がやっているようなことに興味を持つ学生も少しは来るかもしれないし、それなら日本語で日本研究をし、日本語でしか教育・指導ができない自分でも役に立てることがあるかもしれないと、迂闊にも思ってしまったからである。以来、開設に向けて準備委員会の一員として自分なりに微力を尽くしたつもりである。

私が中心となって聊か汗をかいて開講できた科目が「日本語表現」と「文化資料学」であった。前者は吉田先生のご依頼に始まったことだが、政経学部時代の経験と知見から「文章表現」と「口頭表現」に分けそれぞれ 2 単位必修科目となった。後者は、学長室専門委員として準備委員会に参加されていた横井勝彦先生のご発案を受け、当時博物館の副館長を務めさせていただいていた関係で、私が博物館学芸員の方々と協議しながら実現できた。しかし、「日本語表現」はこの度の初年次教育のカリキュラム改革に伴い「学術的文章の作成」などの新規科目に衣替えし、「文化資料学」も博物館学芸員の要望に基づき廃止された。また、開設とともに初年次必修科目として始まった「国際日本学講座」もこの度「国際日本学入門講義」などへと発展的に解消された。「国際日本学講座」の開講には「日本語表現」や「文化資料学」のように深く関わらなかったが、その後数年間担当させていただいたし、担当者のコーディネーターも何年か務めさせていただいた。学部開設から 10 年以上が経過し、学部の発展とともに役目を終える科目が出てくれることはやむを得ないことである。寂しさを感じないといえば嘘になるが、関わりの深い開設当初の科目が 3 つもなくなるということは、自分にとって今がちょうど引退の潮時ということなのだろう、と受け止めている。目下話題の Chat-GPT など生成 AI の問題にしても、自分にはとても適正に対応できそうにない。自分はちょうどいいときに退職を迎えることができたと思っている。

振り返ってみると、この 34 年間で最も忙しく最も充実していたのが準備委員会の時代だったように思う。意見を交換しながら仲間と新しいものを作り上げていくのは、苦勞も多かったが、何ととってもやりがいがあり楽しかった。充実感や喜びもあった。しかし、開設後は、私の思い描いた理想の実現は現実の前に少しずつ阻まれてゆき、「移籍しないほうが良かったのかな」という思いに何度か捉われた。一番堪えたのは、担当授業に学生がなかなか集まらないことだった。ゼミは応募者がいないことが何度かあったし、講義科目も人気ゼミよりも少ない履修者ということも珍しくなかった。国際日本学を標榜する学部なのだから、古い日本に関心のある学生もそれなりに来るかもしれないとの当ては見事に外れたわけである。

ただ、それでも研究科も含め少数ながら熱心な受講生、とりわけ留学生に出会えたのは幸せだった。人数が少ないだけに却って親密になるせいもあるが、今も連絡を取り合っているかつての留学生が何人かいる。なかには 10 年以上まえに私のゼミにやってきた交換留学生で、今では私の

ことを「日本のお父さん」、妻のことを「日本のお母さん」といってくれる「娘」もいる。子供のいない夫婦に「娘」ができたのだからこんな幸せなことはない。「娘」に出会えたのだから移籍して本当に良かったと思う。

また、国際日本学部に移籍し、「国際日本学講座」を担当させていただいたお陰で自分なりに「国際日本学」「国際日本学的視点」を強く意識するようになり、多少なりとも自分の研究の視野が広がり研究に幅ができたのではないかと思っている。研究者の端くれとしても嬉しいことで、感謝している。もっとも、残念ながら、学部の理念とは裏腹に、その成果を英語で発信することはこの先もできそうにないが。

明治大学、そして国際日本学部には長い間お世話になった。研究者としても教育者としても二流で貢献度の低い自分のような人間を定年まで見捨てないでくれたことに感謝しかない。ありがとうございました。

〈付記〉当初は論文か研究ノートのものを投稿するつもりだった。しかし、諸般の事情からそれは諦め、このような雑文を寄稿することにした。この機会を逃がすと、このような雑文を書く機会は二度とないだろうと思ったからでもある。



尾関直子教授・近影

尾関 直子 教授 履歴・業績

論文・著書

1. 2023/04 書評 海外新刊紹介 EAL Research for the Classroom: Practical and Pedagogical Implications 英語教育, 大修館 (単著)
2. 2022/10 書評 海外新刊紹介 Mobile Assisted Language Learning: Concepts, Contexts and Challenges 英語教育, 大修館 (単著)
3. 2022/04 書評 海外新刊紹介 Introduction to TESOL: Becoming a Language Teaching Professional 英語教育, 大修館 (単著)
4. 2021/12 論文 Integrating Complex Variables in the Measurement of L 2 Speech Production: Focusing on Complexity, Accuracy, Fluency, and Creativity 明治大学国際日本学研究 14(1),pp.27-40 (共著)
5. 2021/10 書評 海外新刊紹介 Introduction to TESOL: Becoming a Language 英語教育, 大修館 (単著)
6. 2021/04 書評 海外新刊紹介 Second Language Acquisition: An Introductory Course (5 th edition) 英語教育, 大修館 (単著)
7. 2020/10 論文 発信力の向上を目指した日本の英語教育 ELEC通信 (単著) Link
8. 2020/10 書評 教材・テスト作成のためのCEF-Jリソースブック 英語通信 22頁 (単著)
9. 2020/10 書評 海外新刊紹介 Language Learning Motivation: An Ethical Agenda for Research 英語教育, 大修館 (単著)
10. 2019/06 論文 「主体的・対話的で深い学び」を実現するメタ認知ストラテジー英語教育, 大修館 (単著)
11. 2019/10 書評 海外新刊紹介: Thinking Skills and Creativity in Second Language Education: Case Studies from International Perspectives 英語教育, 大修館 (単著)
12. 2018/08 論文 Expanding Interests: *Report on Plenary Panel PanSig Journal 2017* pp.234-239 (共著)
13. 2019/04 書評 海外新刊書紹介: Reflections on Task-Based Language Learning 英語教育, 大修館 (単著)
14. 2018/04 書評 海外新刊書紹介: Language Learner Autonomy 英語教育, 大修館 (単著)
15. 2018/03 著書 大学英語教育の担い手に関する総合的研究 大学英語教育学会 (共著)
16. 2018/02 論文 小・中・高等学校における学習評価を考える 英語情報 21(1), 4- 9 頁 (単著)
17. 2017/10 書評 海外新刊書紹介: Uncovering English-Medium Instruction: Global

- Issues in Higher Education 英語教育, 大修館 (単著)
18. 2017/04 書評 海外新刊書紹介: Introducing Second Language Acquisition (third edition) 英語教育, 大修館 (単著)
 19. 2017 論文 Expanding Interests: *Report on the Plenary Panel PANSIG Journal 2017* pp.234-239 (共著)
 20. 2016/10 書評 海外新刊書紹介: Capitalizing on Language Learners' Individuality: From Premise to Practice 英語教育, 大修館 (単著)
 21. 2016/04 書評 海外新刊書紹介: Introducing English for Academic Purposes 英語教育, 大修館 (単著)
 22. 2016/03 論文 Autonomous Communicators Who Live in the 21st Century *Bulletin of National Federation of the Prefectural English Teachers' Organizations* 65, pp.215-233 (単著)
 23. 2016/03 論文 JACETグローバル人材特別委員会 「外部試験大学実態調査班」グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み: 最終報告書 77-98頁 大学英語教育学会 (共著)
 24. 2016/03 論文 L2スピーチプロダクションの発達研究: ダイナミックシステムズ理論からのアプローチ 明治大学人文科学研究紀要 79, 1-28頁 (共著)
 25. 2016/02 論文 生徒のエラーとcorrective feedback (修正フィードバック) 英語情報 18(7), 16-17頁 (単著)
 26. 2015/12 論文 プロセスアプローチとポートフォリオ評価 英語情報 18(6), 16-17頁 (単著)
 27. 2015/10 論文 書くこととプロセスアプローチ 英語情報 18(5), 16-17頁 (単著)
 28. 2015/10 書評 海外新刊書紹介: Exploring Language Pedagogy through Second Language Acquisition Research 英語教育, 大修館 (単著)
 29. 2015/08 論文 話すこととパフォーマンス評価 英語情報 10(4), 16-17頁 (単著)
 30. 2015/06 論文 CAN-DOリストとタスクを取り入れた指導法 英語情報 18(3), 16-17頁 (単著)
 31. 2015/04 論文 新学習指導要領とCAN-DOリスト 英語情報 18(2), 18-19頁 (単著)
 32. 2015/04 書評 海外新刊書紹介: ESL (ELL) Literacy Instruction: A Guidebook to Theory and Practice (3rd Edition) 英語教育, 大修館 (単著)
 33. 2015/03 論文 第一斑「外部試験大学実態調査班」2014年中間報告 グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み 72-87頁 大学英語教育学会 (共著)
 34. 2014/10 書評 海外新刊書紹介: Principles of language Learning and Teaching: A Course in Second Language Acquisition (6th edition) 英語教育, 大修館 (単著)
 35. 2014/04 書評 海外新刊書紹介: Peer Interaction and Second Language Learning 英

- 語教育, 大修館 (単著)
36. 2013/10 書評 海外新刊書紹介: Language Teaching Research & Language Pedagogy 英語教育, 大修館 (単著)
 37. 2013/05 論文 CEFR-Jガイドブック 「CAN-DOリストの妥当性を検証する並び替え調査とは」 111-116, 「Spoken InteractionのCAN-DOの特徴とその指導方法は？」 204-211頁 (共著)
 38. 2013/04 書評 海外新刊書紹介: Applied Linguistics and Materials Development 英語教育, 大修館 (単著)
 39. 2013/03 論文 CAN-DOリストと自律した学習者 東北学院大学論集 (97),147-158頁 (単著)
 40. 2012/10 書評 海外新刊書紹介: Second Language Task Complexity: Researching the Cognition Hypothesis of Language Learning and Performance 英語教育, 大修館 (単著)
 41. 2012/08 論文 CEFR-J for English Language Teaching in Japan *The JACET International Convention Proceedings* pp.315-321 (共著)
 42. 2012/05 書評 海外新刊書紹介: Teaching and Researching Language Learning Strategies 英語教育, 大修館 (単著)
 43. 2012/01 著書 統合的英語科教育法 「自律学習論」 142-162、「英語学習と心理要因」 163-179頁 成美堂 (共著)
 44. 2011/08 論文 CEFR Concept of Learner Autonomy, Language Learning Strategies for Tertiary Education *The JACET International Convention Proceedings* pp.98-103 (共著)
 45. 2010/12 報告書 小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証 (平成20年度～平成23年度科学研究費補助金基盤研究A 中間報告書) 「CEFRの理念と学習者の自律」 64-70頁 (共著)
 46. 2010/10 著書 成長する英語学習者: 学習者要因と自律学習 「学習ストラテジーとメタ認知」 75-103頁 大修館 (共著)
 47. 2010/06 論文 「改訂版学習指導要領にもとづく英語科教育法」パラダイムシフトした英語教育のための英語科教育法 英語教育2011年6月号 (大修館書店) 94頁 (単著)
 48. 2010/04 著書 高等学校新学習指導要領の展開 「英語表現」 94-115, 「英会話」 157-163頁 明治図書出版 (共著)
 49. 2010/04 エッセイ 自律した学習者と強い個 雑誌明治46号, pp. 20-21 (単著)
 50. 2010/03 論文 自律した学習者を育てるセルフ・アクセス・センターを活用した英語教育モデルの構築 明治大学人文科学研究所紀要 67,155-176頁 (単著)
 51. 2009/01 論文 What Are L 2 Learners Thinking about While Performing a Speaking Task? *Proceedings of the Seventh Annual Hawaii International Conference on*

Education pp.2079-2081 (共著)

52. 2008/03 報告書 第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基盤研究(平成16年度?18年度科学研究費補助金基盤研究A 研究成果報告書)「韓国の英語教科書の特徴:質的研究」73-76,「中国・韓国・台湾・日本の英語教科書の特徴分析」103-104頁(単著)
53. 2008/03 論文 世界に発信する明治 大学英語教育学会関東支部2007年度研究年報 23-24頁(単著)
54. 2007/11 論文 Project Work Designed to Develop Learners' Metacognition, *Annual Review of English Learning and Teaching* (The JACET Kyushu-Okinawa Chapter) 12, pp.61-66 (単著)
55. 2007/03 著書 わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究:大学の外国語・英語教員一学生編 40-52頁(共著)
56. 2007/03 論文 Strategy Instruction for Developing Public Speaking Skills, *The Journal of Humanities, Meiji University* 13, pp.37-52 (単著)
57. 2006/06 報告書 第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基盤研究(平成16年度?18年度科学研究費補助金基盤研究A 中間報告書) "130-152, 244-246, 248-254, 417-444"頁(共著)
58. 2006/04 著書 英語教師のための学習ストラテジーハンドブック 大修館(共著)
59. 2006/02 論文 世界の外国語教育、日本の英語教育:中国の英語教育から見えてくるもの 英語教育2006年2月号(大修館) 23-25頁(単著)
60. 2005/08 論文 第二言語習得研究の現在-これからの外国語教育への視点(英語展望12月号 ELEC) (単著)
61. 2005/06 著書 言語学習と学習ストラテジー 大修館(共著)
62. 2005/03 論文 Triangulation in a Study of Listening Strategy Instruction, *Journal of Human Sciences of the Faculty of Business Administration* (Meiji University) (50.51), pp.9-27 (単著)
63. 2004/10 論文 学習ストラテジーを授業に!:学習ストラテジー指導は5段階アプローチで 英語教育2004年10月号(大修館書店)(単著)
64. 2004/01 論文 ストラテジー指導を取り入れたリスニング・スピーキングの授業 明治大学教養論集(381),71-92頁(単著)
65. 2003/09 著書 わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究:大学の外国語・英語教員個人編 大学英語教育学会(共著)
66. 2003/04 著書 応用言語学辞典 78,79頁 研究社(共著)
67. 2002/09 報告書 わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究:大学の外国語・英語教員個人編 大学英語教育学会(共著)

68. 2002/03 論文 Listening Strategy Instruction for Japanese Students, *Proceedings of the 29th JACET Summer Seminar*(JACET) pp.27-61 (単著)
69. 2000/12 著書 *Listening Strategy Instruction for Female EFL College Students in Japan* Macmillan (単著)
70. 2000/11 著書 SLA研究と外国語教育 36-44、100-108頁 (共著)
71. 1998/03 論文 Case Study: Leisure Time of Japanese Students of Indiana University of Pennsylvania 環太平洋研究創刊号 (名古屋経済大学環太平洋研究所) (1), pp.35-43 (単著)
72. 1997/12 論文 Examination of Group Work 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (61), pp.35-40 (単著)
73. 1996/09 論文 Learning Styles of Japanese Students, *On JALT '95: Curriculum and Evaluation*, pp.120-128 (単著)
74. 1996/09 論文 Reexamination of Krashen's Monitor Theory 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (59), pp.31-36 (単著)
75. 1996/06 論文 Roles of Learners and Teachers in Communicative Language Teaching 人文科学論集(名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (60), pp.23-27 (単著)
76. 1996/03 論文 Cultural Conflicts in International Marriages between Japanese and Americans 名古屋経済大学・市邨短期大学比較文化研究 (15), pp.09-43 (単著)
77. 1996/02 論文 Highly Apprehensive Second Language Writers 名古屋経済大学・市邨短期大学比較文化研究 pp.167-185 (単著)
78. 1996/02 論文 The Effects of Foreign Language Anxiety on Second Language Acquisition 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (57), pp.33-38 (単著)
79. 1996/09 論文 The Roles of Formulaic Language in Second Language Acquisition 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (58), pp.23-27 (単著)
80. 1993/02 論文 Video Materials in Interactive Language Teaching 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (51), pp.75-89 (単著)
81. 1992/09 論文 Individual Variables in Second/Foreign Language Learning (1): Intelligence and Aptitude, Cognitive Style, Motivation, and Personality 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (50), pp.45-61 (単著)
82. 1990/09 論文 Second Language Acquisition Theory on Creative Construction and Its Implication in a Japanese University English Classroom 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (46), pp.31-64 (単著)
83. 1989/09 論文 The Teaching of the Cultural Component in EFL Programs at Colleges and Universities in Japan Today: A Comprehensive Review of Literary Texts, Reading Texts, Conversation Texts, and Videotaped Materials 人文科学論集 (名古屋経済

大学・市邨短期大学紀要) (44), pp.55-64、75-84(担当部分) (共著)

84. 1989/03 論文 The Present Status of the Teaching of American Culture in English Courses at the College and University Level in Japan: A Survey 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (43), pp.97-152 (共著)
85. 1988/09 論文 Developing Communicative Competence through Videotaped Materials 人文科学論集 (名古屋経済大学・市邨短期大学紀要) (42), pp.37-49 (単著)

(その他 5件)

学会発表・講演

1. 2022/08/20 Integrating Complex Variables in the Measurement of L 2 Speech Production: Focusing on Complexity, Accuracy, Fluency, and Creativity (The 26th PAAL International Online Conference)
2. 2021/08/29 AILA East Asia Symposium: The Role of Languages in the Internationalization of Higher Education (JACET 60周年記念国際大会 特別シンポジウム)
3. 2020/12/20 新学習指導要領と学習者の自律 (2020英語授業改革「本気で授業改革」)
4. 2019/08/29 英語 4 技能を考えるー現在と未来 (The 58th JACET International Convention)
5. 2018/07/30 新学習指導要領を見据えた外国語の指導方法や授業づくり～指導改善につながる『学習評価のあり方』～ (豊中市教育委員会:授業力向上研修 中学校外国語活動研修)
6. 2018/07/05 CAN-DOリストの活用とパフォーマンス 評価について (高知県教育課程研究協議会)
7. 2018/06/28 The Status Quo of Tertiary Level English Teachers in Japan (The 16th Asia TEFL International Conference)
8. 2018/05/05 第二言語習得からの提言: 日本の英語教育に欠けているもの (英語教育コンフェランス)
9. 2017/09/18 CAN-DOリストとパフォーマンス評価 (広島県教育委員会 指導力向上研修)
10. 2017/08/30 英語教育NOW:第4次実態調査委員会プログレスレポート (JACET国際大会)
11. 2017/08/09 Task-Based Instruction and Performance Evaluation (山梨県教育委員会 山梨県教員研修)
12. 2017/07/01 ダイナミック・システム理論から見たスピーチ・プロダクションの発達研究 (JACET北海道支部大会)
13. 2017/07/01 外部検定試験活用の展望と大学英語教育: 明治大学の場合 (JACET北海道支部大会)
14. 2017/06/17 4技能入試と明治大学 (グローバル人材養成教育学会関東支部大会)
15. 2017/05/20 National Trends in Language Education (2017JALT PanSIG Conference)
16. 2017/02/12 CAN-DO リストに基づいた指導とパフォーマンス評価 (東京) (British

- Council CAN-DOセミナー)
17. 2017/01/29 CAN-DO リストに基づいた指導とパフォーマンス評価 (大阪) (British Council Can doセミナー)
 18. 2016/12/05 CAN-DOリストと言語活動 (福島県教育委員会 英語指導力向上事業に係る「CAN-DOリスト指導評価改善研修」)
 19. 2016/08/25 CAN-DO List and Performance Evaluation (滋賀県教育委員会平成28年度英語科主任指導力向上研修)
 20. 2016/08/21 中高の英語教育はグローバル人材を育てるか (GC&T主催セミナー 英語教育改革を考える)
 21. 2016/08/12 Designing English Lessons (山梨県教育委員会 山梨県教員研修)
 22. 2016/07/29 自律した学習者を育てる英語の授業～CAN-DOリストを踏まえた 授業～ (高知県教員研修)
 23. 2016/07/08 Study of L 2 Speech Production from a Dynamic Systems Approach (KATE2016 International Conference)
 24. 2016/06/22 タスク活動とパフォーマンス評価 (埼玉県入間地区中高教育連絡協議会総会)
 25. 2016/06/14 CAN-DOリストを基とした授業改善 (福島県教育委員会 英語指導力向上事業に係る「CAN-DOリスト指導評価改善研修」)
 26. 2015/12/26 グローバル人材を育成する新しい英語の授業とは (東京セミナー (日本英語検定協会))
 27. 2015/12/03 タスクを取り入れた授業とパフォーマンス評価 (福島県教育委員会 英語指導力向上事業に係る「CAN-DOリスト指導評価改善研修」)
 28. 2015/11/29 ダイナミック・システム・アプローチからみたスピーチプロダクションの発達 (JACET東北支部例会)
 29. 2015/11/20 21世紀を生きる自律した英語コミュニケーター (第65回 全国英語教育研究大会 (全英連大分大会))
 30. 2015/11/09 多様な学習成果の評価手法に関する調査研究 (愛知県教育センター)
 31. 2015/09/10 CAN-DOリストとタスク活動 (先進的英語教育充実支援事業 (宮城県))
 32. 2015/09/01 グローバル人材育成のための大学英語教育の 取り組みーグローバル人材育成特別委員会の 調査結果よりー (大学英語教育学会 第54回 (2015年度) 国際大会)
 33. 2015/08/05 Designing English Classes (山梨県教育委員会 山梨県教員研修)
 34. 2015/07/23 Task-Based Instruction and Performance Evaluation (京都市教育委員会夏季教員研修)
 35. 2015/06/11 CAN-DOリストを基にした授業改善 (福島県教育委員会 英語指導力向上事業に係る「CAN-DOリスト指導評価改善研修」)
 36. 2015/02/04 Task-Based Instruction and Performance Evaluation (三河地区第3回授業力

- 向上研修)
37. 2015/01/27 タスクを取り入れた指導とパフォーマンス評価 (第3回尾張地区授業力向上研修)
 38. 2014/09/11 CAN-DOリストと授業設計 (新潟県教育委員会 初任者研修)
 39. 2014/08/30 外部検定試験を利用した大学教育における質保証 (第53回大学英語教育学会国際大会)
 40. 2014/08/30 正規留学とインターンシップで年間100人以上送り出し 一明治大学国際日本学部の留学生派遣一 (第53回大学英語教育学会国際大会ポスターセッション)
 41. 2014/08/26 4技能の育成を目指す授業づくり (静岡県教育委員会)
 42. 2014/08/20 「CAN-DOリスト」の形式による学習到達目標の設定 (静岡県教育委員会 教員研修会)
 43. 2014/08/08 Designing English Classes (山梨県教育委員会 山梨県教員研修)
 44. 2014/08/04 Designing English Expression Classes (奈良県教育委員会平成26年度「英語表現」研修会)
 45. 2014/07/31 「学習評価とCAN-DOリストの形での学習到達目標設定について (京都市教育委員会 英語教科指導講座)
 46. 2014/03/16 Developing the Four Skills in English Communication Classes (「これからの日本の英語教育がめざすもの」公益財団法人 日本英語検定協会主催)
 47. 2014/01/29 English Expressions and Task-Based Instruction (「三河地区第3回授業づくりワークショップ」)
 48. 2014/01/28 English Expressions and the Task-Based Instruction (「尾張地区第3回授業づくりワークショップ」)
 49. 2013/11/19 Course of Study and CAN-DO List (平成25年度静岡県英語研究会)
 50. 2013/10/28 CAN-DOリストの運用と評価 (鳥取県教育委員会 4技能を統合的に活用するコミュニケーション能力の育成: CAN-DOリストを活用した授業づくり)
 51. 2013/09/19 CAN-DOリストとタスク活動 (宮城県教育委員会 CAN-DOリスト研修会第2回)
 52. 2013/08/07 タスク活動を取り入れた単元設計 (山梨県教育委員会 山梨県教員研修)
 53. 2013/07/13 CEFRの理念とCAN-DOリストの作成 (鳥取県教育委員会 4技能を統合的に活用するコミュニケーション能力の育成: CAN-DOリストを活用した授業づくり)
 54. 2013/07/04 Teaching English based on the New Course of Study (高知県教育委員会 教育課程研究協議会)
 55. 2013/06/20 CEFRとCAN-DOリスト (宮城県教育委員会 CAN-DOリスト研修会第1回)
 56. 2013/01/28 CAN-DOリスト: 理念・作成・運営 (登別明日中等教育学校)
 57. 2013/01/10 English Teaching Based on the New Course of Study (東京都教育委員会平成

24年度外国語指導助手の指導力向上研修会)

58. 2012/12/26 新しい英語教育と授業指導 (日本英語検定協会新学習指導要領をふまえた授業の創造)
59. 2012/12/04 Integration of the Four Skills and TBI (岐阜県教育委員会グローバル・コミュニケーション能力育成支援事業)
60. 2012/12/01 『英語をみにつけるといふこと』 自律学習と学習ストラテジー (東北学院大学平成24年度文学部英文学科公開講義)
61. 2012/11/30 Applying what you have learned into the creation of a CAN-DO list (英語教員海外派遣事後研修会 (独立行政法人教員研修センター))
62. 2012/11/19 「英語表現I」「英語表現II」の指導の在り方 (文部科学省初等中等教育局高等学校各教科等教育課程研究協議会外国語科部会)
63. 2012/10/31 英語表現の指導の仕方 (平成24年度高等学校各教科教育課程研究協議会 (文部科学省))
64. 2012/10/05 CAN-DOリスト作成ワークショップ (北海道教育委員会北海道レイター養成研修会)
65. 2012/09/01 Establishing the Validity of CEFR-J (JACET Convention 2012: The 51st International Convention)
66. 2012/08/25 新学習指導要領が求める英語授業 (京都産業大学英語教育研究会)
67. 2012/08/08 Introduction to Task-Based Instruction (Yamanashi Prefectural Education Center)
68. 2012/06/06 CAN-DOリスト作成について (文部科学省事業「英語力を強化する指導改善の取組」知多市勤労文化会館)
69. 2012/06/01 CAN-DOリスト作成について (文部科学省事業「英語力を強化する指導改善の取組」刈谷市総合文化センター)
70. 2012/03/10 スポークン・インタラクション(Bレベル) (新しい英語能力到達度指標CEFR-J 公開シンポジウム)
71. 2012/03/10 スポークン・インタラクション (Aレベル) (新しい英語能力到達度指標CEFR-J 公開シンポジウム)
72. 2012/03/09 Sorting Exercise by EFL Teachers (CEFR-J Conference)
73. 2011/12/02 CEFRと学習指導要領 (教育研究開発事業研究発表会)
74. 2011/11/06 アジアで教える日本語・英語—学習者の多様性に迫る
自律した学習者を育てる (アジアで第2言語を学び教える研究集会 (北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院))
75. 2011/08/31 Language Learning Strategies for Tertiary Education (The JACET 50th (2011) Commemorative International Convention)

76. 2011/08/08 Task-Based Instruction: Theory and Practice (Yamanashi Prefectural Education Center)
77. 2010/08/09 Introducing Task-Based Instruction (Yamanashi Prefectural Education Center)
78. 2010/03/15 フィンランドの教育理念とCEFR (投野科研中間発表会)
79. 2009/11/14 The Effects of Psychological Factors on L 2 Speech Performance ("The English Teachers' Association of the Republic China (ETA-ROC), Taipei, Taiwan")
80. 2009/09/10 自律した学習者を育てる英語指導 (鳥取県教育委員会基調講演)
81. 2009/09/05 Psychological effects on L 2 learners' speech production (JACET International Conference)
82. 2009/05/23 自律学習とタスク活動 (2009年LET中部大会基調講演)
83. 2009/01 What are L 2 learners thinking about while performing a speaking task? ("The 7th Annual Hawaii International Conference on Education, Hawaii, U.S.")
84. 2008/08 タスク活動と学習ストラテジー (山梨県教育委員会主催英語教員研修講演)
85. 2008/07 Recent Trend in English Education: Fostering Autonomous Learners (千葉県教育委員会主催千葉県ブラッシュアップ講座基調講演)
86. 2008/03 分科会SELHi実践事例の司会およびコメンテータ (文部科学省主催「英語が使える日本人」の育成のためのフォーラム2008)
87. 2007/11 Recent Trend in English Education in Japan: Integrated Learning Strategy Instruction (福島教育委員会主催平成19年度外国語助手中間期研修基調講演)
88. 2007/09 学生を対象としたアンケート調査からみた大学英語教育の実態とその示唆 (第46回大学英語教育学会全国大会にて口頭発表) (第46回大学英語教育学会全国大会)
89. 2007/08 中学・高校における学習ストラテジー指導 (鹿児島県英語教員研修基調講演)
90. 2007/08 小学校における学習ストラテジー指導 (鹿児島市教育委員会主催教員研修基調講演)
91. 2007/07 Project Work to Develop Learners' Metacognition, In search of good practice: Learning strategies and learning tasks in EFL/ESL (The 21st JACET Kyusyu/Okinawa Chapter)
92. 2007/06 A Comparative Study on the Senior High School English Language Textbooks in East Asia ("The 5th Asia TEFL International Conference, Kuala Lumpur, Malaysia")
93. 2007/06 大学英語カリキュラムの現状と未来: 異なる教育組織からの展望 (大学英語教育学会関東支部第2回大会)
94. 2006/09 学生アンケートに調査に見られる大学英語教育の実態と今後 (第45回大学英語教育学会全国大会)
95. 2006/08 A Comparative Study on the Junior High School English Language Textbooks in

- East Asia (The 4th Asia TEFL International Conference)
96. 2006/06 COE/GPアンケート報告 (小池科研中間報告会)
 97. 2004/09 メタ認知重視の学習ストラテジー指導 (第43回大学英語教育学会全国大会)
 98. 2003/11 Developing Speaking Skills through Learning Strategy Instruction in the Japanese University Class ("The 1st Asia TEFL International Conference, Busan, Korea")
 99. 2003/09 学習ストラテジー・トレーニングを取り入れた英語教育を考える (第42回大学英語教育学会全国大会)
 100. 2002/09 大学英語教育の変化-大学の英語教育は変化したか (第41回大学英語教育学会全国大会)
 101. 2001/08 Listening Strategy Instruction for Female EFL College Students in Japan (JACET summer seminar)
 102. 2000/11 Listening Strategies of Japanese University Students (The 39th JACET Conference)
 103. 1997/09 Learner-Centered Curriculum for Cross-Cultural Communication (The 36th JACET Conference)
 104. 1997/06 ライティングと誤文指導 (大学英語教育学会中部支部大会)
 105. Recipes for Teaching Culture (Nagoya International Book Fair)
 106. 1996/09 Recipes for Teaching Culture (全国語学教育学会札幌大会)
 107. 1995/11 Learning Styles of Japanese Students (JALT '95)
 108. 1994/11 Highly Apprehensive ESL Writers ("Burn the Canon at Both Ends-Graduate Student Conference at Indiana University of Pennsylvania, Pennsylvania, U.S.")
 109. 1994/11 Kamishibai for Cross-Cultural Communication ("Three Rivers TESOL Conference, Pennsylvania")
 110. 1993/10 Helping Students to Talk about Culture (Tokyo International Book Fair)
 111. 1993/10 Helping Students to Talk about Culture (JALT93)
 112. 1993/10 グループワークの効用 (愛知県立大学公開講座)
 113. 1993/02 Teaching Culture (YMCA語学教育研究所研究会)
 114. 1990/11 The Present Status of the Teaching of American Culture (JALT90)

■ 学歴

1. 1990/07 ~ 2000/05 インディアナ・ユニバーシティ・オブ・ペンシルベニア 英語学部 修辞学及び言語学 博士課程修了 Ph.D in Rhetoric and Linguistics
2. 1984/09 ~ 1986/05 セント・マイケルズ・カレッジ 文芸・言語研究科 第2言語としての英語教授法 修士課程修了 MA in TESL

3. 1972/04～1976/03 慶應義塾大学 文学部 英米文学専攻 卒業 文学学士

■ 職歴

1. 2008/04 明治大学 国際日本学部 教授
2. 2004/04～2008/03 明治大学 経営学部 教授
3. 2003/04～2004/03 明治大学 経営学部 助教授

■ 学内役職・委員

1. 2020/04/01～2024/03/31 明治大学 理事
2. 2018/04/01～2020/03/31 明治大学 国際日本学部教務主任
3. 2014/04/01～2016/03/31 明治大学 大学院国際日本学研究科長
4. 2012/04/01～2014/03/31 明治大学 大学院国際日本学研究科国際日本学専攻主任
5. 2012/04/01～2014/03/31 明治大学 国際日本学部国際日本学科長
6. 2010/04/01～2012/03/31 明治大学 国際日本学部教務主任
7. 2008/04/01～2010/03/01 明治大学 国際日本学部国際日本学科長

■ 所属学会

大学英語教育学会

2015/06～2022/05 副会長

2010/06～2015/05 理事

2010/06～2021/05 代表幹事

2006/06～2010/05 副代表幹事

■ 研究課題・受託研究・科研費

1. 2018～2021 スピーキング力発達に寄与する外的・内的要因の研究 科研基盤研究C 研究責任者
2. 2014/04～2017/03 CALPの育成を意識したCAN-DOストラテジーリストの策定と実践 科研基盤研究 (C) 研究責任者
3. 2010/04～2013/03 外国語学習者のためのスピーチプロダクションモデルの開発と応用 科研基盤研究 (C) 研究責任者
4. 2008/04～2012/03 小・中・高・大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証 科研基盤研究 (A) 研究分担者
5. 2007/04～2010/03 発信力を高めるスピーキング授業モデルの構築 科研基盤研究 (C) 研究責任者
6. 2004/04～2007/03 スピーキングの授業における学習ストラテジー指導モデルの構築 科研挑戦的萌芽研究 研究責任者
7. 2004/04～2008/03 第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的研究 科研基盤研究 (A) 研究分担者
8. 2005～2007 日本の大学英語教育に関する実態調査－学生の意識 国内共同研究 (キーワー

ド：英語教育,授業,教授)

9. 2012/04～2014/04 L2スピーチプロダクションの発達研究：ダイナミックシステムズ理論からのアプローチ 学内人文研究
10. 2007/04～2009/03 自律した学習者を育てるセルフ・アクセス・センターを利用した英語教育モデルの構築 学内人文研究

■ 委員会・協会等

1. 2023/04/01～現在 教科用図書検定調査審議会 委員
2. 2023 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
3. 2022 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
4. 2021/04/01～2022/03/31 教科用図書検定調査審議会専門委員会 委員
5. 2021 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
6. 2020 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
7. 2019 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
8. 2018 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
9. 2017/04/01～2018/03/31 平成29年度英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会委員
10. 2017 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
11. 2016 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
12. 2015 ELEC(The English Language Education Council) 英語教育賞審査委員
13. 2015 大学機関別認証評価委員会専門委員 専門委員
14. 2014～2017 仙台二華高等学校 スーパーグローバルハイスクール運営指導委員会 運営委員
15. 2014～2018 文部科学省 英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会 委員
16. 2013/12/22～2014/11/20 日本学術振興会科学研究費委員会 専門委員
17. 2013/12～2016/03 愛知県教育委員会「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」委員
18. 2012/08～2015 文部科学省外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定委員会 委員
19. 2011/03～2012/03 文部科学省日本人若手英語教員米国派遣に係る業務委託選定委員会 委員
20. 2010/12/22～2011/11/30 日本学術振興会科学研究費委員会 専門委員
21. 2010/01～2010/03 英語教員の海外派遣に関する研修プログラム作成委員会（独立行政法人教員研修センター）委員
22. 2009/03～2010/03 文部科学省初等中等教育局 英語教育改善のための調査研究 委員
23. 2007/09～2010/03 文部科学省初等中等教育局 学習指導要領改善等に関する調査研究 協力

者

24. 2006/04 ~ 2007/03 国立教育政策研究所 高等学校における教育課程実施調査結果分析 協力者
25. 2006/04 ~ 2009/03 文部科学省初等中等教育局 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの研究開発に関する企画評価会議 協力者
26. 2005/04 ~ 2006/03 国立教育政策研究所 高卒認定問題審査委員

所 感

尾関直子

20年間、明治大学で教鞭をとることができて、幸運な人間だとつくづく感じています。良い仲間（先生方）、真面目な学生、そして優秀な職員の方に支えられて、楽しく、そして愉快に過ごすことができました。ありがとうございました。



横田雅弘教授・近影

横田 雅弘 教授 履歴・業績

目次

1 学歴・学位・職歴

2 研究活動

- (1) 著書・編著書
- (2) 学術論文等
 - <主な学術論文—査読あり>
 - <主な学術論文—査読なし>
- (3) その他の研究業績
 - <研究助成による研究成果報告書等>
- (4) 所属学会等・役職
 - <学会等の活動>
- (5) 社会活動・省庁／大学等委員会活動

3 教育歴

- (1) 一橋大学での常勤授業 (学部、大学院)
- (2) 明治大学での常勤授業 (学部、大学院)
- (3) 非常勤授業

1 学歴・学位・職歴

<学歴>

- 1977年 3月 上智大学文学部 (心理学専攻) 卒業
- 1984年 6月 ハーバード大学教育学部大学院修士課程修了
(Master of Education : Counseling and Consulting Psychology Program)
- 2008年 2月 東京学芸大学 学術博士 (教育)

<学位>

- 2008年 2月 教育学博士 東京学芸大学

<職歴等>

- 1977年 4月 ポリドールレコード株式会社
- 1981年 8月 日本チェンジ・エージェント
- 1987年 4月 一橋大学商学部専任講師
- 1992年 4月 一橋大学商学部専任助教授
- 1996年 10月 一橋大学留学生センター専任助教授

1999年 4月 一橋大学留学生センター専任教授

2008年 4月 明治大学国際日本学部専任教授

2 研究活動

(1) 著書・編著書

1. 『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック～トラブルから学ぶ異文化理解』、(株)アルク、1-179、1992.5、(共著: 大橋敏子、近藤祐一、秦喜美恵、堀江学).
2. 『アメリカ留生活体験ブック』、(株)アルク、1-140、1997.7、(共著: Ann Helm、堀江学、近藤祐一、Kay A. Thomas)
3. 『留学生アドバイザーング ～学習・生活・心理をいかに支援するか～』、ナカニシヤ出版、1-360、2004.12、(共著: 白土悟).
4. 『日本関連フェロシップ・プログラム調査』第1章・第2章、国際交流基金、9-60、2004.(共著: 太田浩、中本進一)
5. 『学生まちづくりの奇跡』、(株)学文社、1-266、2012.1、(共監修・著: 林大樹).
6. 『多文化社会の偏見・差別～形成のメカニズムと低減のための教育～』、異文化間教育学会企画、明石書店、1-225、2012、(共編著: 加賀美常美代、坪井健、工藤和宏).
7. 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』、学文社、1-206、2013.10、(共編著: 小林明).
8. 『異文化間教育のフロンティア』異文化間教育学大系4、佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健編著、明石書店、1-227、2016.6.
9. 『ヒューマンライブラリー～多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究～』、坪井健・横田雅弘・工藤和宏編著、明石書店、2018.2.
10. 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト～大規模調査による留学の効果測定～』横田雅弘・太田浩・新見有紀子編著、1-291、学文社、2018.3.
11. 『異文化間教育事典』異文化間教育学会編 (共編著) 明石書店、2022.6.

(2) 学術論文等

<主な学術論文一査読あり>

1. 「日本人からの援助に対する留学生の否定的反応の分析」、『一橋論叢』、100巻5号、45-63、日本評論社、1988.
2. 「激増する留学生と国際交流アドバイザーの必要性」、学生相談学会編、『学生相談研究』、11巻2号、77-84、1990.
3. 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、5号、81-97、アカデミア出版会、1991.
4. 「留学生との出会いを阻む要因 ～構造的視点から～」、『京都大学学生懇話室紀要』、21巻、119-127、1991.

5. 「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」、『一橋論叢』、105巻5号、57-75、日本評論社、1991.
6. 「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク ～居住形態による比較～」、学生相談学会編、『学生相談研究』、13巻1号、1- 8、1992. (共著：田中共子)
7. 「在日留学生の居住形態とストレス」、学生相談学会編、『学生相談研究』、13巻2号 51-59、1992. (共著：田中共子)
8. 「大学は留学生の受け入れをどう捉えるべきか」、『一橋論叢』、109巻5号、51-73、1993.
9. 「留学生受け入れが促す大学教育と社会教育の接近～国立市における地域国際化の実践から～」、『一橋論叢』、114巻4号、116-136、1995. (共著：文孝淑)
10. 「留学生教育交流と異文化間教育学 ～回顧と展望～」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、10号、44-58、1996.
11. 「青年期における留学のインパクト ～日本人高校生と大学生の留学経験～」、多文化間精神医学会編、『文化とこころー多文化間精神医学研究』、2(1)、相川書房、12-16、1997.
12. 「留学生相談の10年」、『一橋大学留学生センター紀要』、創刊号、17-31、1998.
13. 「留学生支援システムの最前線」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、13号、4-18、1999.
14. 「新宿・庄内・川崎における多文化共生の実践に学ぶもの」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、15号、141-146、2001.
15. 「韓国における日本留学フェアの来談者状況の分析 ～中国 (1999) での質問紙調査との比較から～」、『一橋大学留学生センター紀要』、4号、127-139、2001.
16. 「大学における留学生支援システムについて」、『奈良教育大学人権教育研究紀要』、9号、21-43、2002.
17. 「メディアのもたらす摩擦と誤解」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、18号、68-80、2003.
18. 「大学・商店主・市民・行政が取り組むまちづくりと商店街の活性化」、中小商工業研究、81号、29-34、2004.
19. 「高度国際人材育成政策としての留学生政策～世界の留学潮流と日本のこれから～」、『桜美林高等教育研究』第3号、桜美林大学高等教育研究所、19-33、2011.
20. 「異文化間での相互理解を育むための二つのアプローチ」、『日本語学』、vol.31- 8、明治書院、46-59、2012.
21. 「日本の多文化社会における文化際的多様性～地域の現場経験から学んだことは何だったのか～」異文化間教育学会編、『異文化間教育』、44号、1-17、2016.
22. 「ヒューマンライブラリーという図書館～新しい図書館のかたち～」、『情報の科学と技術』68巻1号、19-24、2018.
23. 「留学の意思決定と人生における意味～大規模アンケート調査による分析～」異文化間教育学会編、『異文化間教育』48号、1-17、2018.

24. 「異文化間教育とダイバーシティ：理論と実践をつなぐ」 異文化間教育学会編、『異文化間教育』51号、71-84、2020.

<主な学術論文一査読なし>

1. 「留学生と日本人学生の友人関係」、『青年心理』84、130-133、1990.
2. 「留学生と日本人学生の交流について」、(財)日本国際教育協会編、『留学交流』、3巻2号、ぎょうせい、8-11、1991.
3. 「在日留学生への異文化オリエンテーション・プログラム」、渡辺文夫編、『現代のエスプリ 特集: 国際化と異文化教育』、299、至文堂、109-117、1992.
4. 「なぜ留学生と日本人学生の交流を推進するのか」、(財)日本国際教育協会編、『留学交流』、5巻5号、ぎょうせい、2-5、1993.
5. 「異文化間の友人関係 ～留学生と日本人学生はどのように親しくなるのか～」、渡辺文夫編、『現代のエスプリ 特集: 異文化間コンフリクト・マネジメント』、308号、至文堂、90-98、1993.
6. 「ノーマリゼーションの理念と地域の国際化」、『現代のエスプリ 特集: 異文化接触と日本人』、322号、横田雅弘・堀江学編、至文堂、84-93、1994.
7. 「外国人留学生の適応」、松原達哉編、『メンタルヘルスガイド』、教育出版、200-210、1994.
8. 「日常における異文化接触」、渡辺文夫編、『異文化接触の心理学 ～その現状と理論～』、川島書店、3-12、1995.
9. 「留学生の受入れが大学と地域を変える」、(財)日本国際教育協会編、『留学交流』、7巻5号、ぎょうせい、28-30、1995.
10. 「大学・自治体・市民の協力による国際交流ネットワークの構築 ～国立市の事例から～」、(財)日本国際教育協会編、『留学交流』、7巻8号、ぎょうせい、7-9、1995.
11. 「日常の異文化接触を生かす地域のあり方 ～大学と地域の留学生受け入れを通して～」、鎌田修・山内博之編、『日本語教育・異文化間コミュニケーション～教室・ホームステイ・地域を結ぶもの』、(財)北海道国際交流センター、凡人社、173-190、1996.
12. 「留学生担当者の育成はどうあるべきか」、(財)日本国際教育協会編、『留学交流』、9巻6号ぎょうせい、2-5、1997.
13. 「在住外国人との関わりから考える地域・個人の『国際化』」、国際交流基金・(財)大阪国際交流センター編、『実践国際交流』、109-114、1997.
14. 「外国人留学生の受け入れ」、異文化コミュニケーション・ハンドブック編集委員会編、『異文化コミュニケーション・ハンドブック』、有斐閣、160-164、1997.
15. 「外国人留学生の適応と教育」、江淵一公編、『異文化間教育研究入門』、玉川大学出版部、67-84、1997.
16. 「大学生の国際交流意識とその醸成過程 ～異文化間教育の視点から見た学生国際交流サー

- クルの実践活動～」、江淵一公編著、『トランスカルチュラルリズムの研究 (江淵一公教授退官記念論文集)』、明石書店、405-447、1998.
17. 「留学生と日本人学生の異文化間教育」、『現代のエスプリ 特集: 多文化時代のカウンセリング』、377号、井上孝代編、至文堂、109-118、1998.
 18. 「留学生と地域社会」、『ジョイン』、31号、文教大学、44-47、1999.
 19. 「地域とよい協力関係を結ぶために～大学が地域と交流することの意味を問うことから～」、(財)日本国際教育協会編、『留学交流』、第11巻2号、ぎょうせい、2-5、1999.
 20. 「留学生受け入れの現状と意義」、『転換点に立つ留学交流～諸機関の連携をめざして～ JAFSA創立30周年記念 第17回夏期研究集会報告書』、JAFSA (外国人留学生問題研究会)、30-38、1999.
 21. 「世界・日本・一橋大学の留学生」、『留学生理解のための基礎講座』、一橋大学留学生センター、1-18、1999.
 22. 『国立地域のボランティアによる留学生支援活動 ～その歴史的展開と意義～』、一橋大学留学生センター教育研究シリーズ5、137、2001.
 23. 「留学生問題の現状と将来を考える」、『桜門春秋』、89号、日本大学、10-16、2001.
 24. 「心理学部」、『月刊日本語』、2002年10月号、(株)アルク、18-19、2002.
 25. 「フルブライト・プログラムに学ぶ～日本と米国の留学生制度の評価をめぐって～」、賀来景英・平野健一郎編、『21世紀の国際知的交流と日本』、287-320、2002、(共著: 白土悟、坪井健)
 26. 『学校教育辞典』、事項執筆(「日本語教育」「外国人日本語能力試験」「留学」「国際教育交流」「外国人留学生」)、教育出版、2003.
 27. 「日本の国際教育交流とJAFSAの役割」、『桜門春秋』、98号、日本大学、47-55、2004.
 28. 「シンガポール 米の有名大学続々上陸/学費無料、奨学金も支給」「香港 英教師が本国並み授業」、「問われる育成の成果」、『21世紀の留学生戦略』、朝日新聞朝刊、2005.2.28、2005.3.3. 朝日新聞アジアネットワーク、2005.
 29. 『カウンセリング基本図書ガイドブック』、分担執筆第1,13,18,26,28,47項担当、ブレーン出版、2005.
 30. 「アジア諸国における国際教育交流の動向」、(独)日本学生支援機構編、『留学交流』、17巻9号、ぎょうせい、20-23、2005.
 31. 「生活実践から学ぶ『授業』」、五味政信・松岡弘編著、『開かれた日本語教育の扉』、スリーエーネットワーク、222-236、2005.
 32. 「世界の留学事情と岐路に立つ日本の留学生受け入れ」、(独)日本学生支援機構編、『留学交流』、18巻10号、ぎょうせい、2-5、2006.
 33. 「岐路に立つ留学生政策とJAFSAの役割」、『IDE 現代の高等教育』、No.494、9-12、2007.10.
 34. 「三〇万人計画が実現する条件～中教審留学生特別委員会での議論を通して～」『留学交流』、

- 20巻8号、時評社、6-9、2008.8
35. 「留学生三〇万人計画実現のために何が必要か」『外交フォーラム』243号、都市出版、26-29、2008.10
 36. 「国際化の質が問われる留学生30万人計画」、2010年版『大学ランキング』外国人留学生ランキング、朝日新聞出版、p144、2009.
 37. 「留学生アドバイジングは日本語教育にいかに関与できるか」、西原鈴子編著、シリーズ朝倉<言語の可能性> 8『言語と社会・教育』、朝倉書店、30-48、2010.
 38. 「留学生30万人計画と大学の戦略」、竹内宏・末廣昭・藤村博之編、『人材獲得競争』、学生社、54-74、2010.
 39. 「『多文化社会を担う人づくり』に至る道程とその意味」(異文化間教育学会創立30周年記念4学会連携シンポジウムに寄せて)、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、36号、1-18、2012.
 40. 「学生交流の国際的動向」、『IDE 現代の高等教育』、No.540、17-21、2012.
 41. 「『ヒューマンライブラリー』という『図書館』」、『図書の譜 明治大学図書館紀要』、第17号、明治大学図書館、147-152、2013.
 42. 「留学生獲得のための入試広報戦略～オールジャパンと個々の大学の戦略～」ウェブマガジン『留学交流』vol.33、1-10、2013.
 43. 「国際交流プログラムと学生の国際志向性」、『IDE 現代の高等教育』、No.558、17-21、2014.
 44. 「教室性はいかに解体されたか～異文化間教育学からのコメント～」、渡部淳+獲得型教育研究会編『教育におけるドラマ技法の探求～「学びの大系化」にむけて～』、明石書店、97-108、2014.
 45. 「留学生政策の現在と未来」『なぜ今、移民問題か』別冊環⑩、藤原書店、133-137、2014.
 46. 「海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト」、『TASC MONTHLY』、No.525、公益財団法人たばこ総合研究センター、6-12、2019.

(3) その他の研究業績

<研究助成による研究成果報告書等>

1. 『日本人高校留学生の送り出しと受け入れのダイナミック・オリエンテーション・トレーニング・プログラムの開発』、平成5年度、平成6年度、平成7年度、国際交流基金日米センター助成研究報告書、1-75 およびマニュアル1-285、助成対象者 JAFSA (外国人留学生問題研究会)、研究代表者：横田雅弘 (他日本2名、米国2名)、1995.
2. 『国立地域のボランティアによる留学生支援活動 ～その歴史的展開と意義～』、一橋大学留学生センター教育研究シリーズ5、137、2001.
3. 『国際協力における知のコラボレーションを目指して』JICA・JAFSA研究プロジェクト報告書、1-38、JAFSA側代表者：横田雅弘、JICA側代表者：加藤宏、2003.

4. 『日本人フルブライトターの留学評価に関する研究 ～日本の留学生制度が学ぶもの～』、日米フルブライト交流計画50周年記念事業実行委員会、1-39、研究代表者：横田雅弘(他4名)、2003.
5. 『アジア太平洋諸国の留学生受け入れ政策と中国の動向』、平成15、16、17年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)、「日米豪の留学交流戦略の実態分析と中国の動向 ～来るべき日本の留学交流戦略の構築～」平成15、16年度中間報告書、1-360、研究課題番号15330177、研究代表者 横田雅弘(他3名)、2005.
6. 『岐路に立つ日本の大学～全国四年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告～』、平成15、16、17年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)、「日米豪の留学交流戦略の実態分析と中国の動向～来るべき日本の留学交流戦略の構築～」研究課題番号15330177、研究代表者 横田雅弘(他3名+研究協力者1名)、1-211、2006.9.
7. 『留学生交流の将来予測に関する調査研究』、平成18年度文部科学省先導的の大学改革推進経費による委託研究、委託先:一橋大学、研究代表者:横田雅弘、1-163、2007.10.
8. 『年間を通した外国人学生受入れの実態調査』、平成19年度文部科学省先導的の大学改革推進経費による委託研究、委託先:一橋大学、研究代表者:横田雅弘、1-123、2008.3.
9. 『中国における日本と諸外国への留学生送出し要因の比較研究～IDP方式の将来予測～』、2008年度明治大学新領域創成型研究報告書、研究代表者:横田雅弘、1-112、2009.3.
10. 『外国人学生の日本留学へのニーズに関する調査』、平成20年度、21年度文部科学省先導的の大学改革推進経費による委託研究、委託先:明治大学、研究代表者:横田雅弘、1-123、2009.9.
11. 『ホームステイの効果に関する研究』、2008年10月～2012年7月、明治大学・(株)JTB法人東京産学共同調査研究、研究代表者:横田雅弘、1-84、2012.6.
12. 『グローバル人材育成と留学の長期的インパクトに関する国際比較研究』平成24～26年度文部科学省科学研究費(基盤研究A)、研究代表者 横田雅弘、研究成果報告：<http://recsie.or.jp/project/gj5000/>
13. 『地域のダイバーシティ推進に関する現場生成型研究』平成31～令和5年度(コロナによる延長2年含む)文部科学省科学研究費(基盤研究C) 研究代表者：横田雅弘

(4) 所属学会等・役職

<学会等の活動>

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1988年4月～現在 | 異文化間教育学会会員 |
| 1989年3月～2009年3月 | 日本学生相談学会会員 |
| 1992年5月～1994年4月 | JAFSA(外国人留学生問題研究会)理事 |
| 1993年6月～1998年5月 | 異文化間教育学会研究担当幹事 |
| 1993年4月～1998年3月 | 文化と人間の会会員・監事 |
| 1994年5月～2000年4月 | JAFSA(外国人留学生問題研究会)常務理事 |

1996年4月～現在	留学生教育学会会員
1999年4月～2008年3月	コミュニティ心理学会会員
1999年6月～2006年5月	異文化間教育学会常任理事
2000年6月～2002年5月	異文化間教育学会事務局長
2000年11月～2009年5月	NPO法人JAFSA国際教育交流協議会理事・副会長 (JAFSA (留学生問題研究会)が法人化、名称変更)
2002年4月～2006年3月	広島大学留学生センター研究員
2009年度～現在	留学生教育学会理事
2009年6月～2013年5月	異文化間教育学会理事長
2017年10月～現在	日本ヒューマンライブラリー学会副理事長
2019年6月～2021年5月	異文化間教育学会副理事長
2021年6月～2023年5月	異文化間教育学会常任理事
2023年6月～現在	異文化間教育学会理事

(5) 社会活動・省庁／大学等委員会活動

1988年5月～1997年3月	くにたち地域国際交流会会長
1988年8月～1990年7月	国立市公民館運営審議会委員
1989年4月～2002年3月	(財)くにたち文化・スポーツ振興財団評議員
1995年4月～1999年3月	「箱根会議」国際交流担い手ネットワーク運営委員
2001年4月～2012年3月	(財)東亜留学生育友会理事
2001年10月	早稲田大学大学院日本語教育研究科 外部評価委員
2002年2月	文部科学省科学研究費補助金審査委員 (若手・萌芽研究)
2003年8月	日米フルブライト交流計画50周年記念フルブライト・プログラム評価 委員
2003年11月	国際交流基金日本関連フェロウシップ・プログラム評価代表者
2004年4月～2005年3月	朝日新聞アジアネットワーク研究員
2005年4月～2007年3月	(財)似鳥国際奨学財団選考委員
2005年4月～2007年3月	国立市社会教育委員
2005年10月～2009年9月	NPO法人CINGA (国際活動市民中心) 理事
2006年5月	国際交流基金平成17年度業務実績専門評価委員
2006年5月～7月	国際交流基金日米センター「日米交流リサーチ事業」 外部アドバイザー
2007年5月～現在	(財)ロッテ国際奨学財団選考委員
2007年度	朝日新聞アジアネットワーク・フェロウ
2007年度～2013年3月	経済産業省アジア人財資金評価委員

2008年度	文部科学省中央教育審議会大学分科会留学生特別部会委員
2009年9月～2011年3月	明治大学JTB産学共同ホームステイ調査研究代表者
2009年度～2016年度	JASSO短期外国人留学生支援制度実施委員会委員
2009年度～2016年度	JASSO短期留学推進制度実施委員会委員
2009年度～2010年度	文部科学省先導的の大学改革推進委託事業選定委員会委員
2009年3月～2011年1月	文部科学省中央教育審議会専門委員(大学分科会)
2009年4月～2011年3月	(財)海外技術者研修協会アジア人材資金構想共通カリキュラムマネージメントセンター事業委員
2009年5月1日～12月	(独)日本学術振興会国際化拠点整備事業プログラム委員会審査部会専門委員
2009年度～現在	(財)日本語教育振興協会評議員
2009年度～2010年度	JASSO留学生交流実務担当教職員養成プログラム実施協力者会議委員(座長)
2009年度～2014年3月	JASSO政策企画委員会委員
2010年度～2015年度	(財)かめのり国際奨学財団選考委員
2010年2月～2016年	文部科学省ショートステイ・ショートビジット実施委員会委員
2012年6月～2013年3月	グローバル人材育成推進事業プログラム委員会審査部会委員
2013年7月～2014年3月	留学生交流支援制度(短期受入れ・短期派遣)評価委員会委員
2013年7月～2019年3月	大学の世界展開力強化事業プログラム委員会専門委員
2013年8月～現在	日本国際化推進協会(JAPI)理事
2014年7月～2015年3月	グローバル人材育成支援プログラム委員会評価部会委員
2014年6月～2021年3月	国費外国人留学生選考委員会専門部会委員
2014年4月～2016年3月	海外留学支援制度(短期派遣・短期受入れ)実施委員会委員
2014年4月～2016年3月	海外留学支援制度(短期派遣・短期受入れ)選考委員会委員
2014年4月～2016年3月	海外留学支援制度(短期派遣・短期受入れ)評価分析委員会委員
2017年4月～2021年3月	文部科学省大学間共同利用施設専門部会委員
2018年8月～現在	財団法人千本財団奨学金選考委員会委員
2021年8月～現在	三菱UFJ国際財団専門委員会委員
2022年10月～現在	立命館大学キャンパスアジア外部評価委員

3 教育歴

(1) 一橋大学での常勤授業 (1～5は学部、6は大学院)

- 比較文化経験論 (商学部専門科目 半年2単位)
- まちづくり (全学共通教育科目 夏・冬各2単位 林大樹社会学研究科教授と共同で担当、文部科学省特色GP関連授業)

3. コミュニティ・ビジネス起業講座（全学共通教育科目 通年4単位 林大樹社会学研究科教授と共同で担当、文部科学省特色GP関連授業）
4. 社会起業論（全学共通教育科目 演習通年2単位 林大樹社会学研究科教授と共同で担当、文部科学省特色GP関連授業）
5. 異文化発見ゼミナール(留学生センター科目 夏・冬各週2コマ)
6. 異文化間理解教育研究（言語社会研究科大学院専門科目 夏・冬各2単位）

（2）明治大学での授業（1～5は学部、6～8は大学院）

1. 異文化間教育学A・B(基幹科目)
2. まちづくり教育論A・B(2008年度～2016年度)
3. 国際日本学講座(2019年度～2022年度)
4. 社会連携科目(2019年度C：ダイバーシティ都市中野をつくる、G：JAPIとの連携科目)
5. 3年・4年演習
6. 多文化共生・異文化間教育研究(大学院前期授業：留学生アドバイジング)
7. 言語・国際交流特別研究(大学院博士後期授業：実践研究を实践研究する)
8. 多文化共生・異文化間教育演習(大学院博士前期・後期演習)

（3）非常勤授業

- | | |
|-----------------|-------------------------------------------|
| 1990年4月～2009年3月 | 獨協大学カウンセリング・センター非常勤カウンセラー |
| 1992年4月～2009年3月 | 獨協大学非常勤講師（「教職心理学」担当） |
| 1998年9月～2000年3月 | 青山学院大学大学院国際政治経済学研究科非常勤講師
（「異文化間心理学」担当） |
| 2001年度～2009年度 | ラボ日本語教育センター日本語教師養成講座
（集中講義「異文化間心理学」担当） |
| 2002年4月～2004年3月 | 目白大学大学院非常勤講師（「異文化間心理学」担当） |
| 2003年度～2007年度 | 津田塾大学日本語教師養成講座（「異文化間心理学」担当） |
| 2006年年度～2012年度 | 早稲田大学大学院日本語教育研究科（「異文化コミュニケーション教育論」担当） |
| 2006年度～2008年度 | 東京外語専門学校日本語教師養成講座（集中講義「異文化間カウンセリング」担当） |
| 2010年4月～2011年度 | 聖心女子大学非常勤講師（「性格心理学特講」担当） |

3 その他

＜明治大学における役職＞

- | | |
|------------|--------------|
| 2008年4月～現在 | 明治大学国際日本学部教授 |
|------------|--------------|

2009年10月～2014年3月 明治大学国際教育センター長
2011年4月～現在 明治大学国際日本学研究科教授を兼任
2011年9月～現在 明治大学国際・ダイバーシティ教育研究所長
2014年4月～2018年3月 明治大学国際日本学部長
2014年4月～2018年3月 明治大学評議員
2018年4月～2020年3月 明治大学学長室専門員

以 上

研究・教育を振り返る

横田雅弘

定年を迎えるにあたり、37年間の教員生活を5つの時代に分けて振り返ってみた。それは自分にとってたいへん感慨深い時間となった。

1. 留学生アドバイザーの時代

大学卒業後、しばらく企業で働いたが、留学してもう一度心理学を学びたい気持ちが勝り、30歳にして米国に留学した。運よくそこで出会った米倉誠一郎先生とのご縁で、1987年に一橋大学商学部からお声掛けをいただいた。異文化間カウンセリングを専門としていたので、留学生激増の時代に国立大学についての留学生専門教育教員というポストへの着任であった。当時は右も左も分からなかったが、留学生から絶大な信頼を得ていた留学生担当職員の高波辰男さんに師事して留学生相談にあたった。

若い頃と今とでは、同じ人間なのだがその行動はずいぶんと異なる。一橋大学着任当初は何も分からないから、面白い論文や本を読むとすぐに著者に手紙を書いた(当時は勿論ウェブなどない)。都内の研究者だと強引に押し掛けたが、研究室で読みたい本を見つけると、先ほど会ったばかりの先生にこの本貸してもらえませんかと頼んで借りてきた。明治大学の斎藤孝先生の論文「半歩踏み出す身振りの技法」を読んで感激し、その論文執筆のきっかけになったと書かれていた「青い目茶色い目」というビデオを貸してくれと手紙を書いたら、快く(?) 郵送してくれたのにはもう一度感激した。今思うと相当図々しい奴である。

一橋大学の留学生は大学院生が中心で、夫婦家族同伴の方たちも多く、大学だけでは配偶者や子どもの支援は難しいので、地元国立市の公民館で任意団体「くにたち地域国際交流会」を当時公民館職員であった平林正夫さんと立ち上げた。公民館での日本語教室の開設や、留学生を雇用して行った母国語での外国人住民聞き取り調査など、今でも印象深く思い出す。

米国で設立された留学生アドバイザーの組織(NAFSA)が日本(JAFSA)でも立ち上がって、毎夏教職員が分け隔てなく互いに「さん」づけで夜通し議論する合宿セミナーが開かれていた。ここで九州大学留学生センターの白土悟先生と出会い、意気投合した。2004年に二人で『留学生アドバイザー』を書き上げ、自分の留学生の現場の仕事に一区切りをつけた。

2. まちづくりの時代

その頃、先の平林さんが国立市役所産業振興課長に着任しておられ、国立市の南にある当時築50年の巨大団地でシャッターが下りた商店街の活性化を一緒にやらないかと誘ってくれた。そこで、社会学部の林大樹先生と一緒に「まちづくり」という授業を開講した。幸運にも2004年度文部科学省特色GPに選定され(「人間環境キーステーションとまちづくり授業」)、4年間毎年1,500万円の助成を受け、国立市や商店街と連携してさまざまな授業とプロジェクトを展開した。団地のシャッターを上げて学生らと立ち上げた4つの店舗は、その後20年になろうとする

今も6つに増えて営業している。

3. 留学生政策論の時代

JAFSAの副会長をしていたときに、理事会のメンバーに明治大学の納谷廣美学長(当時)がおられたことや、地域の外国人支援で山脇啓造先生と知己を得ていたことなどがご縁であろう、2008年国際日本学部の開設に参加させていただくことになった。留学生の現場からは離れたつもりであったが、当時留学生の専門家などという人はほとんどいなかったもので、移籍後すぐに国際教育センター長を拝命することになった。そこで、自分の研究テーマも現場中心の留学生相談から留学生政策にシフトさせ、文部科学省の先導的・大学改革推進経費をいただいて、アジアの大学調査と留学生30万人計画の基礎研究に携わった。この間、納谷学長や土屋学長のもとで、文部科学省の国際化拠点整備事業(グローバル30)やスーパーグローバル大学創成支援事業などの申請に関わり、獲得に奔走した。

4. ヒューマンライブラリーの時代

しかし実のところ、着任後すぐにロンドンで開催されたヒューマンライブラリーを紹介する朝日新聞の記事に衝撃を受けていた。2000年にデンマークで始まった人を貸し出す仮想の図書館ヒューマンライブラリーは瞬く間に世界90か国に広まり、日本では東京大学先端科学技術研究センターに事務局ができていたが、その解散後は学会を立ち上げてセミナーなどを開き、日本での開催を支援した。私にとっては、初めていわゆるマイノリティとみなされる多様な方々と直接お話しする貴重な機会となった。2009年に当時の2年演習でこれを開催し、その後今年まで毎年のようにゼミ活動として開催を続けてきた。今は「本」になってくださる方々を集めるのもそれほど苦労しないが、最初の頃はたいへんだった。人を「本」にして貸し出すとはそれこそ差別的な見世物小屋ではないかと言われて折れそうになったこともある。しかし、「本」になってくださった方々が、自分は自分の意志で「本」になり、自分の人生を語りたくてここにきているんだから心配なくていいと励ましてくれた。性的マイノリティや視覚障害、ホームレスなどの方々が30人も「書庫」に設定した中野キャンパス307教室に集まり、「本」になって次々に貸し出されていった。「書庫」には、自分の今を受け入れて前を向こうとする人間のオーラが立ち込めた。その姿に、私も「司書」となったゼミ学生も圧倒され、腹の底から学んだ。

5. ダイバーシティとまちづくりの時代

2019年に私の最後の科研(基盤C)が始まった。「現場生成型研究」と命名した異文化間教育の新しい研究スタイルを用いて、中野区をフィールドに様々なマイノリティの団体と感心を寄せる企業や区民をつなぐ仕組みを創る研究である。中野区は2022年4月1日に「中野区人権と多様性を尊重するまちづくり条例」を発効したが、条例ができて実質化しなければ意味がない。私の最後の2年間は、ゼミで「中野ダイバーシティフェスタ」をプロデュースしたが、今後は中野区のダイバーシティをウォッチする任意団体「Nakano Diversity Watchers」がこれを引き継いでくれる予定である。私の仕事は、こうして外国人も含む様々なマイノリティ(ダイバーシティ)をつなぐまちづくり活動で最終章を迎える。留学生研究をしていた者が、いつの間にかまちづく

りの方に行ってしまったという人もいるが、私の中ではつながっている。まちは異文化の宝庫なのだ。

長いようであつという間の16年間であった。その間、恐れ多くも学部長や教職員組合の執行委員長もさせていただき、大学をいろいろな側面から見る機会を与えられた。年金の17年問題があつて退職後の生活は楽ではないが、楽しく仕事をさせていただいたことには深く感謝している。明治大学と国際日本学部の更なる発展を念じてやまない。



小林明准教授・近影

小林 明 准教授 履歴・業績

1 学歴・学位・職歴

<学歴>

1999年 ミネソタ大学大学院 教育政策管理研究科修士課程修了

<職歴>

2002年～2013年 有限会社国際教育企画取締役

2011年～2013年 米国国務省指定*EducationUSA* Center東京西地区アメリカ留学支援センター・アドバイザー

2 研究活動

(1) 著書・編著書

「大学の国際化と日本人学生の国際志向性」(2013) 共編著 学文社

「グローバル人材の養成と海外留学」(2016) 共編著 学文社

(2) 論文、辞典、事典等

「交換留学生の居住形態による生活環境適応の分析 (2012)」単著

『明治大学国際日本学研究』第4巻第1号 pp.15-30、他

「留学体験のインパクトと成果 —留学経験者と留学非経験者の比較調査から—」(2016)

単著 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』8月号Vol. 65

「米国のコミュニティカレッジに関する一考察 ～高等教育機関としての認定～」(2017) 単著

『明治大学国際日本学研究』第9巻第1号 pp.15-30

3 明治大学での教育暦等

(1) 国際日本学部

担当科目：「海外留学入門」「国際教育交流論」「国際日本学実践科目」「演習」

(2) その他

2014年度～2023年度 国際交流委員会委員長（送出分科会）

2016年度～2017年度 明治大学国際教育センター副センター長

2022年度～2023年度 国際日本学科長

【献呈論文】

『今昔物語集』における言語活動語彙の文体的特徴

Stylistic Characteristics of Language Activity Vocabulary in
*Konjaku-Monogatari-Shū*田中牧郎
TANAKA, Makiro

I はじめに

平安時代中後期（10～11世紀）の日本語は、貴族の話し言葉に基づく和文の文章と、漢籍や仏典を訓読するなかで形成された漢文訓読文の文章とが並立し、それぞれで用いられる語彙は異なる様相を示していた。ところが、平安末期（12世紀）から和漢混淆文が確立していくなかで、和文の語彙と漢文訓読文の語彙が同じ文章の中で用いられるようになり、類似の意味をもつ語彙の間に文体差を伴う新たな語彙体系が形成されていった。

平安末期の和漢の混淆にともなう新たな語彙体系を把握しようとする際、一つの作品の中に文体の異なる部や巻が共存している『今昔物語集』（以下『今昔』）は、きわめて好適な資料である。天竺震旦部（巻1～10）は漢文訓読文、本朝世俗部（巻22～31）は和文で書かれ、本朝仏法部（巻11～20）はその中間であるという顕著な傾向があることに加えて、巻や説話にまで分け入って見ていくことで、鮮明な文体差が見えることがあるからである。

『今昔』の言語の研究史をまとめた佐藤（1984）によると、信頼できる本文である「日本古典文学大系」（岩波書店、以下「旧大系」）に『今昔』全5冊が収められた1960年代に、研究が質量ともに飛躍したという。その後、『今昔物語集文節索引』『同自立語索引』『同漢字索引』（笠間書院）が整備された1970～80年代に、言語表現の細部までを分析する研究が充実した。そして、国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』の中に『今昔』が組みこまれた2010年代後半からは（田中2014）、コーパスを用いることでより精緻で見通しのよい研究が可能になっており、『今昔』の言語研究は新たな研究段階に至ったと言える。

本稿の筆者も、1980年代から『今昔』の語彙を文体差の視点で考察する研究を重ねてきたが（田中1989、2003など）、『日本語歴史コーパス』の開発に携わるようになったことを機に、語彙の文体差をマクロ・ミクロの双方の視点で総合的に記述することを目指した研究を行うようになった（田中2015、2016など）。この流れの中で、田中（2022）では、『今昔』における人間や家族を表す名詞の5つの類義語群を取り上げて、和文体的特徴と漢文訓読的特徴を持つ語を特定し、文体的特徴が明瞭な類義語間には意味差を伴う傾向があることを明らかにした。その研究の結果を

受けて指摘した課題の一つに、より広範囲の語彙の文体差について研究する必要性がある。

そこで、本稿でも、『今昔』における語彙の文体的特徴を扱っていくが、特に、田中（2022）ではあまり扱えなかった多義語を含む類義語群に焦点をあてる。一語が多くの語義を持つことの多い動詞にも類義語が広がっている語群を取り上げて、同様の調査と考察を行って、『今昔』における語彙の文体的特徴について、そのありようの解明を進めることを目的とする。具体的には、名詞と動詞に類義語が広がり、高頻度語の多い語群として、国立国語研究所編『分類語彙表増補改訂版』（以下『分類語彙表』）における「1.31 言語」「2.31 言語」の中項目に注目し、その中のいくつかの分類項目における高頻度の名詞と動詞を対象にする。

Ⅱ. 調査の手順

本稿で実施する『分類語彙表』の中項目「1.31 言語」「2.31 言語」に属する高頻度語を対象とした調査は、田中（2022）で「1.20 人間」「1.21 家族」に属する高頻度語を調査したときと同じ考え方で実施するが、取り上げる分類項目の選び方や、語彙頻度の集計の仕方などが異なっているところも多いので、以下に手順を説明する。

[1] 『日本語歴史コーパス』のデータをもとに国立国語研究所から公開されている、『日本語歴史コーパス』統合語彙表（バージョン 2022.03）（以下「統合語彙表」）をもとに、『今昔』の本朝仏法部（巻 11～20）、本朝世俗部（巻 22～31）の全語彙の巻別語彙頻度表を作成する（『今昔』の天竺震旦部（巻 1～10）は、『日本語歴史コーパス』に収められていない）。具体的には、Excel のピボットテーブルの機能で、「作品名」が『今昔』であるものをフィルターで抽出し、「語彙素 ID」「語彙素」と「部」とでクロス集計を行うことで実現する。なお、この「統合語彙表」の「部」には、『今昔』の場合は、巻番号が収められている。

[2] 上記の巻別語彙頻度表の巻番号をもとに、巻 11～20 の本朝仏法部、巻 22～31 の本朝世俗部の二つの部に分け、部別語彙頻度表に集約する。

[3] 国立国語研究所編「分類語彙表番号-UniDic 語彙素番号対応表」（近藤・田中 2020 参照）を用いて、上記の部別語彙頻度表の「語彙素 ID」に対して「分類語彙表番号」を対応付ける。『分類語彙表』に収録されていない語で、ある程度の頻度のある語については、筆者の判断で番号を付ける。

[4] [3] までの作業で得られた部別語彙頻度表で、「分類語彙表番号」により「1.31 言語」「2.31 言語」に属する語について、国文学研究資料館編『日本古典文学大系本文データベース』（底本は「旧大系」）に収録されている『今昔』巻 1～10 の天竺震旦部の本文テキストに対して文字列検索を行って用例を収集する。その結果得られた各語の天竺震旦部の粗頻度を、部別語彙頻度表に書き加える。

[5] 『分類語彙表』において、名詞の「1.31 言語」は 30 の分類項目、同じく動詞の「2.31 言語」は 23 の分類項目から構成されるが、「2.31 言語」の 23 の分類項目はすべて、「1.31 言語」のピリオド以下の 4 桁の数字が同じ分類項目に対応しているので（例えば「1.3102 名」「2.3102 名」

など)、名詞と動詞を1つの類義語群と扱う(例えば「3102名」の1つにまとめる)。

[6] 上記の作業は、『日本語歴史コーパス』の読み(おおむね底本である「新編日本古典文学全集」(小学館、以下「新全集」)の読みに従って付けられている)によって行うが、中には読みの可能性が複数あり、読み分けの作業を行わずに頻度を集計するわけにはいかないものがある。そうした場合は、文脈から読み分け作業を行って集計するか、読み分けできない複数の語を1つに統合して集計する。

[7] 天竺震旦部、本朝仏法部、本朝世俗部の3つの部の頻度を相互に比較できるようにする調整頻度を、次のように算出する。各語の各部における粗頻度を「新日本古典文学大系」(岩波書店、以下「新大系」)の部別の行数(天竺震旦部:11,440行、本朝仏法部:11,830行、本朝世俗部:9,800行)で割った数値に1000を掛け、1000行あたりに何回出現しているかの数値を算出する。新大系を用いるのは、『今昔』全体が収録され、紙面の行数・文字数が均質化されているからである。

以上の7段階の手順で語彙を抽出集計した結果、以下の5つの分類項目において、多くの高頻度語が得られた。なお、以下、語を示す場合は、統合語彙表の「語彙素」を古語の表記法に変換して示す。

3100 言語活動:「言ふ」「申す」「宣ふ」「読む」など

3102 名:「名(な)」「字(あざな)」「呼ぶ」「唱ふ」など

3123 伝達・報知:「伝ふ」「告ぐ」「教ふ」「遺言」など

3132 問答:「聞く」「問ふ」「尋ぬ」「返り事」など

3151 書き:「書く」「しるす」「写す」「書写」など

これらの分類項目の語彙について、頻度や、用例における語義や用法を観察し、語の文体的特徴を分析しているが、本稿では、一定の整理のついた、「3102名」「3123伝達・報知」「3151書き」の3つの分類項目に属する語彙について、分析の結果を報告し考察を行う。

Ⅲ. 語彙の分析

1. 「3102名」の語彙

1.1 分析対象の語彙

はじめに、「3102名」の分類項目に属する語彙を見よう。『今昔』全体で20件以上ある語には、名詞「名(な)」「字(あざな)」「姓(しょう)」、動詞「呼ぶ」「呼ばふ」「唱ふ」「名付ける」の7語があがるが、「姓」と類義性の高い「姓名」(12件)も対象に加え、8語を観察する。これら8語について、『今昔』における部別の粗頻度と調整頻度を集計するが、「呼ぶ」と「呼ばふ」とは読み分け困難な例も多いため、統合して集計した。その結果を示すと、表1の通りである。表の数値の左側が粗頻度、右側が調整頻度である。

表1 「3102名」の高頻度語（左：粗頻度、右：調整頻度）

	名		字		姓		姓名		呼ぶ・呼ばふ		唱ふ		名付く	
天竺震旦部	163	14.25	4	0.35	13	1.14	10	0.87	73	6.38	32	2.80	18	1.57
本朝仏法部	128	10.82	7	0.59	17	1.44	1	0.08	135	11.41	178	15.05	25	2.11
本朝世俗部	65	6.63	14	1.43	2	0.20	1	0.10	151	15.41	4	0.41	5	0.51
計	356	10.77	25	0.76	32	0.97	12	0.36	359	10.86	214	6.47	48	1.45

1.2 「名（な）」

表1のうち、まず名詞語彙から見ていこう。「名（な）」がもっともよく使われ、全体に高頻度で各部に広がっているが、天竺震旦部、本朝仏法部、本朝世俗部の順に頻度が高く、部による偏りも見えている。この偏りは、文体の違いを反映しているのだろうか。

「名」の用例を見わたすと、(1)のように、「名を（ば）○○と（ぞ）云ふ〔申す・付く〕』という形式で、人物や仏の名前を提示する用法が非常に多く、国や寺の名前を提示する場合もある。なお、『今昔』の用例の引用は、天竺震旦部は「旧大系」の本文、本朝部は『日本語歴史コーパス』の「原文表記」によるが、読みやすさを考慮して、筆者の判断で表記に手を入れる場合がある。

(1) 今昔、天竺ニ一人ノ人有リ、名ヲバ和羅多ト云フ。(巻1-25)

これは、名をことさらに提示するような表現形式と言えるが、部による頻度差のある背景には、まず次のようなことがありそうである。天竺震旦部や本朝仏法部には、仏や高僧、歴史上の人物など、名のある登場人物が多いのに対して、本朝世俗部には、名も無き登場人物が多くなるということである。本朝世俗部でもこの表現形式が比較的多く見られるのは、巻24と巻25であるのは、これらの巻が名のある貴族や武士の説話を集めていることと関係していよう。このように、「名」の頻度の高低は、名を重視する説話や話題が多いか少ないかによるところが大きい。

ほかに、部による頻度差が目立つ用法に、(2)のような、仏の名前について「○○の名を唱ふ〔聞く〕』という形式で、仏名を口にしたり耳にしたりするものが挙げられる。

(2) 只一度観音御名ヲ唱フルソラ、諸ノ願ヲ満給ナリ。(巻16-4)

仏が主に登場する説話は、天竺震旦部と本朝仏法部に多いことから、この用法の存在も「名」に頻度差が生じている原因になっていよう。

これら2つの用法の存在から、「名」という語の部による頻度の違いの原因については、文体差ではなく話題差に求めるべきである。一方、文体差が原因で部による頻度差が生じていると考えられるところもある。それは、「名」の転義用法の出現が本朝世俗部に偏っているところである。『日本語大辞典 第2版』（小学館、以下『日国』）は、「名」について、中古までの用例を挙げる語義を3つ示しているが、そのうち『今昔』に例が確認できるものは、[1]「個、または集合としての事柄や物を、他から区別するために、対応する言語でいい表わしたもの。なまえ。」と、[2][1]に伴う事柄、または、その属性を象徴するものとしての名称。」の2つである。[1]は名前、[2]は評判、と言ひ換えることができよう。[1]が本義で、上に挙げた(1)(2)のようなものである。[2]は転義で、次の(3)のようなものである。

(3) 其ヨリ後ナム此ノ維茂ハ東八ヶ国ニ名ヲ挙テ、弥ヨ並ビ無キ兵ニ被云ケル。(巻25-5)

[2] の転義は、『分類語彙表』では「1.3142 評判」に当たるもので、その類義語群にある『今昔』にも見られる語には、(4) に示す「名聞」「聞こえ」がある。

(4) 現世ノ名聞利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思ケル間ニ、カク止事無キ学生ナル聞工高ク成テ (巻 12- 3)

「名聞」は7件すべてが本朝仏法部にあり、漢文訓読的な特徴が指摘できる。「聞こえ」は18件あり、天竺震旦部1件、本朝仏法部10件、本朝世俗部6件とあり、文体による特徴は見えにくい。評判の意味の「名」が本朝世俗部に偏っているのは、話題によるものではなく、文体差によるものだと考えることができよう。「聞こえ」を中立的な語として、「名」と「名聞」とが、和文的特徴か漢文訓読的特徴かで文体的に対立しているわけである。

「名」は、本義用法では、文体に関係なくよく用いられるのに対して、転義用法では和文的特徴を有しているのである。

1.3 「字 (あざな)」

表1の名詞語彙のうち、「字 (あざな)」の部別頻度を見ると、「名」とはちょうど反対の分布をしている。本朝世俗部に最も多く、本朝仏法部がこれに次ぎ、天竺震旦部で最も少なくなっているのである。用例を見わたすと、(5)(6)のように、どの部でも同じ意味・用法で使われていることがわかる。

(5) 今昔、平ノ定文ト云フ人有ケリ。字ヲバ平中ト云ケリ。(巻 30-2)

(6) 今ハ昔、震旦ノ唐ノ代ニ、幽洲ノ漢懸ト云フ所ニ、虞ノ安良ト云フ人有ケリ、字ヲ族ト云フ。(巻 6-11)

正式名ではなく別名である「字」を話題にすることが、天竺震旦部では少なく、本朝仏法部では少し増えるがまだ少なく、本朝世俗部で多くなるという、話題の多寡が頻度の偏りを生んでいるのだと考えられる。

なお、「字」の類義語に「異名」があり、『日国』の「字」の「語誌」欄に、院政期の「異名」と「字」には使い分けがあり、「異名」は、身体・性行などの特異な点に基づく命名でマイナス評価を伴い、「字」は、命名の由縁に限定はなくマイナス方向への価値評価はない、という趣旨の記述がある。『今昔』では「異名」は4件使われており、すべて(7)のように巻28にあり、『日国』の指摘通りの意味や価値評価を読み取ることができ、和文的特徴を伴っている。

(7) 僧共弥ヨ咲テ、其ヨリ後、小寺ノ小僧ト云フ異名ハ付タル也ケリ。「無端ク物咎メシテ、異名付タル」トテナム、基僧悔シガリケル。(巻 28-8)

意味や文体に限定のある「異名」に対して、「字」はそうした限定はなく、広く用いられた語と見るべきものである。また、この語には「名」のような転義もない。

1.4 「姓」「姓名」

表1の名詞語彙には「姓 (しょう)」「姓名 (しょうみょう)」という漢語が2語あり、いずれも天竺震旦部に多く(「姓」は本朝仏法部にも多い)、本朝世俗部に少ない。低頻度の本朝世俗部の例を見ることで、その文体的特徴を考えていこう。

まず、「姓」は本朝世俗部に2件あり、(8)のような「姓」単独例と、(9)のような「本姓」という漢字列の例である。

(8) 大織冠ヲ以テ即チ内大臣ニ被成ヌ。大中臣ノ姓ヲ改テ藤原トス。(巻22-1)

(9) 忠仁公、「湛慶法師既ニ濫行ニ成タリ。僧ノ身ニテ異様也。亦内外道ニ付テ極タル者也。此レヲ徒ニ可被棄キニ非ズ。速ニ還俗シテ、公ニ可仕キ也」ト被定テ、還俗シツ。名ヲ公輔ト云フ。本姓高向也。(巻31-3)

(8)は、中臣鎌足が藤原に姓を改めることを言うもので、まさに「姓」が主題になる話での特別の意味合いを帯びた箇所である。(9)の「本姓」は、コーパスの底本の「新全集」では「もとのしやう」と読んでいるが、二字の熟合した「ほんしやう」という字音語であった可能性がある。「本姓」という漢字語は、平安時代の古記録によく使われており、漢文との親近性が強い語だと思われる。これらのことから本朝世俗部の「姓」は、漢文訓読的特徴を持った語が特別な意味を表すために顔を出したものだと思えることができる。

これに対して、天竺震旦部と本朝仏法部では、(10)のように特別な意味を持たない箇所でも「姓」は普通によく使われている。漢文訓読的特徴を持つ「姓」がこれら2つの部で多用されることは矛盾しない。

(10) 今昔、一人ノ女有ケリ。姓ハ藤原ノ氏也。(巻15-50)

次に、「姓名」も、やはり本朝世俗部には少なく、(11)が唯一の使用例である。

(11) 林ノ中ニ辛ビタル音ノ気色異ナルヲ以テ、此ノ灯為ル者ノ姓名ヲ呼ケレバ、「怪」ト思テ馬ヲ押返シテ、其ノ呼ブ音ヲ弓手様ニ成シテ(巻27-34)

この例は、「被呼姓名射野猪語」という題の、姓名を呼ばれることをテーマとする説話の中で使われていることから、姓名を呼ぶことが特別な意味を持つ場面における例と言えよう。この語は、古記録などにはよく使われており、やはり漢文訓読的特徴を有していたと見られる。

このように、「姓」「姓名」は漢文訓読的特徴を持つ語であることが明らかだが、これらと同じような意味を表す、和文でも用いられる語は見つからない。「名字(苗字)」「氏名」などの語は『今昔』にはなく、「かばね」「氏(うじ)」なども、姓の意味では使われていない。

1.5 「呼ぶ」「呼ばふ」

表1における動詞語彙を見ていこう。まず「呼ぶ」と「呼ばふ」であるが、『日本古典対照分類語彙表』(宮島ほか2014)では、「呼ぶ」は「2.3031 声」「2.3100 言語活動」「2.3102 名」「2.3520 応接・送迎」、「呼ばふ」は「2.3100 言語活動」「2.3350 冠婚」に分類されており、「2.3100 言語活動」が共通する。『分類語彙表』で「2.3100 言語活動」に掲げられる「呼ぶ」に、「[大声で]」と注記されていることを参考にすれば(古語「呼ばふ」は非掲載)、呼び方が大きな声であるか否かで「呼ばふ」と「呼ぶ」は読み分けることができそうにも思われるが、文脈から大きな声かどうかを判別して全例の読みを決めるのは困難である。現に(12)は、コーパスの底本である「新全集」では「よぶ」とし、コーパスでもそう認定しているが、「旧大系」では「ふ」を清音に読み「よばふ」としており、解釈が分かれている。そこで、表1では、「呼ぶ」「呼ばふ」を合算した頻度を示した。

(12) 馬ヨリ下テ鞍ヲ下テ、馬ニ逆様ニ置テ逆様ニ乗テ、呼ズ者ニハ女手ト思ハセテ、(巻 27-34)

「呼ぶ」であることが確実な用法のうち、多くは、(13) (14) のように、誰かの名を口にする意味で、漢文訓読文 (13) でも和文 (14) でも、同じように使われている。こうした「呼ぶ」の用法を「呼ぶ (基本義)」とする。

(13) 王、憂陀夷ヲ呼ビテ問給フ、「太子出テ楽有ツヤ否ヤ」ト。(巻 1-3)

(14) 医師和氣重秀ヲ呼テ、「此クタルヲバ、何ガセムト為ル。…」ト宣ケレバ (巻 28-30)

確実に「呼ばふ」と読めるものについても、(15) (16) のように、どちらの文体でも使用されている。これらの「呼ばふ」の用法を「呼ばふ (基本義)」とする。

(15) 音ヲ通ヌ程ナラバコソハ呼バ、メ、目モ不及ズ、音モ不通ヌ程ナレバ、力モ不及デ居タリ。(巻 10-35)

(16) 其時ニ聖人、「此ハ何ニシ給ヒツル事ゾ」ト云テ、呼バヒ泣キ迷フ事無限シ。(巻 20-13)

しかし「呼ぶ」「呼ばふ」を合わせた全体としての部別の出現頻度を見ると、天竺震旦部でやや少なく、本朝仏法部で多く、本朝世俗部でさらに多くなっている。用例を見わたしていくと、こうした頻度差が生じる事情として、部による出現頻度に大きな差がある用法の存在が浮かび上がってくる。

まず、「夜這」「這」という表記が当てられることもある、求婚を意味する「呼ばふ」の語義(「呼ばふ (転義) 」とする)は、本朝仏法部の巻 20 に 1 件あるほかは、すべて本朝世俗部で使われている。

(17) 此ノ娘ヲバ近江守無限ク傳テ、御子上達部ノ夜這ケルヲモ聞キ入ズシテ、「女御ニ奉ラム」ト思ケレドモ、(巻 30-3)

次に、発話内容を格助詞「と」で引用して示す (18) のような「呼ぶ」の語義(「呼ぶ (転義 1) 」とする)は、天竺震旦部には皆無で、本朝仏法部でもわずかな例しかないのに対し、本朝世俗部に十数件見出すことができる。

(18) 関ノ者共並ビ立テ、「何主ノ人入レ。彼主ノ人入レ」ト呼テ、主従者次第二入ルニ、(巻 26-14)

そして、「呼び寄す」(19)、「呼び取る」(20) のような複合動詞の形で、誰かに声をかけて近付ける用法(「呼ぶ (転義 2) 」とする)は、天竺震旦部には少なく、本朝仏法部で少し増え、本朝世俗部で多くなることがわかる。

(19) 明清弟子静真ト云フ僧ヲ呼ビ寄セテ、告テ云ク、(巻 15-10)

(20) 継母此郎等ヲ呼取テ云ク、(巻 26-5)

このように、「呼ばふ (転義)」「呼ぶ (転義 1)」「呼ぶ (転義 2)」の 3 つの語義が、本朝世俗部に偏って出現していることから、「呼ぶ」「呼ばふ」には和文的特点の顕著な語義が確かに存在していると見ることができよう。語義の拡張が、和文に限って進んでいるわけだが、和文で転義が起きているのは、「名」にも見られた現象であった。

1.6 「唱ふ」

表1で「唱ふ」を見ると、本朝世俗部にほとんど用いられず、天竺震旦部に多少あり、本朝仏法部にきわめて多いという、明らかな偏りが確認できる。表現を比較検討できる天竺震旦部と本朝仏法部の用例に注目すると、天竺震旦部では、(21) (22) のように、伎楽、音楽、仏の御名を対象とする用例が大部分であるのに対して、本朝仏法部では、(23) のように、念仏を対象とする用例が大部分になっており、二つの部の間で用法に大きな違いがあることがわかる。

(21) 天竺ノ舍衛城ノ中ニ諸ノ人有テ自ノ身ヲ莊嚴シテ伎楽ヲ唱テ城ヲ出テ遊戯ス。(巻1-35)

(22) 我等異口同音ニ仏ノ御名ヲ唱ヘテ此ノ苦ヲ濟ヒ給ヘト申サム(巻1-38)

(23) 諸人彼ノ西門ニシテ弥陀ノ念仏ヲ唱ふ。(巻11-21)

本朝仏法部の頻度がきわめて高くなっているのは、念仏を唱える場面が頻出する説話が非常に多いからであることも判明する。

なお「唱ふ」の本来の意味は、「声を立てて読む」「高く呼ぶ」(『日国』)といったものだったと考えられることから、先の(21) (22) のような場面が、本朝仏法部の後半や本朝世俗部に描かれる場合は、次の(24) (25) のように別の語で表現されたのではないかと考えることもできる。

(24) 諸ノ止事無キ多ノ僧ヲ請ジ、微妙キ音楽ヲ奏シ、歌舞ヲ調ヘテ(巻31-1)

(25) 我レ其ノ仏ノ名ヲ呼ビ奉ラムニ、答ヘ給ヒナムヤ(巻19-14)

「唱ふ」とほぼ同じ意味の語が「奏す」や「呼ぶ」だというわけではないが、「唱ふ」が本朝世俗部でほとんど用いられなくなるのは、話題差だけでは説明できないところがあることも確かである。こうした点からは、「唱ふ」に漢文訓読的な特徴を認めるべきではないかと考えられてくるのである。

1.7 「名付く」

「名付く」は、表1によれば、天竺震旦部と本朝仏法部に多く、本朝世俗部に少ない。天竺震旦部では、(26) のように、人や仏に対する命名の由来を述べる場合に使われている例が多い。

(26) 一人ノ男子ヲ令生メタリ。其ノ兒、身体金色ニシテ端正ナル事、世ニ比ヒ無シ。身ニ光明有テ城ノ内ヲ照ス、皆金色ト成レリ。父母、此レヲ見テ歡喜スル事無限シ。此レニ依テ其ノ兒ノ名ヲバ金色ト名付タリ。(巻2-17)

一方、本朝仏法部前半では、(27) のように天皇など権力者が、功績のあった人に名を与えることを表す例が目立つ。

(27) 天皇首ヲ低テ、五筆和尚ト名ヅケテ、菩提子ノ念珠ヲ施シ給フ。(巻11-9)

そして、本朝仏法部後半から本朝世俗部では、用例数は少ないものの、名付ける主体が権力者ではなく、世の人々である例が見られるようになり、本朝仏法部前半までとは異なる様相を呈している。

(28) 身ノ才微妙ク、心賢ク御ケレバ、世ノ人、賢人ノ右ノ大臣トゾ名付タリシ。(巻27-19)

『日国』によれば、「名付く」には、①「名を付ける。命名する」、②「一般的に呼びならわす」の2つの語義があり、①は奈良時代から②は鎌倉時代からの用例が挙げられている。上の(26) (27)

は①の語義、(28)は②の語義に該当し、旧来の①の語義が本朝仏法部前半までに多く使われ、新しい②の語義が本朝部後半以降になって使われ始めるところが目目される。和文に限って、新しい語義への展開が進んでいると見ることができるだろう。これは、「名」や「呼ぶ」「呼ばふ」の場合と同じである。

2. 「3123 伝達・報知」の語彙

2.1 分析対象の語彙

この分類項目に掲出されている語で『今昔』で20件以上あるものは8語あるが、「触れる」「広める」「訴える」は、それぞれ、「2.1560 接近・接触・隔離」または「2.3392 手足の動作」、「2.1524 通過・普及など」、「2.3611 裁判」の分類項目に入る意味で使われている例が大部分であるため、ここでは扱わない。それ以外の5語の部別の粗頻度と調整頻度は、表2の通りである。

表2 「3123 伝達・報知」の高頻度語（左：粗頻度、右：調整頻度）

部	伝ふ		告ぐ		教ふ		教へ		遺言	
天竺震旦部	427	37.33	192	16.78	107	9.35	64	5.59	10	0.87
本朝仏法部	486	41.08	250	21.13	85	7.19	27	2.28	15	1.27
本朝世俗部	336	34.29	78	7.96	53	5.41	4	0.41	0	0.00
計	1249	37.77	520	15.72	245	7.41	95	2.87	25	0.76

2.2 「伝ふ」

まず、最も高頻度の「伝ふ」を見よう、この語の語義は『日国』では3種11類に細分化してありやや煩雑なため、『角川古語大辞典』（角川書店）の整理に基づいて要点を示すと、①物を受け取らせる、②事柄を言葉で告げ知らせる、③語り継ぐ、④学芸の奥儀などを伝授する、の4つに分けられる。①は物、②③は言葉、④は奥儀が、それぞれ対象になるものであることから、3つの語義に集約されよう。

『今昔』の「伝ふ」約1250件のうち1000件以上（8割以上）が、(1)のような「語り伝ふ」という複合動詞の形をとり、その多くが説話末の定型句の一部に用いられており、これは2つめの語義である言葉を対象とするものである。この語義はすべての部や巻に広く行きわたっている。

(1) 帰去ニケリトナム語り伝へタルトヤ。(巻1-1)

また、1つめの語義である物を対象とする(2)のような例も、3つの部いずれにも同程度使われている。

(2) 祖、伯父失ニケレバ、其二人ガ財ヲ併テ伝へテ、(巻26-5)

そして、3つめの語義である奥儀を対象とする(3)のような例は、天竺震旦部と本朝仏法部に使用例を見つけることができる。本朝世俗部には見られないが、全体に低頻度の語義であることから、ここに文体的な偏りがあるか否かの判断は難しい。

(3) 震旦ニ玄奘法師ト云フ人有テ、天竺ニ渡テ正教ヲ伝テ本国ニ返来ル(巻11-4)

「伝ふ」には文体的に顕著な特徴はないと見てよいだろう。

2.3 「告ぐ」

「告ぐ」を表2で見ると、3つの部いずれにもよく使われるが、天竺震旦部、本朝仏法部に多く、本朝世俗部ではやや少なくなっていることが見て取れる。

(4) 努々、此ノ羊ヲ殺ス事無カレ。此ノ由ヲ告ゲ申サム (巻9-18)

(5) 和男ノ、其コニ有シ時ニハ不告シテ、此レニテ云コソ悪ケレ」(巻24-56)

用例を見わたすと、(4)(5)のように、部による偏りもなく自在に用いられている用法(「告ぐ(基本義)」とする)が多い中で、(6)のように、人を相手に取り(傍点部)、「告て」を介して、発話動詞のク語法を取って(点線部)、発話の引用を導く用法(「告ぐ(転義)」とする)は、天竺震旦部と本朝仏法部での頻度が高く、本朝世俗部での頻度が低くなっていることがわかる。

(6) 光時夢ニ、形チ端正ナル小僧出来テ、光時ニ告テ云ク、「…」(巻17-11)

この発話等の引用を発話動詞のク語法で導く用法は、漢文訓読に由来する語法とされているものであり(山田1935)、この用法に用いられる「告ぐ」の多さが、上記のような部別の頻度の差になって現れたものと考えられる。

以上のことから、「告ぐ」は、文体的特徴を持たない中立の語であることを基本としながら、発話を導く一部の用法(告ぐ(転義))が、漢文訓読的な特徴を有していたと見ることができよう。漢文訓読の語法と共に用いられることが多い場合、その用法が漢文訓読的な特徴を帯びてくるのだと考えられる。

2.4 「教ふ」「教へ」

表2で「教ふ」を見ると、すべての部でよく用いられる中で、天竺震旦部で最も多く、本朝仏法部がこれに次ぎ、本朝世俗部で最も少なくなっていることもわかる。「教ふ」の用例を見わたしても、特定の用法が一部の部に偏って出現するというような明瞭な傾向は見出せないが、天竺震旦部や本朝仏法部により出やすい用法や、反対に本朝世俗部により出やすい用法というもの是指摘できそうである。以下に、教える主体(二重下線)、教える相手(傍点)、教える対象(波線)、教える発話内容(点線)をマークして用例を示す。

(7) 耆婆大臣、闍王ヲ教テ云ク (巻3-27)

(8) 人来テ我レニ此ノ経ヲ教フ。(巻7-25)

(9) 「此ノ仏ヲ念ジ奉レ、ト教ヘツル人ヲ尋ヌルニ (巻7-28)

(10) ヤガテ即チ彼ノ女ノ教ヘシ橋ノ許ニ持行テ立テリケレバ、(巻27-21)

上のうち、(7)(8)(9)のような、相手、対象、発話内容が示される用法(「教ふ(転義)」とする)は、天竺震旦部や本朝仏法部に多いが、本朝世俗部には少ない。一方、(10)のような、主体が示される用法(「教ふ(本義)」とする)は、本朝世俗部に多いが、天竺震旦部や本朝仏法部には少ない。「教ふ」という動作のどこに焦点を当てて述べるのかの表現法の選択傾向に、部によって差が見られるのである。なお、『今昔』の「教ふ」について、漢文訓読に由来する独自の用法がいくつか存在するという指摘があるが(山本1993)、それらの用法が特定の部に偏る目立った傾向は見出せない。

名詞「教へ」は、表2によると、「教ふ」以上に、天竺震旦部と本朝仏法部への偏在が目立っており、本朝世俗部ではかなり低頻度になっている。「教へ」の用例を見ると、天竺震旦部では(11)のように、教える主体を指す語を格助詞「の」で受けて、「○○の教への如し」「○○の教へに随ふ」「○○の教へに依る」といった形式で、○○に教える主体（神仏、師、母、夢など）が入るものが非常に多い。

(11) 大王、后ノ教へニ随テ始テ仏法ヲ信ズ。(巻3-26)

教える主体を表示する用法は、先に見た動詞「教ふ」の場合は、本朝世俗部によく用いられるものだった。主体に焦点をあてて教える動作を描写する場合、本朝世俗部では動詞で表現し、天竺震旦部や本朝仏法部では名詞で表現するといった、表現選択の文体差があったのではないかと考えられる。

本朝仏法部では、上記のような用法は多いが、(12)の点線部のような教える内容を受けて「教へ」が使われる例も見られるようになっている。

(12) 我レ速疾ニ仏ニ可成キ教ヲ知ラム。(巻11-9)

2.5 「遺言」

「遺言」は、表2のように、天竺震旦部と本朝仏法部にあり、本朝世俗部には皆無である。多くは(13)のように名詞用法で使われるが、本朝仏法部には(14)のような動詞用法で使われるものも見られる。

(13) 深ク父ノ遺言ヲ信ジテ、寧ニ此羅漢ヲ供養シテ晝夜ニ帰依スル事無限シ。(巻2-29)

(14) 此レニ依テ、「三年、坊ノ戸ヲ可開ズ」トハ遺言シケル也ケリ。(巻20-24)

この語は、古記録など変体漢文には使用例が見られるものであり、漢文訓読的な特徴を持って『今昔』でも使われたものだと見ることができる。

3. 「3151 書き」の語彙

3.1 分析対象の語彙

「3151 書き」の分類項目に属する名詞には「手」「筆」があるが、それぞれ、「1.5603 手足・指など」の分類項目、「1.4530 文具」の分類項目で使われている例が大部分で、「1.3151 書き」の分類項目で使われている例は少ないため、ここでは考察対象にはしない。動詞には、「書く」「しるす」「写す」があり、「書写」もほとんどの例が「する」を下接する用法で用いられているので動詞用法の語と見ることができる。これら4語の部別の粗頻度と調整頻度を整理すると、表3のようになる。

表3 「3151 書き」の高頻度語（左：粗頻度、右：調整頻度）

部	書く		しるす		写す		書写	
天竺震旦部	63	5.51	24	2.10	14	1.22	73	6.38
本朝仏法部	128	10.82	18	1.52	39	3.30	69	5.83
本朝世俗部	133	13.57	2	0.20	7	0.71	0	0.00
計	324	9.80	44	1.33	60	1.81	142	4.29

3語ある和語のうち、「書く」は、最も高頻度で、後半に進むほどよく使われるようになっていいるのに対して、それより頻度の低い「しるす」「写す」は、後半ではあまり使われず、前半でよく使われていることがわかる。漢語「書写」は、天竺震旦部と本朝仏法部ではとてもよく使われるが、本朝世俗では全く使われなくなっている。以下、これらの語について、個別に分析していく。

3.2 「書く」

表3で、「書く」は、各部にありながらも本朝世俗部に最も多い。この語は、部による頻度の偏りだけでなく、巻による偏りも目立ち、20件以上の用例が存在するのが、巻7、巻10、巻14、巻24、巻28の5つの巻である。このうち、巻7、巻14は、(1)のように、経を書く話題が出てくる説話が多く、巻10は、(2)のように、詩や絵画を書くこと、巻24は、(3)のように、絵画を書くこと、巻28は、(4)のように手紙や文書を書くことが、それぞれ話題になる説話が多い。何かを書く行為の出現の多寡が、巻や部による頻度差になって現れたものと見ることができよう。

(1) 珠ニ浄キ所ヲ造リ儲テ、此ノ経ヲ書ク室ト為リ。(巻7-18)

(2) 柿ノ葉ノ赤ク紅葉タルニ詩ヲ書タリケリ。(巻10-8)

(3) 壁ニ絵ナド書テ得サセ給へ(巻24-5)

(4) 先ヅ宣ハヌ前ニ、怠リ文ヲ書テ進テム(巻28-30)

後に見るように、経や絵画を書写したり描写したりする場合は、類義の動詞が使われることがあり、詩を作文する場合は(5)のように「作る」が用いられることがあるが、こうした様々な対象について「書く」という1つの動詞がカバーしているところから見ると、この語は、とても幅広く使うことのできる、文体的な特徴を持たない語であったと考えられる。

(5) 「宮ノ鶯曉ニ轉ル」ト云題ヲ以テ詩ヲ作ラセ給ケリ。(巻24-26)

3.3 「しるす」

表3で、「しるす」は、天竺震旦部と本朝仏法部に遍在しているので、漢文訓読的な特徴を持っている可能性がある。「しるす」は、「記」と「注」の2つの表記で書かれることが多く、例外はあるものの、概ね次のように使い分けられている。(6)のような、書き留める内容を「を」格に取る場合は「記」、(7)のような、書き留める物を「に」格に取る場合は「注」という使い分けである。

(6) 我レ生レテヨリ以来罪有レヲバ皆不残ズ記シ、生レテヨリ以来タ善ヲ修セシヲバ不記ズ。
(巻9-28)

(7) 其ノ札ニ注シテ云ク、「大安寺ノ大修多羅供ノ錢也」ト。(巻12-5)

そして、天竺震旦部には「記」19件、「注」5件、本朝仏法部には「記」4件、「注」15件が用いられており(他に「註」1件)、部によって表記や用法の多寡が逆転している。漢文訓読的な特徴が、「記」が選ばれる用法でより強く、「注」が選ばれる用法でやや弱くなっていることできよう。

2件だけ見られる本朝世俗部の「しるす」は、「記」「註」が用いられているので、「注」が選ばれる用法が和文的な特徴を帯びていると見ることはできない。実は、(8)(9)に見るように「注」が選ばれる用法で表現される内容が和文で用いられる場合には、「書く」という語が選ばれているのである。

(8) 寺ノ僧共此レヲ見ルニ、札ニ注セル所如此ク也。(巻12-15)

(9) 今昔、加茂ノ祭ノ日、一条ト東ノ洞院トニ、暁ヨリ札立タリケリ。其ノ札ニ書タル様(巻31-6)

こうした用法においては、文体的な特徴を持たない「書く」に対して、「しるす」が漢文訓読的な特徴を有して対立していることを示すものだろう。

3.4 「写す」

表3において、「写す」は、天竺震旦部と本朝仏法部に用例が偏在し、本朝世俗部に見える7件も、巻24-16と巻25-2の2つの説話に集中しており、限定的にしか用いられていない。「写す」の用例を見わたすと、経や法文を対象とする〈書写〉(10)、形や像を対象とする〈描写〉(11)と、「瓶の水を写すが如し」という慣用句(12)の、3つの語義があることがわかる。

(10) 亡ゼル父母ノ為ニ四部ノ大乘経ヲ写シ奉ル。(巻6-45)

(11) 左門ノ府生掃守ノ在上ト云高名ノ絵師有リ、物ノ形ヲ写ス、少モ違フ事無カリケリ、(巻25-2)

(12) 蜜法ヲ授ル事、瓶ノ水ヲ写スガ如シ。(巻11-12)

これら3つの語義は部による出現状況に差は見られない。(10)(11)は、「書く」で示した(1)(3)と同じ意味であり、この意味を表す際に、「書く」と「写す」の間に文体差があり、「写す」には漢文訓読的な特徴があるのだと考えられる。(12)の慣用句は、物事の奥儀を伝授する場合に用いられるが、「写瓶」という漢語に基づく訓読表現である。

このように「写す」は、3つの語義にわたる全体が漢文訓読的な特徴を持っていると見ることができ。なお、『日本語歴史コーパス』では別の語彙素に区分されている「移す」も、もとは同じ1つの「うつす」という和語である。『今昔』の「移す」はすべての部に偏りなく分布し、文体的な特徴は持っていない。

「うつす」が漢文訓読文に限って派生させた語義が「写す」であるわけだが、それが起こった背景には、ジスク(2009)が明らかにしたように、漢字「写」の字義が、訓を通して結びついた「うつす」の語義に浸透した事情がある。

3.5 「書写」

表3で「書写」を見ると、天竺震旦部と本朝仏法部に同程度使われているが、本朝世俗部では全く使われていない。「書写」は専ら「書写する」または「書写供養する」といった動詞用法で用いられるが、その対象は、ほとんどすべての例で、(13)のように經典や経文を対象とした〈書写〉の意味で用いられている。

(13) 自ラ法花経一部ヲ書写シ奉ル。(巻12-29)

この語義では、先述した通り、文体的に中立な「書く」((1)の例)も、漢文訓読的特徴を有する「写す」((10)の例)も用いられたが、「写す」と同様の漢文訓読的特徴を備えた「書写」も多く用いられている。この語義において「写す」と「書写」の使い分けは見られず、「写す」と「書写」は、文体的特徴も重なるところが大きい。両者の違いは、本朝世俗部にも少し用いられる「写す」の方が、漢文訓読的特徴が比較的弱い点である。

IV. まとめと課題

Ⅲでは、3つの分類項目について、類義語群における文体的特徴を分析してきた。そこで指摘した特徴を表にまとめると、表4のようになる。語数の多い「3102名」は名詞と動詞に分けてまとめた。

表4 文体的特徴のまとめ

分類項目	文体的特徴なし	和文体的特徴	漢文訓読的特徴
3102名(名詞)	名(基本義)		
	聞こえ	名(転義)	名聞
	字(あざな)	異名	
			姓 姓名
3102名(動詞)	呼ぶ(基本義)	呼ぶ(転義1)、呼ぶ(転義2)	
	呼ばふ(基本義)	呼ばふ(転義)	
			唱ふ
	名付く(基本義)	名付く(転義)	
3123伝達・報知	伝ふ		
	告ぐ(基本義)		告ぐ(転義)
			教ふ(転義)
		教ふ(基本義)	教へ 遺言
3151書き	書く(作文の意)	作る	しるす
	書く(書写の意)		写す、書写

語の文体的特徴は語形として見えるものではなく、意味のように共起関係にある語から探れるものでもないため、把握するのが難しい。『今昔』の場合、部や巻の頻度差からそれを探ることができる場合が多いが、頻度差は話題差に起因する場合もあるので、慎重な分析が必要であった。

本稿では特に多義語を多く含む類義語群を扱ったが、分析の結果、基本義では文体的特徴のない語であっても、転義において文体的特徴を帯びるものが多く見つかった。「名」「呼ぶ」「呼ばふ」「名付く」では、和文において転義が生じ、その転義が和文体的特徴を帯びるところが共通していた。「告ぐ」のように、共起することの非常に多い語句が漢文訓読語である場合、その語義が漢文訓読的特徴を持つようになる場合もあった。

表で網掛けをした部分は、ほぼ同義の語どうしに文体的特徴が指摘できるものであり、そこに文体的な対立関係に基づく緊密な語彙体系が形成されている様子を確認することもできた。こうした緊密な語彙体系も、語義を限定した上で形成されている場合が多いこともわかった。

本稿を受けた課題としては、次のようなことが指摘できよう。まず、語の文体的特徴が、語義

の拡張などによって生じる現象について、より広範囲の多義語を対象に、その実態を把握し、詳しい分析を行うことが必要である。また、ほぼ同義の語の間に文体的な対立関係が認められる場合、そこに意味差があるのかどうかの分析が、本稿では十分に行えていない。田中（2022）では、文体的対立関係のある語には意味差を伴う場合が多いことを指摘したが、多義の現象が絡む場合にもそれが認められるかどうか考察が必要である。『今昔』を資料とした語彙の文体的特徴の研究は、開拓の余地が大きい。

参考文献

- 近藤明日子・田中牧郎（2020）「『分類語彙表番号－UniDic 語彙素番号対応表』の構築」（『国立国語研究所論集』18, pp.77-91）
- 佐藤武義（1984）『今昔物語集の語彙と語法』（明治書院）
- ジスク・マシュー（2009）「和語に対する漢字の影響—「写」字と「うつす」の関係を一例に一」（『漢字教育研究』10, pp. 6-45）
- 田中牧郎（1989）「今昔物語集から見た「訓点特有語」の一面—動詞を中心に—」（『文芸研究』120, pp.43-58）
- 田中牧郎（2003）「語彙層別化資料としての今昔物語集—二字漢語サ変動詞を例として—」（『国語語彙史の研究』22, pp.17-36）
- 田中牧郎（2014）「『日本語歴史コーパス』の構築」（『日本語学』33-14, pp.56-57）
- 田中牧郎（2015）「『今昔物語集』に見る文体による語の対立—本朝仏法部と本朝世俗部の語彙比較」（近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』pp.119-148）
- 田中牧郎（2016）「平安時代の「しるし」と「かひ」—コーパスを用いた語誌研究—」（『国語と国文学』93-5, pp.42-58）
- 田中牧郎（2022）「『今昔物語集』における語彙の文体差—人間・家族を表す名詞語彙を事例に一」（中部日本・日本語学研究会編『中部日本・日本語学研究論集』, pp.329-349）
- 宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉（2014）『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院）
- 山田孝雄（1935）『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（宝文館）
- 山本真吾（1993）「平安時代に於ける動詞「をしふ（教）」の意味用法について—訓点資料の用例に注目して—」（『訓点語と訓点資料』92, pp.17-36）

コーパス・データベース

- 国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』（現在は公開停止中）
- 国立国語研究所『分類語彙表増補改訂版データベース』<https://clrd.ninjal.ac.jp/goihyo.html>
- 国立国語研究所「『日本語歴史コーパス』統合語彙表（バージョン 2022.03）」<https://repository.ninjal.ac.jp/records/3558>
- 国立国語研究所『日本語歴史コーパス』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>

【献呈論文】

自動評価システムによる作文評価は 教師評価の代用になるのか

Can Automated Essay Scoring Systems Replace Teachers' Rating?

小 森 和 子
Komori, Kazuko

1. はじめに

文科省が2020年3月に公表した『大学入学者選抜関連基礎資料集』(https://www.mext.go.jp/content/20200318-mxt_daigakuc02-000005103_8.pdf)によると、平成31年度の一般入試において小論文を課した国公立大学は計131大学で、全体の76.2%にのぼるといふ。また、同資料によると、平成28年度に国公立の大学で推薦入試を実施した2,170学部のうち、学力把握措置として最も利用が多かったのは小論文で、その数は全体の60%にあたる1,301学部であったということである。科目別の試験とは異なり、小論文からは、書き手の言語産出能力に加えて、論理的思考力、知識の多面性、発想や視点の獨創性など、さまざまな側面が垣間見えるため、多様な学生を選抜するのに有用な手段であるといえる。実際、本学においても、一部の入試に小論文が利用されている。

しかしながら、小論文の採点には労力がかかる上、評価に主観が入ることは自明の通りである。主観に基づく評価の場合は、複数の評価者間における評価の一致度(評価者間信頼性)をどのように担保するか、また、同じ評価者内の評価の安定性(評価者内信頼性)を高めるにはどのようにすることも検討すべき重要な点である(野口・大隅,2014:142)。評価の信頼性をできるだけ確保する方法としては、採点基準に策定し、それに基づいて評価するという方法が採られることが多い。しかしながら、基準を設けても、読む順番や量、それに伴う疲労度などによる評価のブレを完全に排除することは困難である。また、一定レベル以上の小論文のみ評価の対象とするといったいわゆる足切りを行えば、読む量や疲労度については軽減が期待できるが、読まずに足切りをするとすると、小論文そのものではなく、当該小論文の書き手に関する他の評価項目、例えば、国語の得点などを対象にして、一度評価を行うほかない。

こうした問題に対応するべく、近年、日本語においても、機械による自動評価研究が進みつつある。日本語学習者向けの作文の自動評価システムである*jWriter*(詳細は後述)を開発した李在鎬氏は、「信頼性のある評価をより少ないコストで実現できる、というのが自動評価の研究を推進する合理的な理由」(李,2022:52)であるとし、自動評価研究が今後ますます活性化する可能

性を示唆している。筆者自身も、研究において、また、学部のプレイズメント・テストにおいて、*jWriter* を活用し、自動評価の有用性や利便性を認識している。

他方、自動評価は、文や文章の長さ、語数、品詞、語種、語彙難易度などの言語の形式的側面を変数として評価するため、文章の構成、内容、文章が与える印象、読み手配慮の意識など、多様な側面を総合的に評価する人間の評価とは異なる。今後、自動評価の精度を高め、人間の評価をサポートする存在として活用していくためには、自動評価が人間の評価とどのような点で符号し、どのような点にズレがあるのかを確認する必要があるだろう。こうした問題意識のもと、筆者は小森ほか（2018）や小森ほか（2022）などにおいて、日本語学習者が執筆した作文の自動評価の可能性や、教師評価との関係性について検討してきた。しかしながら、教師評価の評価者数、作文執筆者のバランス、分析方法などに課題を残していた。

そこで、本稿では、十分な数の教師評価が付与された作文データについて、二つの自動評価システムを用いながら、教師評価と自動評価のそれぞれの評価の特徴を明らかにしたい。これによって、これまでの研究をさらに一歩進め、自動評価と教師評価の関係性について検討を深めることができると思う。

2. これまでの研究

ここでは、本研究の基となる小森ほか（2018）、および小森ほか（2022）の概要を示す。

2.1. 小森ほか（2018）

小森ほか（2018）は、*jWriter* の評価と教師の評価の関連性を確認するために行われた研究である。この研究の動機は、本学部で日本語プレイズメント・テストの作文評価で活用している *jWriter* の判定が、教師評価による判定と齟齬がないかを確認することであった。プレイズメント・テストにおいて、*jWriter* は、語彙科目や文法科目（いずれも多肢選択式）の得点が中級レベル以上と判定された者が執筆した作文に対して起動している。*jWriter* を導入するまでは、プレイズメント・テストで作文評価は行っていなかったが、多肢選択式のテストの結果だけでは十分に受験者の能力を識別しきれないことが問題であった。しかしながら、短時間で処理しなければならないプレイズメント・テストにおいて作文評価に時間をかけることは難しかったため、*jWriter* を導入することとした。これにより、短時間に大量の作文評価が可能となり、プレイズメントの効率が格段に上がった。ただし、*jWriter* の評価結果でプレイズメントに大きな問題は生じていなかったものの、*jWriter* の評価が教師の評価と整合しているか否かについては十分な検証が行われていなかった。そこで、*jWriter* が評価を付与した作文に対して、教師も評価を付与し、その結果を比較し、評価の関係を確認したのがこの研究である。

評価の対象とした作文は、日本語レベルが本学部の中級 ($N=11$)、中上級 ($N=12$)、および上級入門 ($N=7$) の日本語学習者が書いた比較論証型（印刷した紙の本とデジタルブック）の意見文 30 編である。教師による評価は、日本語教育歴 20 年以上の 3 名が独立に行った。教師評価の項目は、包括的評価（7 段階評価）、および「内容」、「構成」、「言語」、「誤用」の項目別評価（5

段階評価)である。なお、作文の評価において、教師は「内容」、「構成」、「言語」の側面に注目していることが実証されているが(伊集院ほか, 2020)、本研究では「誤用」という項目も設けることとした。これは、本学部では、プレースメントにおいて、何ができてきているかだけでなく、何ができていないかも見ていることから、プレースメントにおける評価観点としても、「誤用」の側面が重要だと考えたためである。他方、同30編に対して、*jWriter*でも解析を行い、教師評価と比較した。その結果、*jWriter*の評価は、教師による包括的評価と項目別評価の「言語」との間で、有意な正の相関が確認された。しかし、その他の「内容」、「構成」、「誤用」とは無相関であった。

このように、*jWriter*による自動評価は、教師の包括的評価および言語との間に相関が認められていることから、言語知識や能力によってレベル判定を行うプレースメント・テストにおいては、教師評価の代用として*jWriter*を利用することは妥当であることが示された。

2.2. 小森ほか (2020)

小森ほか(2020)は、プレースメント・テストの一部として実施されている*jWriter*による作文の評価結果が、プレースメント・テストの他の科目の結果と整合しているかどうかを確認するために行われたものである。この研究の動機は、*jWriter*が判定する作文で高いレベルに判定された学習者ほど、プレースメント・テストの他の科目でも高得点なのか、それとも、作文の評価結果が他の科目の得点結果とは関連がないのか、を確認しておく必要があるためである。

使用したデータは、本学部のプレースメント・テストで執筆された作文(上述と同じ比較論証型の意見文)のうち、*jWriter*の5段階評価で中級以上に判定された作文47編である。このうち、中級と判定された作文が27編、上級が20編である。ただし、小森ほか(2018)とは異なり、この研究では教師評価との整合性を検討することが目的ではなかったため、教師評価は付与されていない。

分析の結果、*jWriter*により判定された中級と上級における、文字語彙、文法、読解の得点の差はいずれも統計的に有意であった。また、中級と上級とで正答者数に統計的に有意な差が認められた問題項目を確認したところ、文字語彙や文法では、「みにくい争い」、「合併を見送る」、「直前になってテーマを変えるようでは」など、学習者が初出で習う基本義ではなく、派生義を問う多義表現が多かった。また、読解では、文章の局所的な理解を問う問題ではなく、全体的な理解や推論が必要な統合理解を測る問題において、差が認められた。このように、差の認められた問題項目を見ると、言語知識や言語処理の深さにおいて、中級の書き手と上級の書き手とは差があることがわかった。

さらに、中級と上級の作文の言語統計量を求め、比較したところ、その差が有意であった統計量は多く、総文字数、平均語数、延べ語数、異なり語数、初級前半語、中級前半語、中級後半語、多様性、動詞、和語、漢語、名詞、動詞、助詞などであった。このことから、文章の長さ、使用する語の多様性、漢字使用の多さなどにおいて、差があることが確認された。

ただし、中級と上級の間で、接続表現に差が認められなかった。接続表現は文章の構成、段落内や段落間の関係性を明示する指標であるため、作文の良し悪しに関わる可能性がある。それにも関わらず、中級と上級とで使用数に差がないという結果となった。そこで、接続表現が実際にどのように使われているかを文の機能から分析したところ、上級では使用数は少ないものの、使用されている接続表現にはバリエーションが多く、さらに、適切かつ有効な使い方ができているのに対して、中級では同じ接続表現が繰り返し使われている、正しく使われていない、あるいは、読み手の理解を妨げるような使われ方がされているなど、上級とは明らかに異なる傾向が認められた。

以上のことから、*jWriter*により弁別されるレベルの違いは、言語知識の量だけでなく、使用の適切さなどの質的な面における差も反映しており、プレイスメント・テストとしての作文評価には有用であることがわかった。

3. 本研究の目的

上述の通り、筆者らの研究では、自動評価の結果が教師の包括的評価と大きなズレがないこと、さらに、作文の自動評価によって日本語習熟度をある程度推定できることが実証された。しかしながら、以下のような課題も残された。

まず、評価に当たった教師が少なかった。小森ほか(2018)では、作文の教師評価は日本語教師3名のみによるものであった。評価の観点が多様になるように、また、より多くの評価者に共通した傾向を探るためには、評価を担当する教師の人数を増やし、さらに、日本語教育以外を専門とする教員も含める方が良い。

また、作文データについて再考する必要がある。小森ほか(2018)や小森ほか(2020)の分析対象の作文は、プレイスメント・テストの中で執筆したものであり、文字語彙、文法、読解の科目を受験した後に、30分という時間制限の中で執筆したものであった。また、執筆者の国籍や母語などについても偏りがあった。作文評価は言語的側面も重要であるが、内容や構成といった側面からも評価されるため、日本語学習者の作文だけを対象とするのではなく、母語話者が執筆した作文も含め、かつ、より統制された状況で収集された作文データを対象にすることが望ましい。

最後に、小森ほか(2018)や小森ほか(2020)では、自動評価システムは*jWriter*を使用したがる、システムによって特性が異なることを考慮すると、複数のシステムを利用して解析した方が良かった。日本語学習者の作文評価を目的としたシステムには、*jWriter*のほかにGoodWriting Rater(詳細は後述)というシステムも存在する。そこで、今回はこの二つのシステムを用いることで、自動評価による評価の諸相をより広範に確認したい。

本研究では、これらの課題に配慮しながら、調査や分析方法をより精緻にした上で、教師評価と自動評価の関係について検討する。

4. データの詳細

分析に用いる作文は、日本語母語話者と日本語学習者が同じ課題で同じ執筆条件で書いた作文であること、また、教師による評価が付与されている作文であることを条件とし、伊集院ほか(2018)で収集された教師評価付き作文データ(以下、作文データ)を用いることとした⁽¹⁾。この作文データは、伊集院郁子氏が代表を務めた科研基盤研究(C)「評価者・学習者・意見文の分析に基づく評価の検証：作文の自律学習支援を目指して(18K00680)」(平成18年度～平成21年度)で収集されたデータである。

この作文データは、伊集院郁子氏による「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/terms.html>)と奥切恵氏による「The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (MOECS)」(<https://okugiri.wixsite.com/website/corpus-moecs>)の日本語作文データから抽出されたもので、日本語母語話者15編と日本語学習者15編(中国語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者で、それぞれ5編ずつ)の計30編からなる。作文のプロンプトは、「今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は『インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない』と言います。一方、『これからも、新聞や雑誌は必要だ』という人もいます。あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください」で、一編当たり800字程度で書くよう指示された意見文である。この30編に対して、大学教員44名(日本語教員と人文社会系の専門教員各22名)が行った5段階の評定値と、作文の良い点・悪い点を記述した「評価コメント」が付されている。伊集院ほか(2018)では、この30編の作文を、評定値の高い方から10編ずつ上位群、中位群、下位群に弁別している。

また、伊集院ほか(2020)では、付された評価コメントを分類するために、すべてのコメントを統合し、意味的なまとまりに切片化し、カテゴリー化を行った。この作業によって抽出されたカテゴリーは「内容」、「構成」、「言語」などの10種類である。

以上のデータや分析方法の詳細については、伊集院ほか(2018)および伊集院ほか(2020)に詳細な記述があるため、そちらを参照されたい。

5. 自動評価のツール

自動評価には、日本語学習者の作文評価システムとして実績のある日本語学習者作文評価システム *jWriter* (<https://jreadability.net/jWriter/>)と GoodWriting Rater (<https://goodwriting.jp/wp/>)を用いる。以下にこの二つのシステムの概要と特徴を記す。

5.1. 日本語学習者作文評価システム *jWriter*

日本語学習者作文評価システム *jWriter* (<https://jreadability.net/jWriter/>)は、日本語学習者が

(1) 本データを利用については、伊集院ほか(2018)の研究代表者である東京外国語大学大学院の伊集院郁子氏に許諾を得た。

書いた作文の文章の難易度を、計量テキスト分析の手法を用いて自動評価するシステムである(李・長谷部・村田 2019)。*jWriter* によって得られる言語統計量は、総文字数、文数、段落数、延べ語数、異なり語数、平均語数(一文の平均延べ語数)、語種別語彙数、難易度別語彙数、多様性(延べ語数に占める異なり語数)、接続表現数などの44種⁽²⁾である。

そのうち、平均語数、総文字数、動詞数、難易度別語彙数、多様性、和語数、漢語数の七つの素性によって作文のレベル(作文評価・レベル)が推定される。推定の公式は、「 $1.637 + \text{平均語数} \times 0.045 + \text{中級後半語} \times 0.021 + \text{多様性} \times -0.430 + \text{動詞} \times 0.015 + \text{中級前半語} \times 0.011 + \text{総文字数} \times -0.004 + \text{和語} \times 0.007 + \text{漢語} \times 0.007$ 」($R^2=0.760$)である。この公式は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language: I-JAS)」にある12言語を母語とする日本語学習者(初級、中級、上級の3レベル)373名のエッセイを基準データとして用い、重回帰分析によって得られたモデルに基づいている(Lee&Hasebe, 2020)。なお、エッセイは「食生活」に関する比較論証型の意見文(600字程度)である。詳細は迫田ほか(2020)、迫田ほか(2016)を参照されたい。

また、*jWriter* では、作文評価・レベルのほか、その評価レベルを基に付与される作文評価・ガイドラインという5段階評価(入門、初級、中級、上級、超級)、テキスト情報(文字数、文数、段落数)、語彙情報(語の難易度を色別に表示)、接続表現情報(機能毎に色別に表示)、および語彙リスト一覧(レベル表示、辞書表示など)などの情報も、視覚的に捉えやすいデザインで、学習者にフィードバックできるように設計されている。

なお、*jWriter* では、解析のための最低文字数が300に設定されている。これは、上記の基準データが最低300文字であったことによるという(Lee&Hasebe, 2020)。ただし、精度の高い解析として600字前後が推奨されている。

5.2. 日本語ライティングの自動評価システム GoodWriting Rater の概要

日本語ライティングの自動評価システム GoodWriting Rater (<https://goodwriting.jp/wp/>)は、「比較と意見(論証)」の作文に対して自動評価するシステムである(田中ほか, 2017)。評価は、包括的評価である「ホリスティック評価(Holistic scoring)」および観点別評価の「マルチプルトレイト評価(Multiple-trait scoring)」から成る。観点別評価は「目的・内容」、「構成・結束性」、「日本語」の3種類である。包括的評価と観点別評価はいずれも、1-2(中級前半に近い中級)、

(2) *jWriter* で表示される統計量は全部で44種類あるが、名称は異なるが同じ数値になる統計量がある。具体的には、総形態素数=延べ語数、長文力=平均語数、普通名詞=名詞である。また、レベル付き語数=初級前半語+初級後半語+中級前半語+中級後半語+上級前半語+上級後半語、内容語=名詞+動詞+形容詞であり、接続表現数には接続詞の数も含まれる。さらに、難解語使用率、接続表現使用率、その他の品詞、漢語力、定型句、リーダビリティ・レベル(文章の読みやすさ)は、*jWriter* の定義に基づいて独自に返される値である。

そこで、本稿では、全44種類のうち、総形態素数、長文力、普通名詞、レベル付き語数、内容語、接続詞、難解語使用率、接続表現使用率、その他の品詞、漢語力、定型句、リーダビリティ・レベルの12種を除く32種類の統計量を用いることとする。

3 (中級後半に近い中級), 4 (中級後半, N2), 5-6 (上級前半, N1) の4段階評価で評定値が返される。この評定値は、「日本語学習者の書いた作文に日本語教師がスコアを付与したデータを使用し、日本語教師の付与するスコアを正しく予測できるように (予測の正解率が最大となるように)」ロジスティック回帰を用いて予測モデルを構築し、推定された値であるという。なお、予測モデル構築に使用された素性は、HP にリスト化されて明示されているが、それによると、総文字数、段落数、語種別語彙数、難易度別語彙数などのほか、内容語数、終助詞別頻度数、メタ言語表現数、第1段落の文字数 / 総文字数、最終段落の文字数 / 総文字数などの観点別評価に関わる要素も含めて、62の素性が用いられている。なお、予測モデル構築のために用いられた作文データは、*jWriter* でも使用された I-JAS から抽出された 611 作文に加えて、上述の伊集院郁子氏の「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」134 作文など、合計 1,056 もの作文が用いられている。

なお、HP には、評価のフローチャートが示されており、ホリスティック評価とマルチプルトレイト評価がそれぞれどのような評価観点であるか、それぞれの評定値の目安は何かが解説されている。例えば、ホリスティック評価は、「細部にあまりとらわれなくて、全体的印象を重視して評価する」、マルチプルトレイト評価の目的・内容は「『目的』は、課題達成、つまり、「比較」がなされ「意見」が述べられているかを評価し、『内容』は、メインアイデア (この文章で言いたいこと) の一貫性とサポート (理由、例、説明、読み手の背景知識への配慮) の妥当性を評価する」とある。さらに、構成・結束性は、「『構成』は、「構成意識」(話の順序を考えて書こうとする意識)、「パラグラフ (段落) 意識」(1つのまとまったことがらを1つのパラグラフに書こうとする意識)、マクロ構成 (序論・本論・結論) を評価し、『結束性』は、パラグラフ間のつながりを評価する」、最後に日本語は、「言語知識 (正確さと多様性) とレジスター (適切さ) を評価する」とある。

また、GoodWriting Rater では、推定された評定値のほか、テキスト情報とメタ言語ハイライトが表示される。テキスト情報では、総文字数、総文数、漢字率、文あたりの平均文字数、全体に対する第1段落の割合、全体に対する最終段落の割合など、基本的な言語統計量が返される。メタ言語ハイライトは、*jWriter* の接続表現のように、順接、逆接、対比、換言、例示などの機能別にハイライトされて表示される機能である。これによって、どこにどのようなメタ言語が使われているかが、視覚的にとらえやすくなっている。なお、GoodWriting Rater におけるメタ言語とは、「まず」のような接続詞、「以上のように」のような句、さらに、「次に～について説明する」などの文など、「本文の内容とは直接関係のない、文章の展開を理解しやすくするような機能を持つ表現や説明のこと」(田中・阿部, 2014:31) であるとされている。

なお、GoodWriting Rater は、400 文字以上を最低文字数として設定している。

6. 分析と考察

6.1. 作文の言語統計量

まず、本研究で用いる 30 編の作文データの概要を把握するために、*jWriter* を用いて言語統計量を確認した。その結果は表 1 の通りである。なお、表 1 には GoodWriting Rater が独自に算出するメタ言語数も含まれている。

表 1 の結果を見ると、本作文データが一編あたり約 17 文、740 文字、約 440 語程度で書かれたものであることがわかる。また、語彙難易度としては、初級前半から中級後半までの語が多く、上級語彙の使用は少ない。

表 1 作文 30 編の言語統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>N</i>
総文字数	739.20	56.75	637.00	929.00	30
総文数	17.17	3.28	11.00	24.00	30
平均語数	26.35	4.84	15.70	37.08	30
延べ語数	438.60	42.42	361.00	590.00	30
異なり語数	154.23	20.65	105.00	193.00	30
多様性	0.35	0.04	0.26	0.46	30
名詞	104.10	14.21	73.00	136.00	30
動詞	31.13	6.43	21.00	46.00	30
形容詞	8.77	4.14	3.00	23.00	30
形状詞	6.43	2.42	2.00	12.00	30
連体詞	3.53	2.42	0.00	10.00	30
副詞	8.23	3.94	2.00	19.00	30
代名詞	6.83	2.47	1.00	12.00	30
固有名詞	0.80	1.24	0.00	4.00	30
感動詞	0.07	0.25	0.00	1.00	30
助詞	138.80	18.79	105.00	200.00	30
助動詞	39.23	8.99	22.00	59.00	30
初級前半語	64.27	13.01	45.00	101.00	30
初級後半語	48.77	11.45	26.00	76.00	30
中級前半語	42.87	9.14	25.00	62.00	30
中級後半語	30.90	12.54	2.00	63.00	30
上級前半語	8.40	6.19	0.00	31.00	30
上級後半語	0.50	0.94	0.00	3.00	30

ひらがな	414.20	58.05	337.00	611.00	30
カタカナ	78.73	20.53	41.00	118.00	30
漢字	180.30	42.52	76.00	246.00	30
和語	301.80	33.52	255.00	426.00	30
漢語	71.77	18.99	33.00	106.00	30
外来語	17.37	5.44	8.00	29.00	30
混種語	2.43	1.76	0.00	6.00	30
接続表現数	5.50	2.56	1.00	11.00	30
メタ言語数	7.40	3.14	14.00	2.00	30

6.2. 二つの自動評価の結果

次に、各作文をそれぞれ *jWriter* と GoodWriting Rater にて判定を行った。その結果は表2の通りである。ただし、GoodWriting Rater の評価は 1-2, 3, 4, 5-6 の4段階であるが、1-2 と 5-6 には数値に幅があるため、1-2 を 1, 3 を 2, 4 を 3, 5-6 を 4, の4段階に変換し、統計処理を行った。

その結果、*jWriter* の作文評価・レベルの平均は 2.91 で、*jWriter* の判定（入門、初級、中級、上級、超級）では上級に相当する値であった。また、GoodWriting Rater のホリスティック評価は 3.40 であった。3.40 という値はオリジナルの値の 4 から 5-6 のほぼ中間に相当することから、GoodWriting Rater の基準では中級後半から上級前半（JLPT の N2 と N1 の間）に相当する値であると考えられる。包括的な評価においては、二つの自動評価の結果は同程度だと言えよう。

さらに、GoodWriting Rater の観点別評価では、目的・内容が 2.80 とやや低い値であったが、構成・結束性は 3.33、日本語は 3.57 と、3 を超えており、ホリスティック評価と同様に、中級後半から上級前半のレベルに評価されたと言える。

表2 *jWriter* と GoodWriting Rater による自動評価結果

		<i>jWriter</i>	GoodWriting Rater			
		作文評価・レベル	ホリスティック	目的・内容	構成・結束性	日本語
全体	<i>M</i>	2.91	3.40	2.80	3.33	3.57
	<i>SD</i>	0.56	0.89	0.76	0.99	0.82
	<i>Min</i>	1.22	2.00	2.00	1.00	1.00
	<i>Max</i>	4.12	4.00	4.00	4.00	4.00

6.3. 教師評価（評定値）と自動評価の関係

教師評価と自動評価の関係を分析する前に、*jWriter* と GoodWriting Rater の値に相関がある

か確認した。その結果, *jWriter* は, ホリスティック [$r=.438, df=28, p<.05$], 構成・結束性 [$r=.460, df=28, p<.01$], 日本語 [$r=.527, df=28, p<.01$] との間で相関が確認され, その値も有意であったが, 目的・内容では, 相関の値は有意でなかった [$r=.349, df=28, n.s.$]。

6.3.1. 教師評価による三群の自動評価の結果

教師評価と自動評価がどの程度関連しているかを確認するために, 教師評価の評定値によって分けられた下位群・中位群・上位群の三群別に自動評価の結果を整理した(表3)。これを見ると, 下位群から上位群とレベルが上がるにつれて, *jWriter* の値も GoodWriting Rater の値も高くなる傾向が確認できる。そこで, 三群の差が統計的に有意であるか否かを確認するために, 一元配置の分散分析を行ったところ, *jWriter* の作文評価・レベルにおいては三群の差は有意であった [$F(2,26)=5.628, p<.01, \eta^2=.490$]。ただし, 多重比較の結果, 有意であったのは, 上位群と下位群の間の差のみであった。一方, GoodWriting Rater では, ホリスティック評価 [$F(2,26)=1.558, n.s., \eta^2=.298$], 目的・内容 [$F(2,26)=2.250, n.s., \eta^2=.345$], 構成・結束性 [$F(2,26)=1.500, n.s., \eta^2=.293$], 日本語 [$F(2,26)=2.739, n.s., \eta^2=.373$] のいずれにおいても, その差は有意でなかった。

表3 教師評価, *jWriter*, および GoodWriting Rater による評価結果

		<i>jWriter</i>	GoodWriting Rater			
		作文評価・レベル	ホリスティック	目的・内容	構成・結束性	日本語
下位群	<i>M</i>	2.56	3.20	2.60	2.90	3.10
	<i>SD</i>	0.65	1.03	0.70	1.20	1.20
	<i>Min</i>	1.22	2.00	2.00	1.00	1.00
	<i>Max</i>	3.32	4.00	4.00	4.00	4.00
中位群	<i>M</i>	2.88	3.20	2.60	3.60	3.80
	<i>SD</i>	0.31	0.92	0.70	0.84	0.42
	<i>Min</i>	2.55	2.00	2.00	2.00	3.00
	<i>Max</i>	3.43	4.00	4.00	4.00	4.00
上位群	<i>M</i>	3.29	3.80	3.20	3.50	3.80
	<i>SD</i>	0.42	0.63	0.79	0.85	0.42
	<i>Min</i>	2.61	2.00	2.00	1.00	3.00
	<i>Max</i>	4.12	4.00	4.00	4.00	4.00
全体	<i>M</i>	2.91	3.40	2.80	3.33	3.57
	<i>SD</i>	0.56	0.89	0.76	0.99	0.82
	<i>Min</i>	1.22	2.00	2.00	1.00	1.00
	<i>Max</i>	4.12	4.00	4.00	4.00	4.00

6.3.2. 教師評価と自動評価の相関

以上のように、三群の差は *jWriter* では有意であったが、GoodWriting Rater では有意でなかったため、群間の差ではなく、教師評価の評定値と自動評価の値の間に相関が認められるか否かを確認することとした。教師評価と *jWriter* はピアソン積率相関係数で、教師評価と GoodWriting Rater はスピアマンの順位相関で、それぞれ確認した。

その結果、教師評価と *jWriter* の作文評価・レベルには正の強い相関が認められた [$r=.593$, $df=28$, $p<.001$]。しかし、教師評価と GoodWriting Rater では、相関は有意でなかった[ホリスティック評価 $r=.307$, $df=28$, *n.s.*, 目的・内容: $r=.290$, $df=28$, *n.s.*, 構成・結束性: $r=.298$, $df=28$, *n.s.*, 日本語 $r=.273$, $df=28$, *n.s.*]。

また、教師評価は、専門教員 22 名の評価と日本語教員 22 名の評価の値が独立に求められているため、教師評価を専門教員と日本語教員のそれぞれに分け、自動評価との相関を確認したところ、日本語教員と *jWriter* [$r=.600$, $df=28$, $p<.001$], 専門教員と *jWriter* [$r=.529$, $df=28$, $p<.01$], はいずれも相関の値が有意であった。一方、GoodWriting Rater は日本語教員とホリスティック評価の相関のみ有意であった[ホリスティック評価 $r=.372$, $df=28$, $p<.05$, 目的・内容: $r=.337$, $df=28$, *n.s.*, 構成・結束性: $r=.262$, $df=28$, *n.s.*, 日本語 $r=.307$, $df=28$, *n.s.*]。また、専門教員の評価とは相関が認められなかった[ホリスティック評価 $r=.254$, $df=28$, *n.s.*, 目的・内容: $r=.292$, $df=28$, *n.s.*, 構成・結束性: $r=.226$, $df=28$, *n.s.*, 日本語 $r=.282$, $df=28$, *n.s.*]。

以上のように、相関を確認しても、*jWriter* は、日本語教員と専門教員の両者との間で相関が認められたが、GoodWriting Rater はホリスティック評価が日本語教員との間でのみ相関していた。

6.3.3. 言語統計量と評価の関係

次に、評価の高い作文はどのような言語項目の使用数が多いのかを確認するために、作文の言語統計量と三つの評価（教師評価、*jWriter*、GoodWriting Rater）の相関を確認した（表 4）。

まず、教師評価との間で正の相関が認められた言語統計量は、平均語数、異なり語数、名詞、中級前半語、中級後半語、上級前半語、漢字、漢語の 8 項目であった。なお、負の相関が認められた項目も一つ（副詞 $r=-.502^*$ ）あったが、今回は正の相関のみに着目して論じる。

次に、*jWriter* との間に正の相関が認められた統計量は、平均語数、延べ語数、異なり語数、多様性、名詞、中級前半語、中級後半語、上級前半語、漢字、漢語の 10 項目であった。なお、この 10 項目に教師評価と相関している 8 項目すべてが含まれる。

さらに、GoodWriting Rater との間に相関が認められた統計量を確認する。まず、ホリスティック評価では、中級後半語としか相関が認められなかった。しかし、目的・内容では、中級前半語、中級後半語、上級前半語、漢語、接続表現数、メタ言語数の 6 項目が相関していた。構成・結束性では、延べ語数、異なり語数、動詞、中級後半語、和語、メタ言語数の 6 項目であった。日本語では、異なり語数、形状詞、代名詞、中級後半語の 4 項目であった。GoodWriting Rater は、

表4 評価と言語統計量の相関

	教師評価			<i>jWriter</i>	GoodWriting Rater			日本語
	日本語 教員	専門教員	全教員	作文評価 ・レベル	ホリス ティック	目的 ・内容	構成 ・結束性	
平均語数	$r=.363^*$	$r=.394^*$	$r=.383^*$	$r=.621^{**}$	$r=.252$	$r=-.014$	$r=.049$	$r=.228$
総文数	$r=-.285$	$r=-.249$	$r=-.271$	$r=-.494^{**}$	$r=-.153$	$r=.000$	$r=.056$	$r=-.114$
延べ語数	$r=.288$	$r=.278$	$r=.286$	$r=.392^*$	$r=.236$	$r=.118$	$r=.366^*$	$r=.304$
異なり語数	$r=.531^{**}$	$r=.415^*$	$r=.478^{**}$	$r=.796^{**}$	$r=.327$	$r=.241$	$r=.430^*$	$r=.457^*$
多様性	$r=.322$	$r=.196$	$r=.261$	$r=.592^{**}$	$r=.219$	$r=.256$	$r=.246$	$r=.311$
名詞	$r=.550^{**}$	$r=.595^{**}$	$r=.580^{**}$	$r=.417^*$	$r=.210$	$r=.303$	$r=.185$	$r=.234$
動詞	$r=-.106$	$r=-.131$	$r=-.121$	$r=.103$	$r=-.092$	$r=-.303$	$r=.451^*$	$r=.063$
形容詞	$r=-.241$	$r=-.390^*$	$r=-.320$	$r=.046$	$r=.005$	$r=-.036$	$r=.109$	$r=-.158$
形状詞	$r=.141$	$r=.108$	$r=.126$	$r=.279$	$r=.172$	$r=.141$	$r=.257$	$r=.368^*$
代名詞	$r=.337$	$r=.329$	$r=.338$	$r=.108$	$r=.230$	$r=-.104$	$r=.330$	$r=.408^*$
副詞	$r=-.478^{**}$	$r=-.513^{**}$	$r=-.502^{**}$	$r=-.256$	$r=-.066$	$r=.072$	$r=-.079$	$r=-.222$
初級前半語	$r=-.103$	$r=-.063$	$r=-.084$	$r=-.266$	$r=-.008$	$r=-.446^*$	$r=.068$	$r=-.148$
初級後半語	$r=-.380^*$	$r=-.329$	$r=-.339$	$r=-.481^{**}$	$r=-.323$	$r=-.434^*$	$r=.078$	$r=-.128$
中級前半語	$r=.415^*$	$r=.391^{**}$	$r=.407^*$	$r=.553^{**}$	$r=.326$	$r=.381^*$	$r=.205$	$r=.190$
中級後半語	$r=.630^{**}$	$r=.552^{**}$	$r=.598^{**}$	$r=.789^{**}$	$r=.475^{**}$	$r=.639^{**}$	$r=.363^*$	$r=.484^{**}$
上級前半語	$r=.482^{**}$	$r=.514^{**}$	$r=.505^{**}$	$r=.495^{**}$	$r=.300$	$r=.462^*$	$r=.170$	$r=.290$
漢字	$r=.662^{**}$	$r=.718^{**}$	$r=.699^{**}$	$r=.498^{**}$	$r=.228$	$r=.317$	$r=.270$	$r=.134$
漢語	$r=.570^{**}$	$r=.573^{**}$	$r=.579^{**}$	$r=.421^*$	$r=.350$	$r=.490^{**}$	$r=.130$	$r=.117$
和語	$r=-.020$	$r=-.041$	$r=-.031$	$r=.241$	$r=-.011$	$r=-.033$	$r=.395^*$	$r=.316$
接続表現数	$r=.008$	$r=.003$	$r=.006$	$r=.128$	$r=.133$	$r=.517^{**}$	$r=.318$	$r=.029$
メタ言語数	$r=-.033$	$r=-.041$	$r=-.038$	$r=.142$	$r=.057$	$r=.364^*$	$r=.464^{**}$	$r=.093$

注:* $p<.05$, ** $p<.01$

ホリスティックと観点別のすべてを総合すると、相関が認められた言語統計量は14項目であった。

以上を見ると、教師評価、*jWriter*、およびGoodWriting Rater（ホリスティック評価または観点別評価のいずれか一つ以上）の三者で共通して相関が認められる言語統計量は、異なり語数、中級前半語、中級後半語、上級前半語、漢語の5項目であることがわかる。このことから、教師評価でも自動評価でも、評価が高い作文は中級前半から上級前半までの多様な語や漢語を用いて

いると言えよう。

また、*jWriter* と GoodWriting Rater を比較すると、両者ともに相関しているのは、延べ語数、異なり語数、中級前半語、中級後半語、上級後半語、漢語の6項目で、延べ語数以外は、上述した三者に共通して相関している項目と同じである。

次に、*jWriter* と GoodWriting Rater のいずれか一方のみが相関している項目を確認すると、*jWriter* のみが相関しているのは、平均語数、多様性、名詞、漢字であるのに対して、GoodWriting Rater のみが相関しているのは、動詞、形状詞、代名詞、和語、接続表現数、メタ言語数と、この二つのシステムで傾向が異なっている。*jWriter* のみが相関している平均語数や多様性は作文に多様な語が数多く使用されていることを示すものであることから、*jWriter* による評価は、書き手の語彙知識の量的側面を反映していると言えよう。他方、GoodWriting Rater が相関している動詞数は命題数に比例し、形状詞は表現の豊かさと関わる。また、代名詞、接続表現、およびメタ言語は、段落内の結束性、段落間の論理的関係性、文の機能を表示するなどの重要な働きをする。このことから、GoodWriting Rater による評価は、作文の展開、構成、結束性などの文章の構成や内容的側面を反映していると考えられる。つまり、評価の決め手となっているのは、*jWriter* の場合は、主として、語彙が量的に豊富に使われているか否かであるのに対して、GoodWriting Rater は構成や内容面に関わる言語項目がどの程度使用されているか、であると言えるのではないかと考える。

したがって、これらの自動評価システムを活用する場合には、活用の目的、すなわち、どのような観点を自動評価に委ねたいのかによって、使い分ける、あるいは、両者の結果のどこに注目するかを考慮するのが良いと言えよう。例えば、筆者のように、プレイスメント・テストで学習者が習得した言語知識の量を推定したいという場合には、*jWriter* がより有用であり、学習者が作文の展開や構成などについて学んできたかどうかを確認したいという場合には、GoodWriting Rater が適していると考えられる。

6. おわりに

本研究では、教師評価の付された作文30編について、二つの自動評価システムで解析を行い、教師評価の結果との比較から、システムのそれぞれの特徴について検討した。

その結果、教師評価によって弁別された三群は、*jWriter* による評価結果（作文評価・レベル）においてもその差が有意であったが、GoodWriting Rater による評価結果では、有意な差が認められなかった。また、教師評価、*jWriter*、GoodWriting Rater の三つの評価について、それぞれの評価結果（連続変数）について相関を確認したところ、*jWriter* と GoodWriting Rater の自動評価の間では相関が認められ、さらに、教師評価と *jWriter* の間にも相関が認められたが、教師評価と GoodWriting Rater との間には相関が認められなかった。以上の結果から、教師が作文の包括的評価を行う代わりに自動評価で評価を行いたいという場合には、*jWriter* の値が参考になると言える。これは、*jWriter* の評価と相関している言語統計量と、教師評価と相関している言

語統計量がほぼ同じであることから示唆された。一方、GoodWriting Rater の観点別評価の結果を精査すると、目的・内容や構成・結束性では、動詞数、メタ言語数、接続表現数などの内容や構成に関わる言語統計量との相関が認められた。このことから、作文の内容や構成に関して評価を得たい場合には GoodWriting Rater が有用であると考えられる。

これらの結果から、二つの自動評価システムは、それぞれに異なる特性を有していること、また、自動評価を利用する際には、利用の目的に応じて使い分けることで、有意義な利用につながることを確認できた。

今後は、今回使用したデータに付されている教師の評価コメントについて更に分析を進めたい。具体的には、評価コメントは、内容、構成、言語、形式などに分類されているため、それぞれのコメントが多く付されている作文にどのような特徴があるのか、コメント数と教師の評定値にはどのような関係があるのか、さらに、コメント数と言語統計量、自動評価の評価結果には何らかの関係があるのかなどについて、詳細に分析を進める予定である。こうした分析を行うことによって、教師は作文のどこをどう見て、作文のどこが決め手となって評価を下しているのか、それを自動評価がどの程度実現できているのかを精査していきたい。

付記

拙稿は、2023 年度をもって本学を退官なさる渡浩一先生に捧げるものである。

本研究は、学習者作文評価システム *jWriter* (<https://jreadability.net/jWriter/>), JSPS 科研費 (研究代表者: 李在鎬 (早稲田大学大学院), 16K02794) と GoodWriting Rater (<https://goodwriting.jp/wp/>), JSPS 科研費 (研究代表者: 田中真理 (名古屋外国語大学), 26284074) を用いて行った。また、本研究は、人文科学研究所研究費 (2022 年度～2023 年度, 個人研究第 1 種), JSPS 科研費 (研究代表者: 伊集院郁子 (東京外国語大学大学院), 22H00667), JSPS 科研費 (研究代用者: 伊集院郁子 (東京外国語大学大学院), 18K00680) の助成を受け、東京外国語大学大学院の伊集院郁子氏と早稲田大学大学院の李在鎬氏とともに進めてきた研究の一部である。

参考文献

- 伊集院郁子・李在鎬・野口裕之・小森和子・奥切恵 (2017) 「IRT 系モデルと Readability による日本語作文の定量的分析—大学教員による評価とコンピュータによる自動評価の比較—」『2017 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 214-219.
- 伊集院郁子・小森和子・奥切恵 (2018) 「大学教員によるライティング評価の観点を探る」S. Ishikawa (Ed.), *Learner Corpus Studies in Asia and the World*. Vol. 3, 159-176.
- 伊集院郁子・李在鎬・小森和子・野口裕之 (2018) . 「意見文に対する評価コメントの計量的分析—コレスポネンス分析に基づく考察—」『2018 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 324-329.
- 伊集院郁子・李在鎬・小森和子・野口裕之 (2020) 「評価コメントに見られる意見文評価の様相

- 共起ネットワーク及びコレスポネンシ分析に基づく考察—『第二言語としての日本語の習得研究』第23号, 26-43. 東京: 凡人社.
- 小森和子・李在鎬・長谷部陽一郎・鈴木泰山・伊集院郁子・柳澤絵美 (2018) 「教師による評価とコンピュータによる自動評価はどの程度一致するのか—中上級日本語学習者の意見文の評価を対象に—」『2018年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 278-283.
- 小森和子・伊集院郁子・李在鎬 (2022) 「日本語学習者の作文における自動評価と教師評価の比較」『明治大学国際日本学研究』14-1, 41-67.
- 田中真理・阿部新 (2014) 『Good Writingへのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング』東京: くろしお出版.
- 田中真理・阿部新・影山陽子・佐々木藍子・坪根由香里 (2017) 「ヨーロッパ日本語学習者のライティング分析: 総合的評価とマルチプルトレイト評価結果を参照して」『第21回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』, 75-92.
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編) (2020) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか』東京: くろしお出版.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6-3, 93-110.
- 野口裕之・大隅敦子 (2014) 『テストングの基礎理論』東京: 研究社.
- 李在鎬・長谷部陽一郎・村田裕美子 (2019). 「学習者作文の習熟度に関する自動判定と Web システムの開発について」當作靖彦 (監), 李在鎬 (編) 『ICT × 日本語教育』, 38-53. 東京: ひつじ書房.
- Lee, Jae-Ho & Hasebe, Yoichiro (2020) Quantitative Analysis of JFL Learners' Writing Abilities and the Development of a Computational System to Estimate Writing Proficiency. *Learner Corpus Studies in Asia and the World* 5, 105-120.
- 李在鎬 (2021) 「書くことを支援する自動評価システム [jWriter] (特集: AI や ICT が変える言語教育)」『日本語学』40 (4), 42-53.
- 李在鎬 (2022) 「ライティング評価のための自動評価研究の展望と課題」『早稲田日本語教育学』33, 51-59.

インターネット

- GoodWriting Rater 読み手と構成を意識した日本語ライティング <<https://goodwriting.jp/wp/>>
(最終閲覧日: 2023年10月8日)
- jWriter 学習者作文評価システム <<https://jreadability.net/jWriter/>> (最終閲覧日: 2023年10月8日)
- 『文部科学省 大学入学者選抜関連基礎資料集』 <<https://www.mext.go.jp/content/20200318->

mxt_daigakuc02-000005103_8.pdf> (最終閲覧日：2023年10月16日)

【献呈論文】

〈永遠の女の子〉と〈意地悪な女〉

——『キューティ・ブロンド』に見る女性の連帯の可能性——

〈Eternal Girl〉 and 〈Mean Girl〉

: Possibility of the bonds of sisterhood in *Legally Blonde*

政治経済学部兼任講師 田中 絵美利
Tanaka, Emiri.

1 はじめに ——私的で小さな告発——

はじめに、この文章を私的な話から始めたい。

筆者はもともと近代文学の研究をしていたが、こうして論文を書くのはずいぶんと久しぶりである。明治大学で非常勤講師として勤務し、アカデミックな〈場〉にかろうじて踏みとどまっているが、学会や研究会などのコミュニティからはすべて離脱して久しい。

それは、筆者が〈アカデミック・ハラスメント〉と呼ぶべき仕打ちに遭い、研究する場を奪われたからである。詳細はここでは語らないが、当時、筆者がどのような目に遭っていたかを熟知していた人は学内、学会に複数いる。また、同様の目に遭った同輩もいる。

SNSは世界を大きく変えた。近年、SNS上でハラスメントを告発する女性、性被害を受けたことをカミングアウトし、加害者への処罰を求める訴えを起こす女性が見られる。女性に限らず、社会的には弱い立場にいる人物が、自分よりも社会的に強い立場にいる人物の不正をSNS上で明らかにする行為は日々行われている。SNSは社会的に声を奪われ、声を消されてきたマイノリティに発言する場を与えた。

だが、筆者がハラスメントの被害を受けた当時、SNSはまだそこまで広く利用されていなかった。筆者が大学院博士後期課程に入学したのは2002年である¹。2ちゃんねるで匿名の告発が行われることはあったが、2ちゃんねるは現在広く使われているTwitterやInstagramと比較すると“無法地帯”であり、そこに真剣な告発を書き込むことにはまた別の勇気が必要だった。「裁判を起こしたければ起こしなさい」と筆者に言い放った学内関係者もいたが、裁判を起こすハードルはあまりに高かった。ハラスメント委員会もまだ組織されたばかりで、相談に出向いた筆者

¹ 現在、日本国内において告発の〈場〉として最も多く利用されているSNSはTwitterであろう。Twitterのサービス開始は2006年である。Twitterは2023年7月にXと名称を変えた。が、便宜上、また反発の意も込めてここではTwitterと呼び続ける。

をどう扱っていいのか戸惑っているように見えた。週刊誌への告発を提案してくれた友人もいたが、無名の若い女性研究者の告発など価値のないことは重々分かっていた。

SNSを通じてのハラスメントの告発、インターネット上のフェミニズムの新たな高まりには希望を感じると同時に、複雑な思いもある。筆者が持てなかった〈場〉、筆者が得られなかった不特定多数からの賛同／いいね！を得られることへの羨望、これまで沈黙を強いられてきたマイノリティたちが勇気ある行動を起こし、その存在が可視化されるプロセスへの敬意はもちろんある。が、その一方でこの「フェミニズムの高まり」の最終的な目的地はどこなのだろうか、と懐疑的にもなる。個々の事例についてのゴールは明確であるが、では〈フェミニズム〉としてのゴールはどこに設定されているのだろうか。

近年、筆者よりも若い世代の優秀な研究者たちによって、フェミニズム研究、ジェンダー研究は大きな進展を見せている。2000年代の激しいバックラッシュを吹き飛ばす勢いがそこにはある。若い世代だけでなく、上野千鶴子氏のような女性学研究者の第一人者も変わらず活躍されている²。

が、アカデミックな世界とは距離を置きながらも学生と対話する機会を常に持ち、若い世代の生の声³を聞いてきた筆者は、やはりある種の〈分断〉を感じざるを得ない。フェミニストであることを自覚し、それを公にする者とそうでない者との温度差、アカデミーという特殊な世界に身を置く者と、その外の世界で生きる多くの“普通の人々”との温度差を感じてしまうのだ。

この温度差は、日本の〈フェミニズム〉／〈ポストフェミニズム〉の持つ特殊性にその根拠を求められるだろう。今回、文章を書く機会を与えていただいたので、アカデミズムの内にも外にも定まった場所を得られなかった者として、その特殊性をまとめていきたい。あまりに久しぶりの経験で、論文を呼ぶのもおこがましい拙いものとなるだろうが公にしたい。

本来、このような私的な告発を論文（たとえ試論や研究ノートだとしても）に書くべきではない。が、ジェンダーを研究対象としたことで“アカハラ”に遭った筆者としては、まさに「個人的なことは政治的なこと」であった。15年ぶりに筆を執る動機が、多くのマイノリティたちの勇気ある告発に支えられている事実もあり、私的な、かつ小さな告発から文章をはじめさせていただいた。

なお、筆者に“アカハラ”を働いたのは、筆者の指導教授である故・小川武敏先生ではない。小川先生は最後まで筆者の活躍を期待してくれていた。ハラスメントは小川先生という“父”を失った“遺児”に対して行われた。この点も非常に示唆に富んだファクターであろう。筆者個人の体験は、決して個人的な出来事ではないのである。

² 上野千鶴子氏は、2021年明治大学国際日本学部の特任教授として特別講義「ニッポンのミソジニー」(全5回)を行った。最終回はシンポジウムがZOOM上で開かれ、筆者も聴講した。多くの学生が参加し、ジェンダー研究が“まだ生きている”ことを確認する機会となった。

³ 筆者は現在、明治大学政治経済学部にも所属し、政治経済学部と国際日本学部で授業を担当している。本来自分の専門である文学研究を志す学生とはほとんど接点はない。つまり、文学をあくまで一般教養として学ぶ学生との対話が主である。

2 ポストフェミニズムにおける“フェミニスト”イメージの変化と女性の対立

概して、“フェミニスト”のイメージは悪い。フェミニストの典型的なイメージは、男嫌いのモテないおばさん、ヒステリックでダサイおばさんであると言っても、決して言い過ぎではないだろう。このような悪いイメージを持つフェミニストを、ロザリンド・ギルは「興ざめフェミニスト」と表した（ギル 2020, p.167）。第二波フェミニズム以降、“フェミニスト”にネガティブなイメージがつきまとうようになったのは、日本に限らないのだ。

第三波フェミニズムにおいて、本来当事者となるべき女性たちはすでにフェミニストの悪いイメージをすり込まれていた。田中東子は以下のようにまとめている。

その担い手は、いまだ達成されていないものも含めて第二波フェミニズムの理想が自明視されるポストフェミニズム時代に生まれ教育を受けた女性たちであり、しかし同時にバックラッシュ期にフェミニズムと出会ったがゆえに自らをフェミニストであると自称することに戸惑いを感じる女性たちであった。（田中 2020, p.20）

日本では第三波フェミニズムの象徴として挙げるべき大きな動きはなかったと言われている⁴。欧米では、第三波フェミニズムにおいてフェミニズムはすでに必要のないもの、すでに女性が得るべき権利は得られていると見なされるようになっていた。しかし、日本では90年代以降、フェミニストが何よりも「興ざめ」な存在であり、仮に自分の置かれている状況に満足していなかったとしても、フェミニストになるという選択肢を選ぶことが憚られたからである。欧米に比較すると第二波フェミニズムの成果も不十分であったにも関わらず、日本においてフェミニズムは確実に悪評を帯びていた。

しかし、欧米において現在フェミニズムは第四波のまっただ中にあると言われており、その“波”の中でフェミニズムは“ポピュラー化”している。第四波の特徴として挙げられるのはSNSを使った運動である。#Me Too 運動を代表とするハッシュタグ・フェミニズムだ。誰もがSNS上で（多くの場合は匿名で）フェミニストとしての、あるいはフェミニズムに基づいた主張を掲げること

⁴ いわゆる“ガングロ”に代表される“ギャル”（＝“コギャル”）の存在を日本における第三波フェミニズムの顕れであると指摘する声もあるが、「どこか無条件にイメージする「コギャル」像」は「メディアによって部分的に捻じ曲げられたもの」だと関根麻里恵は述べている（関根 2020, p.80）。“モテ”を意識せずに自分たちのしたいメイクをする“ギャル”は男性から一方的に与えられる価値観とは異なるオリジナルの価値観を持っていたと言える。が、イギリスの第三波フェミニズムの象徴とされるスパイス・ガールズのようなブームとはならなかった。あくまでも特異な存在として着目されていたのである。メディアが安易に援助交際と“ギャル”を結び付けたものもあるが、同時代の多くの日本人にとってはあまりにも“斬新”で“規格外”だったからとも言えよう。顔を真っ黒に塗り、油性マジックをアイブロウライナー、アイライナー代わりに使う“ギャル”はあるべき女性の姿からは逸脱していた。それだからこそ彼女たちの存在から〈フェミニズム〉を読み取るべきであると同時に、異端な存在としてメインストリームからははじき出されたという事実にも着目する必要があるだろう。

ができ、それに賛同することができる。発言している本人がフェミニズムを意識しているかどうかはともかくとして、SNS 上においてフェミニズムは前よりもアクセスしやすくなっている（が、同時に反発も強くなっている）。#Me Too 運動はインターネット上だからこそ実現した女性同士の連帯であった。

“ポピュラー化”したフェミニズムは、フェミニストのイメージを変えた。エマ・ワトソンやビヨンセ、テイラー・スウィフトなどの有名人がフェミニストであることを公言したことで、フェミニズムは“ポピュラー”となった。どう見ても男嫌いのモテないおばさんではない女性、むしろどちらかと言えば男性からもてはやされるであろう魅力的な女性がフェミニストであることを堂々と公言したことで、フェミニストであると自称するハードルが下がったのである。

しかし、ポピュラー化は可視化を伴う。エマ・ワトソンのような女性が作り上げるフェミニズムが広く受け入れられポピュラー化するのには、それがルッキズムと強く結び付いているからだ。エマ・ワトソン自身がルッキズムを利用しているという意味ではない。一般論として、美は強い武器となる。また、『ハリー・ポッター』という大人気シリーズに出演したことによる知名度と好感度は、その発言のイメージを大きく左右する。つまり、発言の内容ではなく、誰がその発言をしているかでその発言の受け取り方が変わるのだ。「興ざめフェミニスト」ではなく「感じのいい女性」、特にルッキズムの観点において「感じのいい女性」だからこそ、みなその発言に耳を傾けるのだ。

「感じのいい女性」によって展開されるフェミニズムは、新たな分断を生むこととなっている。エマ・ワトソンのような「仕事も家族も素敵なライフスタイルも、すべてを手に入れたパーフェクトな人生を謳歌」（田中東子 2020, p.29）している女性だからこそ「感じのいい女性」と受け止められ、フェミニストを自称できる。「パーフェクトな人生」を持てる女性などごく限られている。「パーフェクトな人生」を送る「感じのいい女性」によるポピュラーなフェミニズムは、同時にポピュラーなミソジニーを生み出しているのである（バネット＝ワイザー、サラ 2020）。

フェミニズムの一環として、女性自身が自分自身の身体を労ることを推奨する動きが見られる。フェムテックは、月経や妊娠、出産といった女性が抱える身体的な悩みを解決し、より女性が楽に暮らせるような製品であり、SDGs と関連付けられ 2020 年ごろから日本でもよく名前を聞くようになった。このような試みは女性にとっての選択肢を増やすという点でいい取り組みであるとは言える。

が、フェムテックに関する記事を読んでいると、その関の高さに気付かされる。Web マガジン『metropolitana Tokyo』に「心身の準備を整えて、本当の自分を迎える準備を [フェムテックを、もっと!]」と題された記事が掲載されている（産経新聞 2023）⁵。この記事では、料理研究家の和田明日香、起業家の奥田浩美がフェムテックの一環として、自分の心身といかに向き合

⁵ この記事は、2023 年 3 月 8 日・9 日に行われた「フェムテックを、もっと！——家庭や職場でココロとカラダを学ぶ 2 DAYS——」というオンラインイベントの一部をまとめたものである。このイベントは 9 つのセッションに分かれ、それぞれのテーマに即してゲストが対談を行った。
https://www.sankei.com/special/femcareproject/event/2023-mar/?utm_source=metro&utm_medium=qr&utm_campaign=metro202303（2023 年 10 月 12 日閲覧）

うべきかについて語っている。「一人ひとりの個性が尊重されるようになったいま、“自分らしさ”について考える機会も増えている。自分のありのままの姿を解放するために、心身をどのようにケアしていけばよいのか？」がこの対談のテーマだ。

「からだのケアは、第一にからだにいいものを食べることに。外界から内側を守り、内臓とも一枚皮でつながっている肌を保湿することも大切にしています」と和田さん。奥田さんは「からだに関してはとにかく敏感にしようと心がけている」と語った。

フェムテックが「自分らしさ」と結びつけられている点に着目したい。そもそも、フェムテックは女性が生理やPMS、妊娠、出産などで男性よりも心身に不調を感じる機会が多いために生みだされた。特に日本は低用量ピルの認可が諸外国と比べて遅かったり、無痛分娩を母性と結びつけたりと、女性に痛みを強いる傾向がある。よって、少しでも生理痛が楽なように西洋・東洋医学の知識を持つこと、母性に対する固定観念を取り払うことは女性にとってベターな生き方を選ぶきっかけとなり得る。が、それが「自分らしさ」と連なる必要はない。「自分らしさ」とはずいぶんと耳障りのいい言葉ではあるが、結局それが何を指すのか分からないマジックワードである。例えば、男性が性欲を解消するために風俗店に行く選択をすることを「自分らしさ」という言葉で表すだろうか。自分らしさとは無関係に女性は女性特有の生理現象から逃れられない。

また、この対談の中で「自分らしく」生きるためにやるべきと挙げられたことは、多くの現代女性には困難だ。栄養満点の食事を摂り、部屋の湿度に気を遣い、常に自分自身のからだに敏感でいる。それは社会的に成功し、金銭的にも時間的にも余裕のある女性だからこそ許される行為だ。一時期、「ていねいな暮らし」が流行語となっていたが、まさにそれである。毎日駆けずり回るように働き、子育てをしている今の日本の女性に「ていねいな暮らし」ができるだろうか。この「フェムテックを、もっと！」は男性も含めて21名のゲストが参加したが、そのほぼ全員が社会的な成功を収めた“名のある人々”だ（1名だけ女子高生が参加していた）。この中に1人でも、家計のやりくりで悩み、ドラッグストアで数百円の化粧水を買って、美容院は半年に1回行ければいい方といった、“名もなき令和の日本女性”が参加していれば、もう少しリアリティが生まれただろう。いかに「ていねいな暮らし」が困難か、生理用ナプキンを買うことができないほどの貧困層が生まれている今の日本で、栄養やら保湿がどれほど贅沢なのかを考えれば、「自分らしさ」を語るなど一部のセレブに許された特権的な行為だと分かるだろう。コンビニで“ストゼロ”を買って、家に帰る途中で飲みきり、化粧も落とさず風呂にも入らずに寝る庶民の密かな楽しみは、決して「自分らしさ」として称揚されることはない。

フェミニズムのポピュラー化、それは女性同士の対立を生み出している。SNSを通じてフェミニズムがポピュラー化してはいるが、その多くが名もなき女性の明確には表せない日々の不満によって構成されている。それをフェミニズムの発言としてまとめる立場にいる女性は、一定以上の教養を持っており、自分の不遇が世の中のシステムによって生み出されていることに気付けな

い女性とは明確な格差がある。フェミニズムを知っている女性は、「それは政治の問題だ、政治を変える必要がある」とすぐに言えるが、多くの“普通の”女性の不満は日常的なレベルで留まっている。「個人的なことは政治的なこと」であると知らずに、ダンナの不満、義両親の不満、子育ての不満、恋人の不満を訴えている女性が SNS には大勢いる。

たとえば、インターネットを見ていると、ワーママ対専業主婦の対立がよく見られる。ワーママとはフルタイムで仕事をし、子どもは保育園に預けている女性のこと、専業主婦はパートタイムで働いているケースも含むが夫の扶養範囲内でしか働いていない。この対立が実際に存在するものなのか、それともメディアが作り出したフィクションなのかは分からない。が、インターネット上には互いにマウントを取り合うワーママ対専業主婦の（醜い）争いが繰り広げられている。専業主婦を自立していない、金銭的に余裕がないと見下すワーママ、ワーママを子どもに接する時間がなくてかわいそうと見下す専業主婦。怒りをぶつけるべき相手を間違えたまま、女性同士での対立が続いている。

このように日本のインターネット上には、#Me too 運動のような女性の連帯よりも、むしろ女性同士の対立の方が目立っている⁶。それは今に始まったことではないにしろ、女性同士の連帯、女性同士の結託がなければ、日本の女性が置かれている状況は変わらない。今の状況では、日本に第四波フェミニズムが起きているとは到底言えない。本論では、現代日本において女性の連帯はどうすれば実現するのか、そもそも女性の連帯を阻んでいるのは何なのか考察していきたい。

3 女性同士の連帯、それを阻むもの

3.1 女性の〈ホモソーシャルティ〉の可能性

女性を劣位に置く男性中心的社会の根幹には、男性たちによるホモ・ソーシャルな体制があるという認識は、広く共有されている（セジウィック 1985）。ミソジニーとホモフォビアを共有する男性たちはホモ・ソーシャルなコミュニティを作り、女性を媒介として結束を強めていく。この図式は、たしかに実際の社会、あるいはその社会の中で紡ぎ出される多くの物語の中の人間関係に当てはめることができる。近代以降の多くの物語は〈ホモ・ソーシャル〉で説明をすることが可能である。

では、女性もまた男性たちのように結束を強めれば男性たちに独占されてきた地位を獲得できるのか、男性と女性が対等な関係となれるのか。

東園子は、もともとイブ・コゾフスキー・セジウィックは、〈ホモ・ソーシャル〉という用語

⁶ 日本では2019年に石川優実による#Ku Too運動が展開した。女性にパンプスやハイヒールの着用を強制することを反対する署名を募り、18,856人がこれに応じた(change.org 2019)。一部の企業が女性従業員にローファーやスニーカーの着用を認めるなど一定の成功は収めたが、社会通念が大きく変化したとは言えない。18,856人の署名も決して多いとは言えない(SMAPの解散撤回を求める署名は37万筆以上集まったという(J-CAST 2016))。

を男性に限ったものとして使用していなかった点に着目している。よって、「[女性のホモソーシャルリティ]は、ホモソーシャルリティの語義からすると言葉としては成立可能」である(東 2006, p.77)。
〈ホモソーシャルリティ〉は男性によって占有されているが、原理的には女性にも〈ホモソーシャルリティ〉を作り上げることは可能なのだ。

だが、「女性のホモソーシャルリティは、社会制度の中にも、言語の中にも、多くの女性の経験の中にも不在」である(東 2006, p.78)。それは、〈ホモ・ソーシャル〉体制に基づいて構築されている共同体において、「女性は「セクシュアルな存在」でしかなく、それゆえに「性的なもの」と強固に結びつけられ」ているからだ(東 2006, p.80)。男性によって構成されている男の〈ホモソーシャルリティ〉の中において、女性は〈性〉を付与された存在である。したがって、その枠内においては女性はあくまでも〈性〉的な存在で、「女性の間の個別的で強固な関係性を表す語は、「レズビアン」という「性的」とされている言葉しか用意されていない」(東 2006, p.80)。女性同士が特に肉体的／性的な欲求で結び付いている関係を我々は〈レズビアン〉と呼称してきたが、「非性的」関係で女性同士が結ばれることはなかった。それは、「強制的異性愛を伴う男性ホモ・ソーシャル体制においては「セクシュアルな存在」でしかない女性にとって、他の女性は男性の愛を争う競争あいてでしかありえない」からだ(東 2006, p.80)

インターネット上でよく使われる“害悪女”という語がある。“害悪女”は、自分の夫／彼氏の浮気相手となる可能性のある女性を指す。仮にその“害悪女”と見なされる女が他意なく接していたとしても、夫／彼氏が心を動かされる可能性があるとして妻／彼女が判断すれば、“害悪”と見なされる。ここで、仮に夫／彼氏が浮気や心変わりをしたとして、その夫／彼氏を責める態度はあまり見られない。あくまでも、夫／彼氏に近付き、夫／彼氏を誘惑した女が悪いのである。

男性が不倫をした際に、男性ではなく不倫相手の女性に批判が集中するのはよくあることだ。男の〈ホモソーシャルリティ〉において、女は男性にとって性的な存在であるが主体的な性は持ち得ない存在と見なされている。女性の譲渡を通して男性同士の連帯は強まり、一夫一婦制の婚姻制度により安定した社会体制が築かれる。これが、〈ホモソーシャルリティ〉あるいは家父長制に基づいた近代社会の基本ルールだ。よって、女性は男性によって〈聖女〉と〈娼婦〉に都合よく分類される。しかし、女性もまた女性を分類する。多くの女性にとって〈正妻〉という安定した立場はとても魅力的だ。いまだに多くの女性にとって結婚はゴールである。よって、結婚というゴールへの道筋を阻害する女、婚姻関係に亀裂を加える女は“害悪”でしかないのだ。このとき、“害悪女”にのみ批判の矛先が向けられ、男性の主体性は完全に無視される。どんなに誘惑されてもそれを突っぱねることは可能なのに、突っぱねなかった男性が責められることはない。あくまでも悪いのは、あるいは不倫のきっかけを作ったのは、不倫相手の女性なのだ⁷。

これはまさに男の〈ホモソーシャルリティ〉の内部では、女性自身も女性に〈性〉を付与して区別している事実の証明だ。女性が女性を“害悪”と見なすのは、その女性が〈性〉的な力で自ら

⁷ 言うまでもなく、その背後には“男性の性欲は抑えられない”という偏見がある。

のテリトリーを侵犯し得るからである。女性を〈聖女〉か〈娼婦〉の2種に分ける男性の都合の良さをフェミニズムは批判してきたが、女性が女性をまなざすときにもまた、この二分法を無意識的に使っている⁸。

このようにいまだに日本の多くの女性が家父長制的な女性観を抜け出せないのは、日本において第二波フェミニズムが欧米ほどの成果を上げられなかったからであろう。第二波フェミニズムの成果として男女雇用機会均等法の施行が挙げられるが、同じ年に国民年金の第三号被保険者の制定、労働者派遣法の成立も為されている。この3つの法律／制度が同年に成立したという事実、日本における男女平等実現の難しさ、根強い近代的ジェンダー観が見て取れる。すなわち、女性の社会進出を推進する法律を成立させながらも、女性が家庭に収まる選択をしやすい制度、女性をより不安定な労働環境に置く法律を成立させているのである。事実、女性の正規雇用率は男性よりも圧倒的に低い。

日本の男女平等政策は、そもそも“外圧”によって行われた。1975年、国連により国際女性年が制定された。これに続き、1979年には女子差別撤廃条約（=女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約）が採択され、日本は1980年にこれに署名、1985年に批准した。アメリカ、ドイツ、フランス、中国も日本と同日に署名しており⁹、女性差別の撤廃、男女平等の実現は国際的な流れであったと言えよう。条約に批准するためには条約に則った政策を実現しなければならず、批准と同年に男女雇用機会均等法が制定された。1985年に日本において男女平等が矛盾を孕んだ形でしか実現しなかったのは、ここに理由が求められる。

1999年には日本で男女共同参画社会基本法が成立する。男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」である（男女共同参画社会基本法第2条）。この法律が成立した背景にも“外圧”がある。1990年5月に、国連は「西暦2000年に向けての婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略に関する第1回見直しと評価に基づく勧告及び結論」を採択した。2000年を目処に、より具体的な男女平等社会の実現を目指すことを定めたのである。この勧告を受け、日本政府も基本的な施策の見直しを行い、「西暦2000年に向けての新国内行動計画（第一次改定）」（1991年5月30日決定）の中で初めて「男女共同参画」という用語が使われた¹⁰。

このように、日本においてフェミニズム／男女平等を実現する政策は、国際的な流れに後押し

⁸ ただし、男性が女性を2種に分けたらその分類は固定的になるのに対し、女性が同じ女性に対して行う分類は流動的である。誰もが“害悪女”になる可能性があり、それは同時に女性同士の敵対関係が狭い範囲、コミュニティで起こり得ることを示している。

⁹ アメリカは日本と同じ1980年7月17日に女子差別撤廃条約に署名しているが、条約の批准はいまだしていない。

¹⁰ 男女共同参画局は、「参加」ではなく「参画」という用語を使う理由を、「単に女性の参加の場を増やすだけでなく、その場において政策・方針の決定、企画等に加わるなど、より主体的な参加姿勢を明確にするため」としている（男女共同参画局、公開年不明）

されて進められた。いわば「管制フェミニズム」(大泉 博子 2018) だったのである。

したがって、日本において第三波フェミニズム以降目立った成果が上がっていないのも当然と言えるだろう。前述したワーママと専業主婦の対立構造も、男女雇用機会均等法の制定と第三号被保険者制度によって作られたのだ。では、どうすれば現在の体制、法制度のままで女性同士の連帯が実現するのだろうか。もちろん、より男女平等に近づき、女性同士が対立しなくていい体制、法制度に転換する方が好ましい。が、それにはかなりの時間が必要だ。そして、体制や法制度を変えるためにもまず女性同士の連帯が求められるのだ。今、この日本で私たち女性たちに何ができるのか、考えていきたい。

3.2 『キューティ・ブロンド』で描かれる女性同士の連帯

まず、アメリカにおいて女性の連帯はどのように描かれているのか、見ていきたい。

2001年にアメリカで公開された『キューティ・ブロンド』(ロバート・ルケティック監督 *Legally Blond*, directed by Luketic, Robert.) は、第三波フェミニズムの象徴的作品と言われている。バービー人形のような、ブロンドで胸の大きい女子大生エル・ウッズは、名家の子息である恋人ワーナーとの結婚を夢見ていたが、結婚相手は「真面目な女性」(Someone serious) でなければいけないとフラれてしまう。ワーナーはハーバードのロースクールへの進学が決まっており、30歳までに上院議員になることを目指している。家族の期待も高いワーナーにとって、エルは「プーちゃん」(Pooh Bear)、すなわち“可愛い存在”、愛玩の対象であり、大人になったら捨てなければいけない存在でしかなかったのだ。

ワーナーへの未練を捨てきれないエルは、自分もハーバードのロースクールに進学し、ワーナーを取り戻すことを目指す。物語は、エルがロースクールを首席で卒業し、自分を見下していたワーナーを捨て、誠実で優秀な弁護士と結婚して幕を下ろす。

この作品が第三波フェミニズムの象徴とされるのは、〈ガール・パワー〉が描かれているからだ。エルは自分が女であることを否定しない。女性らしい体つきを隠すことなく、それをより美しく見せるファッションを好む。ピンクでワフワフなポップデザイン、すなわち“Girly”なモノたちに囲まれ、プラダやシャネルなどのハイブランドを好む自身のこだわりを彼女は最後まで捨てない。たしかに、バービー人形のようなエルは男性にとって性的な魅力に溢れている。が、エルは男性ウケを狙って自分の洋服や持ち物を選んでいるのではない。エルは自分が“Girly”なモノが好きだからそれを選んでいるのである。エルの恋愛に対するスタンスは、決して受動的ではない。ハーバード入学という難関を乗り越えるパワーは、王子様の到来をただ待っているだけのプリンセスではないのだ。

アメリカにおける第三波フェミニズムのもう一つの象徴として取り上げられる、商業雑誌 *Sassy* (1998-1996) についての論考をまとめた上谷香陽は、*Sassy* の編集意図を以下のようにまとめている。

この雑誌の哲学においては、女の子であることは「よいこと」であった。Sassy は girl culture(女の子文化)を肯定的に評価した。そこには、主流派のメディアをとおして価値を貶められてきた「女の子であること (girlhood)」を自らの手に取り戻そう、というフェミニスト的な考え方があった。(上谷, 2012, p.191)

〈ガール・パワー〉とは、「女の子」が主体的に「女の子」であることを選び、そして「女の子」であるがゆえに発揮できる力である。第二波フェミニズムにおいては、「女の子らしさ」は否定的に語られていた。「女の子らしさ」は、すべて男性たちによって一方的に与えられた男性にとって都合のいい女性像であるとされたからだ。その結果、「女の子らしさ」を否定するフェミニストは男嫌いの、とげとげしい女であるというイメージが造形され、男性からも女性からも忌避されるようになった。しかし、エルは、第二波フェミニズムが作り上げたフェミニストの悪いイメージを払拭し、新しいフェミニズムの可能性を提示している。

また、この作品は〈シスターフッド〉も描いている。エルがハーバードで成功するきっかけとなったのは、彼女が〈シスターフッド〉＝「姉妹の誓い」(the bonds of sisterhood)を何より重視したからである。夫殺害の容疑を掛けられている依頼人の秘密を聞き出し、その秘密を守ることを選んだ。「誓い」を破り、秘密を法廷で明らかにすれば依頼人は間違いなく無罪になるとともに、依頼人の心を聞き秘密を聞き出したエルの将来も開ける。が、エルは頑なに「誓い」を守る。そんなエルの態度をロースクールの男性教授やワーナーは、「くだらない」(Screw sisterhood!)「バカ」(So what?)と卑下する。が、エルは自分の成功よりも〈シスターフッド〉を重視したことで、結果的に成功を収める。そしてまた、エルと依頼人とが〈シスターフッド〉を結ぶことになったきっかけも、もともと同じ社交クラブに所属していた先輩後輩であり、依頼人が主催しているフィットネスのクラスにエルが参加してダイエットに成功したという履歴があったからである。エルは依頼人の面会の際に“some necessities”として化粧品やファッション誌を差し入れている。依頼人はそれに感動し、エルに“You are an angel!”と言っている。つまり、エルは依頼人と“Girly”なモノで共鳴し合い、〈ガール・パワー〉で連帯したのである。〈ガール・パワー〉は「女の子」同士の連帯によって得られる力でもある。

『キューティ・ブロンド』は興行的にも成功を収め、高い評価を得ている。主演のリース・ウィザースプーンの出世作とあってよいだろう。2003年には続編『キューティ・ブロンド／ハッピーMAX』(チャールズ・ハーマン＝ウルフエルド監督, *Legally Blonde 2: Red, White & Blonde*, directed by Herman-Wurmfeld, Charles.)が製作された¹¹。

では、『キューティ・ブロンド』で女性同士の連帯はどのように描かれているのだろうか。『キュー

¹¹ 2009年には『キューティ・ブロンド3』(サヴェージ・スティーブ・ホランド監督 *Legally blondes*, directed by Holland, "Savage" Steve.)が公開されているが、リース・ウィザースプーンは製作者として作品に関わっているものの、物語にエルは登場しない。エルの従妹であるブロンドの双子の姉妹が主人公であり、評価は決して芳しくない。

ティ・ブロンド』においては、女性同士の連帯を阻んでいるのは男性ではなく、女性である。

まず、エルの入学を認めたロースクールの教員たちは全員男性である。ロースクールには女性の教員もいるが、入学資格を検討する委員会は男性のみで構成されている。彼らはエルの作成したPRビデオに啞然としながらも、彼女の出身大学での成績、LSAT (Law School Admission Test) の点数、その他課外活動での成果を認めている。エルのこれまでの実績を加点方式で認め、ロースクールに提出すべき論文をビキニ姿で出演したPRビデオにするという異例の行動を減点対象とはしていない。ハーバードのロースクールは男性を中心に構成されている〈男社会〉であるが、男女によって審査基準を変えるような不正は行われていない。エルの水着姿に下心を見せた教員もいない。ジェーン・スーは、教員たちが「最終的に彼女を合格にする根拠として「多様性」という言葉を使って」いたことについて、以下のような指摘をしている。

でもエルが「多様性を持つ」と判断されたのは、彼女の外見やPRビデオでのアピール方法が「ハーバード的じゃない」ってだけ。もしかしたらエルはハーバードにありがちな思考の持ち主かもしれないのに、あのビジュアルだけで「多様性」という言葉で括られてしまうのは偏見と言えば偏見で、なかなかヘビーな現実ではある。

(スー・高橋, 2018)

が、映画を改めて観てみると、「多様性」(diversity)という言葉が出てくるのは、エルのオールAという成績が「ファッション専攻」という法学とはまったく縁のない分野で得られたことに対してである。〈ファッション〉は女性的で、学術とはかけ離れたイメージを強く持っている。〈ファッション〉を学んだ経験がロースクールでどう活かされるのか、前例がないためにジャッジをするのは難しい。それゆえ、難色を示す教員もいたが、別の教員が〈ファッション〉に対する偏見を「多様性」という言葉で否定し、音楽やデザインに興味を持っている事実に加点しているのだ。

さらに、ロースクールに入学してからも、エルはロースクールという男性ジェンダー化された組織内で、その組織を運営する教員たちによって差別されることはない。まず、そもそもエルが受講している講義の受講生を見るに、決して女性は少数ではない。男性の方が数は多いように見えるが、それほど極端な男女差は見受けられない¹²。ストロムウエルという女性教授に初回の授業で教室から追い出されているが、それは彼女が宿題をやってこなかったからである。一番前の席に座り、教科書も出さない学生をわざと当て、受講に必要な予習をしていないと確認した上で追い出すのは、エルが女性だからでも、ブロンドだからでも、ピンクのフワフワのペンを使っているからでもない。実際、後にエルと結婚することになるエメットも、ハーバードの教授はみんな

¹² これは、実際のハーバードのロースクールのことを言っているのではない。あくまでも、物語の中のハーバードのロースクールの設定について述べている。しかし、実際のハーバードのロースクールにおいても現在男女で学生数に大きな差はない。一方、法務省によれば、日本の令和2年の司法試験受験者数は男性2641人に対し、女性1062人となっていて、明らかに男性の比率が高いことが分かる(法務省, 2020)。

な意地悪で、ストロムウェル教授の授業を受けた後に部屋で泣いたことがあると言っている。ストロムウェル教授はエルでなくても同じ態度で接しているのだ。アカデミックな世界が男性を中心に構成されているのは事実だが、2001年の段階で物語内で造型されたロースクールに通う学生の男女比に大きな差はなく、入学したばかりのエルに対して教員たちは決して偏見を抱いていない¹³。ハーバードのロースクールにおいて、学生は性別によって差別されることはなく、あくまでも実力至上主義の世界として描かれているのである。

ただし、それは同時にハーバードのロースクールが女性にも男性同等の能力を求める場所であることも示している。ハーバードにおいて、エルが異端な存在と見なされているのは間違いない。エルが他の学生とは“違う”ことはハーバードの教員も当然気付いている。だが、エルの見た目が他の学生とは“違う”からといって、エルを不当には扱わない。女だから、可愛いから、おっぱいが大きいからという理由で優遇されないのは、もともと男性が多数派であったロースクールにおいて、女性を優遇も冷遇もせず男性と同等に扱っているからだ。つまり、ハーバードのロースクールは女性に“男性並”の実力を求める、男性に準じた価値基準に基づいて構成されているのである。

また、エルは行きつけのビューティサロンのスタッフ、客とも親和性が高い。ビューティサロンのスタッフであるポーレットはエルよりもかなり年上で、決して“美人”ではない。「高校中退の中年女」(middle-aged high-school dropout)で「三段腹にデカ尻」(stretch marks and a fat ass)のポーレットは、エルとはかけ離れている。ビューティサロンに来ている他の客も、黒人であったり太っていたりあるいは年を取っていたりと、〈ルッキズム〉の点においてエルよりも劣っている¹⁴。が、エルは決して“バービー人形”的ではない女性を見下したり、差別したりすることはない。一方ポーレットも、ワーナーに婚約者がいると知って泣きながら来店したエルを見て共感する。自分よりも若くて美しいエルを見て妬むことはないのだ。ハーバードのロースクールが男性ジェンダーを付与される場所であるのに対し、ビューティサロンは女性ジェンダーを付与される場所である。客のほとんどが女性であり、男性スタッフもいるが彼は見るからに“ゲイ”である。ビューティサロンという女性的な〈場〉で、エルはファッションや恋愛テクニックを通して女性との連帯を実現している¹⁵。

しかし、エルが連帯できない女性もいる。それは、同じハーバードの学生である女性たちである。特にワーナーの婚約者であるヴィヴィアン・ケンジントンは明らかにエルを敵視している。

¹³ エルが法律事務所のインターンとして実際の裁判を担当した際に、その法律事務所の経営者でもあるキャラハン教授はエルに対してセクシュアルハラスメントを行う。が、インターンとなる前、学内の講義中にはエルを他の学生と同等に扱っている。エルが狭き門であるインターンの座を勝ち取ったのも、講義でのエルの発言が優れていたからである。

¹⁴ エルは美人だけでなく、とても裕福な家に生まれている。ジューン・スーはエルを「ビバヒル的な世界から飛び出してきた女の子」と表している(スー・高橋 2018)。

¹⁵ ハーバードの最初の洗札をエルに浴びせたストロムウェル教授は、エルを鼓舞しハーバードを辞める決意を翻させる。それが大学内ではなくこのビューティサロンで行われている点も、ビューティサロンが女性同士の連帯をより容易にする〈場〉として設定されている証左となる。

授業中にエルの答えを嘲笑し、エルがワーナーとヴィヴィアンが所属している勉強会への参加を申し出たときも、ヴィヴィアンとその親友であるクレアに拒絶されている。さらには、仮装パーティーを開催すると欺し、エルは1人だけそのパーティーに仮装姿（しかもバニーガール）で参加し、恥をかかされる。また、フェミニストでありレズビアンでもあるイニッドも、エルに対して嫌悪感をあらわにした表情で接している。

なぜ、彼女たちはエルを嫌うのか。エルに対してどのような偏見が向けられているのか。それは、“バービー人形”のような女性は美しいけれど頭が悪いという偏見だ。ワーナーが政治家となる自分に相応しいのはマリリン・モンローではなくジャクリン・ケネディだと言ったことから分かるように、エルのような容姿の女性は“dumb blonde”と見なされる。エルが異端な存在と見なされ嫌悪感を向けられるのは、“dumb blonde”はハーバードに入れるわけがないという偏見が根底にある。

だがそれと同時に、エルの存在は“バービー人形”にはなれない女性から見れば脅威である。言うまでもなく、エルは男性から見れば性的な魅力に溢れている。エルは“害悪女”なのである。ロースクールの女子学生たちがエルに対して“意地悪”なのは、エルを見下すと同時に嫉妬しているからである。エルがヴィヴィアンに欺かれてパーティーに行った際、エルはヴィヴィアンがバニーガールの格好を笑ったのに対して、ヴィヴィアンの服装を見て「不感症」(frigid bitch)、「慢性便秘症」(constipated)と言いつつ、つまり、ヴィヴィアンの見た目が決して“Girly”ではないと指摘したのである。それに対してヴィヴィアンは不快感を明らかにするが、クレアは「あなたには指輪が」(You've got the ring, sweetie.)と言いつつ、2人は指輪を見て怒りを鎮める。ヴィヴィアンにとってすでにワーナーと婚約しているという事実だけが、エルという脅威を否定する要因となっている。

一方でエルは決してヴィヴィアンに対して容姿で勝とうとはしていない。ポーレットにヴィヴィアンの容姿について問われた際に、エルは「マスカラとハイライトが必要だけどそれほどの“ブス”じゃない」(She could use some mascara and some serious highlight...but she's not completely unfortunate looking)と答えている。客観的に見て、ヴィヴィアンはエルに比較すれば性的な魅力に欠ける女性として造型されている。ヴィヴィアンは“マリリン”ではなく“ジャッキー”だ。しかし、エルはロースクールにおいて正々堂々と実力でヴィヴィアンに勝ち、ワーナーを取り戻そうとしている。すなわち、「女を使う」ことはしない。エルは自分の容姿やファッションにこだわりを持っているが、他人の容姿を見下して自己肯定感を上げるような女性ではない。ヴィヴィアンに“意地悪”されてバニーガールの格好をする羽目になったのも、ワーナーに言いつけることはない。イニッドは典型的な「興ざめフェミニスト」として造型されているが、エルは特に嫌悪感を示してはいない¹⁶。そしてまた、容姿で人を見下さないのは女性に対してだけではない。明らかに“非モテ”の同級生デヴィットが女性をデートに誘おうと苦戦しているときに

¹⁶ 藤田秀樹は、イニッドについて「この女性学生は、その洒落っ気のない容姿と急進的なフェミニスト的言動によって、エルの特徴を際立たせる引き立て役 (foil) となっている」と指摘している (藤田 2018, p.166)。

は、自ら進んで助け船を出している。容姿に恵まれているにもかかわらず、エルは容姿で人を判断しないのだ。

そんなエルに対して〈意地悪な女〉は、“Girly”ではない女だ。エルがピンクを好んで身にまとっているのに対し、ヴィヴィアンもイニッドも服装はいつもグレーやダークブルーといった地味な色合いだ。エルが肌を露出した服を着ているのに対し、ヴィヴィアンやイニッドはタートルネックを着たり、ブラウスのボタンを一番上まで留めたりと、極力肌を露出していない。エルが〈女の子〉であることを楽しんでいるのに対し、ヴィヴィアンやイニッドはむしろ〈女らしさ〉や〈女の子であること〉 = girlhood を恥じているかのようだ。

エルのような girlhood を楽しめている〈女の子らしさを肯定する女〉すなわち〈永遠の女の子〉と、ヴィヴィアンやイニッドのような〈意地悪な女〉とは女性同士の連帯を結ぶことはできない。彼女たちは〈女の子〉／“Girly”をめぐって対局にいる。が、連帯を阻んでいるのは“意地悪な女”の一方的な敵意である。エルはヴィヴィアンが敵意を向けたときにはやり返すが、それ以外は自分から攻撃を仕掛けることはない。つまり、〈永遠の女の子〉と〈意地悪な女〉との連帯を阻んでいるのは〈意地悪な女〉であり、〈意地悪な女〉が変わることで連帯は実現するのである。

実際、『キューティ・ブロンド』においても、〈意地悪な女〉側のヴィヴィアンが態度を変え歩み寄ることでエルとの間に連帯が生まれ始める。ヴィヴィアンは、自分だけにコーヒーを淹れるよう頼むキャラハン教授に不満を抱いていた。しかし、自分を指導する立場にいる男性に口答えはできず、ずっと我慢していたのだ。ヴィヴィアンは、男性たちにどんなに小馬鹿にされても Sisterhood を守り、自分の私利私欲のために約束を反故にはしないエルの正義感を知り、エルへの偏見を捨てる。ヴィヴィアンはエルに、実はワーナーは補欠合格だったというワーナーの秘密を話す。これは男社会の中では男以上に実力を求められる女の小さな復讐であり、その復讐を通してエルとの間に共感が生まれるのだ。

このように、『キューティ・ブロンド』においては“害悪女”と見なされるエルが「女を使う」ことなく正々堂々とライバルと闘い、その熱意が対局にいる〈意地悪な女〉の心を動かし、女性同士の連帯が実現している。

3.3 〈意地悪な女〉を生み出す構造

こうして『キューティ・ブロンド』において物語は大団円を迎えるわけだが、女性の連帯が実現しないのは〈意地悪な女〉のせいなのだろうか。現実世界においても〈意地悪な女〉さえ変われば、女性は“ガールパワー”を発揮できるのか。そもそも、〈意地悪な女〉を作り出しているのは何なのか。

ヴィヴィアンやイニッドもまた、偏見を受けている存在だ。エルは、“dumb blonde”という偏見を受けている。一方ヴィヴィアンは、ハーバードのロースクールに進学できるような女性は地味でブスなガリ勉（ヴィヴィアンはブスではないが）という偏見、イニッドは言うまでもなく「興

「ざめフェミニスト」に対する偏見をもとに造型されたキャラクターだ。エルが白人のプロンド女性のステレオタイプとして造型されているのと同様に、ヴィヴィアンやイニッドもまたステレオタイプになぞらえて造型されている。

このようなステレオタイプは、完全なるフィクションではないだろう。第二波フェミニズムの時代（1960～80年代）は、今よりも女性の社会進出は難しかった。ロースクールに進学するにしても、アカデミックな世界で女性の権利を訴えるにしても、男性中心のコミュニティに女性が入っていくためには“男勝り”でなくてはならなかった。そこで〈女〉を見せてしまうと、〈女〉を使ってその世界に入り込んだという偏見を受けかねなかったからだ。女性は男性より劣っているのが当然だという価値観の中で男性と対等に渡り歩くには、〈女らしさ〉を捨てる必要があった。〈女〉であることはマイナス要因でしかなかったのだ。「興ざめフェミニスト」と表されるフェミニストのネガティブなイメージは、こうして作り出された。

〈意地悪な女〉は男の〈ホモソーシャリティ〉の中で女性が男性と同じ権利を獲得しようと格闘する中で必然的に生まれた。〈女の子〉のままでは男性と同等にはなれない、それはミソジニーの共有が男性社会における成功の条件だったと言い換えてもいいだろう。女性として生まれながらも〈女の子〉を捨てなければ男性社会で生き残れなかった女たちは、〈永遠の女の子〉を嫉妬と羨望と嫌悪感の入り交じった複雑な感情でまなざす。それは自分たちには選べなかった〈女の子〉としての人生を〈永遠の女の子〉が楽しんでいるからだ。

もちろん、女性として生まれたからと言って〈女の子〉である必要はない。問題は、男のホモソーシャリティにおいては選択肢が限定されていたという点にある。つまり、〈意地悪な女〉を作り出しているのは、女性を不当に扱ってきた男のホモソーシャリティだ。社会的な地位や特権を独占してきた男中心の社会構造なのだ。高橋幸は、「性的魅力を自己利益のために使う女性のふるまいが可視化されるほど、男性たちは警戒感と恐怖感を強め女性憎悪を募らせるという仕組みがある」（高橋, p131）と述べているが、この「女性憎悪」＝ミソジニーは、ホモソーシャルの中で男性と共存する女性によっても共有されている。

エルは、「興ざめフェミニスト」に代わる新しい世代のフェミニストだ。パービー人形のような容姿で男性と対等に戦うエルは規格外で、本人が自覚していなくてもその存在自体がフェミニズムである。第二波フェミニズムの恩恵を受け、〈女の子〉であることを最大限楽しんで男性と対等に渡り合う新しいフェミニスト。「興ざめフェミニスト」として造型されているイニッドは、エルにこそフェミニズムの新しい可能性を見出し、希望を感じるべきだった。エルに眉をひそめるイニッドの存在は、第二波フェミニズムの限界を象徴している。

『キューティ・ブロンド』には女性同士の連帯が描かれている。エルとヴィヴィアンの和解はカタルシスを観客に与えるシーンとなっている。が、仮にヴィヴィアンのような〈意地悪な女〉との連帯がなくても、エルは成功していただろう。ヴィヴィアンとの連帯がなくても、エルは依頼人と〈女の子〉同士連帯していた。エルはヴィヴィアンと連帯したことで裁判を勝利に導いたわけでもないし、ワーナーをヴィヴィアンから譲渡されたわけでもない。ヴィヴィアンが〈意地

悪な女)のままであったとしても、エルは自らの〈ガールパワー〉で勝ち上がっていただろう。つまり、『キューティ・ブロンド』において〈永遠の女の子〉と〈意地悪な女〉との連帯は、物語を盛り上げるエッセンスでしかないのだ。

男のホモソーシャルリティによって分断されている女の連帯をどうやって実現させ、男の連帯＝ホモソーシャルに対抗するのか。『キューティ・ブロンド』においては、〈意地悪な女〉の改心によって実現している。〈意地悪な女〉はいわばヒール役だ。エルが正々堂々とヴィヴィアンと戦おうとしていても、“かわいいは正義”の世界で〈意地悪な女〉はヒールとして扱われる。よって、ヒール役には改心が求められるし、ヒロインへの屈服と共鳴が物語をハッピーエンディングへと導くのだ。しかし、先にも述べたように〈意地悪な女〉は女性が積極的に選択した生き方とは限らない。女性が中心のビューティサロンには〈意地悪な女〉がいなかったことから分かるように、ハーバードのロースクールでは〈意地悪な女〉であることが処世術だったのだ。

現在も日々〈意地悪な女〉は生み出されている。インターネット上で繰り返される女同士の対立構造はさまざまだ。“害悪女”への罵詈雑言、ワーママ対専業主婦、若い女対もう若くない女、子持ち女対子なし女、自分と違う属性を持つ女性に対しての対抗意識、これは両者を〈意地悪な女〉にしている。

日本で暮らしていると、自らを「おばさん」と自嘲気味に自称する女性にたくさん出会う。「おばさんだけいいですか」と遠慮がちに女性が言わなければならないのは、女性に若さを求める、日本男性の根強いロリータコンプレックスによるものだろう。そしてさらに厄介なのは、女が自分以外の他の女性にも「おばさん」と認めることを強要する点だ。女は死ぬまで〈女の子〉であってもいい。それを選ぶのは個々人の選択であるのに、自重することを女が女に求める。そして、“いい年をしたおばさん”が〈女の子〉であろうとするのを侮蔑的なまなざしで見つめる。“かわいい”、“Girly”は若い女性にだけ許された特権であると女性自身が偏狭な固定観念に縛られているのだ。これは男性のロリータコンプレックスを共有しているからであり、男性の価値観に迎合して女性自ら自分たちの選択肢を制限しているのである。

『キューティ・ブロンド』はたしかに新しいフェミニストの姿を描き出している。が、その一方で〈意地悪な女〉を生み出している社会構造にまでメスを入れられているかという点、そうではないだろう。実際、『キューティ・ブロンド2 ハッピーMAX』でエルが転職した法律事務所に勤める女性はとげとげしい黒人女性とオドオドしているファッションとは縁遠い白人女性という、“いかにも法律事務所で働いていそうな女性”のステレオタイプとして造型されている。そして、黒人女性の方は当然のようにエルに対して〈意地悪な女〉となる。『キューティ・ブロンド』から2年、世の中はそう変化していないのだ。

また、日本における『キューティ・ブロンド』の宣伝それ自体に、偏見が含まれていた点も無視できない。原題*Legally Blonde*に『キューティ・ブロンド』という日本語のタイトルを付け、さらにはDVD販売時には宣伝コピーとして「ちょっとエッチでちょっとホロッ プリティ・ピンクコメディ! ホレちゃうね、ピンクにがんばるオンナのこ」とポスターやDVDのジャケット

トに記載した。しかし、管見の限りにおいて「エッチ」なシーンなどなかった。『キューティ・ブロンド』にはキスシーンすら登場しない。たしかに、エルは“Girly”なモノを好む〈女の子〉だ。だが、それを選んでいるのはエル自身であり、他者から「キューティ」「プリティ」「ピンク」「オンナのコ」といった枠に当てはめるのは、この映画の趣旨を完全に読み違えている。海外の映画が日本で公開される時、日本版のポスターの酷さがしばしば話題になるが、*Legally Blonde* の例もかなり酷い部類に入るだろう。



図1 『キューティ・ブロンド』VIDEO・DVD 発売告知ポスター¹⁷

以上、『キューティ・ブロンド』を例にアメリカにおける女性同士の連帯=Sisterhoodの可能性を見てきた。コメディ映画であるため、リアリティに欠ける点はもちろんある。が、エルが〈女の子〉であることを楽しみながら女性同士の連帯を実現させるのは、女性同士が結ぶ関係の新しい可能性を表している。藤田秀樹の述べるように、「エルが男性とのロマンスよりも女性同士の絆に傾斜していくことは、図らずも男性中心の秩序に対するひとつのレジスタンスにもなっている」(藤田2018, p.169)のである。

4 多様性の認められない〈多様性の時代〉に生きる生きづらさ

“多様性”や“自分らしさ”が求められる時代である。しかし、先に述べたように“自分らしさ”の追求は決して簡単にはできない。電車に乗ると多くの美容整形外科の広告が目に入る。全身脱毛や二重整形手術を“自分らしさ”と絡めて勧めてくる。“自分らしさ”はお金と時間がなければ獲得できない。

¹⁷ 「ちょっとエッチでちょっとホロッ プリティ・ピンクコメディ! ホレちゃうね、ピンクにがんばるオンナのコ」というコピーが掲載されていないDVDのジャケットもあるようだが、筆者が購入したDVDのジャケットには図1同様に当コピーが掲載されている。

また、〈意地悪な女〉はエルのような〈永遠の女の子〉にだけ向けられるわけではない。“自分らしく多様な生き方”をする者すべてに〈意地悪な視線〉は向けられる。2023年に亡くなったタレントのryuchellを例に挙げたい。ryuchellはパートナーであるpecoと婚姻関係を結び、一子をもうけた。子どもの誕生後は積極的に育児に参加する“イクメン”としてメディアに登場することも多く、2018年には「イクメン オブ ザ イヤー」に選ばれている。が、性的な対象が男性であるとカミングアウトし、pecoとの離婚を発表した。離婚はしてもpecoと家族であり続け、2人で協力して子育てをしていく、pecoとのパートナーシップは続けるとし、実際、離婚後もpecoのYouTubeちゃんねるに登場している。が、このryuchellのカミングアウトは猛バッシングを受け、それだけが原因とも言えないがryuchellはこの世を去った。

ryuchellとpecoの〈新しい家族〉としての生き方は、“多様性”の象徴であっていいはずだった。現在、多くの方が日本にも同性婚を認めるべきだと考えている¹⁸。同性婚が認められたら、今よりも多様な夫婦が生まれる。“多様性”を認めるのであれば、そもそも“家族”であるために婚姻関係を結ぶ必要すらなくなる。ゲイカップルが養子をとって家族になってもいいし、その際に法律婚を選ぶかどうかは本人たちの自由でいい。一夫一婦制を守る必要もない。本人たちが了解しているのであれば、どういう家族を作り上げてもいいのだ。

しかし、ryuchellへのバッシングは多くの日本人の“多様性”への理解が表面的なものでしかない事実を露呈させた。実際に“自分らしく多様な生き方”をする人物に対して、人々は〈意地悪な視線〉を向け、自分勝手だと非難する。ryuchellの場合は「pecoがかわいそう」とpecoを理由にryuchellをバッシングする傾向が強かった(吉崎 2023)。peco自身がryuchellを非難する発言などしていないのに、pecoの多様な考えを考慮することなく固定観念でpecoを被害者と思なし、ryuchellを悪者にしたのである。規格外の生き方を選んだryuchellは、エルのように強く居続けられなかった。エルは物語の中の登場人物に過ぎない。ryuchellは生前、以下のように発言していたという(当時は「りゅうちえる」名義)。

先入観をなくすためには、社会全体を変える必要があると説くりゅうちえるは、「学校では『人と違うのは変わり者』だと教えるのに、社会に出たら『人と違ってないと抜きん出ることはいできない』と言われる。世界はマルとバツだけで答えが出るものばかりじゃないのに、教育で(多様性への)土台が作れていない」と持論を披露。また、「多様性を否定する人も認める。理解できなくても認め合うのが多様性」と訴えて参加者をうならせた。(ORICON 2020)

ryuchellは〈多様性〉を理解する「土台が作」られていない世の中で、誹謗中傷の対象とされた。ryuchellが実践しようとした〈多様性〉、〈自分らしさ〉は「人と違う」が故に批判された。そもそも、誰かと同じ〈自分らしさ〉などないはずなのに。

¹⁸ 2022年に厚生労働省が実施した「第7回全国家庭動向調査」によれば、同性婚を認めるべきとする人は75.6%に及んでいる(厚生労働省 2023)。

現実世界において、女性同士の連帯をもっと可能にしていくためには女性だけではなく、すべてのジェンダー、セクシュアリティを持つ人々に対する偏見を捨て、“多様な生き方”を尊重する必要がある。男のホモソーシャルリティがあまりに堅牢であるから、それに対して女性同士の連帯が可能かどうかを検討してきたが、そもそも男女に分かれて連帯関係を作る必要性などない。男のホモソーシャルリティが性別を男女の2つに分けている現状においては、女性同士が同じ境遇にある仲間として連帯する必要性はある。しかし、男女の婚姻関係に基づいた社会体制を壊し、“多様な生き方”を認めれば、セクシュアリティやジェンダーを超えた連帯関係も可能になる。

しかし、“多様な生き方”を目の前にすると、男も女も〈意地悪〉になる。“多様な生き方”は自分勝手に思えるのだ。自分とは異なる生き方を選べる人は、自分よりも得をしていると思えるのだ。男も女も「不当な剥奪感」、「相対的な剥奪感」に縛られている。

“多様性”の例としてゲイが挙げられる。たしかに以前よりはゲイに対する社会の許容度は上がっただろう。「おかま」や「ホモ」が差別用語であるという認識も広まっている。また、同性愛カップルを扱ったドラマや映画も増えている。同性愛カップルのポピュラー化が起きているとも言えるだろう。

が、ここにもあらたな分断を作り出す要因がある。近年国内で製作された同性愛カップルをメインに扱った代表的な作品を挙げてみよう。

ドラマ『トランジットガールズ』（フジテレビ 2015）

ドラマ『おっさんずラブ』（テレビ朝日 2016）

ドラマ／映画『きのう何食べた？』（テレビ東京 2019 2021 2023）

ドラマ『作りたい女と食べたい女』（NHK 2022）

ドラマ『僕らの食卓』（BS-TBS 2023）

ドラマ『私の夫と夫の彼氏』（テレビ東京 2023）

映画『his』（ファントム・フィルム 2020）

映画『エゴイスト』（東京テアトル 2022）

まず、注目すべきはほとんどが男性同士のゲイカップルを描いている。『トランジットガールズ』『作りたい女と食べたい女』はタイトル通り女性同士のレズビアンカップルを描いているが、男性同士のゲイカップルに比べるとポピュラー化は進んでいない¹⁹。

¹⁹ 『トランジットガールズ』の主人公の名は葉山小百合であり、名前に「百合」が入っている。「百合」は女性同士の同性愛を指す隠語であるが、男性同士の同性愛を「薔薇」と呼ぶのがもはや差別的な表現であるという認識が広がっているのと同様、「百合」という呼称は当事者が使うというよりも、むしろ女性同士の恋愛関係をフェティッシュに消費する側が使う用語であろう。「百合」を消費する主体が誰であるのかは改めて考察する必要があるが、「百合」はあくまでもフィクションの世界で描かれる女性同士の同性愛であり、それをエンタメとして楽しむ消費者がいることを指摘しておきたい。自身の性的な嗜好、しかもマイノリティとして差別され得る性的な嗜好を、エンタメあるいはエロとして消費されることを当事者が望んでいるとは到底思えない。

そしてまた、ゲイカップルを扱った作品において登場するゲイは、みなとても美しい。フェミニズムがポピュラー化する過程において「感じのいいフェミニスト」が受け入れられたように、「美しく穏やかなゲイカップル」が受け入れられている。実際はあらゆる容姿、あらゆる世代のゲイカップルが存在しているにも関わらずだ。これでは『アナザー・カントリー』(Another Country 1984, directed by Kanievsk, Marek)の時代、あるいは萩尾望都、竹宮恵子らの「24年組」の時代から何も変わっていない。最近、ゲイカップルを扱ったタイのドラマ(『2gether』2020など)も日本で人気だが、そこに登場するゲイカップルもとにかく美しい。

このような現象を通して、ゲイカップルの“多様性”が認められたと言えるだろうか。結局、そこで描かれるのは非現実的なゲイカップルで、誰のためにそんな非現実的なゲイカップルが描かれているのかと言えば、作品のメインターゲットは女性視聴者だろう。女性が観賞して楽しむ、消費できるカップルとして造型されているのだ。つまり、自分にとって都合がよく、利用できる“多様性”は認めるけれど、自分に特にメリットのない“多様性”、自分には与えられなかった選択肢を選んだ“多様性”には〈意地悪な視線〉を向けて自分勝手だと排除する、これが今の日本の“多様性”をめぐる現実だ。

近代社会において作り出されたあるべき男の姿、女の姿、家庭のあり方、夫婦のあり方、そういったステレオタイプは根強く残っている。ステレオタイプを逸脱する存在、行動は批判の対象となる。SNSは見知らぬ者同士の連帯も可能にしたが、見知らぬ者からの誹謗中傷も可能にした。自分とは異なる生き方をする人に対し、とても〈意地悪〉なのだ。

これまで見てきたように、女性同士に限らず、人と人との連帯を阻むのは〈多様性〉に対する妬み、剥奪感、羨望、拒絶感である。〈自分らしさ〉が求められる世の中であるのに、自分とは異なる生き方をする人、自分らしく生きる人に〈意地悪な視線〉を向け、正しくあるように促す(時には暴力的なことばで)。その“正しさ”は男のホモソーシャリティが作り出した価値観に基づいている。連帯すべき女性同士の対立を生み出しているのは男性的な価値観なのである。正しくないものを排除する自浄作用が働くことによって、男のホモソーシャリティはさらに強固になっていく。そしてそれは〈多様性〉を認めない生きづらい世の中を持続させる悪循環を生み出しているのである。

私的な話で始めた文章なので、私的な話でまとめたい。

筆者は〈永遠の女の子〉でありたい女である。その生き方を自分で選んだ。エルのように着たい服を着て、自分の好きなモノに囲まれて過ごすのが私の生き方だ。ファッションにこだわりがあり、ハイブランドが新作コレクションをWebで生中継する際にはチェックして次のトレンドを確認する。体型にも気を遣い、筋トレは欠かさない。子どもは持たず、自分自身に投資するのが私の選んだ生き方だ。〈永遠の女の子〉でありたいが、〈女らしさ〉の基準は自分自身で決める。私にとっての〈女らしさ〉は他の誰の〈女らしさ〉とも違う。そして、言うまでもなく私はフェミニスト、いや平等主義者である。

しかし、筆者に対して〈意地悪な視線〉を向ける女性が多い。筆者を“害悪”と見なす女性もいる。が、何かを選ぶということは何かを捨てることでもある。逆に何かを捨てざるを得なかったからこそ選べたものもある。すべてを持っているスーパーウーマンなど存在しない。エマ・ワトソンでも悩みはあるだろう。その人が持っているものではなく、持っていないもの、持てなかったものに目を向けるべきだ。ネオリベラリズムの観点においては、何でも自己責任論に帰結させる。しかし、社会の構造上、選べない選択肢もたくさんある。現状、同性愛者には結婚（法律婚）という選択肢は選べない。同性愛者に結婚という選択肢が与えられてこなかったのは、国民は結婚し子どもを持って一人前だという近代的な家族観、国民観による。男のホモソーシャルリティは同性愛者に結婚という選択肢を与えなかったのだ。それを自己責任だと言うのは酷すぎる。

インターネット上で複雑に交錯する〈意地悪な視線〉を見て思う。その視線は個人に向けるべきではなく、もっと大きな“何か”に向けるべきである。それが女性同士の連帯を可能にし、ひいては様々な境遇にいる人間同士の連帯を可能にする。

最後に付け加えておきたいが、もちろん男性にも〈永遠の男の子〉でいる選択肢はある。

参考文献一覧

東園子 2006 「女同士の絆の認識論——「女性のホモソーシャルリティ」概念の可能性——」

『年報日本科学』27, 大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学・人類学研究室, pp.71-85

上谷香陽 2012 「フェミニズムとガール・カルチャー (Girl Culture)

——雑誌 *Sassy* の語り方——」『応用社会学研究』54, 立教大学社会学部, pp.185-199

大泉博子 2018 「「男女平等社会」のイノベーション —「男女共同参画」政策の何が問題だったのか—」『政策オピニオン』97, 2018年9月, 平和政策研究所, <https://ippjapan.org/archives/1218>, 2023年10月12日閲覧

ORICON NEWS 2020 「りゅうちえる、“多様性”について持論「否定する人も認めるのが多様性」

6月29日公開, <https://www.oricon.co.jp/news/2165703/full/>, 2023年10月12日閲覧

ギル, ロザリンド 「ポスト・ポストフェミニズムなのか?——ポストフェミニズム時代におけるフェミニズムの新たな可能性」(河野真太郎訳)『早稲田文学』第十次22, 2020年春号, 早稲田文学会, pp.156-183)

Gill, Rosalind. 2016 *Post-postfeminism: new feminist visibilities in postfeminist times* “FEMINIST MEDI STUDIES”16-4, Routledge, pp.610-630

厚生労働省 2023 「第7回 全国家庭動向調査」2023年8月22日公開,

https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ7/NSFJ7_top.asp, 2023年10月13日閲覧

産経新聞 2023 「心身の準備を整えて、本当の自分を迎える準備を [フェムテックを、もっと!]」

『metropolitana Tokyo』 3月17日公開 <https://metropolitana.tokyo/ja/archive/>

metropolitana241-special-06 2023年10月12日閲覧

J-CAST 2016「ジェニーズ事務所「手紙」が物議 37万人「SMAP 署名」の波紋」『J-CAST ニュース』<https://www.j-cast.com/2016/12/12285920.html?p=all> 2016年12月12日 2023年10月12日閲覧

スー, ジェーン・高橋芳朗 2018 「「可愛い子はおバカ」だと、どこかで思っていないか？

——ジェーン・スー&高橋芳朗のラブコメ映画ガイド9』『GQ』3月21日,
コンデナスト・ジャパン,
<https://www.gjapan.jp/culture/movie/20180321/love-romantic-comedy-09>,
2023年10月9日閲覧

関根麻里恵 2020 「「ギャル（文化）」と「正義」と「エンパワメント」『GALS !』に憧れたすべての「ギャル」へ』『現代思想』48-4, 2020年2月, 青土社, pp.77-84

セジウィック, イブ・コゾフスキー 2001

『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（上原早苗・亀澤美由紀翻訳）
名古屋大学出版会

Sedgwick, Eve Kosofsky 1985 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press

高橋幸 2020 「女を使う」から「女子力」へ 女として見られる／見せることをめぐるポリティックスの現在』『早稲田文学』第十次22, 2020年春号, 早稲田文学会, pp.128-137

田中東子 2020 「感じのいいフェミニズム？ ポピュラーなものをめぐる、わたしたちの両義性」『現代思想』48-4, 2020年2月, 青土社, pp.26-33

男女共同参画局 公開年不明 「男女共同参画社会基本法成立のあゆみ 執務提要

第3章 平成元年から2000年プランの策定（平成8年）まで」
https://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/situmu1-3.html
2023年10月12日閲覧

change.org 2019 「#KuToo キャンペーン院内集会を開催しました」6月14日公開,

<https://www.change.org/l/jp/20190611kutoomt>, 2023年10月12日閲覧

バネット＝ワイザー, サラ 2020 「エンパワード——ポピュラー・フェミニズムとポピュラー・ミソジニー イントロダクション」（田中東子訳）『早稲田文学』第十次23, 2020年夏号, 早稲田文学会, pp.212-252

Banet-Weiser, Sarah 2018 “Introduction” *Empowered Popular Feminism and Popular Misogyny*, Duke University Press

藤田秀樹 「屈服すると見せかけて素早く反撃—ロバート・ルケティックの『キューティ・ブロンド』における「馬鹿な金髪美人」という戦略」『富山大学人文学部紀要』69, 富山大学人文学部, pp.161-178

法務省 2020 「令和2年司法試験男女別受験状況」

<https://www.moj.go.jp/content/001345362.pdf> , 2023 年 10 月 12 日閲覧

吉崎洋夫 2023 「「ryuchell を批判している声を聞くと私は悲しい」 peco さんが婚姻解消後も連載担当に語っていた「2 人の愛」」『AERA.dot』2023 年 7 月 14 日公開, 朝日新聞出版,

<https://dot.asahi.com/articles/-/196034?page=1>, 2023 年 10 月 12 日閲覧

ルケティック, ロバート監督 2001 『キューティ・ブロンド』(戸田奈津子翻訳)

20 世紀フォックス

Luketic,Robert (Director) . 2001, *Legally Blond*, MGM

最後に、2023 年度をもって退官される渡浩一先生には、先生が政治経済学部に所属されていたところから大変お世話になりました。年齢も性別も研究分野も異なっておりますが、互いに“動物好き”という点で連帯関係にあったと勝手に信じています。国際日本学部の学生と対話するという刺激的な時間を持つことができているのも、渡先生のおかげです。本当に有り難うございました。

【献呈論文】

日本語上級レベル留学生の読解ストラテジーの使用頻度の変化

－「留学生のための学術日本語Ⅰ」受講前と受講後の比較－

安高紀子
ATAKA, Noriko

I はじめに

明治大学国際日本学部では、留学生を対象として入門から上級まで全7レベルの日本語の授業が開講されている。中でももっとも上位となる上級レベルの日本語科目に「留学生のための学術日本語Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ」がある。2023年度より本学部の初年次教育プログラムが新カリキュラムとなったことに伴い、上級レベルの日本語科目においても初年次教育プログラムの内容に照らし合わせ、学習内容の再検討が行われた。大学での学部留学生に対する日本語教育はアカデミック・ジャパニーズと呼ばれ、留学生が本学部で学ぶためにどのような日本語力が必要かを明らかにする目的で、2021年度には過年度の上級レベルの日本語科目受講者を対象にアンケート調査、およびヒアリング調査が実施された（詳細については、安高他（2021）を参照されたい）。これらの調査結果に基づき、留学生が本学部での学びに必要な日本語力を養うための科目として、2023年度に「留学生のための学術日本語Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ」が開講された。

「留学生のための学術日本語Ⅰ」はアカデミックな文章を読むスキルの育成を目指す科目である。大学での学びにおいては、専門的な内容の長い文章を読み、要点を掴み、内容を理解する力が求められる。石井・田川（2010）は日本語学習者に対する読解教育に関して、読みを一つの技術と捉えた読解ストラテジー教育の重要性を指摘している。安高他（2021）の調査においても、読解の授業に対して、留学生から文章をどう読めばよいか、汎用性のある読み方を教えてほしいとのコメントがあった。したがって、本科目では読解ストラテジーにはどのようなものがあるのかを学び、それらのストラテジーを用いた読解練習を中心に行うこととした。そこで、留学生が文章読解でどのようなストラテジーを使用しているのか現状を把握するため、本科目の受講者に対し、読解ストラテジーの使用に関する質問紙調査を行った。本稿では、質問紙調査の回答を基に、読解ストラテジーの使用傾向、および本科目での学びを通して、読解ストラテジーの使用頻度には変化が生じたのかを検証し、本科目の授業実践との関係について考察する。

Ⅱ 対象となる授業の概要

「留学生のための学術日本語Ⅰ」は本学部留学生の1年次必修科目である。授業は2023年春学期に週1回2コマ（1コマ＝100分）全14回（28コマ）で、読解ストラテジーを用いて文章を読む実践練習を行った。授業で使用したのは、グループさくら（2019）『メタ認知を活用したアカデミック・リーディングのための10のストラテジー』で、このテキストは、【計画】・【モニター】・【問題解決】・【評価】のプロセスを意識しながらメタ認知を活用した読み方が段階的に練習できる（福島他2017）ことが特色とされ、メタ認知の4つのプロセスに関わる読解ストラテジーが1課に1つ学べるようになっている（藤田他2018）という。

表1に、2023年度に実施された「留学生のための学術日本語Ⅰ」の学習内容を示す。各回の授業で、基本的には使用テキストの1課分を扱った。授業では、最初に学習する読解ストラテジーについて、どのような場合に使用できるのかを考え、次に読解ストラテジーを用いた読解の実践練習を行った。その後、読解でストラテジーをどのように使用したかを学生同士で説明し合うピア活動を行い、自己の読解ストラテジーの使用について言語化し、他者と共有する時間を設けた。また、毎回授業後には、課題として配付された文章を授業で学習したストラテジーを用いて読み、自己のストラテジーの使用について内省を行い、「私の読解ストラテジーの記録」としてまとめ、提出することとした。

表1：2023年度「留学生のための学術日本語Ⅰ」の学習内容

授業回	学習内容
第1回	学術的文章の構成について学び、異なるタイプの学術的文章を読む。
第2回	「読む前に準備する」：読む前に、背景テーマに関する知識を活性化させたり、タイトルから内容を予測したり、読む目標や計画を立てるなどし、何のために読むのか明確にする。
第3回	「知っているルールを利用する」：序論・本論・結論などの構成の型、接続詞や副詞など自分が知っている知識を文章理解のための手がかりにする。
第4回	「周りの情報からことばの意味を推測する」：わからない言葉があったとき、その言葉の前後で使われている言葉や内容から意味を推測する。
第5回	「自分の知っていることや経験に引き付けて考える」：自分が持っている知識や経験に当てはめたり、自分がわかるほかの言葉で言い換えたりして、自分に関連付ける。
第6回	「焦点をしぼる」：筆者の主張やキーワードなど、自分が必要だと思う情報が書かれているところに焦点をしぼることを意識する。
第7回	「ときどき止まってメモする」：大切だと思ったところ、文章の流れが変わったところに線を引いたり、記号をつけたりする。内容を理解できているのか自分に問いかけ、読んだ内容をまとめ、メモしておく。
第8回	「図表を利用する」①：図表がある場合は文章と対応させながら読む。図表がない場合は文章の内容について、読み取ったことを自分で図や表にして整理する。
第9回	1) 「図表を利用する」②：図表がない場合は文章の内容について、読み取ったことを自分で図や表にして整理する。 2) 文章の論理展開を考え、文章を再構成する。

第10回	「質問して確認する」：わからないところや自分は何がわからないのかを明確にし、自分が求めている答えが引き出せるよう、具体的な質問をして確認する。
第11回	1) 「読んだ後、理解度を自己評価する」：読んだ内容を理解できたか、何が理解できなかったのかを自分で評価する。 2) 質問作成ワークショップ
第12回	「クリティカルに読む」とはどういうことか文献を読んで、考える。
第13回	「ストラテジーの選び方・使い方を自己評価する」 自分がどうストラテジーを選び、どのように使っているのか自己評価する。
第14回	おススメの本を紹介しよう：明治大学書評コンテストの入賞文をモデルとし、自分が紹介したい本について、書評を書く。

Ⅲ 調査の概要

1. 調査協力者

調査は2023年度春学期の「留学生のための学術日本語Ⅰ」を受講した留学生28名を対象に実施した。出身地域は、韓国21名、中国4名、香港2名、ベトナム1名である。留学生の日本語能力は日本語能力試験（JLPT）のN1レベル相当である。本調査は、授業の初回と最終回の合計2回行われ、そのいずれの回にも回答のあった25名のデータを調査対象とした。

2. 調査方法

調査はMicrosoft Formsで作成した質問紙を用いて行った。調査時期は1回目が4月上旬の初回の授業後、2回目が7月下旬の最終回の授業後で、調査の際は質問紙のQRコードを教室のスクリーンに提示し、調査協力者は各自のデバイスでアクセスして質問への回答を行った¹。回答時間は特に制限を設けず、各自のペースで回答するようにした。

3. 質問紙票

質問は読解ストラテジーの使用に関するもので、読解時に自分がどのようなストラテジーを使って読んでいるのか、読解ストラテジー40項目に対し、5件法で回答を求めた。

読解ストラテジー40項目は、二口(2020)の調査で用いられたものを採用した。二口(2020)は中級レベル日本語学習者のワーキングメモリ容量と読解ストラテジーの使用との関係を調査しており、調査で使用された読解ストラテジー40項目は、犬塚(2002)の第一言語の読解ストラテジー研究でモデル化された31項目に、第二言語としての日本語の読解ストラテジー研究などで取り上げられている9項目が加えられたものである。また、ストラテジーの相互関係として、犬塚(2002)による構造分類モデルの7カテゴリーの分類が示されている。二口(2020)の調査と同様に、本調査の学部留学生も日本語を第二言語としており、二口(2020)で使用されている

1 欠席などにより授業時に回答できなかったものに対しては、LMS上に質問紙調査のURL情報を掲示し、各自アクセスして回答を行った。

読解ストラテジー 40 項目は本調査の対象者においても適切だと判断した。

表 2 に本調査で用いた 40 項目の読解ストラテジーの種類とカテゴリーを示す。調査では、協力者に読解ストラテジー 40 項目のひとつひとつに対し、「たいへんよく使う」、「よく使う」、「使う」、「あまり使わない」、「ぜんぜん使わない」の 5 件法で、自分自身にとって当てはまるものを回答するよう求めた。

表 2：本調査に用いた読解ストラテジー 40 項目

	読解ストラテジーの種類	カテゴリー
1	大事なところを書き出す	要点把握
2	段落ごとのまとめ（要約）を書く	
3	コメントや内容をまとめたものを書き込む	
4	読みながら大切なところとそうでないところを区別する	
5	大切なところに線を引く	
6	内容をまとめるために簡単な表や図を書く	
7	段落に分けて考える	構造注目
8	段落ごとのまとめ（要約）を考える	
9	分からない言葉や文が出てきた時は、とばして先を読み進む	
10	次にどういう内容が書かれているか予測しながら読む	
11	文章の構造を考えながら読む	
12	題名を考える	
13	文脈から全体像を予測する	
14	どことどこが対応しているかを考えながら読む	
15	速く読もうとする	
16	文章の中で前に読んだ部分と後から読む部分を関連づけて読む	
17	段落の最初、または最後のほうをまず読む	意味明確化
18	一文一文どういう意味かをはっきりさせながら読む	
19	一文を理解するため、語のまとまりを考えながら読む	
20	指示詞（これ、それ、あれ）が指すものを考えながら読む	
21	一文を理解するため、文の前後関係を考えながら読む	
22	母語に翻訳する	
23	わからない言葉や文が出てきた時は前後の文脈から意味を推測する	
24	省略されているもの考えながら読む	
25	一文を理解するため、修飾関係を考えながら読む	
26	具体的な例を挙げながら読む	既有知識
27	既に知っていること（文章を読む前から知っていること）と読んでいる内容を結び付けようとしながら読む	
28	覚えるために繰り返し読む	記憶
29	大切な言葉や文はそのまま覚えようとする	
30	難しい言葉や内容は理解しないで丸暗記してしまう	

31	読み終わってから、自分がどのくらい分かっているかチェックするような質問を自分にする	モニタリング
32	読みながら文章の内容が正しいかどうか考える	
33	自分がどのくらい分かっているのかをチェックするような質問を自分にしながら読む	
34	先生ならどういう質問をするか考えながら読む	
35	どれくらい難しいかを判断して読むスピードを調節する	コントロール
36	分からなくなったら、どこから分からなくなっただのかを考え、そこから読み直す	
37	はじめに全体をさっと読んで大体の意味をつかんでからもう一度読む	
38	分からないところはゆっくりと読む	
39	意味がわからないところや難しいところを繰り返し読む	
40	ときどき読み進むのをやめて、それまでに読んだ内容を思い出す	

4. 分析方法

本稿では、本科目の受講前（授業初回）と受講後（授業最終回）に行った読解ストラテジー 40 項目の使用頻度に関する回答データを分析する。回答は、「たいへんよく使う」を 5、「よく使う」を 4、「使う」を 3、「あまり使わない」を 2、「ぜんぜん使わない」を 1 として数値化し、読解ストラテジー 40 項目それぞれの平均値、標準偏差を算出した。そして、受講前と受講後の平均値の差が統計的に有意かを確かめるため、対応のある t 検定を行った。

IV 結果と考察

表 3 に読解ストラテジー別の本科目受講前と受講後の使用頻度を示す。表の「ストラテジー」の列にある数字は、表 2 の各読解ストラテジーの番号を指している。「受講前」は初回の授業後、「受講後」は最終回の授業後のデータである。「 M 」は平均値、「 SD 」は標準偏差である。「平均値の差」は受講前後の平均値の差分で、受講後の平均値から受講前の平均値を引いた値である。「 t 値」は本科目の受講前と受講後の平均値の差について、対応のある t 検定（有意水準 5%、両側検定）を行った結果である。

表3：読解ストラテジー別受講前と受講後の使用頻度

読解ストラテジー	受講前		受講後		平均値の差	t 値 (24)
	M	SD	M	SD		
1	3.04	1.24	3.64	0.95	0.60	-1.897
2	2.72	1.14	3.04	1.06	0.32	-1.281
3	2.88	1.24	3.12	1.09	0.24	-0.625
4	3.12	1.09	3.80	1.00	0.68	-2.652*
5	4.12	1.17	4.24	1.01	0.12	-0.430
6	2.32	1.22	2.20	0.82	-0.12	0.569
7	3.32	1.15	3.80	1.08	0.48	-1.853
8	3.20	1.12	3.60	1.26	0.40	-1.188
9	3.32	1.41	3.48	1.19	0.16	-0.625
10	3.48	1.36	3.68	1.07	0.20	-0.707
11	2.96	1.06	3.88	1.09	0.92	-3.663**
12	3.20	1.47	3.60	1.35	0.40	-1.359
13	3.44	1.04	3.88	0.78	0.44	-2.193*
14	3.28	1.02	3.88	0.97	0.60	-2.324*
15	2.84	1.31	2.84	1.28	0.00	0.000
16	3.72	1.10	3.88	0.88	0.16	-0.582
17	3.00	1.26	3.52	1.30	0.52	-1.960
18	3.12	1.05	3.28	0.94	0.16	-0.569
19	3.00	1.26	3.04	1.21	0.04	-0.123
20	4.08	1.04	4.00	0.76	-0.08	0.327
21	3.92	1.12	4.12	0.67	0.20	-0.739
22	3.12	1.45	3.24	1.54	0.12	-0.499
23	4.08	0.86	4.12	1.01	0.04	-0.189
24	3.28	1.14	3.04	1.06	-0.24	0.796
25	3.40	1.08	3.60	0.82	0.20	-0.840
26	3.08	1.19	3.12	1.05	0.04	-0.115
27	3.80	1.00	3.88	0.88	0.08	-0.283
28	2.68	1.22	3.12	1.17	0.44	-1.464
29	3.52	1.01	3.52	1.19	0.00	0.000
30	2.60	1.44	2.64	1.19	0.04	-0.135
31	2.52	0.92	3.16	1.11	0.64	-2.782*
32	3.48	1.09	3.48	1.05	0.00	0.000
33	2.80	1.12	2.92	1.00	0.12	-0.413
34	2.80	1.08	2.84	0.99	0.04	-0.143
35	3.44	1.26	3.72	0.89	0.28	-0.893
36	4.12	0.73	3.96	0.79	-0.16	0.891
37	3.20	1.26	3.36	1.19	0.16	-0.451
38	4.44	0.77	4.16	0.94	-0.28	1.319
39	4.48	0.87	4.08	0.86	-0.40	2.000
40	3.20	1.08	3.88	1.17	0.68	-1.944

** $p < .01$, * $p < .05$

1. 読解ストラテジーの使用傾向

本科目を受講した留学生の読解ストラテジーの使用について、調査結果に基づき、「受講前」と「受講後」のストラテジーの使用状況について検討する。

(1) 受講前の読解ストラテジーの使用傾向

まず、読解ストラテジーの使用について、平均値の高いものから見ていく。40項目中もっとも平均値が高いのは「39. 意味がわからないところや難しいところを繰り返し読む」($M=4.48, SD=0.87$)であった。2番目は「38. 分からないところはゆっくりと読む」($M=4.44, SD=0.77$)、3番目は「5. 大切なところに線を引く」($M=4.12, SD=1.17$)と「36. 分からなくなったら、どこから分からなくなっただのかを考え、そこから読み直す」($M=4.12, SD=0.73$)であった。本調査は5件法での回答で、「よく使う」は分析で4と数値化されており、平均値が4.00を超えるものは、留学生が「よく使う」と認識しているストラテジーだと言える。他に4.00を超えるものは、「20. 指示詞（これ、それ、あれ）が指すものを考えながら読む」($M=4.08, SD=1.04$)、「23. わからない言葉や文が出てきた時は前後の文脈から意味を推測する」($M=4.08, SD=0.86$)があり、合計6つあった。本科目受講前は、ストラテジー「5. 大切なところに線を引く」、そして、「意味明確化」(ストラテジー 20, 23)、「コントロール」(ストラテジー 36, 38, 39)のカテゴリーに属するストラテジーの使用頻度が高いことがわかった。

次に、平均値の低いものでは、ストラテジー「6. 内容をまとめるために簡単な表や図を書く」($M=2.32, SD=1.22$)がもっとも低い。続いて「31. 読み終わってから、自分がどのくらい分かっているかチェックするような質問を自分にする」($M=2.52, SD=0.92$)、「30. 難しい言葉や内容は理解しないで丸暗記してしまう」($M=2.60, SD=1.44$)の順であった。本調査の回答「あまり使わない」は2、「使う」は3と数値化されており、平均値が2.99以下のものは全部で10あり、「要点把握」(ストラテジー 2,3,6)、「構造注目」(ストラテジー 11,15)「記憶」(ストラテジー 28,30)、「モニタリング」(ストラテジー 31,33,34)のカテゴリーに多く見られた。

受講前のストラテジーの使用傾向として、使用頻度が高いのは「要点把握」「意味明確化」「コントロール」のカテゴリーのもの、一方、使用頻度が低いのは「要点把握」「構造注目」「記憶」「モニタリング」のカテゴリーのものであった。「要点把握」はいずれにも見られたが、使用頻度の高いストラテジーではこれに該当するのはストラテジー5ひとつのみであった。以上のように、「要点把握」を除けばストラテジーの使用傾向は、使用頻度の高いものと低いものでは、読解ストラテジーのカテゴリーに相違が見られた。

(2) 受講後の読解ストラテジーの使用傾向

「受講後」の読解ストラテジーの使用では、平均値が4.00以上のものは6つあった。平均値がもっとも高いのは「5. 大切なところに線を引く」($M=4.24, SD=1.01$)で、次に「38. 分からないところはゆっくりと読む」($M=4.16, SD=0.94$)、3番目は「21. 一文を理解するため、文の前後関係を考えながら読む」($M=4.12, SD=0.67$)と「23. わからない言葉や文が出てきた時は前後の文

脈から意味を推測する」($M=4.12, SD=1.01$)であった。続いて「39. 意味がわからないところや難しいところを繰り返し読む」($M=4.08, SD=0.86$)、「20. 指示詞（これ、それ、あれ）が指すものを考えながら読む」($M=4.00, SD=0.76$)であった。カテゴリーでは、「要点把握」（ストラテジー5）、「コントロール」（ストラテジー 38, 39）と「意味明確化」（ストラテジー 20, 21, 23）に属するストラテジーの使用頻度が高いことがわかった。

次に、平均値が低いものとして、2.99 以下は5つあった。もっとも平均値が低いのは「6. 内容をまとめるために簡単な表や図を書く」($M=2.22, SD=0.82$)で、次が「30. 難しい言葉や内容は理解しないで丸暗記してしまう」($M=2.64, SD=1.19$)であった。それに続き「15. 速く読もうとする」($M=2.84, SD=1.28$)と「34. 先生ならどういふ質問をするか考えながら読む」($M=2.84, SD=0.99$)、「33. 自分がどのくらい分かっているのかをチェックするような質問を自分にしながら読む」($M=2.92, SD=1.00$)の順であった。カテゴリーでは、「要点把握」（ストラテジー6）、「構造注目」（ストラテジー 15）、「記憶」（ストラテジー 30）、「モニタリング」（ストラテジー 33,34）のストラテジーの使用頻度が低いことがわかった。

受講後のストラテジーの使用傾向では、「要点把握」はいずれにも共通しているが、それ以外は、使用頻度の高いものは「コントロール」「意味明確化」、使用頻度の低いものは「構造注目」「記憶」「モニタリング」で、カテゴリーではそれぞれ異なる傾向が示された。

（3）受講前と受講後の読解ストラテジーの使用傾向

受講前と受講後で使用頻度の高いストラテジーはそれぞれ6つあり、それらを比較すると、ストラテジー「5. 大切なところに線を引く」、そして、「コントロール」と「意味明確化」のカテゴリーのストラテジーである点で一致していた。また、使用頻度の低いストラテジーは、受講前は10、受講後は5つあり、その数は半減しているが、カテゴリーで分けると「要点把握」、「構造注目」、「記憶」、「モニタリング」であり、受講前と受講後ではすべて同じカテゴリーのものであった。このように、受講前と受講後の読解ストラテジーの使用傾向は、使用頻度の高いもの、低いもののいずれにおいても、カテゴリーはすべて一致しており、カテゴリー別の使用傾向は受講前後で相違がないことが判明した。

使用頻度の高いストラテジーには、「意味明確化」の「20. 指示詞（これ、それ、あれ）が指すものを考えながら読む」や「21. 一文を理解するため、文の前後関係を考えながら読む」というものがあり、これらはボトムアップの読みに関わるものである。日本語学習者の読解力とストラテジーの使用を調査した南之蘭（1997）は、読解力の高い読み手ほどボトムアップ・ストラテジーを使用する程度が低いことを検証している。つまり、読解力が高ければ、ボトムアップ・ストラテジーをあまり使用しないことになるが、今回の調査では、ボトムアップの読みに関わるストラテジーがよく使用されていた。学習者が読解でボトムアップ処理に依存することについて、南之蘭（1997）は読解指導が逐語的なボトムアップの読みに比重を置きすぎていることを要因として挙げている。したがって、今後、授業においては、「要点把握」や「構造注目」のようなトップ

ダウンの読みに関わるストラテジーを積極的に活用した読解練習を行うことが重要だと思われる。

使用頻度の低いストラテジーに関しては、受講前後の2回、いずれも全40項目中でストラテジー6がもっとも低い。ストラテジー6は本科目の第8回と第9回の授業で取り上げ、練習を行っている。しかしながら、受講後の結果でも使用頻度がもっとも低いのはなぜだろうか。ストラテジー6は「内容をまとめるために簡単な表や図を書く」というものである。石井(2006)は中級後半レベルの日本語学習者を対象に、図表の呈示、または図表完成のタスクが説明文の理解に及ぼす影響を検証し、図表完成タスクは言語の表層レベルの処理に終わり、理解を促進しないと報告している。本科目でストラテジー6を扱った授業では、図表作成のタスクにおいて、学生らは自分が読み取った情報をどのように図や表に整理すればよいのか判断できず、図表作成に非常に時間を要していた。授業後の学生コメントには、「表でそれを見やすく整理すれば、全体的な流れ把握と内容理解に役立つ」「どのように表を作るかを構想する過程の中で、文の内容を把握することが容易になることが分かった」とあり、図表作成は内容理解に役立つと感じているようであった。また、図表作成に関して「様々な練習や訓練を通じ、気軽に図や表を作られるようになりたい」(原文ママ)というコメントも見られた。このことから、読解において、ストラテジー「6. 内容をまとめるために簡単な表や図を書く」ことの効果は感じているものの、図表作成の難しさや作業に時間を要することがこのストラテジー使用の妨げになっていると推察される。

2. 受講前後で使用頻度に変化の見られた読解ストラテジー

受講前と受講後の読解ストラテジーの使用頻度の平均値の差について、対応のある t 検定を行った結果、ストラテジー 4,11,13,14,31 に有意な差が見られた。以下では、有意な差が見られた5つのストラテジーについて、本科目の授業での実践練習との関係について考察する。

(1) 読解ストラテジー4

読解ストラテジー「4. 読みながら大切なところとそうでないところを区別する」の使用頻度は、受講前 ($M=3.12$, $SD=1.09$) に比べ、受講後 ($M=3.80$, $SD=1.00$) の方が有意に高いことが示された ($t(24) = 2.652$, $p = .014$)。

読解ストラテジー4は、第6回の授業「焦点をしぼる」で実践練習を行った。文の一字一句を確認しながら文章を理解するのではなく、主張やキーワードなどに焦点をしぼって読むトップダウンの読み方を促すために、読む時間に制限時間を設けて読解練習を行った。その結果、時間を意識し、制限時間内に最後まで読み終えようと取り組む姿が見受けられ、焦点をしぼって読むストラテジーの積極的な運用に結びついたと思われる。

また、本授業外での学習経験も大きく関係していると考えられる。留学生らは日本語科目以外にも、学部で開講されている科目を複数受講しており、それらの授業では課題として数十ページの長さの文献を読むこともあり、多種多様な文章に触れている。したがって、これまでの日本語

学習としての精読ではなく、自分で重要な情報を取捨選択しながら読む力が必要となり、このような学部でのアカデミックな学びの中で、ストラテジーの活用が促進された可能性があるだろう。

(2) 読解ストラテジー 11, 13, 14

読解ストラテジー「11. 文章の構造を考えながら読む」($t(24) = -3.663, p = .001$)、「13. 文脈から全体像を予測する」($t(24) = -2.193, p = .038$)、「14. どこどこが対応しているかを考えながら読む」($t(24) = -2.324, p = .029$)は、いずれも受講前より受講後の方が使用頻度は有意に高いことが示された。これら3つは、「構造注目」という同一のカテゴリーに属するトップダウンの読みに関わるストラテジーである。つまり、受講前に比べ文章全体の構造に注目したストラテジーが使用されるようになり、読解時にトップダウンの読み方が促されたことが明らかになった。

「構造注目」に関わるストラテジーが使用されるようになった要因として、次の二つのことが考えられる。一つ目は、文章の構造に注目するストラテジーを用いた読解練習に繰り返し取り組んだ効果である。授業回としては第1回、第3回、第9回である。第1回の授業では、学術的文章のタイプと構成について、レポート・論文の序論、本論、結論にそれぞれ何が書かれているかを確認し、タイプの異なるレポート4編を取り上げ、文章の構成や展開に注目して読む練習を行った。また、第3回の授業では、第1回の授業で学んだ文章構成の復習後、序論だけを読み、本論の内容を予測する練習を行った。そして、第9回の授業では、2500字程度の論説文を使用した文章再構築のワークを行った。文章の序論部分を読んだ後、7つに切り分けられた本論と結論部分について、文章全体の構成や展開を考え、適切だと思う順番に並べ替えるワークを行った。このように、文章の構造を考えながら読む練習を繰り返したことで、これらのストラテジーの使用が促され、それが使用頻度の向上に繋がったと考えられるだろう。

二つ目は、留学生がこれまでに日本語学習で触れていた文章の長さの問題である。本学部の外国人留学生入試選抜では日本語学習試験（以下、EJUとする）を利用しており、本科目受講者の留学生には、入学前の日本語学習はEJU対策に重点が置かれていたという。EJUの日本語科目のひとつ「読解」問題は、短文（300～500字）と長文（500～800字）で構成されており、文章としてそれほど長くはない。特に短文は1パラグラフだけのものも多い。そのため、これまで文章構造や展開を考えて読むということがそれほどなかったと思われる。しかし、現在、大学の授業や課題で読まなければならない数十ページに及ぶ長さの文章の場合は、焦点を絞って読むこと、先を予測して文章の展開を考えながら読む必要がある。つまり、大学での学習活動で長さのある文章を読むようになり、文章の構造に注目したストラテジーの使用頻度が高くなったと推測される。

(3) 読解ストラテジー 31

読解ストラテジー「31. 読み終わってから、自分がどのくらい分かっているかチェックするような質問を自分にする」は、受講前 ($M=2.52, SD=0.92$) と受講後 ($M=3.16, SD=1.11$) の平均

値に有意な差が見られた($t(24) = 2.782, p = .010$)。受講前の平均値は40項目の中で2番目に低く、他のストラテジーよりも使用頻度はかなり低かった。受講後の平均値は3.16で、全体の中で使用頻度はそれほど高いわけではないが、受講前よりも使用されるようになったことが統計的に示された。

このストラテジーに関わる読解の理解度を確認する質問を行う活動は、第10回と第11回の授業で行った。第10回は、「質問して確認する」練習として、文章が理解できない場合、自分がわからないことを明確にしてから、他者に質問する練習を行った。授業中のグループワークでは、「～は何ですか」「～はどんな意味ですか」といった語彙の意味確認のような単純な質問しか出ず、内容に関する自分の理解を確かめる質問はどう問えばよいかわからず、大変苦戦している様子であった。そこで、まずは質問を作ること自体に慣れる必要があると考え、第11回の授業では質問作成のワークを行った。質問作成は、ロススタイン&サンタナ(2015)の質問づくりに倣い、グループで取り組んだ。その結果、各自が作成した質問をグループ内で共有し、相互に参照することで、どのような質問が可能なのかわかり、質問のバリエーションも増えた。さらに、テキストL9「読んだ後、理解度を自己評価する」でも、自分で自己の理解度を確かめる質問を考える練習も実施した。

日本語学習者対象の授業で質問作りを取り入れた実践を報告した堀ほか(2018)は、質問作りは学習者の思考力を刺激し、内容理解を深める可能性を示唆している。このように、文章の内容理解を問う質問作成のプロセスでは、文章について自分が何がどこまで理解でき、何が理解できていないのかを確かめることが必要であり、それを通じて、文章に対する理解が深まると考えられる。

このように、授業の第10回、第11回で文章の内容理解を確認する質問作成を実施したことにより、質問作成、および自分自身で理解を問う質問をする経験値が上がったことで、読解ストラテジー31の活用が可能となり、使用頻度に変化が生じたと考えられる。

V おわりに

本学部の日本語上級レベル留学生の読解におけるストラテジーの使用傾向を探る目的で、本科目の受講前と受講後の2回、40項目の読解ストラテジーの使用頻度に関する質問紙調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。まず、よく使用されているストラテジーの傾向は、受講前と受講後ではほとんど相違が見られず、使用頻度が高いものは、ストラテジー「5. 大切なところに線を引く」、そして「コントロール」と「意味明確化」に関するストラテジーで、受講前後で一致していた。また、使用頻度の低いストラテジーは、受講前と受講後であまり使われていないものに該当する数は10から5に半減したが、ストラテジーのカテゴリーは「要点把握」、「構造注目」、「記憶」、「モニタリング」で、受講前後でカテゴリーには変化が見られなかった。使用頻度をもっとも低かったストラテジー「6. 内容をまとめるために簡単な表や図を書く」は、授業で実践練習を行い、留学生からも効果を感じているようであったにもかかわらず、受講後も使用

頻度はもっとも低く、要因としては図表作成の難しさ、作業時間がかかることが使用の妨げになっていると考えられた。次に、ストラテジーの使用頻度に関して、受講前と受講後で平均値に統計的に有意な差があったものは5つあった。使用頻度が受講前よりも有意に高くなったストラテジー「4. 読みながら大切なところとそうでないところを区別する」や「構造注目」(ストラテジー11, 13, 14)のストラテジーは、トップダウンの読みに関わるものであり、この結果から、授業における実践練習や学部科目の学習での読解経験によって、トップダウンの読みのストラテジーが意識的に使用されるようになったことが示唆された。

本授業では、今回調査した40項目のストラテジーをすべて扱ったわけではない。しかし、受講前と受講後で使用頻度に有意な差が見られたストラテジーは、本授業でストラテジーに関する説明や運用練習が行われたものであった。したがって、本授業での読解ストラテジーの実践的な運用練習には、ストラテジーの使用を促す一定の効果が認められたといえるだろう。

今後の課題としては、今回の調査によって明らかになった読解ストラテジーの使用傾向を基に、留学生が本学部で学ぶために必要な読むスキルを身に付けられるよう、本科目の学習内容の改善を図るとともに、今後も本科目受講者に対する読解ストラテジーの使用に関する調査や検証を続け、本学の留学生が読解力を向上できる授業デザインを検討していきたい。

謝辞

本調査を行うにあたって、2023年度春学期「留学生のための学術日本語Ⅰ」の受講者のみなさんには質問紙調査へのご協力を賜り、心よりお礼を申し上げます。

参考文献

- 安高紀子・黄叢叢・黄秀智・吳梅 (2021) 「上級日本語科目改革のための調査に関する報告」『明治大学国際日本学研究』第14巻1号, pp173-190
- 石井怜子 (2006) 「図表の呈示及び完成が第二言語学習者の説明文読解に及ぼす影響－中級後半レベルの成人日本語学習者の場合－」『教育心理学研究』54巻4号, pp498-508
- 石井怜子・田川麻央 (2010) 「言語手がかりに注目した読解ストラテジー教育の可能性を探る－第一言語読解教育研究からJSL読解教育への示唆－」『言語文化と日本語教育』佐々貴義式先生追悼記念号39号, pp70-83
- グループさくら (2019) 『メタ認知を活用したアカデミック・リーディングのための10のストラテジー』凡人社
- ダン・ロススタイン, ルース・サンタナ著吉田新一郎訳 (2015) 『たった一つを変えるだけ: クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論
- 福島智子・藤田裕子・白頭宏美・三宅若菜・鈴木理子・梅岡巳香 (2017) 「学部留学生のためのメタ認知を活用した読解教材開発」『日本語教育方法研究会誌』23巻2号, pp28-29
- 藤田 裕子・福島 智子・白頭 宏美・三宅 若菜・鈴木 理子・伊古田 絵里 (2018) 「メタ認知を活

- 用した読解教材を用いた授業の試み—使用後の面接調査から得られた声—『日本語教育方法研究会誌』24巻2号, pp.34-35
- 二口由紀子 (2020)「第二言語としての日本語読解におけるワーキングメモリ容量の個人差と読解ストラテジー」『開智国際大学紀要』第19号, pp65-74
- 堀恵子・大隅紀子・世良時子 (2018)「質問作りの手法を取り入れた読解授業」『日本語教育方法研究会誌』Vol.24 No.2, pp58-59
- 南之蘭博美 (1997)「読解ストラテジーの使用と読解力との関係に関する調査研究—外国語としての日本語テキスト読解の場合—」『世界の日本語教育』第7号, pp 31-44.

【献呈論文】

日本語学習者の日本語科目履修後の日本語能力の向上

－ Can-do statements 調査を用いた自己評価を基に－

Japanese Language Learners' Improvement of Japanese Proficiency after
Taking Japanese Language Courses;

Based on self-assessment using a Can-do statements survey

柳 澤 絵 美

YANAGISAWA, Emi

I . はじめに

国際日本学部（以下、本学部）では、2023年度秋学期現在、正規生と交換留学生をあわせて、約250名の留学生や日本語学習者が在籍しており、「入門（科目名は、「Introductory Japanese」）」、「初級」、「中級入門」、「中級」、「中上級」、「上級入門」、「上級（科目名は、2023年度から始まった新カリキュラムでは「留学生のための学術日本語 I・II・III）」の全7レベルの日本語科目を提供している。この7レベルのうち、「上級」は、Japanese Track¹（以下、JT）の正規留学生1年生の必修科目であり、大学での学びの基礎となるアカデミック・ジャパニーズの習得を目標としている。具体的には、春学期は、読解能力を養う科目と文章表現能力を養う科目、秋学期は、技能横断的な課題解決型のプロジェクトワークを通して日本語の運用能力を養成する科目の3科目が提供されており、それぞれ週2コマの授業が対面で開講されている。一方、「入門」～「上級入門」の6レベルについては、4技能を総合的に使って日本語能力を養成する「総合」クラス（週3コマ）と、語彙と漢字の学習に特化した「語彙・漢字」クラス（週1コマ）の週4コマで構成されている。「総合」は、教師と学習者、または、学習者同士のやり取りや口頭練習を通して日本語を学んでいくため、3コマ全てを対面で実施しているが、「語彙・漢字」は、漢字圏の学習者と非漢字圏の学習者では、語彙や漢字の学習に要する時間や、重点を置いて取り組むべき項目などが異なるため、それぞれの学習者に合ったペースで学べるよう、2020年度以降は、非同期型（オンデマンド）で授業を実施している。「入門」～「上級入門」の履修者は、English Track²（以下、ET）の正規生、および、ET・JT交換留学生であり、ET所属の学生が多いことから、本稿では、「入門」～「上級入門」の6レベルのことを便宜的にET日本語と呼

¹ 日本語で行われている科目を中心に履修し、学位を取得するプログラム

² 英語で開講されている科目のみの履修で学位が取得できるプログラム

ぶことにする（ET 日本語の詳細については、柳澤他 2017, 柳澤他 2018a, 柳澤他 2019 を参照）。

ET 日本語では、日本語科目の履修後に日本語能力が向上しているかどうか、向上している場合は、どのレベルでどのような技能に伸びが見られるかを確認するために、日本語科目の履修前後に Can-do statements（以下、Cds）を用いた自己評価アンケートを実施した。本稿では、Cds 調査による ET 日本履修者の日本語科目履修後の日本語能力の伸びについて報告する。

Ⅱ．調査に用いた Can-do statements

Cds 調査とは、具体的に日本語を使ってどんなことができるのかを学習者の自己評価によって明らかにする手段の一つであり、島田（2006）では、「学習者に具体的な言語行動場面を記述した短い文章を提示して、『できる』『できない』を自己評定により回答させる質問紙調査」であると説明されている。本調査に用いた Cds は、日本語能力試験 Can-do 自己評価リスト（以下、JLPT-Cds）であり、現在、日本語能力試験の HP で公開されている（<https://www.jlpt.jp/about/candolist.html>）。JLPT-Cds は、「聞く」「読む」「話す」「書く」の 4 技能に分けて記述されており、各技能について、例えば、「聞く」であれば、「教室で、先生や友達の簡単な自己紹介を聞いて、理解できる」、「読む」であれば、「学校などで面談の予定表を見て、自分の面談の曜日と時間がわかる」などのように、日本語を使って具体的にどのようなことができるかを示した能力記述文が示されている。この能力記述文は全体で 80 項目あり、各技能につき 20 項目が難易度順に並べられている。また、JLPT-Cds を示した表では、JLPT の各レベルの合格者のうち、上位何パーセントが各 Cds として記述された日本語運用能力を有しているか自己評価しているかを色分けして表示している。75% 以上が「できる」と答えた項目は濃い緑色、50~75% が「できる」と答えた項目は緑色、25~50% が「できる」と答えた項目は薄い緑色、25% 未満が「できる」と答えた項目は白で表示され、どのレベルに合格した学習者であれば、日本語でどのようなことができるかを知る目安となっている。

本調査では、上記の JLPT-Cds の能力記述文を用いているが、その提示順は変更した。JLPT-Cds は、難易度の高いものから易しいものへと番号が付与されており、例えば、「聞く」については、(1) がもっとも難しく、(20) がもっとも易しい能力記述文となっている。しかし、本調査では、全ての技能において、易しいものから難しいものになるように（「聞く」であれば、(1) がもっとも易しく、(20) がもっとも難しい能力記述文になるように）、能力記述文を並べ替えた。さらに、番号は 4 技能全体で通し番号とし、(1) ~ (80) とした。

表 1 ~ 4 に本調査で用いた Cds の能力記述文を 4 技能に分けて示す。

表1：「聞く」の能力記述文

(1)	教室で、先生や友達の簡単な自己紹介を聞いて、理解できる。
(2)	店、郵便局、駅などで、よく使う言葉（例：「いらっしゃいませ」「〇〇円です」「こちらへどうぞ」）を聞いて、理解できる。
(3)	先生からのお知らせを聞いて、集合時間、場所などがわかる。
(4)	簡単な指示を聞いて、何をすべきか理解できる。
(5)	身近で日常的な話題（例：趣味、食べ物、週末の予定）についての会話がだいたい理解できる。
(6)	簡単な道順や乗り換えについての説明を聞いて、理解できる。
(7)	周りの人との雑談や自由な会話で、だいたいの内容が理解できる。
(8)	駅やデパートでのアナウンスを聞いて、だいたい理解できる。
(9)	店で商品の説明を聞いて、知りたいこと（例：特徴など）がわかる。
(10)	標準的な話し方のテレビドラマや映画を見て、だいたい理解できる。
(11)	身近で日常的な話題（例：旅行の計画、パーティーの準備）についての話し合いで、話の流れが理解できる。
(12)	身近で日常的な内容のテレビ番組（例：料理、旅行）を見て、だいたいの内容が理解できる。
(13)	関心あるテーマの議論や討論で、だいたいの内容が理解できる。
(14)	学校や職場の会議で、話の流れが理解できる。
(15)	関心あるテーマの講義や講演を聞いて、だいたいの内容が理解できる。
(16)	仕事や専門に関する問い合わせを聞いて、内容が理解できる。
(17)	思いがけない出来事（例：事故など）についてのアナウンスを聞いてだいたい理解できる。
(18)	フォーマルな場（例：歓迎会）でのスピーチを聞いて、だいたいの内容が理解できる。
(19)	最近メディアで話題になっていることについての会話で、だいたいの内容が理解できる。
(20)	政治や経済などについてのテレビのニュースを見て、要点が理解できる。

表2：「読む」の能力記述文

(21)	学校などで面談の予定表を見て、自分の面談の曜日と時間がわかる。
(22)	絵の付いた簡単な指示（例：ゴミの捨て方、料理の作り方）がわかる。
(23)	簡単なメモを読んで、理解できる。
(24)	年賀状や誕生日のカードを読んで、理解できる。
(25)	駅の時刻表や案内板を見て、自分が乗る電車の時間がわかる。
(26)	新聞の広告やチラシを見て、安売り期間や値段などがわかる。
(27)	学校、職場などの掲示板を見て、必要な情報（例：講義や会議のスケジュールなど）がとれる。
(28)	知人や友人から来たはがきやメールを読んで、理解できる。
(29)	短い物語を読んで、だいたいのストーリーが理解できる。
(30)	商品のパンフレットを見て、知りたいことがわかる。（例：商品の特徴など）
(31)	一般日本人向けの国語辞典を使ってことばの意味が調べられる。
(32)	旅行のガイドブックや、進学・就職の情報誌を読んで、必要な情報がとれる。
(33)	身近で日常的な話題についての新聞や雑誌の記事を読んで、内容が理解できる。
(34)	仕事相手からの問い合わせや依頼の文書を読んで、理解できる。
(35)	敬語が使われている正式な手紙やメールの内容が理解できる。
(36)	関心のある話題についての専門的な文章を読んで、だいたいの内容が理解できる。
(37)	エッセイを読んで、筆者の言いたいことがわかる。
(38)	人物の心理や話の展開を理解しながら、小説を読むことができる。
(39)	論説記事（例：新聞の社説など）を読んで、主張・意見や論理展開が理解できる。
(40)	政治、経済などについての新聞や雑誌の記事を読んで、要点が理解できる。

表3：「話す」の能力記述文

(41)	自己紹介をしたり、自分についての簡単な質問に答えたりすることができる。
(42)	店、郵便局、駅などで、よく使われることば（例：「いくらですか」「〇〇をください」）を使って簡単なやりとりができる。
(43)	趣味や興味のあることについて、話すことができる。
(44)	自分の部屋について説明することができる。
(45)	驚き、嬉しさなどの自分の気持ちと、その理由を簡単なことばで説明することができる。
(46)	相手の都合を聞いて、会う日時を決めることができる。
(47)	身近で日常的な話題（例：趣味、週末の予定）について会話ができる。
(48)	電話で遅刻や欠席の連絡ができる。
(49)	店で買いたいものについて質問したり、希望や条件を説明したりすることができる。
(50)	準備をしていれば、自分の送別会などフォーマルな場で短いスピーチをすることができる。
(51)	よく知っている場所の道順や乗り換えについて説明することができる。
(52)	アルバイトや仕事の面接で、希望や経験を言うことができる。（例：勤務時間、経験した仕事）
(53)	友人や同僚と、旅行の計画やパーティーの準備などについて話し合うことができる。
(54)	準備をしていれば、自分の専門の話題やよく知っている話題についてプレゼンテーションができる。
(55)	クラスのディスカッションで、相手の意見に賛成か反対かを理由とともに述べるができる。
(56)	最近見た映画や読んだ本のだいたいのストーリーを紹介することができる。
(57)	相手や状況に応じて、丁寧な言い方とくだけた言い方が使い分けられる。
(58)	思いがけない出来事（例：事故など）の経緯と原因について説明することができる。
(59)	最近メディアで話題になっていることについて質問したり、意見を言ったりすることができる。
(60)	関心ある話題の議論や討論に参加して、意見を論理的に述べることができる。

表4：「書く」の能力記述文

(61)	書類に、名前や国名などを書くことができる。
(62)	簡単な自己紹介の文を書くことができる。
(63)	誕生日のカードや短いお礼のカードを書くことができる。
(64)	予定表やカレンダーに、短いことばで自分の予定を書くことができる。
(65)	自分の家族や町などの身近な話題について簡単に書くことができる。
(66)	友人や同僚に日常の用件を伝える簡単なメモを書くことができる。
(67)	短い日記を書くことができる。
(68)	将来の計画や希望（例：夏休みの旅行、やりたい仕事）について簡単に書くことができる。
(69)	自分の日常生活を説明する文章を書くことができる。
(70)	知人に、感謝や謝罪を伝える手紙やメールを書くことができる。
(71)	体験したことや、その感想について、簡単に書くことができる。
(72)	理由を述べながら、自分の意見を書くことができる。
(73)	最近読んだ本や見た映画のだいたいのストーリーを書くことができる。
(74)	学校や会社への志望理由などを書くことができる。
(75)	自分の送別会などでの挨拶スピーチの原稿を書くことができる。
(76)	目上の知人（例：先生など）あてに、基本的な敬語を使って手紙やメールを書くことができる。
(77)	自分の関心のある分野のレポートを書くことができる。
(78)	料理の作り方や機械の使い方などの方法を書いて伝えることができる。
(79)	思いがけない出来事（例：事故など）について説明する文章を書くことができる。
(80)	論理的に意見を主張する文章を書くことができる。

Ⅲ. 調査の概要

1. 1. 調査協力者

本調査の調査協力者は、2023年度春学期にET日本語を履修した日本語学習者54名のうち、学期開始直後と学期末に実施した両方のCds調査に回答した52名である。各レベルの内訳は、入門9名、初級15名、中級入門5名、中級8名、中上級12名、上級入門3名である。調査協力者の出身国・地域は、アメリカ13名、中国9名、オーストラリア5名、ウクライナ4名、イギリス3名、韓国3名、ドイツ3名、スイス2名、台湾2名、フランス2名、イタリア1名、オーストリア1名、スペイン1名、ベトナム1名、ポーランド1名、リトアニア1名であった。

1. 2. 調査の実施時期と実施方法

本調査は、2023年度春学期の授業開始直後と学期末に、ET日本語履修者を対象に自己評価アンケートとして実施した。いずれの調査においても、Google formを活用したアンケートフォームを履修者に送付し、設定された期限までに回答してもらった。

Cds調査の教示と能力記述文は、日本語と英語の2言語で併記されており、学習者は自分がより分かる方の言語を見てアンケートに回答した。回答時には、それぞれの能力記述文に対して、「できる / Yes」、「難しいがなんとかできる / Yes, but with difficulty」、「あまりできない / Not very well」、「できない / No」の4段階の選択肢の中から1つを選択し、各調査の実施時点での自身の日本語運用能力について自己評価を行った。能力記述文の内容や提示順は学期開始直後の調査も学期末の調査も同じであり、回答時間については特に制限は設けず、いずれの調査においても学習者には自分のペースで回答をしてもらった。

1. 3. 分析方法

本調査の分析対象としたのは、前述のとおり学期開始直後と学期末の両方のCds調査に回答した52名分のデータである。分析の際には、4段階の評価を間隔尺度とみなし、「できる」を「4」、「難しいがなんとかできる」を「3」、「あまりできない」を「2」、「できない」を「1」として数値化した。本調査では、回答者であるET日本語履修者数が中級入門では5名、上級入門では3名のように統計処理をするには少ないレベルがあるため、統計処理による検定は行わず、上記の方法で数値化された学期開始直後と学期末の自己評価の差の値を基に分析を行う。

Ⅳ. 結果と考察

以下の表5～28に「入門」～「上級入門」の6レベルにおけるCds調査の結果を技能別に示す。表中の「Pre」は学期開始直後、「Post」は学期末のデータであり、「M」は平均、「SD」は標準偏差、「Post-Pre」は学期末の自己評価の平均値から学期開始直後の平均値を引いた差の値を表している。濃い網掛けがされているのは、「Post-Pre」の値が1.0以上あった項目で、例えば、「あまりできない」が「難しいがなんとかできる」になるなど、当該レベルの平均値として自己評価が1段階上がったと考えられるものである。薄い網掛けがされているものは、「Post-Pre」の値が0.5以上あった項目で、当該レベルの半数の学習者の自己評価が1段階上がったと考えられる

項目である。また、数値の下に下線が引いてあるものは、「*Post-Pre*」の値がマイナスになったもので、学期開始当初より学期末の方が自己評価が低くなった項目である。

1. 1. 「聞く」能力についての自己評価

「聞く」の自己評価の結果についてレベル別に見ていくと、まず「入門」では、20項目中、(3)「先生からのお知らせを聞いて、集合時間、場所などがわかる」、(4)「簡単な指示を聞いて、何をすべきか理解できる」、(5)「身近で日常的な話題（例：趣味、食べ物、週末の予定）についての会話がだいたい理解できる」、(6)「簡単な道順や乗り換えについての説明を聞いて、理解できる」、(15)「関心あるテーマの講義や講演を聞いて、だいたいの内容が理解できる」の5項目において「*Post-Pre*」の値が1.0を上回っていた。(3)～(5)については、授業の中で教師が日本語で出した指示が理解できたことや、授業の中でクラスメートが身近な話題について話すのを聞いて理解できた経験が反映されていると考えられる。(6)については、日々の通学や交通機関での移動において、駅や電車内のアナウンスを繰り返し聞き、部分的にでも理解できたためではないかと推測される。(15)については、入門レベルの履修者は日本語未習者、あるいは、あいさつや平仮名などの非常に初歩的な日本語のみ既習の学習者であるため、日本語で行われている講義を聞いてその内容を理解することは難しいと考えられる。履修している講義科目も Type1³であることが想定されるが、英語で行われている講義の中で偶発的に使われた日本語や日本語で示された用語などが聞き取れたという経験はあった可能性がある。しかしながら、自己評価の平均値を見てみると、(15)については、Preでは1.0「できない」であったものが、Postでは、2.0「あまりできない」になっており、「*Post-Pre*」の値が1.0以上であったとはいえ、「できる」という自己評価にはなっていないことが分かる。このことから、(15)は、入門レベルの学習者にとっては難しい項目であるといえるだろう。

次に、「初級」について見てみると、「*Post-Pre*」の値が1.0以上の項目はなく、(12)「身近で日常的な内容のテレビ番組（例：料理、旅行）を見て、だいたいの内容が理解できる」と(13)「関心あるテーマの議論や討論で、だいたいの内容が理解できる」の2項目が0.5以上であった。(12)については、日本のテレビ番組やネット配信動画などを見て、部分的にでも理解できたという経験や、生教材ではないが、教科書付属のオンライン文法説明動画などは授業の中でも繰り返し視聴していることから、その経験も自己評価に影響を与えた可能性があるといえる。(13)については、初級の学習者は入門と同様に、日本語で行われている講義科目を履修するのは日本能力的に難しいため、日本語の授業の中での簡単な意見交換や話し合いを「議論」と捉えて相手の言っていることが分かったという経験が反映されている可能性がある。しかしながら、自己評価の平均値を見ると、いずれの項目もPostの値が2.5～2.6程度であり、3.0を超えていないため、「難しいがなんとかできる」という評価には至っておらず、伸びは見られるものの、初級の学習者にとっては難しい項目であると評価されていることが分かる。

³ 英語のみで行われる授業

「中級入門」については、(9)「店で商品の説明を聞いて、知りたいこと(例:特徴など)がわかる」、(10)「標準的な話し方のテレビドラマや映画を見て、だいたい理解できる」、(19)「最近メディアで話題になっていることについての会話で、だいたいの内容が理解できる」、(20)「政治や経済などについてのテレビのニュースを見て、要点が理解できる」の4項目が、「*Post-Pre*」の値が1.0以上であった。(9)については、SDが0.0であることから分かるように、全員が「できる」という評価をしている。これは、実際に日本で物販をしている店に行き、店員とやり取りをする中で、説明が理解できたという経験が反映されたものと思われる。(10)、(19)、(20)については、各種メディアに関係する項目であり、来日して日本のテレビ番組や映画などに触れ、その内容が分かったという経験や、メディアで視聴した内容についてクラスメートや友達と日本語で話したことが自己評価の伸びにつながったものと推測される。ただし、(20)については、*Post*の自己評価の平均値が3.0には達していないため、「難しいがなんとかできる」という評価には達しておらず、中級入門レベルでは、政治や経済といった話題を理解するのは難しいことがうかがえる。

「中級」の結果については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上のものはなかったが、(10)「標準的な話し方のテレビドラマや映画を見て、だいたい理解できる」、(12)「身近で日常的な内容のテレビ番組(例:料理、旅行)を見て、だいたいの内容が理解できる」、(15)「関心あるテーマの講義や講演を聞いて、だいたいの内容が理解できる」、(18)「フォーマルな場(例:歓迎会)でのスピーチを聞いて、だいたいの内容が理解できる」、(19)「最近メディアで話題になっていることについての会話で、だいたいの内容が理解できる」が0.5以上であった。(10)、(12)、(19)については、テレビや映画などを実際に見て内容を理解したり、学生達がメディアで目にしたことを話したことが自己評価の結果に現れたものと考察できる。(15)については、日本語の授業の中で教科書以外の資料として、短い講義の聴解教材を用いた聞き取り練習を行っていたことが、(18)については、授業の中でクラスメートの発表などを聞いて内容が理解できたことが自己評価にも反映されたと考えられる。

「中上級」の結果を見てみると、「*Post-Pre*」の値が1.0以上のものはなかった。これは、*Pre*の段階で、20項目中19項目の平均値が3.1以上であり、*Post*の平均値が4.0であってもその差が1.0以上にはならないことに起因している。「*Post-Pre*」の値が0.5以上だったのは、(17)「思いがけない出来事(例:事故など)についてのアナウンスを聞いてだいたい理解できる」と(19)「最近メディアで話題になっていることについての会話で、だいたいの内容が理解できる」の2項目であった。(17)については、普段の生活の中で、駅や電車で流れる遅延や人身事故などのアナウンスが理解できたらことが影響しているものと推測される。また、(19)については、学習者はさまざまなメディアから情報を得ており、その内容について友達と情報共有することも多いことから、その会話が理解できた経験が反映されたものと考えられる。

最後に、「上級入門」については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だった項目はなかった。これは中上級と同様に、*Pre*の段階で自己評価の平均値3.1以上の項目が多かったことによるものである。

上級入門では、(1), (3), (4), (6) など、Pre, Post とともに自己評価が4.0 だった項目もあり、学期開始直後の段階で、既に「できる」と自己評価されている項目も見られた。「Post-Pre」の値が0.5 以上だったのは、(14)「学校や職場の会議で、話の流れが理解できる」の1 項目だけである。上級入門の学習者は、JLPT N2 程度の日本語能力があるため、アルバイトをしている可能性があり、アルバイト先でスタッフミーティングなどに参加していることが想定できる。また、実際の会議には参加していなかったとしても、授業で現代日本社会に関するテーマを扱ったり、同様のテーマについてディスカッションをしたりした経験を通して、学期末の段階では、会議などの日本語も理解できると判断した可能性もあるといえる。

表5 入門のPre と Post の比較：「聞く」

Cds 「聞く」	入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(1)	3.444	0.527	3.889	0.333	0.444
(2)	3.000	0.866	3.667	0.707	0.667
(3)	2.556	1.236	3.556	0.726	1.000
(4)	2.444	1.236	3.889	0.333	1.444
(5)	2.111	1.054	3.444	0.527	1.333
(6)	2.333	1.000	3.333	0.707	1.000
(7)	2.000	1.000	2.667	0.707	0.667
(8)	2.333	1.000	3.000	0.707	0.667
(9)	1.889	0.782	2.667	0.707	0.778
(10)	1.333	0.707	1.556	0.726	0.222
(11)	1.778	1.093	2.444	0.726	0.667
(12)	1.444	0.726	2.111	0.601	0.667
(13)	1.333	0.707	1.889	0.782	0.556
(14)	1.333	0.707	1.889	0.782	0.556
(15)	1.000	0.000	2.000	1.118	1.000
(16)	1.000	0.000	1.222	0.441	0.222
(17)	1.111	0.333	1.444	0.726	0.333
(18)	1.000	0.000	1.667	0.866	0.667
(19)	1.222	0.667	1.444	0.726	0.222
(20)	1.222	0.667	1.222	0.441	0.000

表6 初級のPre と Post の比較：「聞く」

Cds 「聞く」	初級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(1)	4.000	0.000	3.933	0.258	-0.067
(2)	3.800	0.414	3.800	0.414	0.000
(3)	3.867	0.352	3.733	0.458	-0.133
(4)	3.667	0.488	3.733	0.458	0.067
(5)	3.733	0.458	3.533	0.640	-0.200
(6)	3.333	0.488	3.533	0.640	0.200
(7)	3.267	0.704	3.400	0.632	0.133
(8)	2.867	0.915	3.267	0.704	0.400
(9)	2.733	0.704	3.067	0.884	0.333
(10)	2.133	0.516	2.600	0.828	0.467
(11)	2.600	1.056	3.000	0.756	0.400
(12)	2.133	0.915	2.667	0.816	0.533
(13)	1.933	0.799	2.533	0.743	0.600
(14)	2.267	0.799	2.600	0.737	0.333
(15)	2.133	0.743	2.533	0.834	0.400
(16)	1.667	0.816	2.067	0.704	0.400
(17)	2.000	0.845	2.467	0.743	0.467
(18)	2.000	0.655	2.467	0.834	0.467
(19)	2.000	0.845	2.133	0.743	0.133
(20)	1.467	0.640	1.667	0.816	0.200

表7 中級入門のPreとPostの比較：「聞く」

Cds 「聞く」	中級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(1)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(2)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(3)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(4)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(5)	3.400	0.894	4.000	0.000	0.600
(6)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(7)	3.200	0.837	4.000	0.000	0.800
(8)	3.200	0.837	3.600	0.548	0.400
(9)	2.600	0.894	4.000	0.000	1.400
(10)	2.400	0.548	3.000	0.894	0.600
(11)	3.600	0.548	4.000	0.000	0.400
(12)	3.000	0.707	3.400	0.548	0.400
(13)	2.600	0.894	3.000	0.707	0.400
(14)	2.800	0.837	3.200	0.447	0.400
(15)	2.750	1.258	3.600	0.894	0.850
(16)	2.400	1.140	3.400	0.894	1.000
(17)	2.800	1.095	3.200	0.837	0.400
(18)	2.600	1.140	3.000	0.707	0.400
(19)	2.200	0.447	3.200	0.837	1.000
(20)	1.800	0.837	2.800	1.095	1.000

表8 中級のPreとPostの比較：「聞く」

Cds 「聞く」	中級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(1)	3.875	0.354	3.875	0.354	0.000
(2)	3.750	0.463	3.625	0.518	-0.125
(3)	4.000	0.000	3.875	0.354	-0.125
(4)	4.000	0.000	3.750	0.463	-0.250
(5)	3.750	0.463	3.625	0.518	-0.125
(6)	3.750	0.463	3.625	0.518	-0.125
(7)	3.375	0.744	3.250	0.886	-0.125
(8)	3.125	0.641	3.500	0.535	0.375
(9)	2.875	0.641	3.250	0.886	0.375
(10)	2.000	0.535	2.750	1.035	0.750
(11)	2.750	1.035	2.875	0.835	0.125
(12)	2.500	0.926	3.000	0.756	0.500
(13)	2.125	0.835	2.500	1.069	0.375
(14)	2.625	0.916	2.750	1.035	0.125
(15)	2.250	0.886	2.875	1.246	0.625
(16)	2.250	0.886	2.500	0.926	0.250
(17)	2.625	0.916	3.125	0.641	0.500
(18)	2.000	0.756	2.750	0.886	0.750
(19)	2.375	1.061	3.125	0.641	0.750
(20)	2.250	1.035	2.625	0.744	0.375

表9 中上級のPreとPostの比較：「聞く」

Cds 「聞く」	中上級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(1)	3.917	0.289	3.917	0.289	0.000
(2)	3.917	0.289	3.917	0.289	0.000
(3)	3.917	0.289	3.833	0.389	-0.083
(4)	3.833	0.389	3.833	0.389	0.000
(5)	3.833	0.389	3.917	0.289	0.083
(6)	3.750	0.452	3.833	0.389	0.083
(7)	3.667	0.492	3.667	0.492	0.000
(8)	3.750	0.622	3.750	0.452	0.000
(9)	3.417	0.669	3.667	0.651	0.250
(10)	3.167	0.835	3.417	0.793	0.250
(11)	3.500	0.522	3.750	0.452	0.250
(12)	3.417	0.669	3.417	0.669	0.000
(13)	3.417	0.515	3.417	0.793	0.000
(14)	3.333	0.651	3.250	0.754	-0.083
(15)	3.250	0.866	3.583	0.515	0.333
(16)	3.000	0.426	3.250	0.754	0.250
(17)	3.167	0.718	3.750	0.452	0.583
(18)	3.000	0.953	3.417	0.669	0.417
(19)	3.083	0.900	3.583	0.793	0.500
(20)	2.917	1.084	2.917	0.900	0.000

表10 上級入門のPreとPostの比較：「聞く」

Cds 「聞く」	上級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(1)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(2)	3.667	0.577	4.000	0.000	0.333
(3)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(4)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(5)	3.667	0.577	4.000	0.000	0.333
(6)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(7)	3.667	0.577	4.000	0.000	0.333
(8)	3.667	0.577	3.667	0.577	0.000
(9)	3.333	0.577	3.667	0.577	0.333
(10)	3.000	0.000	3.333	0.577	0.333
(11)	3.667	0.577	3.667	0.577	0.000
(12)	3.333	0.577	3.667	0.577	0.333
(13)	3.000	0.000	3.000	1.000	0.000
(14)	3.000	0.000	3.667	0.577	0.667
(15)	3.000	0.000	3.000	0.000	0.000
(16)	3.000	1.000	3.000	1.000	0.000
(17)	3.333	0.577	3.333	0.577	0.000
(18)	2.667	0.577	2.667	1.528	0.000
(19)	3.000	0.000	3.333	1.155	0.333
(20)	2.333	0.577	2.667	0.577	0.333

1.2. 「読む」能力についての自己評価

ここからは、「読む」について、学期開始直後と学期末の自己評価結果を比較していく。まず、「入門」の結果を見ると、「Post-Pre」の値が1.0以上だったのは、(23)「簡単なメモを読んで、理解できる」と(26)「新聞の広告やチラシを見て、安売り期間や値段などがわかる」の2項目であった。(23)については、宿題やクイズの添削で書かれた教師のコメントを毎週目に行っていることが

反映されたのではないかと考えられる。また、(26)については、語彙・漢字クラスで、数字や値段に関する漢字を勉強した際に、チラシやメニューを見て値段を日本語で読み上げる練習をしていること、また、生活の中で実際にチラシやメニューを見て内容を理解できた経験が自己評価の結果に現れたものと思われる。「読む」については、この2項目に加えて、能力記述文の中で難易度が低い(21)、(22)、(24)、(25)の4項目が0.5以上となっており、その内3項目は、Postの自己評価が3.0を超え、「難しいがなんとかできる」という評価になっている。「聞く」の分析でも述べたように、入門の学習者の多くは学期開始時点では、日本語未習者に近い状態であるため、少しでも日本語が読めたという経験をすれば、それが自己評価にも反映され、一学期間の日本語学習を経て、短くてやさしい内容であれば、日本語を読むことができると感じるようになったのではないかと推察される。

「初級」については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だった項目はなく、0.5以上だったのは、(35)「敬語が使われている正式な手紙やメールの内容が理解できる」のみであった。これは、初級後半の授業で敬語を勉強し、お礼の手紙のサンプルなども読んでいるためだと考えられる。しかし、PreからPostへの伸びは見られたものの、Postの平均値を見ると2.3であり、「あまりできない」という評価であることが分かることから、敬語の勉強はしたものの、正確に理解するのは難しいと感じているのではないかと考えられる。

「中級入門」の結果を見てみると、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だったのは、(34)「仕事相手からの問い合わせや依頼の文書を読んで、理解できる」、(36)「関心のある話題についての専門的な文章を読んで、だいたいの内容が理解できる」、(37)「エッセイを読んで、筆者の言いたいことがわかる」、(39)「論説記事(例：新聞の社説など)を読んで、主張・意見や論理展開が理解できる」、(40)「政治、経済などについての新聞や雑誌の記事を読んで、要点が理解できる」の5項目であった。中級入門は、入門と初級で学んだ日本語の基礎的な文法や語彙をアウトプットすることで日本語の運用能力を伸ばすとともに、話し言葉から書き言葉への移行を進めるレベルである。授業で扱う読み物は、初級から中級への橋渡しとなるもので、政治、経済、社会問題などの難易度の高いものではないが、初級に比べると長さのある本文を読み、書き言葉にも触れるようになった結果、硬い文章も少し読めるようになったと考えて、これらの項目の自己評価が上がったのではないかと推測される。しかし、Postの自己評価の平均値を見ると、その多くが3.0未満であることから、「難しいがなんとかできる」という段階には到達しておらず、「あまりできない」と感じている学習者も多いことがうかがえる。唯一、Postの平均値が3.4となっている(37)については、授業の中で、教科書以外の読み物として、N4レベル相当のエッセイに近い文章を扱ったことが影響したものと考えられる。中級入門では、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だった上記の5項目に加えて、(27)、(29)、(30)、(31)、(32)、(33)、(35)、(38)の8項目が0.5以上であった。入門と初級では文法や語彙のインプットが中心で、読むものも短文レベルの会話文が中心であったのに対して、中級入門では、ある程度まとまりのある本文などを読む機会が増え、書き言葉を使った少し硬い文章にも触れるようになった結果、日本語を読んでいる、読めているということを実感するようになり、自己評価が上がったのではないかと考えられる。

「中級」については、(37)「エッセイを読んで、筆者の言いたいことがわかる」、(39)「論説記事(例：新聞の社説など)を読んで、主張・意見や論理展開が理解できる」の2項目で「*Post-Pre*」の値が1.0以上であった。これは、中級では、教科書の本文でエッセイを扱ったり、新聞記事などの生教材を読み物として扱っていたためだと考えられる。ただし、(37)については、*Post*の平均値が3.125で「難しいがなんとかできる」という評価になっているのに対して、(39)は2.5で「あまりできない」と感じている学習者もいることが見受けられることから、論説記事の読解については、まだ難しいと評価していることがうかがえる。さらに、中級では、(28)、(31)、(32)、(34)、(36)、(38)、(40)の7項目で「*Post-Pre*」の値が0.5以上となっていた。これは、中級になって、授業の中で生教材の読解をしたり、日常生活の中で日本語で書かれたさまざまなタイプの文章に触れるようになった結果ではないかと考えられる。

「中上級」について確認すると、「*Post-Pre*」の値が1.0以上の項目はなかったが、(34)「仕事相手からの問い合わせや依頼の文書を読んで、理解できる」、(35)「敬語が使われている正式な手紙やメールの内容が理解できる」、(36)「関心のある話題についての専門的な文章を読んで、だいたいの内容が理解できる」、(38)「人物の心理や話の展開を理解しながら、小説を読むことができる」、(39)「論説記事(例：新聞の社説など)を読んで、主張・意見や論理展開が理解できる」、(40)「政治、経済などについての新聞や雑誌の記事を読んで、要点が理解できる」の6項目が0.5以上であった。また、これらの項目の*Post*の平均値を見てみると、すべて、3.0を上回っており、「2. あまりできない」から「3. 難しいがなんとかできる」という評価に変化してきていることがうかがえる。(35)については、授業の中でメールの書き方を指導しており、そこでモデルとなるフォーマルなメールを読んだことが影響したと考えられる。(36)、(39)、(40)については、授業の課題として、日本の社会文化的なテーマについてのレポートを書く際に、書籍や新聞などを読んで情報収集をした経験や、日本語以外のType2⁴科目において、日本語で書かれた専門書などに触れた可能性などが考えられる。(38)については、日本語の授業の中で小説は扱っていないが、文学の講義科目を履修したり、個人的に日本語のライトノベルの読解に挑戦していた学習者がいたりして、そこでの経験が反映されていた可能性もあると言える。

「上級入門」については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だった項目はなく、(21)「学校などで面談の予定表を見て、自分の面談の曜日と時間がわかる」と(36)「関心のある話題についての専門的な文章を読んで、だいたいの内容が理解できる」が0.5以上であった。(21)については、初級の学習者などでも「できる」と回答する学習者がいる比較的やさしい能力記述文ではあるが、学期開始直後の段階では、正確に理解できる自信がない学習者もいたのではないかとと思われる。(36)については、授業の課題でインタビュー調査をする際に、選んだテーマに関する文献を読んだことや、日本語以外の講義科目において、日本語で書かれた専門的な文章を読んだことなどがこの結果に影響を与えたものと考察される。

⁴ 日本語と英語の両方を用いて行われる科目

表 11 入門の Pre と Post の比較 : 「読む」

Cds 「読む」	入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(21)	2.444	1.130	3.111	0.782	0.667
(22)	3.111	1.054	3.889	0.333	0.778
(23)	2.222	1.093	3.444	0.882	1.222
(24)	1.889	1.054	2.556	0.882	0.667
(25)	2.778	1.093	3.667	0.500	0.889
(26)	2.000	1.323	3.222	0.972	1.222
(27)	2.333	1.118	2.444	0.527	0.111
(28)	1.889	1.167	2.333	0.707	0.444
(29)	1.889	1.269	2.667	1.000	0.778
(30)	1.889	1.054	2.333	0.866	0.444
(31)	1.778	1.202	1.667	0.707	-0.111
(32)	1.556	1.014	1.778	0.833	0.222
(33)	1.667	0.866	2.000	0.707	0.333
(34)	1.111	0.333	1.222	0.441	0.111
(35)	1.111	0.333	1.556	0.726	0.444
(36)	1.222	0.667	1.222	0.441	0.000
(37)	1.111	0.333	1.556	0.726	0.444
(38)	1.222	0.667	1.444	0.726	0.222
(39)	1.000	0.000	1.111	0.333	0.111
(40)	1.000	0.000	1.111	0.333	0.111

表 12 初級の Pre と Post の比較 : 「読む」

Cds 「読む」	初級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(21)	3.133	0.743	3.400	0.737	0.267
(22)	3.733	0.594	3.533	0.516	-0.200
(23)	3.733	0.458	3.600	0.507	-0.133
(24)	3.067	0.704	3.200	0.862	0.133
(25)	3.133	0.743	3.600	0.632	0.467
(26)	2.867	0.834	3.067	0.884	0.200
(27)	2.800	0.941	3.267	0.458	0.467
(28)	2.867	0.834	3.000	0.655	0.133
(29)	3.067	0.884	3.267	0.704	0.200
(30)	2.533	0.640	3.000	0.756	0.467
(31)	1.933	0.704	2.133	0.990	0.200
(32)	2.267	0.458	2.533	0.640	0.267
(33)	2.200	0.676	2.467	0.743	0.267
(34)	1.667	0.617	2.067	0.799	0.400
(35)	1.733	0.884	2.333	0.724	0.600
(36)	1.733	0.594	1.800	0.862	0.067
(37)	1.533	0.743	2.000	1.000	0.467
(38)	1.733	0.799	2.000	0.845	0.267
(39)	1.467	0.640	1.800	0.862	0.333
(40)	1.533	0.743	1.600	0.828	0.067

表 13 中級入門の Pre と Post の比較 : 「読む」

Cds 「読む」	中級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(21)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(22)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(23)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(24)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(25)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(26)	3.600	0.548	3.800	0.447	0.200
(27)	3.200	1.095	3.800	0.447	0.600
(28)	3.400	0.548	3.800	0.447	0.400
(29)	3.200	0.837	3.800	0.447	0.600
(30)	3.000	1.000	3.600	0.894	0.600
(31)	2.400	0.548	3.200	0.837	0.800
(32)	2.600	1.342	3.200	1.095	0.600
(33)	2.800	1.095	3.400	0.894	0.600
(34)	1.800	0.837	2.800	1.304	1.000
(35)	2.200	0.837	2.800	1.304	0.600
(36)	1.800	0.837	2.800	1.304	1.000
(37)	1.800	0.447	3.400	0.548	1.600
(38)	2.200	0.837	3.000	1.414	0.800
(39)	1.800	0.447	2.800	1.304	1.000
(40)	1.200	0.447	2.600	1.517	1.400

表 14 中級の Pre と Post の比較 : 「読む」

Cds 「読む」	中級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(21)	3.500	0.535	3.875	0.354	0.375
(22)	3.750	0.463	3.875	0.354	0.125
(23)	3.625	0.518	3.750	0.707	0.125
(24)	3.375	0.518	3.750	0.463	0.375
(25)	3.875	0.354	3.875	0.354	0.000
(26)	3.625	0.518	3.625	0.744	0.000
(27)	3.375	0.518	3.625	0.518	0.250
(28)	3.125	0.354	3.625	0.518	0.500
(29)	3.500	0.535	3.125	0.835	-0.375
(30)	3.250	0.463	3.125	0.835	-0.125
(31)	2.375	0.744	3.250	0.707	0.875
(32)	2.375	0.518	3.125	0.835	0.750
(33)	2.750	0.463	3.125	0.641	0.375
(34)	2.125	0.641	2.625	0.744	0.500
(35)	2.500	0.756	2.875	0.991	0.375
(36)	2.000	0.756	2.625	0.744	0.625
(37)	2.125	0.835	3.125	0.835	1.000
(38)	2.250	0.886	2.750	0.707	0.500
(39)	1.500	0.756	2.500	0.756	1.000
(40)	1.875	0.991	2.500	0.756	0.625

表 15 中上級の Pre と Post の比較：「読む」

Cds 「読む」	中上級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(21)	3.833	0.389	3.750	0.622	-0.083
(22)	3.750	0.622	3.667	0.651	-0.083
(23)	3.833	0.389	3.917	0.289	0.083
(24)	3.750	0.452	3.917	0.289	0.167
(25)	3.833	0.389	3.833	0.577	0.000
(26)	3.667	0.778	3.750	0.622	0.083
(27)	3.750	0.452	3.833	0.389	0.083
(28)	3.750	0.452	3.750	0.622	0.000
(29)	3.667	0.651	3.750	0.622	0.083
(30)	3.583	0.515	3.667	0.651	0.083
(31)	3.250	0.754	3.583	0.669	0.333
(32)	3.167	0.718	3.500	0.798	0.333
(33)	3.250	0.622	3.583	0.669	0.333
(34)	2.833	0.835	3.333	0.985	0.500
(35)	3.000	0.853	3.583	0.669	0.583
(36)	2.667	0.888	3.250	0.965	0.583
(37)	2.833	0.577	3.250	0.622	0.417
(38)	2.667	0.651	3.417	0.669	0.750
(39)	2.500	0.798	3.167	0.835	0.667
(40)	2.583	0.900	3.083	0.900	0.500

表 16 上級入門の Pre と Post の比較：「読む」

Cds 「読む」	上級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(21)	3.333	0.577	4.000	0.000	0.667
(22)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(23)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(24)	4.000	0.000	3.667	0.577	-0.333
(25)	4.000	0.000	3.667	0.577	-0.333
(26)	3.667	0.577	3.333	1.155	-0.333
(27)	3.667	0.577	3.333	1.155	-0.333
(28)	3.667	0.577	3.667	0.577	0.000
(29)	3.667	0.577	3.667	0.577	0.000
(30)	3.333	1.155	3.667	0.577	0.333
(31)	3.000	1.000	3.333	1.155	0.333
(32)	3.000	1.000	3.000	1.000	0.000
(33)	3.000	1.000	3.333	1.155	0.333
(34)	3.000	1.000	3.333	1.155	0.333
(35)	2.667	1.155	3.000	1.732	0.333
(36)	2.333	0.577	3.000	1.732	0.667
(37)	2.333	0.577	2.667	0.577	0.333
(38)	2.333	0.577	2.667	0.577	0.333
(39)	2.333	0.577	2.667	0.577	0.333
(40)	2.333	0.577	2.333	1.155	0.000

1.3. 「話す」能力についての自己評価

ここからは、「話す」の自己評価結果について見ていく。まず、「入門」では、(42)「店、郵便局、駅などで、よく使われることば（例：「いくらですか」「〇〇をください）」を使って簡単なやりとりができる」、(43)「趣味や興味のあることについて、話すことができる」、(44)「自分の部屋について説明することができる」、(45)「驚き、嬉しさなどの自分の気持ちと、その理由を簡単なことばで説明することができる」、(46)「相手の都合を聞いて、会う日時を決めることができる」、(47)「身近で日常的話題（例：趣味、週末の予定）について会話ができる」、(48)「電話で遅刻や欠席の連絡ができる」、(49)「店で買いたいものについて質問したり、希望や条件を説明したりすることができる」、(50)「準備をしていれば、自分の送別会などフォーマルな場で短いスピーチをすることができる」の9項目において、「Post-Pre」の値が1.0以上であった。(42)、(46)、(48)、(49)については、日々の生活の実践的な場面で日本語使って話したことが影響していると思われる。(43)、(45)、(47)については、授業の中で教師が身近な話題について質問し、それに答えられたことが自己評価にも現れたと考えられる。(44)は、「XXXは、YYYの上にあります」などの存在文の練習をしたことが、そして、(50)については、授業の課題として、Show & Tellの短いスピーチをした経験が反映されたものと思われる。入門の学習者は、学期開始時点では、ほとんど日本語が話せないことも多いため、実生活や授業の中で日本語を使ってコミュニケーションが取れたという経験が自信につながり、多くの項目で自己評価に伸びが確認されたと分析できる。

「初級」について見てみると、「Post-Pre」の値が1.0以上の項目はなかったが、(49)「店で買いたいものについて質問したり、希望や条件を説明したりすることができる」、(50)「準備をしていれば、自分の送別会などフォーマルな場で短いスピーチをすることができる」、(52)「アルバイト

や仕事の面接で、希望や経験を言うことができる。(例：勤務時間、経験した仕事)」、(54)「準備をしていれば、自分の専門の話題やよく知っている話題についてプレゼンテーションができる」、(56)「最近見た映画や読んだ本のだいたいのストーリーを紹介することができる」、(59)「最近メディアで話題になっていることについて質問したり、意見を言ったりすることができる」、(60)「関心ある話題の議論や討論に参加して、意見を論理的に述べることができる」の7項目が0.5以上であった。この内、(49)と(50)については、Postの平均値が3.0を超えており、「あまりできない」から「難しいがなんとかできる」という自己評価に変化していることが分かる。(49)については、実生活において、店で店員とやりとりをした経験が反映されたものであり、(50)については、授業の課題でShow & Tellの短いスピーチをしたり、校外学習のホームビジットでも短いスピーチをしたことが影響していると考えられる。それ以外の項目については、日本語能力試験Can-do自己評価リストにおいて、N3合格者であっても、25%未満しか「できる」と回答していない項目であり、初級レベルの学習者にとっては難しいと思われる項目である。また、Postの自己評価の平均値が3.0未満であることから、「難しいがなんとかできる」という段階には至っておらず、学習者の自己評価としても難しいと捉えられていることがうかがえる。

「中級入門」については、「Post-Pre」の値が1.0以上だったのは、(59)「最近メディアで話題になっていることについて質問したり、意見を言ったりすることができる」、(60)「関心ある話題の議論や討論に参加して、意見を論理的に述べることができる」の2項目であった。いずれの項目も、日本語能力試験Can-do自己評価リストでは、N2合格者であっても、25%未満しか「できる」と回答していない項目であるため、中級入門の学習者にとっては難しい項目だといえる。しかし、学習者はさまざまなメディアにアクセスして情報を得ることも多く、そのことについて友人などと情報共有する機会もあると考えられるため、(59)の評価が伸び、(60)については、中級入門になって、日本語での口頭によるアウトプットが増え、自身の意見を述べることもあったことから、その経験が自己評価にも現れたのではないと思われる。

「中級」の結果を見ると、(52)「アルバイトや仕事の面接で、希望や経験を言うことができる。(例：勤務時間、経験した仕事)」と、(60)「関心ある話題の議論や討論に参加して、意見を論理的に述べることができる」の2項目において、「Post-Pre」の値が1.0を上回っていた。(52)については、中級レベルの学習者が日本でアルバイトをするのは、難しい場合が多いと考えられるが、一学期間の日本学習の結果、アルバイトの面接に行った場合には、自身の希望や経験について話すことができるかもしれないと考えた学習者もいた可能性がある。しかし、Postの平均値を見ると2.875であり、「難しいがなんとかできる」という段階には、まだ到達していないことから、簡単には達成できない項目であるという認識はあるようであった。(60)も中級レベルの学習者には難しい項目ではあるが、授業の中で発表に対する質疑応答において、質問に対して、論理的に順序立てて回答をする練習を行ったことから、この項目の評価が上がったのではないかと考えられる。このように、自己評価に伸びが見られた項目がある一方で、(42)、(43)、(44)、(50)は、「Post-Pre」の値がマイナスになっており、差の値は小さいものの、学期開始直後より学期末の方が自己評価

が低くなっている項目もある。中級になると、書き言葉や硬い表現・文章などが学習の中心となり、日常会話については扱わなくなるため、日々の生活の中での会話に関する項目である(42)～(44)については、評価が下がった可能性があるといえる。

「中上級」については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上の項目はなく、(52)「アルバイトや仕事の面接で、希望や経験を言うことができる。(例：勤務時間、経験した仕事)」、(56)「最近見た映画や読んだ本のだいたいのストーリーを紹介することができる」、(58)「思いがけない出来事(例：事故など)の経緯と原因について説明することができる」、(59)「最近メディアで話題になっていることについて質問したり、意見を言ったりすることができる」、(60)「関心ある話題の議論や討論に参加して、意見を論理的に述べることができる」の5項目が0.5以上であった。中上級レベルになると、アルバイトにチャレンジする学習者も出てくるため、(52)については、実際のアルバイトの面接や、面接を想定した練習をした経験に基づいて評価された可能性がある。(56)、(58)、(59)については、中上級になれば、使える文法や語彙も豊かになってくるため、これらの項目についても話せると考えて自己評価が上がったことが想定される。また、(60)については、日本語の授業でディスカッションをした経験や、Type2の講義科目を履修している場合には、専門科目に関する議論をした可能性もあり、そういった経験が反映されたのではないかと考えられる。一方で、ここに挙げた項目より難易度の低い(42)、(45)、(47)、(48)、(49)において「*Post-Pre*」の値がマイナスになっていることも分かった。これは、中級と同様に、授業の中で日常生活で使う表現や会話について扱わなくなったことが影響している可能性がある。また、中上級になると、自身の日本語能力を客観的に評価・分析できるようにもなってくるため、日常会話レベルの項目であっても、正しく適切な日本語で話すことの難しさを実感し、評価が下がった可能性もあるといえる。

最後に、「上級入門」については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上の項目はなかったが、(49)「店で買いたいものについて質問したり、希望や条件を説明したりすることができる」と(50)「準備をしていれば、自分の送別会などフォーマルな場で短いスピーチをすることができる」において、0.5を上回っていた。(49)については、日常生活での経験が反映されたものと考えられる。(50)については、上級入門レベルになれば、事前に準備ができる短いスピーチであれば、問題なく実施できると判断したものと推測される。このように、自己評価が伸びた項目があった一方で、(54)、(57)、(58)、(59)、(60)は、「*Post-Pre*」の値がマイナスになっていた。特に(54)「準備をしていれば、自分の専門の話題やよく知っている話題についてプレゼンテーションができる」については、-0.667と差の値が大きく、学期開直後は4.0で全員が「できる」評価していたものが、学期末では3.333と「難しいがなんとかできる」という評価に下がっていた。これは日本語の授業でプロジェクトワークとして、調査の結果を発表するという課題が課されたことに起因しており、実際に発表をしてみたところ、その内容が十分には伝えられなかった、思っていた以上に大変であったと感じ、そのことが結果に表れたのではないかと考えられる。(57)～(60)については、いずれも難易度の高い項目であるが、上級入門のように日本語能力が上がってくると、自身の日本語能力を客観的に捉える力も養われるようになり、自身の日本語能力を過信することなく、評価できるよ

うになった結果、自己評価が低くなった可能性がある。

表 17 入門の Pre と Post の比較 : 「話す」

Cds 「話す」	入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(41)	3.000	0.866	3.889	0.333	0.889
(42)	2.889	1.054	4.000	0.000	1.111
(43)	2.111	1.054	3.667	0.500	1.556
(44)	2.222	1.093	3.667	0.500	1.444
(45)	2.000	1.000	3.000	0.707	1.000
(46)	1.889	1.054	3.222	0.667	1.333
(47)	1.667	1.000	3.000	0.866	1.333
(48)	1.444	0.527	2.556	0.882	1.111
(49)	1.333	0.707	2.556	0.726	1.222
(50)	1.333	1.000	2.667	1.118	1.333
(51)	1.333	0.500	2.222	0.667	0.889
(52)	1.111	0.333	1.222	0.441	0.111
(53)	1.333	0.707	2.222	1.093	0.889
(54)	1.333	1.000	2.111	1.054	0.778
(55)	1.333	1.000	2.000	1.118	0.667
(56)	1.222	0.667	1.889	1.054	0.667
(57)	1.556	0.882	2.333	1.225	0.778
(58)	1.111	0.333	1.333	0.500	0.222
(59)	1.111	0.333	1.333	0.500	0.222
(60)	1.111	0.333	1.333	0.500	0.222

表 18 初級の Pre と Post の比較 : 「話す」

Cds 「話す」	初級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(41)	3.800	0.414	4.000	0.000	0.200
(42)	3.533	0.640	3.733	0.594	0.200
(43)	3.600	0.507	3.933	0.258	0.333
(44)	3.333	0.816	3.733	0.594	0.400
(45)	3.200	0.862	3.667	0.488	0.467
(46)	3.200	0.941	3.667	0.488	0.467
(47)	3.133	0.915	3.333	0.724	0.200
(48)	3.000	0.926	3.467	0.640	0.467
(49)	2.600	0.828	3.200	0.775	0.600
(50)	2.200	1.014	3.000	0.845	0.800
(51)	2.333	0.816	2.667	0.816	0.333
(52)	1.733	0.594	2.533	0.915	0.800
(53)	2.333	0.724	2.667	0.900	0.333
(54)	2.067	1.033	2.800	0.941	0.733
(55)	2.067	0.799	2.267	0.799	0.200
(56)	2.000	1.000	2.667	0.900	0.667
(57)	2.533	0.990	2.733	0.961	0.200
(58)	1.733	0.704	2.067	0.884	0.333
(59)	1.800	0.561	2.400	0.986	0.600
(60)	1.400	0.507	2.067	1.100	0.667

表 19 中級入門の Pre と Post の比較 : 「話す」

Cds 「話す」	中級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(41)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(42)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(43)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(44)	3.400	0.894	3.800	0.447	0.400
(45)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(46)	3.600	0.548	4.000	0.000	0.400
(47)	3.600	0.548	3.800	0.447	0.200
(48)	3.400	0.894	4.000	0.000	0.600
(49)	3.200	0.837	3.600	0.894	0.400
(50)	3.600	0.548	3.800	0.447	0.200
(51)	3.000	0.707	3.600	0.548	0.600
(52)	2.200	1.304	2.600	1.517	0.400
(53)	3.400	0.548	3.800	0.447	0.400
(54)	4.000	0.000	3.800	0.447	-0.200
(55)	3.000	0.707	3.400	0.894	0.400
(56)	3.000	0.707	3.600	0.894	0.600
(57)	3.400	0.894	3.400	0.548	0.000
(58)	2.000	1.000	2.800	1.304	0.800
(59)	2.000	0.000	3.600	0.548	1.600
(60)	2.000	0.707	3.000	1.000	1.000

表 20 中級の Pre と Post の比較 : 「話す」

Cds 「話す」	中級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(41)	3.625	0.744	3.875	0.354	0.250
(42)	3.875	0.354	3.750	0.463	-0.125
(43)	4.000	0.000	3.750	0.463	-0.250
(44)	3.875	0.354	3.625	0.518	-0.250
(45)	3.625	0.518	3.625	0.518	0.000
(46)	3.625	0.744	3.750	0.707	0.125
(47)	3.625	0.518	3.625	0.744	0.000
(48)	3.250	0.463	3.625	0.518	0.375
(49)	2.875	0.354	3.500	0.535	0.625
(50)	3.375	1.061	3.000	0.756	-0.375
(51)	2.625	0.744	3.375	0.518	0.750
(52)	1.875	0.641	2.875	0.835	1.000
(53)	2.875	0.835	3.375	0.744	0.500
(54)	2.875	0.991	3.375	0.744	0.500
(55)	2.750	0.886	2.875	0.835	0.125
(56)	2.750	1.282	3.125	0.991	0.375
(57)	2.625	0.744	2.875	0.991	0.250
(58)	2.250	0.886	2.875	1.126	0.625
(59)	2.250	0.886	2.875	1.126	0.625
(60)	1.875	0.835	3.000	1.069	1.125

表 21 中上級の Pre と Post の比較：「話す」

Cds 「話す」	中上級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(41)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(42)	4.000	0.000	3.917	0.289	-0.083
(43)	3.917	0.289	3.917	0.289	0.000
(44)	3.917	0.289	3.917	0.289	0.000
(45)	4.000	0.000	3.917	0.289	-0.083
(46)	3.917	0.289	3.917	0.289	0.000
(47)	3.917	0.289	3.833	0.389	-0.083
(48)	3.833	0.389	3.750	0.452	-0.083
(49)	3.667	0.492	3.500	0.798	-0.167
(50)	3.250	0.866	3.417	0.793	0.167
(51)	3.500	0.674	3.833	0.389	0.333
(52)	2.750	1.055	3.417	0.793	0.667
(53)	3.667	0.492	3.667	0.492	0.000
(54)	3.333	0.985	3.583	0.669	0.250
(55)	3.250	0.965	3.583	0.515	0.333
(56)	3.167	0.577	3.750	0.452	0.583
(57)	3.083	0.669	3.333	0.651	0.250
(58)	3.000	0.853	3.500	0.674	0.500
(59)	2.917	0.793	3.417	0.900	0.500
(60)	2.500	0.905	3.167	0.835	0.667

表 22 上級入門の Pre と Post の比較：「話す」

Cds 「話す」	上級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(41)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(42)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(43)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(44)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(45)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(46)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(47)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(48)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(49)	3.333	0.577	4.000	0.000	0.667
(50)	3.333	0.577	4.000	0.000	0.667
(51)	3.667	0.577	4.000	0.000	0.333
(52)	3.333	0.577	3.667	0.577	0.333
(53)	3.667	0.577	4.000	0.000	0.333
(54)	4.000	0.000	3.333	0.577	-0.667
(55)	3.333	0.577	3.333	0.577	0.000
(56)	3.333	0.577	3.333	0.577	0.000
(57)	3.333	0.577	3.000	0.000	-0.333
(58)	3.333	0.577	3.000	0.000	-0.333
(59)	3.333	0.577	3.000	1.000	-0.333
(60)	3.000	0.000	2.667	0.577	-0.333

1.4. 「書く」能力についての自己評価

ここからは、「書く」について、学期開始直後と学期末の自己評価結果について見ていく。まず、「入門」について見てみると、(62)「簡単な自己紹介の文を書くことができる」、(63)「誕生日のカードや短いお礼のカードを書くことができる」、(64)「予定表やカレンダーに、短いことばで自分の予定を書くことができる」、(65)「自分の家族や町などの身近な話題について簡単に書くことができる」、(66)「友人や同僚に日常の用件を伝える簡単なメモを書くことができる」、(67)「短い日記を書くことができる」、(68)「将来の計画や希望（例：夏休みの旅行、やりたい仕事）について簡単に書くことができる」、(69)「自分の日常生活を説明する文章を書くことができる」、(70)「知人に、感謝や謝罪を伝える手紙やメールを書くことができる」、(71)「体験したことや、その感想について、簡単に書くことができる」、(72)「理由を述べながら、自分の意見を書くことができる」、(75)「自分の送別会などでの挨拶スピーチの原稿を書くことができる」の12項目において、「Post-Pre」の値が1.0以上であった。この中で、(62)～(69)については、Preでは、ほとんどの項目で2.0未満だったものが、Postでは3.0～3.8となっており、「できない」から「難しいがなんとかできる」という評価に変わったことが分かる。入門レベルでは、使える文法や語彙に限りはあるが、学期開始時点では、平仮名も完璧には書けなかった学習者もいる状況であったため、日本語で文が書けるようになったことは大きな成果であり、「書く」の能力記述文の中で難易度が低い項目については、ある程度できるようになったと自己評価したと考えられる。また、総合クラスでも語彙・漢字クラスでも、宿題で短文の作成課題が継続して課されていたことから、日常的に日本語で文を書いているという自信につながった点も多くの項目において自己評価に伸びが見られた要因として挙げられる。

「初級」については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だったのは、(75)「自分の送別会などでの挨拶スピーチの原稿を書くことができる」の1項目だけであった。これは、授業の中でShow & Tellのスピーチ課題があり、そのスクリプトを書いた経験が反映されたものと考えられる。PreとPostの差が1.0以上あったのは、この項目だけであったが、0.5以上だったものには、(64), (66), (67), (68), (70), (71), (72), (73), (74), (77), (78), (79), (80)の13項目があり、4技能の中では、「書く」において、日本語能力の伸びを感じた学習者が多かったことがうかがえる。

「中級入門」の結果を見てみると、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だったのは、(79)「思いがけない出来事(例:事故など)について説明する文章を書くことができる」と(80)「論理的に意見を主張する文章を書くことができる」の2項目であった。(79)については、「今まででいちばん〇〇〇だったこと」というテーマでスピーチのスクリプトを書いており、「いちばん驚いたこと」「いちばん困ったこと」について書いた場合には、(79)の結果に影響を与えた可能性がある。また、(80)については、中級入門レベルの学習者には難しい内容であるため、授業の中では特に扱ってはいないが、少し硬い表現や文章、社会的なテーマなどを扱うようになった結果、こういった文章も少しは書けるのではないかと考えた学習者がいた可能性はあると考えられる。

「中級」については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だった項目はなく、(63)「誕生日のカードや短いお礼のカードを書くことができる」、(67)「短い日記を書くことができる」、(72)「理由を述べながら、自分の意見を書くことができる」、(73)「最近読んだ本や見た映画のだいたいのストーリーを書くことができる」、(77)「自分の関心のある分野のレポートを書くことができる」、(78)「料理の作り方や機械の使い方などの方法を書いて伝えることができる」、(79)「思いがけない出来事(例:事故など)について説明する文章を書くことができる」の7項目が0.5を上回っていた。このうち、(63), (67), (72), (73)については、Postの自己評価の平均値が3.1~4.0であり、「難しいがなんとかできる」、「できる」という評価になっている。これは、授業中の活動というより、日常生活の中で行っている行動に起因していたり、話したことを書くこともできると考えて自己評価をした可能性があると考えられる。

「中上級」について見ていくと、「*Post-Pre*」の値が1.0以上だった項目はなく、0.5以上だったのは、(73)「最近読んだ本や見た映画のだいたいのストーリーを書くことができる」、と(76)「目上の知人(例:先生など)あてに、基本的な敬語を使って手紙やメールを書くことができる」の2項目であった。(73)については、特に授業の中で活動としては取り入れていないが、口頭ではこういった活動は日常生活の中で行われている可能性は十分にあるため、口頭で話せていることであれば、それを書くということもできると判断した可能性がある。(76)については、授業の中で教員や学部の人にあてたフォーマルなメールの書き方を学んでいるため、その学習経験が自己評価にも反映されたといえる。

最後に「上級入門」については、(75)「自分の送別会などでの挨拶スピーチの原稿を書くことができる」が「*Post-Pre*」の値が1.0以上で、0.5以上の項目は、(70)「知人に、感謝や謝罪を伝える手紙やメールを書くことができる」であった。(75)については、あいさつのスピーチは授業

では扱っていないが、調査発表のプレゼンテーションは行っており、そこで話すことをスクリプトとして書く活動は行っているため、その活動をイメージして自己評価をした可能性がある。また、(70)については、日常生活の中で教師や友達に感謝や謝罪のメールやメッセージを送ることはあると考えられるため、その経験が自己評価にも現れたのではないかと考察される。

表 23 入門の Pre と Post の比較：「書く」

Cds 「書く」	入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(61)	2.667	1.000	3.556	0.527	0.889
(62)	2.667	1.225	3.889	0.333	1.222
(63)	1.889	1.167	3.444	0.527	1.556
(64)	1.778	1.202	3.111	0.782	1.333
(65)	1.778	1.093	3.444	0.527	1.667
(66)	1.667	1.118	3.444	0.527	1.778
(67)	1.444	0.882	3.000	1.000	1.556
(68)	1.444	0.882	3.000	1.118	1.556
(69)	1.667	1.118	3.444	0.726	1.778
(70)	1.222	0.441	2.222	0.667	1.000
(71)	1.333	0.707	2.333	0.707	1.000
(72)	1.333	1.000	2.333	1.118	1.000
(73)	1.111	0.333	1.778	1.093	0.667
(74)	1.111	0.333	1.667	0.866	0.556
(75)	1.222	0.667	2.222	0.972	1.000
(76)	1.000	0.000	1.667	0.707	0.667
(77)	1.111	0.333	1.667	1.118	0.556
(78)	1.000	0.000	1.333	0.500	0.333
(79)	1.000	0.000	1.444	0.726	0.444
(80)	1.111	0.333	1.778	0.972	0.667

表 24 初級の Pre と Post の比較：「書く」

Cds 「書く」	初級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(61)	3.800	0.414	4.000	0.000	0.200
(62)	3.667	0.488	3.933	0.258	0.267
(63)	3.267	0.594	3.800	0.561	0.533
(64)	2.933	0.704	3.533	0.640	0.600
(65)	3.333	0.724	3.667	0.617	0.333
(66)	3.000	0.845	3.667	0.617	0.667
(67)	2.933	1.100	3.600	0.737	0.667
(68)	2.867	0.915	3.467	0.915	0.600
(69)	2.867	0.915	3.333	0.816	0.467
(70)	2.400	0.910	3.333	0.724	0.933
(71)	2.200	0.862	3.133	0.743	0.933
(72)	2.000	0.756	2.867	0.834	0.867
(73)	2.000	0.845	2.667	0.976	0.667
(74)	1.800	0.775	2.533	0.834	0.733
(75)	1.733	0.799	2.733	0.884	1.000
(76)	2.200	1.082	2.667	0.816	0.467
(77)	1.533	0.743	2.200	1.014	0.667
(78)	1.400	0.632	2.267	1.033	0.867
(79)	1.400	0.737	2.000	0.926	0.600
(80)	1.667	0.816	2.333	1.113	0.667

表 25 中級入門の Pre と Post の比較：「書く」

Cds 「書く」	中級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(61)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(62)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(63)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(64)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(65)	4.000	0.000	3.800	0.447	-0.200
(66)	3.800	0.447	4.000	0.000	0.200
(67)	3.400	0.548	3.800	0.447	0.400
(68)	3.400	0.548	4.000	0.000	0.600
(69)	3.400	0.548	3.800	0.447	0.400
(70)	3.400	0.548	3.800	0.447	0.400
(71)	3.200	0.837	3.600	0.894	0.400
(72)	3.000	1.225	3.600	0.548	0.600
(73)	2.800	0.837	3.400	1.342	0.600
(74)	2.800	0.837	3.200	1.095	0.400
(75)	3.200	0.837	4.000	0.000	0.800
(76)	3.200	0.837	3.600	0.894	0.400
(77)	2.200	0.837	3.000	1.414	0.800
(78)	2.600	0.548	3.400	0.894	0.800
(79)	1.800	0.837	2.800	1.304	1.000
(80)	2.200	0.837	3.400	0.894	1.200

表 26 中級の Pre と Post の比較：「書く」

Cds 「書く」	中級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(61)	3.625	1.061	4.000	0.000	0.375
(62)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(63)	3.500	1.069	4.000	0.000	0.500
(64)	3.375	1.061	3.750	0.463	0.375
(65)	3.750	0.463	4.000	0.000	0.250
(66)	3.500	0.756	3.750	0.463	0.250
(67)	3.250	1.035	3.750	0.463	0.500
(68)	3.625	0.518	3.500	0.756	-0.125
(69)	3.625	0.518	3.625	0.744	0.000
(70)	3.125	0.835	3.250	0.886	0.125
(71)	3.250	0.707	3.375	0.916	0.125
(72)	2.625	0.744	3.375	0.916	0.750
(73)	2.625	0.916	3.125	0.835	0.500
(74)	2.625	0.916	2.875	0.835	0.250
(75)	3.000	1.069	3.000	0.756	0.000
(76)	3.000	0.756	3.250	0.707	0.250
(77)	2.000	1.195	2.625	1.061	0.625
(78)	2.375	1.061	2.875	0.835	0.500
(79)	2.250	1.035	2.750	1.035	0.500
(80)	2.500	1.069	2.750	1.035	0.250

表 27 中上級の Pre と Post の比較 : 「書く」

Cds 「書く」	中上級				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(61)	3.917	0.289	4.000	0.000	0.083
(62)	3.917	0.289	4.000	0.000	0.083
(63)	3.833	0.389	3.833	0.577	0.000
(64)	3.750	0.452	3.917	0.289	0.167
(65)	3.750	0.452	4.000	0.000	0.250
(66)	3.750	0.452	3.917	0.289	0.167
(67)	3.833	0.389	3.750	0.622	-0.083
(68)	3.750	0.452	3.833	0.389	0.083
(69)	3.667	0.492	3.917	0.289	0.250
(70)	3.333	0.651	3.667	0.651	0.333
(71)	3.500	0.522	3.833	0.389	0.333
(72)	3.417	0.669	3.750	0.452	0.333
(73)	3.000	0.603	3.500	0.522	0.500
(74)	3.000	0.739	3.417	0.669	0.417
(75)	3.417	0.669	3.750	0.452	0.333
(76)	2.833	0.718	3.417	0.669	0.583
(77)	3.000	0.953	3.250	0.866	0.250
(78)	3.250	0.622	3.417	0.793	0.167
(79)	3.167	0.577	3.500	0.674	0.333
(80)	3.000	0.853	3.417	0.793	0.417

表 28 上級入門の Pre と Post の比較 : 「書く」

Cds 「書く」	上級入門				
	Pre		Post		Post-Pre
	M	SD	M	SD	
(61)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(62)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(63)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(64)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(65)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(66)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(67)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(68)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(69)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(70)	3.333	0.577	4.000	0.000	0.667
(71)	4.000	0.000	4.000	0.000	0.000
(72)	3.667	0.577	3.667	0.577	0.000
(73)	3.333	0.577	3.667	0.577	0.333
(74)	3.333	0.577	3.667	0.577	0.333
(75)	3.000	0.000	4.000	0.000	1.000
(76)	3.333	0.577	3.333	0.577	0.000
(77)	2.667	0.577	3.000	1.000	0.333
(78)	3.333	0.577	3.667	0.577	0.333
(79)	3.333	0.577	3.000	1.000	-0.333
(80)	3.000	0.000	3.000	1.000	0.000

V. 総合考察

ここからは、授業開始直後と学期末の Cds 調査の結果について、レベル別、および、技能別の傾向についてまとめ、本調査全体としてどのようなことが言えるかについて述べる。

表 29 に、各レベル・技能において、学期開始直後と学期末で自己評価に一定以上の伸びが確認された項目数、および、学期末の方が学期開始直後より自己評価が下がった項目数を示す。「Post-Pre」の値が 1.0 以上だった項目は「1.0 以上」、0.5 以上 1.0 未満だった項目は「0.5-0.9」、値がマイナスになった項目は「-」で表示されている。

表 29 各レベル・技能における自己評価の変化

レベル/技能	「聞く」			「読む」			「話す」			「書く」		
	1.0以上	0.5-0.9	-	1.0以上	0.5-0.9	-	1.0以上	0.5-0.9	-	1.0以上	0.5-0.9	-
入門	5	8	0	2	5	1	9	6	0	12	6	0
初級	0	2	0	0	1	2	0	7	0	1	13	0
中級入門	5	3	1	5	8	0	2	4	1	2	7	1
中級	0	5	4	2	7	2	2	6	4	0	7	1
中上級	0	2	5	0	6	2	0	5	5	0	2	1
上級入門	0	1	5	0	2	4	0	2	5	1	1	1
合計	10	21	15	9	29	11	13	30	15	16	36	4

1.1. レベル別の傾向

表29を見ると、入門において、「1.0以上」が28項目、「0.5-0.9」が25項目と、自己評価に伸びが見られた項目が最も多いことが分かる。入門の学習者には、来日したばかりの日本語未習者が多く、学期開始時点では日本語ではほとんど何もできない状況であったため、一学期間の日本語学習を通して、基礎的で簡単なことであっても日本語で、聞く・読む・話す・書くことができるようになったと実感し、それが自己評価の伸びとして現れたと考えられる。「*Post-Pre*」の値がマイナスになった項目も1つのみであり、全体として日本語能力が向上したと自己評価していることが読み取れる。

入門に次いで自己評価に伸びが見られた項目数が多かったのは、中級入門であった。入門と初級では、日本語の基礎的な文法や語彙のインプットが中心であるのに対して、中級入門では、これまで学習した文法や語彙を使って積極的に日本語のアウトプットをしていくようになる。また、書き言葉も扱い始め、少し硬い表現や硬い文章にも触れていくようになるため、学習者は、日本語の新たな知識を習得し、運用できるようになったと感じ、自己評価も高くなったのではないかと推察される。しかしながら、中級入門で「*Post-Pre*」の値が1.0以上だった項目は、各技能の後半に記載されている難易度の高い項目が多く、JLPT N2合格者でも25%未満の学習者しか「できる」と回答しなかったものも含まれるため、中級入門の学習者が、その能力記述文に書かれていることを実際に日本語でできるかどうかには疑問が残る。したがって、学習者の自己評価だけでなく、実際に日本語を使ってどんなことができているのかという行動調査なども実施するなどして、確認していく必要があるといえるだろう。

入門～上級入門の6レベルの中で、自己評価に一定程度以上の伸びが見られた項目が最も少なかったのは上級入門であった。上級入門の場合は、学期開始直後（Pre）の段階で既に半数弱は3.0以上と自己評価が高く、4.0と評価されていた項目も多く存在したため、学期末（Post）に「4.0できる」と回答しても、「*Post-Pre*」の値が大きくならなかったことがその要因の一つとして考えられる。また、上級入門では、「*Post-Pre*」の値がマイナスになった項目数が6レベルの中でもっとも多かったが、これは、上級入門レベルになると、自身の日本語能力を客観的に捉えることができるようになるため、自身の能力を過大評価せずに、一学期間の日本語学習を振り返って、「この能力記述文で示されていることは、自分の日本語能力では達成できない」と判断した可能性があると思われる。学期開始当初と学期末の自己評価の伸びが見られた項目が少なく、「*Post-Pre*」の値がマイナスになった項目数が多いという傾向は、中上級でも観察されたが、上級入門と同じ要因が背景にあるものと考えられる。

初級と中級については、「*Post-Pre*」の値が1.0以上の項目が少なく、0.5-0.9の項目は全体で20項目以上あるという同様の傾向が見られた。しかし、その要因は必ずしも同じではないと考えられる。初級の学習者は、学期開始時点でほぼ未習者であった入門の学習者とは異なり、基礎的な日本語は既習の学習者である。日本では初級に配置された学習者であっても、母国では中級に配置されていた者もあり、学期開始当初の段階では、「自分はある程度日本語ができる」と自己評

働いているケースも多いと考えられる。しかし、実際に日本に来て生活をしたり授業を履修したりしてみると、思った以上に周囲の人の日本語が理解できない、自分の気持ちや考えなどを十分に伝えられないという経験をし、そのことが自己評価にも影響を与えたのではないかと考えられる。一方、中級については、実際には日本語能力が向上していたとしても、学習者自身がそれを実感できていない可能性がある。中級になると、書き言葉やフォーマルな日本語の学習に重きが置かれるようになるため、日常会話で使える文法や語彙を学んでいた入門や初級とは異なり、授業で学んだことが日常生活ですぐには使えないという状況が発生する。そのため、中級の学習者は、自身の日本語能力の向上を実感しにくくなり、自己評価においてもあまり伸びが見られなかったのではないかと考えられる。

1.2. 技能別の傾向

次に、技能別の傾向を見てみると、学期開始直後と学期末の比較で自己評価に伸びが見られた項目が最も多かったのは「書く」であり、1.0以上と0.5-0.9の項目数の合計は52項目であった。「書く」の自己評価が特に高かったのは、入門と初級の2レベルであった。これは、いずれのレベルも学期開始直後の段階では、あまり日本語を書いた経験がなかったが、学期中の各種練習や課題で日本語を書く活動を繰り返したことで、日本語が書けるようになったという自信が付き、それが自己評価にも反映されたものと考えられる。

「書く」の次に自己評価に伸びが見られた項目が多かったのは、「話す」の43項目であった。特に、入門では1.0以上が9項目、0.5-0.9が6項目と、6レベルの中で伸びが見られた項目が最も多かった。入門レベルの学習者は、学期開始時点ではあいさつや非常に短い短文程度しか話せない状況であったものが、簡単なやり取りや短いスピーチであれば日本語でできるようになるため、日本語が話せるようになったという実感が湧きやすかったものと思われる。一方で、「話す」は、「Post-Pre」の値がマイナスになった項目数も多く、全部で15項目が確認された。これは、特に中級以上のレベルで見られたもので、実際に日本語で日本語母語話者と会話をしたり、スピーチやプレゼンテーションなどをしてみたところ、思ったようには話せなかった、相手に言いたいことが伝わらなかったという経験をした学習者も一定数いたことが推察される。

4技能の中で、自己評価の伸びが見られた項目数が最も少なかったのは、「聞く」の31項目であった。「入門」と「中級入門」以外では、「Post-Pre」の値が1.0を超えた項目が一つもなく、聞く能力が向上したと実感できた学習者が少ないことがうかがえた。これは、2023年度春学期に来日した新規の学習者にとっては、来日前は、語彙や文法、発話速度などがコントロールされた日本語教師の話す日本を中心に聞いていたことで、ある程度理解できると自己評価していたものが、来日して、さまざまなバリエーションの日本語を耳にしたことで、聞き取れない、分からないと感じた経験があり、それが自己評価に影響を与えたのではないかと考えられる。また、「聞く」は、「話す」と並んで、「Post-Pre」の値がマイナスになった項目数が15項目あり、特に中級以上のレベルにおいて、思っていたより日本語が聞き取れなかったという経験をした学習者がいたことがうかがえる。レベルが上がってくると、授業で扱う文法や語彙も難しくなり、一文の

長さも長くなっていく。また、日本語教師の発話だけでなく、ニュース映像や動画など、未習の語彙や文法が含まれた生の日本語にも触れる機会が増えることから、聞き取りの難しさを実感した学習者が多かったのではないかと推測される。

1.3. まとめと今後の課題

本調査の結果、学期開始直後（Pre）と学期末（Post）の日本語能力の自己評価には、レベルや技能によって異なる傾向や特徴が見られることが分かった。しかし、今回のデータは、2023年度春学期のET日本語履修者から得られたものであり、他の学習者を対象に同じ調査を実施した場合にも同様の結果になるとは限らない。そのため、今後も継続してCdsを用いた自己評価調査を行い、本調査と同様の結果が得られるかどうかを検証していく必要があるといえよう。また、今回の調査では、調査対象者数が少なく、統計処理を用いた検定が実施できなかったため、今後はデータ数がある程度集まったところで統計処理を含めた分析を行い、「Pre」と「Post」の間で見られた数値の差が統計的にも有意な差であるかどうかを確認していくことが求められる。さらに、本調査では、当該レベルの学習者では達成できないと思われる項目について自己評価が伸びているということが散見された。その理由は明らかになっておらず、学習者がCdsの能力記述文の内容を正しく理解していない可能性や、自身の日本語能力を過大評価していることなどが考えられる。自己評価は必ずしも当該学生の実際の日本語能力を反映するものではないため、学習者の自己評価と実際の日本語能力が一致しているかどうかを明らかにするためには、調査実施後に学習者にフォローアップ・インタビューをしたり、実際に日本語を使ってどのようなことができるのかを確認する行動調査などを行う必要があると言えるだろう。加えて、自己評価では、同等の日本語能力を有していても、自分に甘い学習者と自分に厳しい学習者では、異なる結果が出る可能性が高いため、定期試験の結果やJLPTの模擬問題の得点など、自己評価以外の方法で日本語能力を確認し、日本語科目履修後の日本語能力の伸びについて分析していくことが求められるだろう。

VI. おわりに

今回は、本学部で提供している7レベルの日本語科目のうち、科目構成が同じである入門～上級入門までの6レベルの履修者を対象にCds調査を実施した。しかし、本学部で行われている日本語教育全体について、学習者の日本語能力の向上について確認するためには、今回は対象外とした上級レベルの学習者も含めた検証が必要になるといえるだろう。また、今回は、外在基準である日本語能力試験Can-do自己評価リストを活用したCds調査を実施したが、将来的には、本学部の日本語教育に合わせた独自のCdsを開発し、それを基に日本語科目履修後の日本語能力の伸びの分析や到達目標の再確認などを行い、本学部における日本語教育実践の充実や質の保証に取り組んでいきたいと思う。

謝辞

本調査の実施にあたっては、ET 日本語の授業を担当している兼任講師の奥原淳子先生、徐乃馨先生、林富美子先生、武内博子先生、渡辺晴世先生にご協力をいただいた。また、2023 年度春学期に Cds 調査に協力してくださった ET 日本語履修者のみなさんにも心よりお礼を申し上げます。

参考文献

- 伊東祐郎 (2011) 「日本語テストと言語能力記述文」『早稲田日本語教育学』8・9, pp.27-32.
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2012) 『日本語能力試験 Can-do 自己評価調査レポート<最終報告> (2011 年 6 月発表)』 < https://www.jlpt.jp/about/pdf/cds_final_report.pdf > (2018 年 10 月 20 日閲覧).
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2011) 『日本語能力試験 Can-do 自己評価調査レポート<中間報告> (2011 年 6 月発表)』 < https://www.jlpt.jp/about/pdf/cds_interim_report.pdf > (2018 年 10 月 20 日閲覧).
- 小森和子・柳澤絵美 (2017) 「日本語プログラムの妥当性検証の試み－日本語能力試験 Can-do 自己評価リストを利用して」『明治大学国際日本学研究』8-1, pp.93-118.
- 坂野永里・大久保理恵 (2012) 「CEFR チェックリストを使った日本語能力の自己評価の変化」『大学教育研究紀要』8, pp. 179-190.
- 島田めぐみ・三枝令子・野口裕之 (2006) 「日本語 Can-do statements を利用した言語行動記述の試み－日本語能力試験受験者を対象として－」『世界の日本語教育』16, pp.75-88.
- 島田めぐみ・野口裕之・谷部弘子・斎藤純男 (2009) 「Can-do statements を利用した教育機関相互の日本語科目の対応づけ」『日本語教育』141, pp.90-100.
- 鈴木美加・藤森弘子・藤村 知子・鈴木 智美・中村彰・坂本恵・花蘭悟・伊集院郁子 (2012) 「日本語学習における目標記述をめぐって－全学日本語プログラムの Can-do リスト作成に向けて－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38, pp. 155-166.
- 原やす江 (2010) 「能力記述文 (CDS) を利用した日本語授業のシラバス・デザインの試み－ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR) を外部指標とする日本語能力の可視化に向けて」『城西国際大学紀要』18-2, pp.53-81.
- 柳澤絵美・渡辺晴世・岩元隆一・菊池富美子・奥原淳子・小森和子 (2017) 「ET 日本語コースにおける中級レベルの開設と今後の展望－国際日本学部における取組－」『明治大学国際日本学研究』9-1, pp. 121-154.
- 柳澤絵美・小森和子・菊池富美子・渡辺晴世・岩元隆一・安高紀子・奥原淳子 (2018a) 「English Track 日本語プログラムにおけるレベル妥当性の検証－日本語能力試験模擬問題と Can-do statements 調査の結果から－」『明治大学国際日本学研究』10-1, pp. 139-167.
- 柳澤絵美・小森和子・李在鎬・長谷部陽一郎 (2018b) 「日本語オンライン・プレイスメント・テ

ストの開発」『2018年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 304-309.

柳澤絵美・小森和子・菊池富美子・渡辺晴世・安高紀子・奥原淳子・岩元隆一（2019）「課題遂行型の活動を取り入れた日本語教育の実践」『明治大学国際日本学研究』 11-2, pp. 133-161

柳澤絵美（2019）「Can-do statements を用いた学期開始時と終了時における日本語能力の自己評価の比較：ET 日本語における教育の質の保証に向けて」『明治大学国際日本学研究 - 吉田教授, 長谷川教授, アレン教授, 野村教授 退任記念号』 11-1, pp. 123-150.

柳澤絵美（2020）「日本語学習者による来日前後の日本語能力の自己評価の比較 -Can-do statements を用いた調査を通して-」『明治大学国際日本学研究』 12-1, pp. 63-82.

*右開きからお読みください

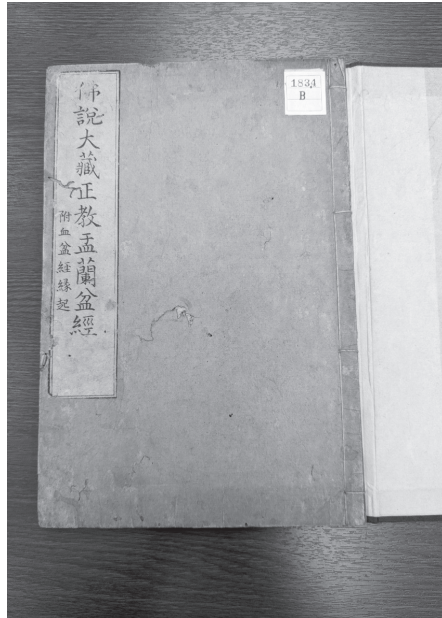


図1 大阪公立大学本 表紙

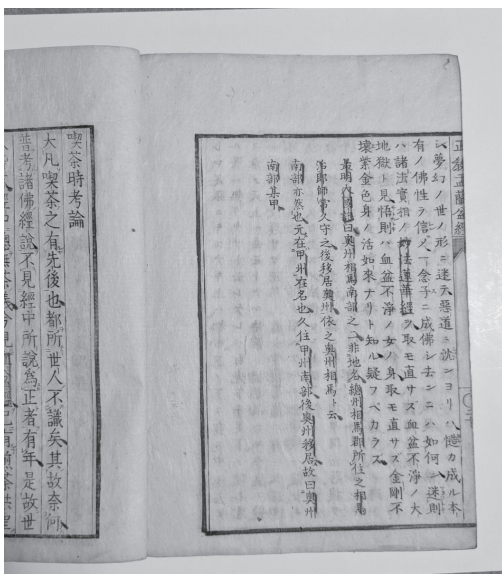


図3 架蔵本 20ウ

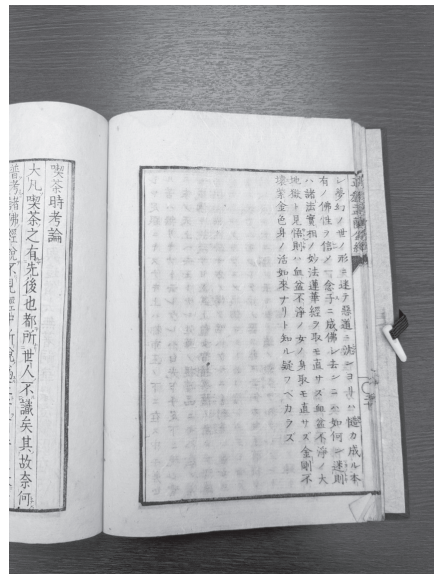


図2 大阪公立大学本 20ウ

二〇二〇・三、五一―五二頁。

(16) 古田紹欽『栄西 喫茶養生記』(講談社学術文庫、講談社、二〇〇〇・九)。

(17) 秋月龍珉『趙州録』(禪の語録11、筑摩書房、一九七二・一二、三六二―三六三頁)、館隆志「禪宗における茶の受容と継承―禅と茶を考える―」(『国際禅研究』8、二〇二二・一、二九三頁)。

(18) 尾崎正善『瀉山―瀉仰の教えとは何か』(唐代の禅僧5、臨川書店、二〇〇七・九、八一―二頁、一四五―一四七頁)。

参考文献

高達奈緒美「資料紹介『血盆経和解』―近世期浄土宗における血盆経信仰―」(『仏教民俗研究』6、一九八九・九、五九―九二頁)

高達奈緒美・牧野和夫「日光山輪王寺威慶長四年积舜貞写『血盆経談義私』略解題並びに翻刻」(『実践女子大学文学部紀要』43、二〇〇一・三、一一―三四頁)

館隆志「禅宗における茶の受容と継承―禅と茶を考える―」(『国際禅研究』8、二〇二二・一、二九三頁)

大観「龍澤創建東嶺慈老和尚年譜」(後藤光村編集代表『白隠和尚全集』1、龍吟社、二六七―三六五頁)

東嶺「龍澤開祖神機獨妙禅師年譜因行格」(後藤光村編集代表『白隠和尚全集』1、龍吟社、一九三五・一、一一―七八頁)

牧野和夫・高達奈緒美「血盆経の受容と展開」(岡野治子編『女と男

の時空―日本女性史再考 Ⅲ 女と男の乱―中世』、藤原書店、

一九九六・三、八一―一五頁、四九一―四九四頁)

秋月龍珉『趙州録』(禪の語録11、筑摩書房、一九七二・一二)、三六二―三六三頁)

尾崎正善『瀉山―瀉仰の教えとは何か』(唐代の禅僧5、臨川書店、二〇〇七・九、八一―二頁、一四五―一四七頁)

高達奈緒美編『東洋大学附属図書館哲学堂文庫藏佛説大藏正教血盆経和解』(岩田書院影印叢刊11、岩田書院、二〇一四・七)

鈴木正崇『女人禁制の人類学―相撲・穢れ・ジェンダー―』(法藏館、二〇二一・八)

『東嶺禅師遺墨集 齡仙寺三百年史』(齡仙寺住職 後藤東慶発行、一九七〇・一〇)

馬叢慧『売茶翁の逍遙遊』(駿河台出版社、二〇二〇・三)、五一―五二頁)

芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』(禅文化研究所、二〇一六・三)

古田紹欽『栄西 喫茶養生記』(講談社学術文庫、講談社、二〇〇〇・九)

国文学研究資料館「国書データベース」「古書データベース」

付記

書誌調査ならびに図版の掲載をご許可下さった大阪公立大学中百舌鳥図書館、解題の執筆に当たってご教示を賜った渡浩一氏・西山美香氏に、御礼申し上げます。

増田源兵衛 (裏表紙見返)

注

- (1) 国文学研究資料館でマイクロ写真所蔵。マイクロ請求記号224「831」、紙焼写真請求記号01788。「古書データベース」による。
- (2) 国文学研究資料館「国書データベース」による。
- (3) 東嶺「龍澤開祖神機獨妙禪師年譜因行格」(後藤光村編集代表「白隠和尚全集」1、龍吟社、一九三五・一、一七七八頁)、芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』(禪文化研究所、二〇一六・三)。
- (4) 大観「龍澤創建東嶺慈老和尚年譜」(後藤光村編集代表「白隠和尚全集」1、二六七―三六五頁)、某「東嶺円慈の生涯」(著者名はなく、「某」とする。『東嶺禪師遺墨集 輪仙寺三百年史』、輪仙寺住職 後藤東慶発行、一九七〇・一〇、四―一七頁)。
- (5) 注(4)と同。引用は「東嶺円慈の生涯」一五頁。
- (6) 一〇頁。
- (7) 舜貞写『血盆経談義私』(高達奈緒美・牧野和夫「日光山輪王寺 蔵慶長四年釈舜貞写『血盆経談義私』略解題並びに翻刻」(『実践女子大学文学部紀要』43、二〇〇一・三)、牧野和夫・高達奈緒美「血盆経の受容と展開」(岡野治子編『女と男の時空——日本女性史再考 Ⅲ 女と男の乱——中世』、藤原書店、一九九六・三)などを参照された。
- (8) 注(7)と同。
- (9) 高達奈緒美編『東洋大学附属図書館哲学堂文庫蔵佛説大蔵正教血盆経和解』(岩田書院影印叢刊11、岩田書院、二〇一四・七)。
- (10) 役行者の母が大峯山に登ろうとして、また弘法大師の母が高野山に登ろうとして忌避されたという話は、『血盆経和解』巻二にも載る(注(9)同書、一〇一―一〇二頁、九七―一〇〇頁)。
- (11) 『血盆経』の出所を語る説話は多くはなく、注目すべきもの。松誉巖的『佛説大蔵正教血盆経和解』「別而明^ス血盆経日本流傳開板之由来」にも、この話が記されている。注(9)同書、二七―二八頁。
- (12) 当寺は江戸時代中期以降に著名になり、各種の「正泉寺縁起」が作成・版行された。なお、『血盆経和解』には記載がない。
- (13) 東嶺「龍澤開祖神機獨妙禪師年譜因行格」(注(3))の宝永五年(一七〇八)条にこのことが記されている。「是夜夢。師母妙遵來告曰。我依^ニ公道力^ニ昇脱生^ニ彌勒内院^ニ。師曰。此來在^ニ何處^ニ。三母曰。在^ニ北方都市王處^ニ。師曰。卻有^ニ苦惱^ニ。母曰。全無。只在^ニ王衛内^ニ耳。師曰。請伸^レ足看。母示^レ之。脚底平滿無^ニ苦惱象^ニ。師悦曰。實無^ニ苦惱^ニ也。仍告別去。白光現^ニ空。異香滿^レ室。直至^ニ清霄上^ニ」(二〇―二二頁)。ただし、「血盆淨穢罪」という語はない。
- (14) 「東嶺円慈の生涯」(注(4)、七一―八頁、一一―一二頁)。
- (15) 「煎茶」は中国では本来「茶を煮る」ことを意味したが、詩中などでは、「湯を沸かして茶を入れる」意味に転用された。日本においても平安時代には、「茶を煎じる」と動詞的に用いられる語であった。馬叢慧『売茶翁の逍遙遊』(駿河台出版社、

南泉法嗣趙州從諗禪師因僧來參。州曰、汝無二舊參^{ナレト}。否^ヤ僧曰是。州曰、喫茶去。新到那僧曰是、州曰、喫茶去。百丈法嗣有^ニ滄山大圓大安二師、大圓出一仰山、一日摘^テ茶、次滄山曰、見^ニ汝體^ヲ未^レ見^ニ汝用^ヲ。仰山即按^テ茶樹^ヲ。滄曰、只見^ニ汝用^ヲ未^レ見^ニ汝體^ヲ。仰山即出去。大安出^ニ大隋^ニ真^ニ。昔有^レ僧辭^ス大隋^ニ。隋曰、什麼^ニ處^ニ去^ル。僧云、禮^ニ拜^シ善賢^ヲ去^ル。大隋堅^ニ起^リ拂^テ子^ヲ云、文殊普賢盡^ク有^ニ這^ニ裡^ニ。僧畫^ニ一圓^ヲ相^ヲ以^テ手^ヲ托^テ呈^シ師^ニ、又抛^テ向^テ背後^ニ。隋云、侍者將^ニ一貼^ヲ茶^ヲ來^ニ、與^ニ這^ニ僧^ニ去^ル。無著嗣^ニ華嚴澄觀^ニ因在^ニ五臺^ニ。山^ニ喫^テ茶^ヲ。文殊拳^ニ起^リ玻璃盞^子云、南方還有^ニ這^ニ個^ニ。著曰、無殊^云、尋常將^テ二什麼^ヲ喫^テ茶^ヲ。著無語。向後宗門就^テ茶^ヲ用^レ語^ヲ不^レ少^カ。有^ニ巖頭雪峯欽山會^ス茶^ノ語^ニ。有^ト王太傳入^ニ招慶^ニ煎茶^ス問答^上。依^テ茶^ヲ稱^ス揚^ス佛事^ヲ不^レ違^ス一枚^ヲ。皆是唐太宗以後之事。日本古書、聖德太子千歲本紀有^ニ湯木費^シ米^ヲ煙^ヲ草^ヲ費^ス粟^ノ之^ヲ語^ニ。湯木所謂^テ茶^ノ之^ヲ湯^ニ是^也。聖武天皇天平元年有^ト修^ス之^ヲ若^ク之^ヲ第二^ニ日^ニ行^テ茶^ノ之^ヲ式^上。嵯峨天皇弘仁元年有^ニ賞^テ茶^ノ之^ヲ式^上。同^ク天皇幸^ニ江州^ニ梵釋寺^ニ。醉後喫^テ茶^ヲ。是^喫茶^ノ之^ヲ始^也。出^ニ梅尾山古記^ニ。古者謂^テ茶^ノ之^ヲ湯^ニ、不^レ謂^テ茶^ヲ。或^ハ謂^テ茶^ノ湯^ヲ座^ニ布^テ茶^ノ湯^ノ道具^ヲ茶^ノ湯^ノ掛^物。是^又非^ニ上^ニ代^ノ之^ヲ語^ニ。至^テ宋^ノ末^ノ元^ノ始^ニ煎^テ茶^ヲ大^ニ行^ス。是^故江^ノ湖^ノ集^ニ有^ニ惠^ニ山^ノ煎^テ茶^ノ之^ヲ頌^ニ。禪定有^ニ醒^レ目^ノ之^ヲ益^ニ、工夫有^ニ添^テ神^ノ之^ヲ德^ニ。建仁^ノ開^祖為^レ傳^ニ此^ノ德^ヲ遠^ニ携^テ從^テ宋^ニ來^ニ茲^ニ先^ニ與^テ梅^ノ尾^ノ明^ノ惠^ノ上^ノ人^ニ為^レ修^テ禪^ノ之^ヲ助^ニ。從^レ是^ニ梅^ノ尾^ノ宇^ノ治^ノ盛^ニ行^ス。轉^シ轉^シ遍^シ世^ニ是以^レ佛^ノ經^ノ所^レ出^テ皆^ニ謂^テ湯^ノ菜^ノ不^レ謂^テ煎^テ茶^ヲ。如^シ法^ノ華^ノ序^ノ品^ノ曰^ク百^ニ種^ノ湯^ノ藥^ノ中^ニ撰^テ茶^ノ器^ヲ茶^ノ具^ヲ必^ニ矣^ニ。經^ノ曰^ク又^レ見^テ菩^ノ薩^ノ離^レ諸^ノ戲^ノ論^ヲ及^テ癡^ノ眷^ノ屬^ヲ一^ニ心^ニ除^レ亂^ヲ撰^テ念^ノ山^ノ林^ノ一^ニ億^ノ千^ノ萬^ノ歲^ノ以^テ求^テ佛^ノ道^上。又^レ見^テ菩^ノ薩^ノ肴^ノ膳^ノ飯^ノ食^ノ百^ニ種^ノ湯^ノ藥^ノ施^ス佛^ノ及^テ僧^ノ一^ニ依^テ此^ノ義^ニ。

則茶之為^レ德^ニ滅^ス三^ノ毒^ヲ破^リ魔^ノ網^ヲ顯^ス發^ス法^ノ性^ヲ、如^レ是^ニ明^レ了^也。若能^レ於^レ我^ノ守^リ約^ヲ知^ル足^ル不^レ將^テ喬^ノ奢^ヲ、誠^ニ可^レ謂^テ茶^ノ湯^ノ之^ヲ實^ノ德^ニ。者^ノ歟。如^レ彼^ノ明^ノ知^ノ客^ノ之^ヲ請^ニ益^ニ虛^ニ堂^ニ于^テ茶^ノ湯^ノ本^ノ相^ヲ超^テ侍^者之^ヲ商^ノ畧^ヲ大^ニ應^ニ於^テ手^ノ基^ヲ全^ニ機^ヲ。是^尚宗^ノ師^ノ一^ニ方^ニ便^ニ而^レ參^ニ詳^ニ言^ニ句^ニ一^ニ傳^ニ授^ニ器^ノ物^ヲ、又有^ニ可^レ貴^ニ之^ヲ處^ニ者^ノ邪。若^レ見^テ今^ノ時^ノ狂^者奢^ニ于^テ書^ノ畫^ニ耽^リ于^テ器^ノ物^ニ不^レ恪^マ財^ノ產^ヲ賣^ニ却^テ人^ノ境^ノ底^ノ之^ヲ輩^ノ者^ノ、將^テ謂^テ何^ノ事^ト哉。太子考^ニ未^レ然^ニ以^テ作^テ後^ノ人^ノ費^レ米^ノ費^レ粟^ノ之^ヲ誠^ヲ如^レ見^テ明^ノ鑒^ヲ然^也。是^故經^ノ中^ノ所^レ說^テ皆^ニ謂^テ湯^ノ不^レ謂^テ茶^ヲ殊^ニ於^ニ血^ノ盆^ノ經^ニ。曰^ク往^ニ古^ノ事^ヲ、不^レ謂^テ唐^ノ以^テ前^ノ事^ヲ。讎^ニ譯^ニ諸^ノ師^ノ亦^レ須^ニ世^ノ流^ノ布^ノ字^ヲ不^レ須^ニ世^ノ無^レ流^ノ布^ノ之^ヲ字^ヲ。煎^テ茶^ヲ行^レ世^ノ唐^ノ以^テ後^ノ事^ノ故[、]只^ニ謂^テ湯^ノ不^レ謂^テ茶^ヲ宜^ニ哉。此^ノ血^ノ盆^ノ經^ノ暗^ニ于^テ往^ニ古^ノ一^ニ明^ニ于^テ今^ノ時^一。嗟^フ呼^フ湯^ノ水^ノ之^ヲ密^ニ而^レ可^レ揀^テ擇^ニ也。其^ノ如^ク斯^ノ久^ノ矣。此^ノ經^ノ所^レ流^ス布^ノ先^ニ以^テ法^ノ性^ノ寺^ノ地^ノ藏^ノ令^ニ中^ノ大^ノ蛇^ノ捧^テ出^ス為^レ第^一依^ノ經^ノ爾。法^ノ性^ノ寺^ノ已^レ然^ニ皆^ニ依^テ閻^ノ王^ノ感^テ授^テ菩^ノ薩^ノ指^ノ訣^ニ為^レ世^ノ流^ノ通^ノ至^ス哉。此^ノ經^ノ奇^ニ哉。血^ノ盆^ノ流^ノ布^ノ於^レ世^ノ明^ニ于^テ末^ノ世^ノ暗^ニ于^テ上^ノ代^ノ。又^レ佛^ノ經^ノ之^ヲ無^レ茶^ノ事^一也。本^ニ者^ノ域^ノ因^レ緣^ノ經^ノ之^ヲ藥^ノ王^ノ樹^一。不^レ說^テ茶^ノ制^ノ所^ノ由^ノ而已。未^レ必^ニ可^レ疑^ニ疑^ノ謗^ノ之^ヲ弊^ノ一^ノ者^ノ邪。

天明八年戊申十一月

京師掘川通綾小路下ル町

齋藤庄兵衛

江戸通石町十軒店

書肆

山崎金兵衛

大坂堺筋長堀橋北へ入

り出ノチ、廢度村ヲ一部村ト云。瀧ノ如涌上タル因縁ニテ、法性寺ヲ今ハ正泉寺ト云由、是誠ノ血盆經ノ顯レ出シ好時節也。女人タル者、追憶哀求スベキ所ナリ。大凡女人タル者ハ男ニ劣リタルコト多シ。是故、近來名徳ノ高僧何レモ母ノ為ニ此血盆經ヲ信仰ナサレヌ人ハアラジ。別シテ愚堂大愚ノ諸師也。古月大(三)道ノ高德タチ、表ニハ離相破有ノ宗風ヲ立玉ヘトモ、内ニハ為母度生ノ大願ヲ起シ玉ハザルハナシ。中ニモ吾白隱先師孝順ノ心最盛ニシテ、別シテ母妙遵(四)日善大姉ノ事爾忘レ玉サリキ。廿四歳ノ御時、信州正受菴ニテ端老人ノ呵責ヲ蒙リ、漸ク幾度カ得力モ多カリキ。中ニ、南泉迂化ノ則ニテ筋骨ヲ脱レ、透脱アリケル夜、夢中ニ母上枕下ニ來リ告玉ヒケルハ、扱モ女程罪深キ者ハ無ゾ。我レ生來善根ノミ志シケル故、何モ格別ノ罪ハ無レトモ、血盆淨穢罪牒ノ品ナ分ラザルニ依テ、北方都市王ニ召レ抱ヘラレ、久布不安ニ暮ケルニ、汝大道ニ出精類ナキ故、兜卒ノ内院ヘ往生シ、菩薩ノ侍者ヲ相務ル間、安慮スベシトアレバ、先師推返シ、尊前ノ足ノ裏ヲ見セタマハレト云。サレハ兩足出シテ見セ玉ニ、何ノ癩モ無リケレハ、扱モ嬉シヤ、足跟ニキズナキ上ハ、都市王ノ下ニ在中モ差セル苦ハ無リキナト云レケレハ、白光乍チ足下ニ現シ、雲ニ乘シテ天上ヘ去玉トナン。法華ノ提婆品ニモ八歳ノ龍女成佛ヲ説殘サセ玉。其上龍女智積菩薩ノ前ニテ深達罪福相徧照於十方ノ偈ヲ唱ヘケルニ、舍利弗ハ龍女ニ語テ、汝テ久カラズシテ成佛セント云コト信シガタシ。女ノ身ハ垢ヲハ布クシテ法ノ器ニ非ズ。云何カ無上菩提ヲ得ベキト大ニ咎メ玉モ、女ノ道ノ難多ヲ知ラシメント也。八歳ノ龍女ノ寶珠ヲ捧ゲ玉ハ、佛ノ

久遠實成ノ珠ト少モ違ハザリケレハ、同様ニ成佛セサセ玉ハ、本有ノ佛性ノ違ヒナキコトヲ凡夫ニ知ラセント、諸佛誓願ナレバナリ。然レハ男女ノ身ニハ違ヒハアレトモ、具足ノ佛身ハ同様ニ有ナレハ、兔テモノ事ニ佛性ノ方ニ心ヲ寄セカシ。夢幻ノ世ノ形ニ迷テ愚道ニ沈ヨリハ、慥カ成ル本有ノ佛性ヲ信シテ一念子ニ成佛シ去ンニハ如何ン。迷則ハ諸法實相ノ妙法蓮華經ヲ取モ直サズ血盆不淨ノ大地獄ト見、悟則ハ血盆不淨ノ女ノ身、取モ直サズ金剛不壞紫金色身ノ活如來ナリト知ル。疑フベカラズ。

最明大國記曰、奥州相馬南部之二、非二地名。總州相馬郡所レ住之相馬治郎師常久守之後、移二居奥州。依之奥州相馬ト云。

南部亦然也。元在二甲州一在名也。久住二甲州南部(一)、後奥州移居故、曰二奥州南部某甲(一)。(三)

喫茶時考論

大凡喫茶之有、二先後一也。都所二世人不レ識矣。其故奈何。普考二諸佛經說不レ見二經中所說為レ正者一有レ年。是故世人皆言、經中總無二茶義一。今見二血盆經一已有二煎茶供聖之文(一)何哉。曰、佛在世并吾神代本有二茶義一分明。及二彼煎而普喫一皆是後人之所レ設爾。茲考二千光祖師之喫茶養生記一、先出二神農食經一曰、茶冥宜二久服一、令三人有二悅志一。此書在二堯舜前一而今過二三千餘歲一、又爾雅明二茶之形容一。是亦古書尤者也。紀原楊文光談苑云、蠟茶出二建州一。又曰、龍鳳石乳茶、本朝太宗皇帝今レ造江左乃(三)有二研膏茶供御一、即龍茶之品云云。吾馬祖和尚有二南泉百丈西堂三子一。

申ケレハ、使立請シケレハ、病人出迎ヒ禮拜シテ申ケルハ、和尚我ヲ知玉ヤ。我ハ是法性寺開基、即最明寺入道時頼カ娘、尼御料法性ト云比丘尼ナリ。我レ身ノ榮花ニ奢リ、三業ヲ慎マス、持戒修善ノ心ナク、徒ニ七十年ノ齡ヲ持チ、相ヒ果ヌ。冥土ノ道ニ貴賤ノ差別ナク、現世ノ業ニ任セ、血盆地獄ニ落テ無量ノ苦ヲ受、其上宿業ニヤ、手賀沼ノ水中ニ蛇身トナリ、頭二十六ノ角ヲ戴キ、三熱ノ苦ヲ受也。若シ我云所ヲ疑ヒ玉ハ、其印シヲ見セントテ、紙十枚計リヲ乞求メ、其身ノ腰ノ下ヲ抹デケレハ、赤ニ染タリ。和尚其苦ヲ問ヒ玉ヘハ、病人悲ミ乍申ハ、凡ソ女人ト生ヲ受ル者、大名公家ノ子タリトモ、菩提ノ心薄ク邪見ノ念深ガ故ニ、月水トテ大惡不淨ノ水ヲ流シ、又子ヲ生時、地神山神水神ヲ汚シ、一切ノ佛神ヲ穢ス故、死後此地獄ヘ落テ、無量ノ苦ヲ受也。夜ル晝ル三度ツ、獄卒呵責シテ、罪女ヲ駈リ勒メ、其血ヲ吞シメント鬼共叫ヒ、鉄棒ヲ以テ打チ惱シ、又池ノ中ヘ迫込トス。罪人池ノ中ニテ鉄ノ髯アル蟲トモ骨ニ入髓ニ徹ス。又或時ハ血盆池ニ五色ノ蓮花化現シテ、佛果ニ至人モアリ。或ハ子孫功德ヲ作テ、生天スルモアリ。和尚曰、血盆地獄ノ苦惱ハ何ナル作善ニテ脱シヤ。病女答云、凡ソ佛ケ一代華嚴阿含方等般若法華涅槃五ノ千餘卷ノ中ニ、血盆經ノ説アリ。此經ヲ七日ノ内毎日一千反ツ、讀誦シ書寫シ玉ハ、大藏五千四十八卷ノ数ニ叶テ、女人此苦ヲ脱セン。又此經六通り書寫シ信仰セハ、晝夜六度ノ責ヲ免。若又在家ノ輩ハ、或ハ墓ニ埋モ宜シ。又一月二日ノ血盆齋會ノ齋日アリ。此日六根清淨ニシテ勤メナバ、功德甚深ナリ。若又其母ノ為カ一切女人ノ為ニ此經ヲ讀誦シ書寫セハ、佛

果ニ到ヘシ。和尚猶モ疑所アラハ、寺ノ後ニ五輪ノ石塔アリ。是我遺骨ヲ納シ墓ナリ。其印シニ松一本柳一莖植置リ。是ニ不思議アルベシ。行テ見ルベシ。其時和尚愕然トシテ曰、汝ガ願ノ如ク血盆經ハ讀誦スベシ。經ヲ求ニ日有敷。病人申シテ言ク、我是ヲ教ヘ上ン。法性寺本尊ハ靈驗新タニ在ハ、速カニ歸リ祈リ玉ヘシト云テ打伏シ、前後モ知ズ寐入タリ。同座ノ諸人は見テ、皆希異ノ思ヲ作シ、感涙袖ヲ浸シケリ。和尚急キ寺ニ歸リ、鐘ヲ撞キ衆ヲ聚メ、右ノ因縁ヲ告ケ、五輪ノ石塔ヲ見ルニ、五輪ノ下朱ニ浸スガ如ク血ニ深訓ケリ。其日則チ地蔵講會ヲ執行シ、通夜ガ禪定三昧ニ入り、線香八炷過テ睡眠セシム。和尚ハ猶志願深ク、南無六道能化願王地蔵大菩薩摩訶薩、我レニ血盆經ヲ與ヘ、迷亡ノ衆生ヲ度セシメ玉ト又禪定ニ入り、丑充過テ寅ノ一點ニ及ビ、少シ眼潤ム中ニ、不思議ヤ地蔵菩薩八旬ノ老僧ト現シ、手ニ錫杖ヲ持テ光明赫奕トシテ告テ言ク、汝佛制ニ準シ志願深シ。是ニ依テ龍宮海蔵ニ収ル所ノ血盆經ヲ汝ニ與フ。明朝急キ手賀沼ヘ行テ見ベシト夢テ、和尚早々行玉ニ、水上俄ニ動シ水涌コト龍門ノ瀧ノ如シ。ウヅマキタル水中ヨリ一莖ノ蓮花涌出ス。即チ此血盆經ナリ。即チ頂戴禮拜シテ歸寺シ玉ヒ、大衆ヲ聚メ、毎日一千卷ツ、一七日ノ間讀誦シ書寫シテ滿ズル夜半ニ、和尚大衆一等ニ夢ヲラク、異香薰シ天華降り、音樂聞エ紫雲靄キ、相好具足ノ菩薩光明ヲ放蓮花ニ坐シ、和尚ニ白言、此間ノ功德ニ依、我速ニ血盆ノ身ヲ離レ、兜卒ノ内院ニ生ズ。自今已後一切女人此經ヲ受持シ讀誦セバ、成佛生天何ノ疑カ有ト云了テ、白光地ヨリ放テ天上ニ去行ケリ。此經一部、此村ヨ

ヲ避玉ニ、是ニモコリス尚ヲ登ントシ玉ヲ、大師左有ラハ證據ヲ見セ奉ント、袈裟ヲ布テ、是レ越玉ヘト有ケレハ、老衰ノ御身乍ラ月ノ障リ出来テ袈裟ヲ汚シ玉ヘハ、扱モ女ノ道ハ業ノ深コト也ト、石ニ取り付悶ヘ玉ハ、今ニネゾ石袈裟掛石トテ、其迹ヲ残セリ。其後大師ハ入定ナサレ、母ハ慈尊院ニテ逝去有トナシ。又同時ニ愛宕山ノ開基慶俊僧都、此山ヲモ女人結界ニセント思召シ有レトモ、其レニテハ一向女人成佛ノ因縁ヲ欠クベシ、此山ニハ責テ佛ノ片方便ヲ残ントテ、血穢産穢ノ忌計ニテ、外ハ厭ヒ無。是モ又貴キ御心ナリ。東大寺ノ法藏上人ハ、天帝釋ノ瑠璃ノ觀音ノ開眼ノ請ニ上リ玉フ程ノ高僧ナリ。布施物ニ何ナリトモ望ミタマヘト有ケレハ、兎テモノ事ニ、母ノ有家ヲ知ラセ玉ヘト有ケレハ、俱生神ヲ召レ、連行テ見ヨト仰セ有。其儘焦熱地獄ヘ連レ行、棒ノ端ニテ炭ノ様ナル者ヲ指出シ、是コソ母上ナリト申セシカバ、法藏モ涙ニ咽ヒ、何ナル罪ニテ左ハ苦ミ玉ソト啼玉ヘハ、母漸ク本形ニカヘリ、女人ホド罪深キモノハ非ス。子ヲ思フ心ノ闇ト月ノ障ノ諸聖ヲ穢シ奉ルコト中々思ノ外ナレハ、斯ハ業ヲ受也。早く法華經ヲ書寫シ回向シテ手向玉ヘト有ケレハ、上人娑婆ヘ還リ、早々僧ヲ請シ、浄土ヘ往生ナサレキ。八十代高倉院ノ時、慈心坊尊惠上人ト云法華ノ持者アリ。然ニ、承安二年十二月廿二日ノ夜、異人來テ曰、我ハ閻魔王宮ノ使ナリ。人皇七十代永承七年壬辰ノ年ニ佛ノ末法ニ入り、衆生益ス惡事重リ、惡道ニ落者多カリキ。是ヲ不敏ニ思召、保元二年ノ春ヨリ天竺唐土日本三國ニ得道ノ大士ヘ勅使ヲ立ラル、ニ、獨足ザル故、性空上人ニ依テ貴僧ヲ召寄ラル。急キ參ラルヘシト。其

布施物ニ、閻王自筆ニテ一千卷ノ血盆經ト自作ノ像トヲ千人ニ與ヘ玉。其時王ノ言ハ、此血盆經ハ釋迦如来説法ナサレ、久ク龍宮城ニ収玉。汝等娑婆ニ返リ、一切ノ女人ヲ救ベシ。此ノ御經ハ末代女人成佛ノ基ナリト、承安二年ニ授玉。今年天明八年戊申迄、六百五年ニ及歟。又河州八尾ノ地藏坊ト云化人アリ。天竺ノ解脫生死寺ニ大過去帳小過去帳ノ二アリ。淺覚沙彌ハ大惡僧ナレトモ、大過去帳ニ付、毎年回向ニ逢シ功德ニテ、九百九十九人ノ菩薩償ヒ玉フニヨリ、菩薩ノ階位ニ登リ玉トナシ。八尾ノ地藏坊此事ヲ羨ミ、十万人講十三文宛ト云コトヲ企テ勸玉リ。伊勢神戸ノ有為惡助ハ極惡人ナレトモ此札ニ依リ浄土ヘ行、近江ノ高島ノ善哉房ト云惡僧モ安養ニ送ラル。山城ノ小篠四郎ハ鶴一足射落シ百文ニ賣リ、十三文ノ札ニ枚受ケ、一ツハ我、一ツハ鶴ト回向セシニ、小篠ハ後鳥羽院ト生レ、鶴ハ空也上人ト生レ玉トナシ。皆回向ノ能儘ニ个程ノ徳ニ逢事ハ、誠ニ地藏坊ノ志ナリ。此善惠上人ヨリ凡七十八年ヲ過テ、建長元年ニ及。此時、北條時頼公トテ貴キ王者アリ。其息女ニ法性比丘尼トテ、身ハ出家ノ道ニ入ト雖トモ心ハ飛行ニ拙キ故ニ、死後ニ大蛇ト爲リ、處ハ總州相馬ノ法性寺ト云寺ニ不思議アリ。時ニ應永廿四年四月廿八日、村ノ檀那ノ娘メ年十三歳ニ成。カ俄ニ狂病ニ取掛リ、其形尋常ニ異也。腰ヨリ下赤ノ如ク染ミ、頭上ニ火焰ヲ出シ、アラクルシヤ、堪ガタヤト空中ニ飛上リ伏シ轉ビ啼キ叫ヒテ、見ル人皆驚怖セズト云コトナシ。父母アマリニ悲ミ、佛神ニ祈リ、醫ト頼テ帛トイヘトモ、更ニ驗ナシ。時ニ病人口走リケルハ、法性寺ノ和尚ニ直ニ申度キコトアリ。請待シテクレヨト

正教ナリ。女人ノ子ヲ生ムコト是又定ニシテ、我モ亦吾母ノ胎中ニ出ヅ。晝夜ノ价抱ヲ蒙ルコト言ニ及カタシ。凡女ト生ルコト、從來果報拙キコト云ニ及ヌコトナレバコソ、昔シ、男女ノ始タル去來諸去來冊ノ尊、天地ノ根元タレハ罪ナトハ少モ有マシケレトモ、陰神ノ謹タラザル故ニ遂ニ根底ノ國へ落サセ玉。是ヨリ天照太神ハ女ト生レ男マサリノ氣ヲ持テ、末ノ女ノ手本ト成玉フ。然トモ陰陽ノ二氣、男女ノ一方ト顯レ玉ハ、中々心ニ任セザルコト多カリキ。我娑婆ノ教主釋迦牟尼ト現レ玉フ佛サへ、血盆不淨ノ女ノ身ヲ借玉ネハ、人間ニ出コトナラヌ習ヒナリ。是故ニ此經ヲ祇園ニ説キ、孟蘭盆經ト名ケ、血盆ノ大事ハ末世ノコトナレハ、經中ニ説キ藏メ、六道能化ノ地藏ニ頼ミ置キ玉フ。日本ノ聖德太子ヲ見ヨ。母后ノ枕上ニ立セ、我ハ是觀世音也。家ハ西方ニ有。此界ノ衆生ヲ濟ヒ度クテ出ルナリ。后身ヲ借シ玉ヘト有ケレハ、皇后ノ我身ハ不淨血盆ノ身也。外ノ聖者ニ宿セ玉ヘト有ケレハ、我ハ只濟度ノミヲ思フ。強テ淨不淨ニハ構ハサリキト仰ラレテ、口ノ中へ飛入り玉フト見テ、后ハ孕ミ玉フトナン。人皇三十六代皇極帝ノ時、サスカ天子ノ御身モモ、男女ノ道ニハ遁サセ玉ハネハコソ、死シテ火車ニ乗玉フ。官領信濃守本多善光、女房彌生前、其一子善助ト云者俄ニ頓死ス。父母ノ嘆キ絶ガタシ。父母思ヒケルハ、我等カ守ル彌陀ハ三國一ノ如來ト承及。一子善助ガ命ヲ一ツ守リ玉ハ又情ナキ佛ヲ頼テ何セント、戸帳ヲモ開カズ嘆キシガ、又不圖思ヒ直シ、是モ彼ガ定業ナラン、如來ヲ咎メ申ウスハ愚ナリト戸帳ヲ開キ見レハ、御姿見玉ス。後ニ能々聞ハ、如來此時兩親ノ歎キ尤也、閻王ニ命乞

セント彼廳ニ到リ玉ヒ、命ヲ還玉フ路ニ、女性ノ上モナキ姿ニテ火ノ車ニ引レ玉ヲ見テ、如何ナル故ニヤト問ニ、此君日本ノ天子ナレトモ、女ノ道ニ雲重リテ、燒熱ノ苦ヲ受玉也。善助佛ニ向ヒ申シ奉ルハ、我ハ一介ノ凡夫也。彼ハ一天ノ主也。願ハ苦ヲ我身ニ引受テ、彼方ヲ還シ奉ト特ケル所へ、火ノ車ニ乗テ通り玉ヲ見テ、我ハ此國ノ本田善光カ一子善助ト申ス者ナリト申シ上ケレハ、邂逅二間人有ハ死出ノ山、泣々獨り行ト答ヨト玉テ、跡ヲモ見ス去玉ハ、善助彌陀ニ此コト申陳へ、冥府ニ還リ申上玉ハ、善助カ意、菩薩ノ志ナレハ、二リ共ニ娑婆へ還レト仰ラレテ、佛ト共ニ還リ玉ヘリ。斯テ天皇ハ都ニ蘇リ、信濃ノ國ニ然ル者有ケルカト御尋アリ。早々召寄セラレ、父善光カ為ニ善光寺ヲ立サセ玉フ。是モ女ノ血盆ノ業ヨリ、天下ノ人彌陀ニ因縁ヲ結フ種ト成リ。四十二代文武天皇ノ代ニ、役ノ行者トテ、佛法弘通ノ大士アリ。終ニハ大峯山上トテ恐布解脫第一ノ迹ヲ末ノ世ノ人ノ為ニ殘シ玉ヘリ。其御袋、我子ノ山ヲ見ントテ五十丁許リモ行ケルニ、雷チ起リ山暗シテ、足ノ立處ヲ失ヒ倒臥玉。扱モ女程口惜キ者ハ非シ。我子ノ山へ登コトノ成ヌト、足摺シ泣叫玉フ。其迹足摺ト云、山上ノ名所ニ成キ。五十二代嵯峨天皇ノ御代、高野弘法大師五十九歳ノ時、御母七十九歳ニシテ、我子ノ山へ登ント、已ニ花坂ト云迄登リ玉フヲ大師知シメシ、母子ハ七歳前ニ別レ玉ヘハ、一向ニ知り玉ス。客僧山ノ路ヲ知玉ハ教ヘ玉ヘト有ケレハ、是ヨリ女人ノ血盆不淨ヲ忌ミ厭フ結果ノ地ナレハ、入事ハ堅ク無用ト有ケレトモ、尚モ吾子ニ逢ト登玉フ。雷チ鳴リ山震ヘテ路ヲ失ヒ、大師通力ニテ大石ヲ推上ケ災

前^ニ。時罪女輩生^シ歡喜心^ヲ起^シ慙愧想^ヲ各各得^ル登^ル佛地^ニ。

△第五、明^ス下佛說^ニ神呪^ニ印^ヲ中有信者^上

佛即說^ニ血盆池陀羅尼神呪^ニ言^フ

南無三滿哆没駄南^ヲ唵^ハ囉^ハ羯哩摩尼珠陀農野^ヲ薩哩囉婆^ヲ捺拏

設駄^ヲ薩哩帝農^ヲ三摩曳^ヲ吽^ハ吠囉佐農^ヲ摩農野^ヲ莎訶^ヲ唵^ハ三昧

耶^ヲ薩罔^ヲ唵^ハ三昧耶^ヲ薩捶吽^ヲ唵^ハ伽囉帝野^ヲ娑婆訶

一本欠^ニ此陀羅尼呪^一蓋出^ニ暗記効覺^ノ之失^一。今此神呪總州法性比丘尼所^レ授也。委出^ニ縁起中^一。(06オ)

△第六、明^ス佛談^ニ末世衆依^ニ行^ニ此經^一

爾時諸大菩薩及目連等回^レ心向^レ大聲聞四衆告^ニ論^一南閻浮提信善男女^一、早覺^ニ冥事^ヲ修^テ取^テ前程^ヲ教^ニ後諸女各不^レ散^ニ失^ニ萬劫血盆受苦^ノ之難^一

△第七、明^ス末代衆依^ニ行^ニ佛勸^一

佛告^ニ諸女人^一言^フ我為^ニ爾等^一正說^ニ此血盆經^一。若有^ニ信心善男子善女人^一書寫受持使^レ三世母^一盡得^レ生^レ天受^ニ諸快樂^一衣食自在證^ニ中無上道^一。

○大節第三、流通分

爾時尊者大目犍連及諸菩薩天龍八部人非人等(06ウ)聞^ニ佛所說^一皆大歡喜信受奉行^レ禮而去^ル。

已上大凡六百〔六十／四〕字、地藏菩薩所^レ出^ニ頭彼龍宮海藏^一

之血盆經^ノ文字神呪^{ナリ}也。今隨^ニ多賀沼神蛇所^一告論^一而已。於^ニ震旦國^一已行^レ世故見^レ彼所^一彫刻^ニ之血盆經^一、并令^ニ二人^一寫^ニ當^ニ後漢十四主獻帝之世^一已為^ニ魏帝^一合^レ國^一。從^レ是黃初(七／年)、大和(六

／年)、青龍(四／年)、景初(三／年)、正始(九／年)、嘉平(五

／年)、此間有^ニ竺佛調^一。以^ニ佛圖澄^一為^レ師受^レ法入^レ定見^レ佛深悟

冥事^一。又有^ニ竺法護^一後曰^ニ燉煌菩薩^一、繼^ニ正法華^一、當^ニ西晋世^一譯^ニ孟蘭盆經^一。今血盆經即孟蘭盆經同會^{ナリ}也。後過^ニ四百年^一、當

唐玄宗朝^一有^ニ神仙吳^一道士^一始畫^ニ地獄變相^一上^レ廷。從^レ是十王圖行^レ世。時有^ニ道明和尚^一入^レ冥審^レ之、令^ニ張果老^一圖畫^一。故

水陸儀文曰、圖^ニ形於果老仙人^一起^ニ教於道明和尚^一〔出谷／響集〕。謂^ニ唐張果老畫^一也。後經^ニ三百年^一、趙宋仁宗朝有^ニ蜀成都府大聖

慈寺藏川和尚^一、定中入^レ冥撰^ニ二十王經^一。此寺唐初太宗^一后長孫夫人居也。懷^レ子不^レ產。太宗問^ニ大醫李洞玄^一。玄曰、尚恐不^レ能^レ全^ニ母子命^一。太宗猶豫之間、夫人悲怒^{シテ}曰、已全^ニ嗣皇命^一、何憂^ニ妾命^一。玄以^レ針治^ニ。夫人即崩後、號^ニ高宗帝^一。帝悲^ニ母為^レ我死^一

誓建^ニ勝藍^一。玄奘窺^ニ基住^レ之得^レ名^一。血盆經依^ニ二十王經^一。十王依^ニ高^ニ宗願張果老吳道士圖^一。其圖本依^ニ竺法護經嚴佛調法^一。二

師皆出^ニ佛圖澄之化^一。宜哉。其來久矣。藏川後經^ニ三百年^一、至^ニ我國北條時頼^一世、為^ニ息女法性比丘尼^一滅後建^ニ法性寺^一。又過

二百年^一、至^ニ應永廿四年^一法性靈魂為^ニ大蛇^一、告^レ寺捧^ニ出血盆經^一。令^ニ二世^一流布^一。蓋見^ニ此經^一出^ニ謹慎中^一於^ニ慎密者^一無^レ處^ニ依用

故^ニ上代不^レ及^レ誠^レ之^一及至^ニ末代^一此義大在^ニ不^レ可^レ不^レ行^一。

佛說大藏正教孟蘭盆經終(06オ)

血盆經國字略縁記

夫此經ハ一切經ノ中ニ見エスト云トモ、其實フヘキコト古今通用ノ

中(二)因見(二)血盆池污水地獄(一)。

從(レ)是(レ)六道能化地藏菩薩所(レ)授血盆經之正文也。(7)十王經抄所謂漢嘉平中(曹操/所(レ)治)有(二)嚴佛調(一)。北天竺人。嘗(レ)入(レ)定(レ)示(三)眞佛來(二)說冥府(一)、以取(二)修多羅藏(一)。達(二)蜀建業(一)其後經(二)八百(一)年、宋仁宗天聖年中、慈恩寺主藏川和尚釋(レ)之流通。是(レ)曰(二)十王經(一)又地藏發心因經又四衆預修經。茲按(二)此名(一)諸賢聚當(二)求法預修之設(一)者歟。是故不(レ)可(レ)求(レ)譯人說者之實、只(レ)可(レ)仰而信爾。今如(三)茲(一)曰(二)烏瑟追陽縣(一)者、即明(二)日連(一)依(レ)母憐(レ)他心冥眼惑(一)者也。諸賢指(二)佛頂髻(一)多言(二)烏瑟(一)、梵(レ)曰(二)烏瑟(一)。此(レ)鬚(レ)黑者、明(三)色(一)不(レ)分(二)晚(一)、又(レ)曰(レ)頂者明(二)見不(レ)及義(一)。追陽縣者慕(二)頭露(一)義、恐(二)冥府(一)義、其人常慕(二)頭(一)露(一)心不(レ)息故(レ)曰(二)追陽縣(一)。

△第二、明(二)血盆池所(一)受苦事(一)其(レ)闍(二)八萬四千由旬(一)、一(レ)地獄(二)中有(三)百三十(一)件(二)苦事(一)。鉄梁鉄柱鉄枷鉄索無(レ)非(二)是銅是鉄是石是火(一)。如(レ)是(二)四種(一)物衆業行感。尊者但見(二)南閻浮提(一)無(レ)限(二)女人頭被(一)散髮(二)悉受(一)枷鎖(二)在地獄中(一)受(二)大苦惱(一)。獄主(二)鬼王(一)一日(二)三度(一)驅(二)勒(一)罪人(二)令(三)其(一)飲(二)自汚血(一)。此時(二)罪女(一)心不甘(二)伏(一)。爾時(二)鬼王(一)將(二)鐵棒(一)捶打(二)罪女(一)哀聲透(二)上徹(一)下。尊者(二)悲哀(一)問(二)鬼王(一)言、不(レ)見(二)閻浮男子(一)依(レ)罪受(二)此苦報(一)、有(二)何所由(一)。鬼王(レ)曰、此罪不(レ)于(二)丈夫(一)之事、只是(二)女人(一)當(二)生(一)產時(二)血露(一)穢(二)地神頂(一)、并(レ)將(二)汚穢衣(一)洗(二)河澤水(一)、誤(二)善男女(一)汲(レ)之煎(二)茶供(一)養(二)諸聖(一)令(レ)致(二)不潔(一)、天(二)大將軍(一)勅(二)下(一)名字(二)附(一)在(二)善惡部中(一)、俟(二)命終(一)後(二)受(一)此(二)苦報(一)。

是段有(二)公與(一)私也。夫(二)天之生(一)於(二)物(一)也、無(二)一箇(一)而不(レ)

依(二)男女(一)者(二)清者(一)昇(レ)為(二)天(一)是(レ)曰(二)父初(一)、濁者降(レ)為(二)地(一)是(レ)母始(一)。父(二)主(一)陽神(二)母主(一)陰精。若(二)無(一)此(二)二無(一)受(レ)生者(一)。雖(レ)有(二)賢聖(一)所(二)皆不(レ)及(一)、然(レ)則(二)女人(一)之(二)各生(一)子何(レ)曾有(二)罪(一)。是(レ)為(二)公義(一)女(レ)之(二)常理(一)、及(二)凡庸(一)女(レ)放逸(二)不(レ)謹(一)、自有(二)二恐(一)五、不(レ)可(レ)忍。若(レ)為(レ)男者、本(二)無(一)此(二)恐(一)、女(レ)即(レ)反(レ)之。是(レ)曰(二)二恐(一)五、不(レ)可(レ)忍者(一)、一者(二)觸(一)許(二)神靈(一)在(レ)下(二)受(一)穢(二)穢(一)故(一)。二者(二)汚(一)濁(二)行者(一)清水留(レ)穢故(一)。三者(二)疑(一)誤(二)正祭(一)獻(レ)水不(レ)密故(一)。四者(二)不(レ)謹(一)己身、凡(二)女(一)為(レ)業不(レ)淨稍多故(一)。五者(二)不(レ)羨(一)他(二)道(一)菩薩(二)三業(一)利(レ)人故(一)。是(レ)曰(二)五不(レ)可(レ)忍(一)之(二)罪過(一)。此(二)節(一)煎(二)茶(一)二字(二)世人(一)以為(二)偽經(一)證。是(レ)故(二)著(一)茶論(二)一篇(一)。詳(レ)之(二)善惡部(一)一(二)經(一)作(二)善部(一)童(二)惡部(一)童(一)、華(二)嚴(一)所謂(二)二天(一)是也。

△第三、明(二)白(一)佛并問(二)法於(一)獄主(一)尊者以(二)神通力(一)詣(二)如來所(一)、諸(二)大菩薩(一)天龍(二)八部(一)皆在(二)會(一)上。尊者以(二)所見(一)事(二)具白(一)佛言、唯(二)願(一)世尊(二)為(一)我(二)等(一)說(二)女人(一)生(レ)子(二)實非(一)私事(二)云(一)、何(レ)報(二)答(一)慈母(二)洪恩(一)令(レ)出(二)離(一)血(二)盆地獄(一)。爾時(二)尊者(一)目連又(二)問(一)獄主(一)。鬼王(レ)受(二)佛威神(一)恭(レ)答(レ)師言(一)、惟(二)有(一)二(二)小心(一)教(二)順(一)男女(二)敬(一)重(三)三寶(一)更(レ)為(二)阿母(一)持(二)血盆齋(一)三(二)年(一)、仍(二)結(一)孟蘭盆(二)勝會(一)請(二)諸僧(一)寶(二)讀(一)此(二)經(一)滿(二)一大(一)藏(二)懺悔(一)慶讚、有(二)般若(一)船(二)乘(一)載(二)奈河(一)自然(二)超(一)越(二)一切(一)苦海(一)。

此段聚(レ)經大同(二)小異(一)。二十(二)餘本(一)及(レ)見(二)明本(一)、折(二)中(一)取(レ)正。願(二)令(一)後(二)人(一)救(二)諸母(一)難(一)。

△第四、明(二)各依(一)功德(二)生(一)五色蓮(二)上(一)爾時(二)日連(一)尊者(二)回看(一)四方(二)無(一)有(二)汚水(一)、唯(二)有(一)五(二)朵蓮花(一)開(二)敷(一)面

二大無碍、是曰上品。宜哉。目連母於此日超昇苦界入菩薩地、一切鐵鬼中撰血盆、是以上代不及三別誠。目連歡喜。明弟子患止、法藏見母、智泉求律師、併可二以按爾。

△第五、明目連令後佛子依行

目連復白佛言、弟子所生母得蒙三寶功德之力衆僧威神之力、故若未來世一切佛弟子亦應奉孟蘭盆救度現在父母乃至七世父母上可為爾不。

七世之、是為三字眼。如來為言三世諸佛、或曰七佛又七如來（仁王古譯曰七佛、新譯皆曰三世佛）、佛子為一切衆生、或言七世父母又一切父母等以明無盡義也。梵網經（不救存亡戒第二十）曰、若佛子以慈心故行放生業、一切男子是我父、一切女人是我母、我生生無不從之受生故、六道衆生皆是我父母。而殺而食、即殺我父母亦殺我故身。一切地水是我先身、一切火風是我本體、故常行放生。又四十二章經曰、想其老者如母、長者如姊、少者如妹、釋者如子。生度脫心息滅惡念（本/文）。佛曰出家、大異于世疎今之事實利多生。雖似不孝為進大孝。

△第六、明三佛重勅後代比丘

佛言、大善、快問。我正欲說汝今復問。善男子、若比丘比丘尼國王太子大臣宰相三公百官萬民庶人行慈孝者、皆應先為所生現在父母過去七世父母於七月十五日佛歡喜日僧自恣日

以二百味飯食安孟蘭盆中施十方自恣僧、願使現在父母壽命百年無病無一切苦惱患乃至七世父母離餓鬼苦生人天中福樂無上極。

慈孝或孝順共曰志至極處。謂徹性地也。自恣有經之所謂說拳非歸正、是為初義、如彼七十而從二心所欲不踰矩云。是為終義。

△第七、明受佛勅兒孫依行

是佛弟子修孝順者、應念中常憶父母乃至七世父母、年年七月十五日常以孝慈憶所生父母為作孟蘭盆施佛及僧以報父母長養慈愛之恩。若一切佛弟子應當奉持是法。已上說孟蘭盆祭了。此中有三。一明現生母受業報。二明世間諸女皆同。三明衆生當起度脫。施餓鬼亦有

三種。初隨分修者一色一香念佛誦呪共供鬼神進昇脫是也。二如法修者如法修之理事盡實是也。三向上修者得忍菩薩語之而已。如論二時刻前已說了。若以七月十五為正。如二八月（待及二年）悠悠追善非孝慈必。今以二義一分別邪正。自恣僧者指得道人、七月十五指非。二十成滿足。雖非滿分急須營辦。似偏依理。孝慈全存。清淨行者須如是修。

○正宗分、第二說法明以擇法眼救此生母血穢之難上又有七節

△第一、明目連依我母救他母難。爾時尊者大目犍連比丘及以四輩弟子歡喜奉行。以自道眼回視照見一切女人、欲救慈母血穢之難、當時往到烏瑟追陽縣曠野之

佛即出現說法。是也。大目犍連、此曰「葉伏根」、其祖嗜之故、為二姓名、令二小根器、最大一義也。自利小道為二他化大乘一義、是即方等彈呵教、而、叶三孟蘭盆并昇脫救苦血盆之旨。此經即入二佛行一。二乘初方便爾。故以二聲聞一為主。佛初於二鹿野苑一說法三年度父、後遷二祇園一說法六年。度二母於忉利天一。目連度二母之時到歟。(24)

○二、正宗分有レ二、曰初說法、曰後說法。初說法又有二七節一。

△第一、明二目連持レ鉢救レ母。

即以二道眼一觀二視世間一、見二其亡母一、生二餓鬼中一。不見二飲食一、皮骨連立。目連悲哀、即以レ鉢盛レ飯往餉二其母一。母得二鉢飯一、便以二左手障レ鉢右手搏レ食。食未レ入口化成一火炭、遂不得レ食。具二曰一、鉢和羅飯一。此略、曰二鉢飯一爾。是明二地獄中鬼趣生一。婆沙論有二正邊住處一、如下閻浮下有二餓鬼界一、閻王被レ領是明二正住一。第二邊住者、山谷虚空各依レ果報(25)有二淨穢別一。如二目連母一業障深、故在二地獄中一受レ報殊レ他。聲聞自利又難一如奈一。

△第二、明二假レ衆力漸當レ救母。

目連大叫悲號涕泣、馳還白レ佛具陳如此。佛言、汝母罪根深結、非三汝一人力所レ奈何。汝雖三孝順一、聲動二天地一、天神地祇邪魔外道道士四天王神亦不能奈何。當二須三十方衆僧威神之力一乃得中解脫上。吾今當下說二救濟之法一令中一切難。皆離中憂苦上。

△第三、明二孟蘭盆會最勝レ他。

佛告二目連一、十方衆僧七月十五日僧自恣時、當下為二七(3オ)世父母及

現在父母厄難中者一具二飯百味五果汲灌盆器香油挺燭牀敷臥具一盡二世甘美一以著二盆中一供中養十方大德衆僧上、當二此之日一、一切聖衆或在二山間一禪定、或得二四道果一、或在二樹下一經行、或六通自在、教化聲聞緣覺、或十地菩薩大人權現比丘在二大衆中一、皆同一心受二鉢和羅飯一、具二清淨戒一聖衆之道其德汪洋。其有三供二養一此等自恣僧一者、現世父母六親眷屬得二出三塗之苦一應レ時解脫上衣食自然。若父母現在者福樂百年。若七世父母生レ天自在化生入二天華光一。

鉢和羅此曰二自恣食一。自恣有レ二。待二日月一至一是為二正(3ウ)當一。神鬼苦切何擇二時日一。以二不レ移レ時即修一為レ正。百味者種種義、五菓謂種種色義、以二所レ洗淨一物一備レ供、是曰二汲灌等一。山間禪定指二凡夫修禪人一、凡今念佛禪學等是也。四道果指レ入二證位一、已下皆指二菩薩大行一。福樂即有為福、天華光即無為德、十住入二十回向一得二性神通一是也。具律淨戒指二修禪得道人一、自恣僧指二行業成就人一。七世者多生義、眷屬者一切衆生義、福樂百年者受二天樂一盡二天年一義、能修二孟蘭盆一者何別足レ救二血盆一。

△第四、明三佛教二授食之法一(4オ)

時佛勅二十方衆僧一、皆先為二施主家一祝願。願七世父母行二禪定意一、然後受レ食。初受レ食時、先安二在佛前塔寺中一、佛前衆僧祝願竟便自受レ食。時目連比丘及大菩薩衆、皆大歡喜。目連悲啼泣聲釋然除滅。時目連母即於是日得レ脫二一切餓鬼之苦一。

禪定意者大須二子細一、不レ明二三義一、恐二滯二徧小一沈レ心撰レ意、是為二下品一、撰二受二心念一入二性圓通一、是為二中品一。發智自在得レ

○センチ。「佛說大藏正教孟蘭盆經／附血盆經縁起」。図1

印 「大阪府女子専門學校／1912／圖書課」(1オ、黒スタンプ)、

「大阪府女子専門學校圖書」(15オ、黒スタンプ)、「135／7」

(23ウ、黒スタンプ)。

書入れ 「150」(表紙見返し、赤鉛筆)。

特記事項 第二部20ウの付記部分(「最明大國記曰…」以下四行)が

ない。

*両伝本は同版だが、大阪公立大学本の特記事項に示した通り、架蔵本にはあつて同大学本にはない記述がある(図2・3)。あつたものを削つたのか(削り跡なし)、あとから入れ木で補つたのか、後者の可能性の方が高いように思われるが、両者ともに異なる箇所での刷りむらがあり、前後関係は判断しがたい。

三 翻刻

【凡例】

- ・字体は原則として通行のものを用いたが、一部正字を用いた。異体字は正字に直し、合字は開いた。割書きは「」内に入れ、改行箇所は／で示した。
- ・判読の便を図るため、私に句読点を補つた。
- ・原本の不審箇所には右傍に(ママ)と示し、返り点を補つた場合は(一)のごとく示した。
- ・改訂箇所は、(1オ)のように示した。

佛說大藏正教孟蘭盆經又曰血盆經細注

凡釋ニ此經ニ先有三科一。一明ニ教起因縁ニ、二明ニ教説宗趣ニ、

三明ニ依レ文解ニレ義ヲ。

一明ニ教起因縁者孟蘭盆、此曰ニ解倒懸器ニ(此義出ニ孟子三

公孫丑上。曰ニ民之悦コトレ之猶レ解ニ倒懸也)。衆生本来成

佛作祖、妄見ニ凡聖(一)故生ニ苦樂ニ。天堂地獄相隨來也。皆是倒懸

無レ虚妄。為レ明ニ此義(一)特説ニ此經ニ。二明ニ經説宗趣

一者、世事皆倒懸心性本實相除ニ去妄見、萬法自然。今此施餓鬼

者除ニ去妄見ニ之初方便。血盆池亦妄之妄者也。為レ示ニ此

理ニ説ニ法之真如意寶了。三明ニ依レ文解ニ義者(1オ)大段為レ一。

如來初以ニ平等大慧眼ニ説ニ孟蘭盆、普濟ニ衆生ニ大悲重以ニ差別擇

法眼ニ示レ有ニ母人血穢之患(一)令ニ後人ニ知ニ。前序分、後流通分、

是曰ニ正宗三分一。

西晋三藏竺曇摩羅察奉レ詔譯

此云ニ法護ニ月氏國人。甚有ニ識量、天性純懿、操行精苦(委

出ニ名義集一)。先居ニ燉煌(或曰ニ燉煌菩薩)、後處ニ青門、

大康七年譯ニ正法華、受ニ國王勅一故奉レ詔譯云。

〇一、序分

如レ是我聞、一時佛在ニ舍衛國祇樹給孤獨園、大目犍連始得ニ六通

一、欲ニ度ニ父母報ニ乳哺之恩(一ウ)。

本曰ニ聞如是、後改ニ如是我聞一。如是約ニ法成就、我約(一)主常

住ニ、聞約ニ慧自在。從レ古則欠ニ三德次序。所謂常住實相依

性智顯ニ慧解現前也。一時有レ一。機感相應是曰ニ一時一。我法不二、

【架蔵本】

装丁 大本、合刻一冊、縦二六・〇センチ、横一八・二センチ。

表紙 黄土色無地、原表紙。

料紙 楮紙(見返しも同)。

題箋 欠。

目録・著者名・序跋文 なし。

版心 黒魚尾あり。「正經孟蘭盆經」。丁付あり。

丁数 二三四。

版 製版。

匡郭 縦二〇・〇センチ、横一八・一センチ(一オ)。

刊記 「天明八年戊申十一月／書肆／京師掘川通綾小路下ル町／齋藤庄

兵衛／江戸通石町十軒店／山崎金兵衛／大坂堺筋長堀橋北へ入／

増田源兵衛」。

印 なし。

書入れ 本文中に墨書・朱書多数あり。墨書のほとんどは読点。固

有名詞に朱で線を引く。2ウと3オの匡郭上部に語句の読

みについての墨書あり(詳細略)。裏表紙墨書、「大正七年

夏六月／新宿寓柴折／源竹生」。

・第一部

内題 「佛説大蔵正教孟蘭盆經又曰血盆經細注」(1オ)。

尾題 「佛説大蔵正教孟蘭盆經終」(12オ)。

丁数 一一丁半。

文体 漢文体、片仮名送り仮名・傍訓、返り点あり。送り仮名・傍

訓濁点あり。合符あり。

行数 一面一〇行。

・第二部

内題 「血盆經國字略縁記」(13オ)。

尾題 なし。

丁数 八丁。

文体 漢字片仮名まじり。片仮名傍訓あり。本文・傍訓濁点あり。

20ウの付記部分(「最明大國記曰」以下四行)は漢文体。片

仮名送り仮名、返り点あり。

行数 一面一三行。

・第三部

内題 「喫茶時考論」(21オ)。

尾題 「喫茶時考論」(23ウ)。

丁数 三四。

文体 漢文体、片仮名送り仮名・傍訓、返り点あり。送り仮名・傍

訓濁点あり。合符あり。

行数 一面一〇行。

【大阪公立大学本】

整理番号 1834/B

以下は架蔵本と同 装丁、表紙、料紙、目録・著者名・序跋文、版心、

丁数、版、匡郭、刊記、第一部・第二部・第三部の内題・尾題・

丁数・文体・行数。

題箋 原題箋あり。表紙左肩。四周双辺、縦一八・五センチ×横四・

を提示している。たとえば、「善光寺如来縁起」の本田善佐(本書では善助)の蘇生譚、大峯山・高野山の女人禁制譚^(注1)、東大寺法蔵の救母譚、慈心坊尊恵が閻魔から『血盆經』を授けられたという話^(注1)などが載る。ここで最も紙幅が費やされているのは、「血盆經出現道場」として広く知られた千葉県我孫子市正泉寺(曹洞宗。旧名は法性寺)の「正泉寺縁起」である。北条時頼の娘で、法性寺開基である法性尼の霊が、応永二十四年(一四一七)四月二十八日に檀那の娘に憑依し、和尚に自分が血盆地獄で苦しんでいることを語り、本尊の地藏に救済を祈ってくれるように頼む。和尚が言われたとおりにすると、地藏が老僧となって現われ、龍宮海蔵に収める『血盆經』を与えるので手賀沼に行くよう伝える。『血盆經』を得た和尚は読誦・書写供養を行い、法性尼は兜率天の内院に生じた。『血盆經』が沼から出現したのち、村名を廢度村から一部村へ、寺名を正泉寺に変えた^(注1)という。

そして、ここにおいてさらに興味深いのは、東嶺の師、白隠が悟りを得た夜、夢中に亡母が現われ、特段の罪はなかったものの「血盆淨穢罪」(19ウ)によって、十王の一人、都市王に召し抱えられていたが、白隠が修行に励んだ結果、兜率の内院に往生したと語ったとの記述である^(注1)。このことを記す前には「近来名徳ノ高僧何レモ母ノ為ニ此血盆經ヲ信仰ナサレヌ人ハアラジ」等とあり(19オ)、多くの場合、幼くして母と別れて仏門に入った臨濟僧たちの中に、「罪多く、男に劣る」女たる母の救済を願う気持ちを抱く人々がいたことが、窺われよう。なお、東嶺自身、母を深く思慕し、二十七歳のとき、

母が病床に臥せったことを知ると故郷に戻って看病に励み、その死に当たっては大いに嘆いた。後年、輪仙寺に白隠や父母、自分と関係する僧俗の齒髪を納めた塔を建立し、晩年には「父母恩難報經」の自註を作成、孝養を勧める説法を行つた^(注1)。

第三部が「喫茶時考論」になっているのは、經文中の「煎茶」^(注1)の二字を根拠に『血盆經』が「偽經」とされ(9オ)、仏教經典の中に「茶義」はないと言う人が多いが(21オ)、仏教と茶とは深い関係を有していることを明かすためである。まず榮西(一一四一―一二一五)『喫茶養生記』^(注1)を参照し、さらに唐代の趙州從諗の「喫茶去」^(注1)、瀉山大圓と仰山慧寂の茶摘みの問答など、茶にまつわる中国の故事を挙げたのち、日本の茶の歴史等について述べる。様々な記述によって仏教と茶との関わりの深さは理解できるものの、『血盆經』が「偽經」ではないことの説明たりえてはいない。

なお、女性差別經典『血盆經』の唱導は、日本ではいまは行われていない。本資料の扱いにおいても、その点、ご注意頂きたい。

二 書誌

筆者が存在を把握している伝本は、架蔵本と大阪公立大学本の二本だけである。本書は三部から成っており、内題・行数などが各本で異なる。まず、全体的な項目について示してから、各部ごとの詳細を示す。大阪公立大学本に関しては、架蔵本と共通する事項は省略する。

受け、駿河国無量寿寺・龍澤寺を建立。龍澤寺を拠点として、教化のために各地を巡る。晩年は近江国勸修寺を居とし、同寺で示寂。白隠存命中は深く孝養を尽くし、現代に及んでも、「白隠あつての東嶺、東嶺あつての白隠」と言われるほどだとい^(注5)う。

東嶺は多くの著述を成しており、「東嶺円慈の生涯」では、「達磨多羅禪經説通考疏 五卷／宗門無尺燈論 二卷／五家參詳要路門／神儒仏三法孝經口解／碧巖百則弁／白隠年譜／巡礼歌円解／自註血盆經／自註父母恩難報經／自註般若心經／快馬鞭」を挙げ^(注6)る。この中の「自註血盆經」が、本書に当たると思われる。

三、内容

『孟蘭盆經』は、孟蘭盆会の由来を説く著名な経典であり、竺法護訳とするが、疑問視されている(中国で撰述された可能性が高い)。一方の『血盆經』は、女性が女性特有の血のケガレを他に及ぼす罪により、死後、血の集まった血盆地獄に墮ちることと、そこからの救済方法を説く、中国成立の経典である。日本では室町時代以降広く普及し、その影響は、大相撲の土俵や大峯山での女人禁制、一部の祭礼における女性忌避など、現代にまで及んでいる(もちろん女性差別なので、現代においては「女性はケガレしているから」と声高に言われることはなく、「伝統だから」と説明される)。

『血盆經』には複数の本文系統があり、①「如是我聞一時佛在鹿野園中(略)爾時目連尊者」で始まるか、「爾時目連尊者」で始まるか、②女性の墮獄理由を出産時の出血とするか、出産時の出血と経血と

するか、③救済方法を獄主が示すか、仏が示すか、以上の三点を基準として、六系統に分けられる(このほか、陀羅尼の有無や願文の有無といった違いもある)。

改めて言うまでもなく、『孟蘭盆經』と『血盆經』とは全く別の経典だが、仏弟子の目連が、前者では母の、後者では女性の死後の苦しみを目にし、救済方法を仏たちに尋ね、その方法が示されるとい^(注7)う共通点から、相通ずるものと考えられてきた。本書第一部において東嶺はそれをさらに進めて、『孟蘭盆經』の末尾がそのまま『血盆經』へと続いていくという(7オ)、独自の形をとっている。墮獄の理由は、出産時の出血のみになっている(8オ・ウ)。東嶺は「二十餘本」の「明本」を見た^(注8)と述べており、「大同異小」のある経文を校訂し、目連が仏の所に行つて血盆地獄からの救済方法を問ひ、さらに獄主に尋ね、獄主が「佛威神」を受けて答えるという(9オ・ウ)、合理化まで行つている。

本書のような、『血盆經』を科分する注釈書としては、他に、舜貞『血盆經談義私』(慶長四年(一五九九)写)、松譽巖的『佛説大蔵正教血盆經和解』(正徳三年(一七二三)刊)が管見に及んだ。

本書は全体を通して分量の割に情報量が多く(いま、一つ一つ出典を明らかにしていく余裕はない)、第一部も語句を説明するに留まらず、『血盆經』が手賀沼から現れたこと(「正泉寺縁起」、後述)、冥途に行つた道明が張果老にその様を描かせたこと、蔵川が『十王經』を撰述したことなどにも言及している。

第二部は『血盆經』の縁起を述べる部分だが、併せて様々な説話

〔献呈論文（資料紹介）〕

『佛説大蔵正教孟蘭盆經』（血盆経細注・血盆経國字略縁記・喫茶時考論）

Material introduction *Bussetsudaizōseikyō Urabonkyō* “Ketsubonkyō saichū”, “Ketsubonkyō Kokujū Ryakuengi”, “Kissa Jikōron”

高達 奈緒美
KODATE, Naomi

一 解題

一、本書の題名と構成

本稿は、架蔵『佛説大蔵正教孟蘭盆經』（天明八年（一七八八）刊）の紹介・翻刻である。本書は三点の書から成る合刻本だが、一人の著者が計画的に立てた構成であり、内容的に連続しているため、それぞれの部分を「第〇部」と称することとする。

架蔵本は題箋を欠いているが、大阪公立大学中百舌鳥図書館所蔵本（旧大阪女子大学附属図書館所蔵、函号1834/B。以下、大阪公立大学本とする）の題箋には「佛説大蔵正教孟蘭盆經／附血盆経縁起」とある。この「佛説大蔵正教孟蘭盆經」が同図書館での登録名になっており、国文学研究資料館の「国書データベース」でもこの名が採用されているので、それに従う。本書には目次はなく、内題は以下の通り。第一部「佛説大蔵正教孟蘭盆經又曰血盆経細注」（1オ）、第二部「血盆経國字略縁記」（13オ）、第三部「喫茶時考論」（21オ）

——、つまり本書は、『孟蘭盆經』と『血盆経』の注釈書であり、『血盆経』の縁起書であるうえに、茶の解説書なのでもある。そのため、やや煩雑だが内容を把握しやすいように、本稿のタイトルでは、外題のみならず内題も示した。

二、著者

本書中には著者名の記載がないが、『国書総目録』では「大阪出版書籍目録による」として、東嶺の名を挙げて^(注3)いる。さらに、本文中で著者の師として白隱の名が出てくるので（19ウ）、白隱慧鶴（一六八六―一七六九）^(注3)の高弟、東嶺円慈（一七二一―一七九二）^(注4)と考えてよからう。

東嶺は近江国神崎郡小幡村に生まれ、九歳で同郡能登川村大徳寺の亮山恵林のもとで出家、十七歳のときに日向国大光寺の古月禅材に参じたのち、しばらく京で過す。二十三歳のとき駿河国松蔭寺の白隱慧鶴の門に入り、二十九歳で印可を得る。その後白隱の命を

本号執筆者

鈴木賢志	国際日本学部教授
張競	国際日本学部教授
渡浩一	国際日本学部教授
尾関直子	国際日本学部教授
横田雅弘	国際日本学部教授
小林明	国際日本学部准教授
高逵奈緒美	国際日本学部兼任講師
田中牧郎	国際日本学部教授
小森和子	国際日本学部教授
田中絵美利	政治経済学部兼任講師
安高紀子	国際日本学部特任講師
柳澤絵美	国際日本学部専任准教授

編集委員

美濃部 仁	(編集委員長)
瀬川 裕司	
張 競	
渡 浩一	
横田 雅弘	

表紙デザイン

森川 嘉一郎

明治大学国際日本学研究 第16巻第1号
張教授、渡教授、尾関教授、横田教授、小林准教授 退任記念号
Global Japanese Studies Review, Meiji University Vol. 16, No.1
Special Edition in Honor of Professor Cho, Watari, Ozeki, Yokota, Associate Professor Kobayashi

2024年3月31日 発行

発行 明治大学国際日本学部
School of Global Japanese Studies, Meiji University
〒164-8525 東京都中野区中野4-21-1

印刷 株式会社ワコー
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-7

